

博 士 論 文

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106 の
伝承・受容におけるロンドン原版の意義

—演奏史とエディション比較を踏まえた考察をもとに—

加 畑 奈 美

はじめに.....	1
0.1. 研究の出発点	1
0.2. 先行研究	3
0.3. 問題の所在	4
0.4. 研究の目的	5
0.5. 本論の独自性と概要	5
序章 ピアノ・ソナタ《ハンマークラヴィーア》Op.106 について	7
1. 作品成立に先立つ創作の衰え.....	7
1.1. 健康状態の悪化.....	7
1.2. 不滅の恋人	9
1.3. 甥の後見を巡る裁判.....	12
1.4. 作風の変化	15
2. 作品の成立	17
3. 初演.....	18
4. まとめ	19
第1章 一次資料の精査	21
1. 現存するもの	21
1.1. スケッチ	21
1.2. 書簡	21
1.3. 訂正リスト	29
1.4. 二つの原版	62
2. 消失したもの	64
2.1. 自筆譜	64
2.2. 2種類の筆写譜.....	64
2.2.1. ベートーヴェンによる筆写譜 I への訂正箇所.....	66
2.2.2. ベートーヴェンによる筆写譜 II への訂正箇所	71
3. 章のまとめ	76

第2章 Op. 106 の受容とロンドン原版.....	76
1. 演奏史と演奏批評.....	76
1.1. モルティエ・ドゥ・フォンテーヌ.....	76
1.1.1. 略歴.....	76
1.1.2. フォンテーヌと Op. 106.....	78
1.2. アラベッラ・ゴッダールド.....	79
1.2.1. 略歴.....	79
1.2.2. ゴッダールドと Op. 106.....	79
1.2.3. ゴッダールドの Op. 106 に関する演奏批評.....	80
1.3. フランツ・リスト.....	83
1.3.1. 略歴.....	83
1.3.2. リストと Op. 106.....	84
1.3.3. リストの Op. 106 に関する演奏批評.....	85
1.4. ハンス・フォン・ビューロー.....	86
1.4.1. 略歴.....	86
1.4.2. ビューローと Op. 106.....	88
1.4.3. ビューローの Op. 106 に関する演奏批評.....	88
2. 楽譜出版.....	93
2.1. 19世紀における原典主義と楽譜.....	93
2.1.1. 1850年頃まで.....	93
2.1.2. 1850年から1950年.....	95
2.1.3. ベートーヴェン作品の楽譜.....	95
2.1.4. 解釈版.....	96
2.2. イグナーツ・モシェレス版.....	97
2.3. フランツ・リスト版.....	97
2.4. ハンス・フォン・ビューロー版.....	99
2.4.1. ビューローの校訂姿勢.....	100
2.4.2. 二つの論争に見るビューローの位置.....	103
2.4.2.1. A-Ais 問題.....	103
2.4.2.2. テンポ問題.....	105

2.5. ヨハネス・フィッシャー版	108
2.6. 現代の原典版	109
2.6.1. ウィーン原典版 (2018)	109
2.6.2. ベーレンライター版 (2019)	110
3. 章のまとめ	110
第3章 エディション比較	112
1. 19世紀におけるエディションの概要	112
2. 各エディションの校訂の特徴	112
2.1. ウィーン原版の異刷り (Artaria : ウィーン) 1819年以降出版	112
2.2. ロンドン原版の訂正版 (Royal Harmonic Institution : ロンドン) 1820年出版	113
2.3. イグナーツ・モシェレス版 (Cramer, Beale&Co : ロンドン) 1841年以前出版	115
2.4. ウィーン原版の第2版 (Artaria : ウィーン) 1856年出版	118
2.5. フランツ・リスト版 (Holle : ヴォルフエンビュッテル) 1857年出版	120
2.6. モシェレス版 (Hallberger : シュトゥットガルト) 1858年出版	122
2.7. 旧全集 (Breitkopf und Härtel : ライプツィヒ) 1862-1865年出版	124
2.8. ハスリンガー版 (C. Haslinger : ウィーン) 1865年頃出版	126
2.9. ハンス・フォン・ビューロー版 (J. G. Cotta : シュトゥットガルト) 1875年出版	127
2.10. ダム版 (Steingraber : ライプツィヒ) 1878年出版	132
2.11. ライネッケ版 (Breitkopf&Härtel : ライプツィヒ) 1878年出版	134
2.12. ダルベール版 (C. Fischer, Inc. : ニューヨーク) 1902-04年出版	138
2.13. シェンカー版 (Universal Edition : ウィーン) 1918-21年出版	141
2.14. トーヴィ版 (Associate Board... : ロンドン) 1931年出版	143
2.15. シュナーベル版 (Curci : ミラノ) 1949年出版	145
2.16. アラウ版 (H. Litolff's Verlag : フランクフルト…) 1978年出版	147
2.17. J. フィッシャー版 (Peters) 1975年出版 / (Fischer) 2005年出版	150
2.18. ヘンレ版 (G. Henle : ミュンヘン) 1953年出版 (C) / 1980年出版 (V)	155
2.19. ウィーン原典版 2001年出版 / 2018年出版	158
2.20. 園田高弘版 (春秋社 : 東京) 2003年出版	161
2.21. ベーレンライター版 (Bärenreiter : カッセル) 2019年出版	164
3. 系譜の整理	165

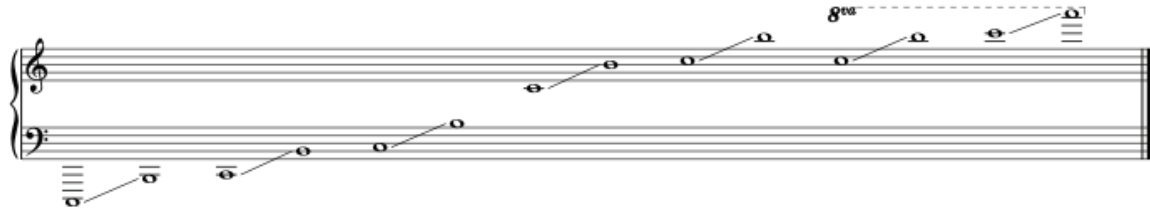
第4章 二つの原版の相違に見る演奏解釈の可能性.....	169
1. 楽章順について	169
2. A-Ais 問題.....	170
3. テンポ問題	171
4. 楽器学の観点から	174
4.1. 音域の問題	174
4.2. U.C.と T.C.	174
5. エディション比較から	176
5.1. sf と ff.....	176
5.2. 強弱記号	179
5.3. スラー・フレージング	180
5.4. スタッカート	182
5.5. ロンドン原版の特徴.....	184
第5章 結論.....	186
参考文献一覧.....	190
謝辞.....	199

付録

- ①ウィーン原版
- ②ロンドン原版
- ③Op. 106 の成立に関する年表
- ④19 世紀における Op. 106 の演奏会記録
- ⑤19 世紀の Op. 106 のエディション一覧
- ⑥エディション比較表

凡例

1. 音高の表示は、以下の譜例に準ずる。



C₁ — H₁ C — H c — h c¹ — h¹ c² — h² c³ — h³ c⁴ — h⁴

2. 音名はドイツ音名で記す。

3. 音高を示さない音名の場合は、イタリア音名でカタカナ表記をする。

4. Op. 106 の楽章名は、原則としてウィーン原版のそれに従っている。

はじめに

0.1. 研究の出発点

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770～1827) 作曲の Op. 106 は、彼の後期作品に数えられる約 50 分に及ぶ巨大なピアノ・ソナタである。ベートーヴェンが出版当時「50 年はこの曲を弾こうとするピアニストを忙しくさせる」と言っていたとされる¹ことが象徴するように、当時から技術的にも表現の面においても難解な作品として扱われてきた。

1819 年にウィーンとロンドンではほぼ同時期に出版されるが、その楽譜内容には相違点が多い。つまり、初版が 2 種類存在している状況だ。これに加えて注目すべきは、ベートーヴェンがいずれの版も承認している点である。現在、自筆譜は消失し、一次資料として残っているものは一部のスケッチと書簡、そして 2 種類の初版（以下、原版²）のみであり、テキストの決定についてこれまで多くの音楽家たちを悩ませ続けてきている。

二つの原版のテキストの違いは、大きなものから細かなものまで多岐にわたるが、一番わかりやすい例として楽章構成の違いをあげることができる。ウィーン原版は、現在知られている楽章順で表すと「1→2→3→4」だが、一方のロンドン原版は「1→3→2」の順で一つの作品、そして第 4 楽章は独立した形で売り出された。またこれらがもともと一つの作品であることも公表されないままの出版だった。

こうした事情は、ベートーヴェン作品においては非常に特異なものである。同時多発的に、様々な国・地域で出版するという例自体は後期になると多く存在する³が、Op. 106 のように楽章順を入れ替えたり、一部削除したりして良いというように、大幅な変更にも承認を与えた例は、他に存在しない。また、ベートーヴェンが認めた原版が複数存在する作品において、Op. 106 ほどに一次資料が消失してしまっている例も他にない⁴。つまり、作品の出版状況においても、その後この作品がたどることになった伝承・受容の状況において

¹ Lenz 1860: Wilhelm von Lenz, *Beethoven. Eine Kunst-Studie V*, Hamburg: Hoffman & Campe, p. 32.

² 本論では、ベートーヴェンがウィーン初版、ロンドン初版ともに承認したという事実と、作品目録(2014)が、この 2 種類の初版をそれぞれ“Original Ausgabe”としていることに基づき、それを日本語訳した形である「原版」という語を用いて、それぞれ「ウィーン原版」「ロンドン原版」と呼ぶ。

³ 多発出版自体は 1803 年頃から開始され、最晩年まで続けられた。特に Op. 91 以降に見られる同時多発出版には、より多くの出版社が参加し、その出版範囲は「国際的」と呼べるほどまでに広がった。ピアノ・ソナタを例に挙げると、Op. 106 以降の後期ソナタは全て、国際出版の形である(大崎滋生 2018 『ベートーヴェン像 再構築』1 巻 p. 136)。

⁴ ベートーヴェンの後期作品の多くは自筆譜などの一次資料が残っており、後期のピアノ・ソナタの中で自筆譜が残っていないのは Op. 106 のみである。

も、Op. 106 は特異な作品であることがわかる。

ベートーヴェンの新全集刊行の現在の中心人物の一人であるヘンレ社の Norbert Gertsch 氏は、2001 年の時点で新全集の該当巻を準備していることを明言し、基本的な資料についてかなり詳細に検討をしている⁵。しかしそれにも拘らず、それから 20 年を経た現在も刊行の予定が発表されていないことから、Op. 106 の資料の見極めとテキストの決定が困難である状況が見て取れよう。昨年 10 月に Gertsch 氏に直接メールで問い合わせをしたところ、「いまだに出版の見通しがたっていない」⁶旨の返信もあった。

ここで、二つの原版がどのように出版されたのかの経緯を簡単に整理する。1819 年 9 月にウィーンのアルタリア Artaria 社から出版されたウィーン原版は、同地に居たベートーヴェンが出版の直前まで目を通せたと考えられている⁷。一方、1819 年 12 月にロンドンのリージェンツ・ハーモニック・インスティテューション Regent's Harmonic Institution より出版されたロンドン原版は、ベートーヴェンの弟子であるフェルディナンド・リース Ferdinand Ries (1784~1838) が、ベートーヴェンとロンドンの出版社との仲介役を担い、出版が叶った。リースはベートーヴェンから、この作品についてのすべてを任されていた⁸ことが明らかになっており、リースはそれを受け、適切だと思う箇所の内容を大いに変更したと考えられている。

こうした出版状況を踏まえ、ベートーヴェンによる自筆譜が見つかっていない今日では、批判校訂版などの楽譜を作成する際、ベートーヴェンがおそらくかなりあとまで目を通していたと考えられるウィーン原版を出発点とする例が多く見られ、ロンドン原版はどこか軽視され続けてきた。このことは、キンスキー＝ハルムの作品目録にある「この最も欠陥

⁵ Gertsch 2001: Norbert Gertsch, "Ludwig van Beethovens 'Hammerklavier'-Sonate Op. 106. Bemerkungen zur Datierung und Bewertung der Quellen", *Bonner Beethoven Studien*, Bd. 2, pp. 63-93, Bonn: Beethoven-Haus.

⁶ 2020 年 10 月 5 日(月)に筆者が送った質問メールに対する、翌 6 日(火)の Gertsch 氏からの返信。質問内容は以下の 2 点である。1. 新全集がいつ出版予定であるのか。2. 刊行予定の新全集は、Murray Perahia 氏との新版とはどのように区別するのか。Gertsch 氏の返答は以下の通りである。「新全集の後期ピアノ・ソナタの巻がいつ出版されるかはまだはっきりしていない。Perahia 氏との版も、今後数年間は発行されず、しばらく時間がかかる。両方の版がまだ準備されていないため、どのように異なるかはわからない。これら二つの版の音楽テキストは、資料の解説に関して校訂者たちの意見が異なる全ての点において、相違が生じることになる。しかしまだ、どこでそうした相違が生じるかについての詳しい情報はない。」

⁷ Gertsch 2001, pp. 80-81.

⁸ このことは、本論第 1 章「書簡」の項で挙げる、ベートーヴェンとリースとのやりとりから明らかである。特に、作品像を大きく左右する楽章順について、リースにその決定権を委ねているベートーヴェンの言葉 (BGA 1295, 4, pp. 254-263) からは、Op. 106 のロンドンでの出版におけるリースへの「全権委任」の姿勢が確かに読み取れる。

のある版」⁹という批判ともとれる記述や、ウィーン原版を「Wiener Originalausgabe (=ウィーン原版)」と呼ぶのに対し、ロンドン原版を「Londoner Erstaussgabe (=ロンドン初版)」と呼び区別していることから明らかである。

その一方で、最近になってロンドン原版を見直す動きも出てきた。2014年に新たに出た作品目録には、Op. 106には二つの原版があるとの記述が見られる¹⁰。また、最新のウィーン原典版¹¹とベーレンライター版¹²は、ロンドン原版の表記を巻末注に載せるといった形で出版がされており、つまり「ロンドン原版に注目する原典版」すら登場するようになってきている。

0.2. 先行研究

二つの原版をめぐる問題についての先行研究には、注目すべきものが大きく3つある。一つ目は、Alan Tysonの1962年の論文¹³である。この論文で彼は、「イギリスのエディション、及び二つの初版の相違に関する正確な知識は、Op. 106の今後のいかなる校訂者にも要請されることになる」と述べ、両原版の相違が持つ意味についての再考を促している。

二つ目は、新全集の刊行にも携わる、先ほども名前を挙げたNorbert Gertschの2001年の論文¹⁴である。ここで彼はロンドン原版に対し、「リースによる変更の多くがどれほど意味のあることであったとしても、ほとんどの場合に、それはベートーヴェン自身に由来するものではない」としている。つまりGertschは、ウィーン原版派であることがわかる。

三つ目は、沼口隆の2014年の論文¹⁵である。この論文は、Op. 106という難解な作品の演奏を可能にし、世に広めていったと考えられる演奏家たちが、ロンドン原版に基づく演奏をしていた可能性を指摘し、ロンドン原版をいま一度再考することの重要性を説いている。

⁹ Kinsky=Halm 1955: Georg Kinsky und Hans Halm, *Das Werk Beethovens. Thematisch-Bibliographisches Verzeichnis seiner sämtlichen vollendeten Kompositionen*, München: G. Henle, p. 296.

¹⁰ Dorfmueller et al. 2014: Kurt Dorfmueller, Norbert Gertsch und Julia Ronge, *Ludwig von Beethoven. Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis*, Revidierte und wesentlich erweiterte Neuausgabe des Verzeichnisses von Kinsky, Georg und Halm, Hans, München: G. Henle, p. 666, 668.

¹¹ *Klaviersonate op. 106*. Ed. by Peter Hauschild. Wien: Wiener Urtext Edition, Mainz: Schott; Wien: Universal, 2018.

¹² *Grande Sonate in B dur op. 106*. Ed. by Jonathan Del Mar. Kassel: Bärenreiter, 2019.

¹³ Tyson 1962: Alan Tyson, "The Hammerklavier Sonata and its English Editions", *The Musical Times* 103, pp. 235-237.

¹⁴ Gertsch 2001.

¹⁵ 沼口隆 2014 「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106 『ハンマークラヴィーア』の2つの初版とイギリス初版の意義」『国立音楽大学研究紀要第48集』25-33頁。

0.3. 問題の所在

以上のことを踏まえ、問題の所在を2点挙げる。

第一に、先行研究では二つの原版の区別を強く意識し、ウィーン原版を尊重する姿勢を当たり前にとる風潮にあったにも拘らず、楽譜にはロンドン原版との混在が目立つという点である。筆者はこれまで、様々な楽譜の比較調査を行ってきたが、多くの楽譜にロンドン原版に由来していると考えうる箇所が存在していた。先行研究や作品目録を見ても、その中ではウィーン原版こそがオリジナルであるとされ、ロンドン原版は非難すらされてきた一方で、多くの楽譜の中にロンドン原版の表記が色濃く反映されているという一つの矛盾を感じた。このことはつまり、ロンドン原版の存在が Op. 106 の伝承・受容において大きなものであったことの一つの証拠であり、だとするならば、ロンドン原版の影響を明らかにすると同時に、両原版のテキストを精査し、考察する必要性が出てくる。なお、先ほど挙げた Tyson による先行研究においても、ロンドン原版の重要性やその価値についての再考は促されているものの、両原版の楽譜テキストの詳細については触れられておらず、またその後のエディションや演奏史において、両原版がどのように扱われてきたかなどの言及もされていない。

第二に、昨今ロンドン原版を見直す動きは少しずつ活発化してきているものの、それは研究やその成果である楽譜の中だけにとどまっている印象があり、実際の演奏に意識的には活かされていないという点である。ロンドン原版についての記述は、論文では目にすることが多くあり、原典版においても 2018 年になってようやく目にする¹⁶ことになったが、その一方でロンドン原版を意識した演奏に出合うことは少ない。例えば、ロンドン原版の楽章順でのレコーディングは、ナクソスマジックライブラリーで検索した結果、全 230 件中 1 件も出てこなかった¹⁷。また筆者がコンクールで、ロンドン原版の出版の形と同じ第 4 楽章のみを抜粋し演奏した際、「この楽章だけを抜粋し演奏することには、違和感がある」という講評をいただいたこともあった。実際、二つの原版を対等に扱った上で、二つの異なる箇所の解釈を比較したり、考察したりする先行研究は無い。確かに、二つの原版それぞれに存在する明らかなミスに関しては、もちろん訂正が必要であるが、資料の大半が消失し、どちらの原版の要素がベートーヴェンによる意向をより正しく反映したものであるかが明らかでない今、ウィーン原版を底本に作品像を考えるだけでは不十分なので

¹⁶ Wiener Urtext Edition 2018.

¹⁷ Naxos music library. “Beethoven Op. 106”で検索（2021年8月16日確認）。

はないか。ロンドン原版も同じく、ベートーヴェンが承認を与えたまさに“Original Ausgabe”なのである。これを今一度踏まえた上で、考察されるべきだろう。

J. Fischer が 2016 年に出した校訂報告¹⁸には、ベートーヴェンが Op. 106 において「一つの作品で二つのアイデンティティ」を生み出したこと、そして最終的にそのどちらのアイデンティティを採用するのかについては「ピアニストの責任」であるとの記述がある。つまり、演奏家が主体的に関わらなければならない問題であることをも指摘しているのである。

ロンドン原版が演奏に積極的に採用されないことの背景には、長年批判されてきた「ロンドン原版」への信頼の低さと、「ロンドン原版」とは一次資料であると言われながらも、それがどのように作成されたのか、そもそもどういった位置付けのものなのかが明確にされていないことがあるように思われる。

0.4. 研究の目的

本研究の目的は、以下の通りである。

第一に、Op. 106 の演奏史において、ロンドン原版がどのような位置にあったのかを明らかにすること。第二に、それを踏まえた上でロンドン原版とは何かを考察し、その新たな意義を提示すること。第三に、演奏者の視点で、ロンドン原版を視野に入れた新たな演奏解釈の在り方を提示すること。

0.5. 本論の独自性と概要

本論の独自性は、以下の3点である。

一つ目は、作品の伝承・受容の側面から、エディションの問題を考察する点である。問題の所在でも述べた通り、これまでの研究では「ロンドン原版は一次資料である」とされながらも、表面的にしか、その重要性を捉えてこなかったと言えるだろう。しかし、なぜ楽譜には多くの箇所でも二つの原版の混在が見られるのかという視点で、伝承・受容について調査・考察することにより、これまで明らかにされてこなかったロンドン原版の位置や重要性を明らかにする。本論第2章と第3章がこれに当たる。

二つ目は、幅広い年代の Op. 106 のエディションを対象とし、比較検討、及び二つの原

¹⁸ Fischer 2016: Johannes Fischer, *Ludwig van Beethoven Große Sonate für das Hammerklavier op. 106*, Begleitheft, Prien am Chirmsee: Edition Johannes Fischer.

版のそれぞれに由来すると考えられる要素の精査を行う点である。これにより、各エディションの特徴が明らかになると同時に、二つの原版がどのように扱われてきたのかの変遷をたどることにもつながる。さらにこの比較検討の結果を表にて添付することで、どちらの原版を採用すべきかの判断に迷った際の指標になれば、と考えている。本論第3章がこれに当たる。

三つ目は、演奏者の視点で、ロンドン原版を視野に入れた新たな解釈を提示している点である。これの何が「新しい」のかについて、ここで抑えておきたい。Op. 106の最近の批判校訂版を含めたこれまでのエディションは、Op. 106の楽譜出版において生じた二つの異本に対して、その違いを考慮しながらも、あくまで「一つの作品像の在り方」を構築すべきであるという立場をとってきた。さらに、その多くがウィーン原版を優位としながらも、そこにロンドン原版の要素の、いわゆる「良いとこ取り」をしてきたと言えよう。しかし本論の立場は、それとは大きく異なる。異なる点は以下の通りである。一点目は、二つの異本の混在を推奨していないこと。二点目は、ベートーヴェン自身によって確かに認められたこの二つの異本に対して、現存する数少ない一次資料を基に「どちらか一方のエディションの方が優位であるとは言えない」と捉える点である。本論では、ロンドン原版とは何かを考察した上で、これまでウィーン原版ばかりに偏った立場が当たり前のように存在していたことに疑問を呈すると同時に、ロンドン原版の形もまた、ベートーヴェンが認めた一つの有効な作品像であることを主張する。また本研究は、これまで軽視され続けてきた「ロンドン原版」を底本とした演奏像はどのようになるのかを考察するという試みでもある。本論第4章がこれに当たる。

こうした議論に先立つ序章では、Op. 106の基本情報をまとめる。第1章では、一次資料の精査と題し、現存するものを可能な限り精査し、それを踏まえて消失したものの内容についても可能な限り推論する。先行研究などでも、もちろんその内容は扱われてきたが、網羅的に時系列を追ってそれらを見ることのできる資料が存在しないこと、そしてそれらは時に、矛盾した内容を示すものもあり、ここで今一度精査するに至った。付録として、二つの原版、Op. 106の成立に関する年表、19世紀におけるOp. 106の演奏会記録、19世紀のOp. 106のエディション一覧、エディション比較表を添付している。

序章 ピアノ・ソナタ《ハンマークラヴィーア》Op. 106 について

本章では、Op. 106 の基本情報を踏まえることを目的とし、作品の成立に先立つ伝記的背景、作品の成立、初演について、その概要を述べる。本論のテーマである、エディションの問題を考えるにあたり、当時のベートーヴェンの伝記的な事柄は、やはり欠くことができない。基本的事項をここで整理したのち、論を展開していくこととする。

1. 作品成立に先立つ創作の衰え

ベートーヴェンは、ハンマークラヴィーアに着手する 1817 年から遡ること 8 年ほど前の 1809 年頃より、徐々に創作活動の不振期に陥っていた。その背景には、健康状態の悪化、失恋、甥の後見を巡る裁判、作風の変化など、様々な要因が考えられる。しかし彼は、こうした危機的状況の中、最終的には「作品 106 の着手によって始まった後期様式の結晶化」¹⁹に成功していくのであった。本節では、この当時のベートーヴェンの伝記的事実を整理する²⁰ことで、彼がいかにしてそれらの危機に立ち向かい、「音楽史上最長のソナタ」²¹である Op. 106 を成立するまでに至ったのかを見る。

1.1. 健康状態の悪化

ベートーヴェンが聴覚の障害をいつ自覚したのか、はっきりとは明らかになっていないが、始めのうちは、おそらく彼自身も全く気づかないでいたようである。また長期間にわたって発熱や腹痛といった体調不良が続いていたため、耳の聞こえない状態や、聴力の衰えを一過性のものだと考えていた節があった。最初の兆候に気づいたのは 1796 年頃であったと言われる。この耳疾が進行性のもので、おそらく不治のものであるということが次第に分かってくるにつれ、ベートーヴェンは強い危機感に襲われた。彼は何年もの間、誰にも言えなかったこの秘密を、最も交友関係の長い医師のウェーゲラーに 1801 年 6 月 29 日の手紙²²で伝えている。この時点ではまだ、ベートーヴェンは医者が聴力を回復させてくれるだろうといった望みを捨ててはいなかったが、音楽家という職にとっても社交生活にお

¹⁹ ソロモン・メイナード 1993 『ベートーヴェン(下)』徳丸吉彦、勝村仁子訳 東京：岩波書店 p. 452。

²⁰ ここでの記述の多くは、ソロモン 1992、1993 とニューグローヴ世界音楽大事典による。

²¹ カイザー・ヨーアヒム 1985 『ベートーヴェン 32 のソナタと演奏家たち 下』東京：春秋社 p. 120。

²² BGA 65(1, pp.78-83).

いても、途方もない困難が生ずることはすでに見通していた。

その一方で、耳の病は演奏や作曲のときにはまだほとんど障害にならず、それが障害になるのは人中にいるときだけだ、とも付け足した。これらの手紙は、絶望的で悲痛な部分ばかりではなく、職業的、経済的な成功を喜んでいる部分もある。4ヶ月半後に再びウェーグラーに宛てた手紙の中でも、医師たちは聴力を回復させることができなかつたこと、しかし以前よりはいくらか楽しく暮らしていることなどについても書かれている。その後ベートーヴェンの健康は、依然として思わしくなく、聴覚は急激に悪化していた。かつては聴くのに苦勞するという程度であったが、彼は医学的に見て急速に聴覚障害者になりつつあった。彼がピアニストとして公の場で最後に演奏したのは1815年1月25日のことで、それはソリストとしてではなく、ロシアの皇后のためにフランツ・ヴィルトが歌う《アデライーデ》の伴奏者としてであった。その前年の4月に彼は《大公》三重奏曲の演奏もしているが、そこに居合わせたルートヴィヒ・シュポーアは次のように述べている。「彼の聴覚障害のせいで、以前はあれほどほめ讃えられていたこの芸術家に名人芸のひとかけらもなくなってしまった。この哀れな耳の悪い男は、フォルテの部分では弦が耳障りな音を出すほどに鍵盤を強く打った。また逆に、ピアノのところではあまりにも弱く弾きすぎるので、たくさんの音がごっそり抜けてしまい、クラヴィアのパート譜を同時にのぞき見できなかつたら音楽がわからなくなるほどだった。…」²³ シュポーアのこの発言は、彼の、ベートーヴェンに対する敵意を考慮しなければならないものではあるが、この頃のベートーヴェンの耳疾がかなり深刻なものであったことは推察できるだろう。1818年までには事実上全く聴力が失われ、会話はすべて紙と鉛筆で行われるようになった。これが「会話帳」の始まりであり、ベートーヴェンが没するまでに400冊あまりになっている。

健康状態の悪化は、言うまでもなくベートーヴェンの自尊心や誇りに悲痛な効果を与えた。ベートーヴェンは、《ハンマークラヴィーア》を完成させた後の1819年4月[3?]月19日の手紙の中で次のように述べている。「それは激しい不安に満ちた状態で作曲された」²⁴。長年続いていた体調不良は、《ハンマークラヴィーア》作曲当時も、彼を悩ませ続けたようである。彼は深く意気消沈し、脅迫観念に付きまとわれ、そして死の思いに取りつ

²³ Thayer-Forbes 1964; 1967: Alexander Wheelock Thayer, rev and ed. Elliot Forbes, *Thayer's Life of Beethoven*. 2 vols. Princeton, N. J.: Princeton Univ. Press, pp. 577-578.

²⁴ BGA 1295(4, pp. 254-263).

かれていた²⁵。こうした状態は、1818年の春まで続いたが、その折、ルドルフ大公のために書かれた《ハンマークラヴィーア》冒頭の主題からは、かすかな回復の前兆を感じさせる。

1.2. 不滅の恋人

1812年7月6日～7日のベートーヴェンの手紙、いわゆる「不滅の恋人への手紙」²⁶は、ベートーヴェンの死後、遺品の書類の中から発見されたものである。

7月6日、朝

私の天使、私のすべて、私の私—今日はほんの少しだけ、そして鉛筆で（あなたの鉛筆で）—明日まで、私の宿舎は、はっきりと決まらない、何という時間の浪費だろう—やむを得ないことなのに、どうしてこのように悲しいのだろう—私たちの恋は、我慢をし、またすべてを求めたりしないようにしなければ成立し得ないのではないか、あなたが完全に私のものではなく、私も完全にあなたのものではないということあなたを変えられますか—どうぞ美しい自然に目を向け、しなければならぬことを考えてあなたの気持ちを静めてください—愛はすべてを要求し、それは正しいことです、同じように私はあなたを必要とし、あなたは私を必要とします—ただあなたは、私が私のためとあなたのために生きなければいけないということにすぐに忘れてしまいます、もし私たちが完全に結ばれていたのなら、あなたも私もこの苦しみを本当に少ししか味わわないですむのに—私の旅はひどいもので、昨日は朝の4時にやっとここに到着しました、馬の数が不足だったので郵便馬車は違う道を選んだのです、しかしこれもひどい道でした、終りから一つ前の中継駅で私は夜には旅をするなど言われ、森のこわさを教えられましたが、それは私を一層駆り立てただけでした—そして私は間違っていました、馬車はひどい道で壊れざるを得ませんでした、ぬかった田舎道で、あのような御者たちがいなかったら、私は途中でずっと止まったままだったでしょう—エステルハージは私とは違って通常の道をとりましたが、8頭の馬をもってしても、4頭の馬の私と同じような目にあつたのです—しかし私は少しばかり満足しました、私が何かを運よく切り抜けたときと同じように—さてここで話を外のことから内のことに移しましょう、私たちはまた

²⁵ Rolland 1966: Romain Rolland, *Beethoven: Les grandes époques créatrices*. Paris: A. Michel, p. 595.

²⁶ BGA 582(2, pp. 268-272).

すぐに会えるでしょう、それに今日はあなたに私の考えを伝えることができないのです、それは私がこの数日間自分の人生について考えたことです—もし私たちの二つの心がいつもぴったりと結びついているのならば私はこのようなことは言わなくてもすみます、私の胸はあなたに言いたいことでいっぱいです—本当に—言葉は何にもならないと思うときがあります—元気を出して下さい—私の誠実なただ一つの宝、私のすべてでいて下さい、私があるに贈るように、神々が残りのものを、つまり私たちにとってなければならないものとあるべきものを、贈って下さるでしょう。

—あなたの忠実なルートヴィヒ

7月6日月曜日夕方—

あなたは悩んでいますね、私の最も大切な人—私は手紙を朝早く投函しなければいけないことを今知りました。毎月曜—毎木曜—これらが K 行きの郵便馬車が出る日です—あなたは悩んでいますね—でも、私がいるところにあなたはいつも私と一緒にいます、私は自分自身ともあなたとも話をしています—私があると一緒に暮らせるようにして下さい、どんなに楽しい生活になるでしょう！！！！本当にそうできたら！！！！あなたがいなかったら—あそこやここで人々の好意に追いかけられ、それは私の考えでは—私には値しないし、受けたいとも思いません—人間が人間に対して卑屈になること—それが私を苦しめます—私が自分を宇宙の関係の中に入れて見ると、私は何でしょう、そして—人々が最も偉大な人と呼ぶのは何でしょう—そしてやはり—ここに人間に備わった神性があります—あなたが私からの最初の便りを多分土曜日まで手にできないかと思うと私は泣けてきます—あなたがどんなに私を愛していても—それよりもっと強く私はあなたを愛します—どうぞ私から隠れないで下さい—お休みなさい—湯治客として私はもう寝なければなりません—ああ—本当に近い！しかし本当に離れている！私たちの愛は本当の天の建物のようではないのでしょうか—そして天の砦と同じように強いのです。—

お早う、7月7日—

床の中にいるときから考えはあなたのことへ、私の不滅の恋人のことへと向かいます、ときどき喜んだかと思うと、また再び悲しくなります、運命が私たちの願いを聞き入れてくれるかどうかわかるのを待っています—私はあなたと完全に一緒にな

るか、あるいは全く別れてでなければ暮らせません、そうです、私は遠いところを長いあいださまよい歩く決心をしました、私がある腕の中に飛び込んでゆけるまで、そしてあなたのもとで本当にくつろいでいると言えるまで、あなたに包まれた私の魂を霊の国に送ることができるまで—そうです、残念だがそうしなければなりません—あなたは私があるあなたに対して忠実であることを知っている分だけ落ち着いていられるでしょう、ほかの誰も私の心を所有することはできません、絶対にです—絶対にです—おお、神様、これほど愛している人からなぜ離れていなければならないのでしょうか、そして私の V [ウィーン] での生活は今と同じようにみじめなものになるでしょう—あなたの愛は、私を最も幸福な人にも、また同時に最も不幸な人にもします—私ぐらいの年になるとある程度生活が毎日変化なく繰り返されていくことが必要になります—私たちの関係でこうしたことが成立するのでしょうか—私の天使よ、今私は知りました、郵便馬車が毎日出ていくことを—ですから私は今すぐ書くのをやめて、あなたが手 [紙] をすぐに受け取れるようにします—落ち着いて下さい、私たちの存在を落ち着いて考えることによってしか私たちは一緒に暮らすという二人の目的に到達することができないのです—落ち着いてください—私を愛して下さい—今日も—昨日も—あなたに対する憧れは涙にあふれていて—あなたに対する—あなたに対する—私の生命—私のすべて—さようなら—私を愛し続けて下さい—あなたを愛する者の最も忠実な心を決して誤解しないように

L.

永遠にあなたのもの

永遠に私のもの

永遠に私たちのもの

この恋文が誰に宛てて書かれたのか直接示すものは何もないが、相手のことを終始、親密な間柄を示す“du”で呼んでいるのはこの手紙だけである。長い間、書かれた年さえもはっきりせず、初期の伝記作家たちはベートーヴェンの憧れの対象となった多くの女性の名前をその候補者として挙げていたが、恋文の書かれた正確な年が 12 年であり、発信地がテプリツ、そして受取人のそのときの住居がカールスバート（書簡中では「K」）であることが判明すると、そのほとんどが当てはまらないことが分かってきた。

Maynard Solomon の著書のなかで、最もそれらしい女性と考えられているのがアント

ーニエ・ブレンターノである。彼女はウィーン貴族の娘で、ベートーヴェンよりも10歳年下である。18歳の時、フランクフルトの実業家フランツ・ブレンターノと結婚している。フランツは、ゲーテの信奉者でのちに文学者となるベートーヴェンの友人ベッティーナ・ブレンターノの異母兄弟である。ブレンターノ一家は1809年から12年にかけてウィーンに滞在している。いろいろな点で誠実な妻であったが、ベートーヴェンを心から崇拝しており、特にフランクフルトへどうしても帰らざるを得なくなると、精神的にベートーヴェンを頼るようになってきたようである。また、ベートーヴェンは、不倫という関係を激しく非難しつつも、既婚の女性や、結婚はしないがすでに男性関係を持っている女性などに強く惹かれていたことも確かである。いずれにしても、この手紙は非常に曖昧な表現が多い。愛する者と結ばれることを強く望みながら、その望みを捨てたり現状を肯定したりする表現があちこちに見られ、見方によっては、一緒に家庭を築いていくという意志がないことを遠回しに言っているとも考えられる。おそらく、こうした曖昧な関係が終わったのは、7月の終わりにベートーヴェンがカールスバートでブレンターノ一家に会った頃である。一家は、秋になると予定通りフランクフルトへ戻り、その後は会うこともなかった。しかし、親交はずっと続き、ベートーヴェンは20年にアントーニエの夫フランツに実業家としての助力を求めたり、重要な作品をアントーニエや娘のマクシミリアーネに献呈したりしている。

1812年夏の失恋事件はさまざまな解釈が可能であるが、少なくともベートーヴェンの心のなかで大きな転機となったのは確かである。創作活動の不振期が著しく長く続き、その頃のベートーヴェンがひどく落ち込んでいたことははっきりしている。

1.3. 甥の後見を巡る裁判

1815年11月15日、ベートーヴェンの弟であるカスパル＝カールが結核で息を引き取った。未亡人のヨハンナと、一人息子である9歳の息子のカールがあとに残されることとなる。ベートーヴェンはこれを機に、甥カールの独占的な養育権を得ようと動き出すのであった。

弟カスパル＝カール・ヴァン・ベートーヴェンは、1806年5月25日にヨハンナ・ライスと結婚した。ベートーヴェンは、1823年の会話帳に「弟の結婚は、彼の愚かさ加減だけ

でなく不道徳性を示している」²⁷と書いている。つまり、彼らの結婚に反対だった。そしてベートーヴェンは、弟がヨハンナに対して反感を抱くように仕向けようとする。1816年の日記帳のある頁には、もしカスパル＝カールが妻のもとを去って「私の所にきていれば、まだ生きていて、あんな惨めな死に方はしなかつたらうに」²⁸と記してある。

しかし、この結婚による兄弟の仲違いは長くは続かなかった。カスパル＝カールは、兄のために以前と同様、ときどきは雑事を手伝っていた。1809年にウィーンがフランス軍によって砲撃されたときも、ベートーヴェンは弟夫婦の家に身を寄せた。1812年以降は、この兄弟は緊密な関係にあったが、彼らにとってそれは激しい喧嘩と仲直りとが交替するものであったらしい。1813年には、兄弟間に暴力沙汰が起こったことが報告されており、その際にはヨハンナが仲介者の役割を果たしたと言われている²⁹。

ベートーヴェンが甥のカールを横取りしようとしていることをほのめかすものは、最後の瞬間まで何も現れなかった。死の床にあったカスパル＝カールは、1815年11月14日、遺言書の中に次のように記した。「私はわが妻に加えて兄ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンを共同後見人に任命する。」このことを知ったベートーヴェンは、弟にこの文面を次のように変えさせた。「私は兄ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンを後見人に任命する。」³⁰ カスパル＝カールとヨハンナは、ベートーヴェンが、母親であるヨハンナを子供の共同後見人からはずそうとしていることに突然気づいて面くらった。そこでカスパル＝カールは、自分の遺言書に補足文をつけ、それにも同日おそく署名した。

兄が「……」私の死後、息子のカールを全面的に引き取り、母親が監督や養育できないように完全に引き離そうと望んでいることを知り、そして、兄と妻はあまり仲がよくないことも知っているため、この遺言に以下のことを付け加える必要があると認める。まず、私自身は決して息子が母親のもとを離れることを望んではおらず、今まで同様、今後も事情が許すかぎり母親のもとにとどまってほしい。そのため、兄同様、妻も息子

²⁷ Schünemann 1941-1943: Georg Schünemann, *Ludwig van Beethovens Konversationshefte III*, Berlin: M. Hesse, p. 158.

²⁸ Leitzmann 1921: Albert Leitzmann (Ed.), *Ludwig van Beethoven: Berichte der Zeitgenossen, Briefe und persönliche Aufzeichnungen*, II, Leipzig: Insel. 255 (no. 82); Sterba 1954: Editha Sterba and Richard, *Beethoven and His Nephew*. New York: Pantheon, p. 51.

²⁹ Nohl 1867-1877: Ludwig Nohl, *Beethovens Leben*, III, Leipzig: J. Günther, p. 34; Thayer-Forbes, p. 551.

³⁰ Thayer-Forbes, p. 624.

の後見人を務めるものとする。³¹

この翌日、カスパル＝カールは息を引き取った。弟が死に際に心配していたことはすべての中する。弟の頼みを全く実行できないことはベートーヴェンにとって悲劇であった。義妹のヨハンナと仲良くできないだけでなく、今の自分の立場を考えるだけで、訳のわからぬ深い情熱や渴望に心が揺り動かされるのであった。考え方や行動がどれほどあやふやに見えようとも、結婚して家庭をもつことを願い、何回か失敗しているベートーヴェンにとって、甥のカールの責任をすべて自分一人で負えば、弟に対する厳粛な義務を果たせばかりか、人の子の親としての責任と満足を少しは得られるだろうと感じられるようになってきたからである。しかし、そうするには、まず母のヨハンナがカールを保護監督するには全く不適當で、後見人から外す必要があることを自分自身や他の人に納得させねばならなかった。甥をめぐる争いは4年半にも及んだが、その後さらに6年もの間、甥の世話と教育がベートーヴェンに重くのしかかってくる。おじと甥という2人の関係が非常に厄介なものであったことから、1826年の夏には、カールの自殺未遂という事態にまで至るが、それまでも、訴訟、書状作成、反目、和解、そして個人的な心の葛藤などに計り知れないほど多くの時間が費やされた。

ベートーヴェンの創造力は、彼がこうした出来事にのめり込んだためにほぼ完全に停止してしまっただけで、というのが通説であるが、後見人をめぐると、ベートーヴェンの創作力の変化との関係は複雑で、単純な因果関係では説明できない。1816年から1817年にかけて、カールとヨハンナに対するベートーヴェンの敵対関係は比較的穏やかであったが、彼の生産性は、極端に低かった。実際、作品98の《はるかな恋人に》を1816年4月に、そして、作品101のピアノ・ソナタを11月に完成させると、その後1年間、新たに作品を書くことはなかった。1817年が終わる頃、作品106《ハンマークラヴィーア》ソナタを書き始める。そして1818年4月までには、このソナタの最初の二つの楽章を書き終えている。1817年と1818年には、第9交響曲の断片的な楽想が現れた。しかし、1818年の夏から1820年初頭まで続いた厄介な訴訟が、ベートーヴェンの生産性に悪い影響を与えたようには見えない。それどころか、この時期に彼は《ハンマークラヴィーア》ソナタを完成し、《ディアベリ変奏曲》のスケッチを書き始め、そして《荘厳ミサ曲》については相当地筆が進み、その中のキリエとグローリアを書き上げて、クレドの一部も1819年末ま

³¹ Thayer-Forbes, p. 625.

で作曲した。したがって、ベートーヴェンが後期様式を中心をなすいくつかの傑作の実質的な作業を完了することによってこの様式を形成したのは、こうした情緒的な大嵐の真最中のことであった。しかも、ベートーヴェンの作曲活動は家庭や法律上の問題に忙殺されても大して損なわれることはなかった。

ベートーヴェンの晩年の作品の成立において、この経験がどの程度影響しているのかは、はっきりとは言えない。しかし確かに彼は、別人となってこの苦難から現われ出た。カールとヨハンナは、ベートーヴェンの深奥の葛藤と欲望を表面化させるための触媒として働き、おそらくそれによって、彼の創造性をそれまでには思いつきもしなかった領域へ向かわせる突破口を準備したのである。³²

1.4. 作風の変化

これまで 1809 年頃からの創作力の落ち込みの背景にあることについて述べてきたが、このころの彼は、そうした音楽以外の要因によって深刻な感情的動揺に襲われていた、というだけではない。創作においても、いわゆるスランプに陥っていた。これまで創り上げてきた「中期の諸様式」を使い尽くし、一種の虚脱感にも襲われていたのだ。彼は、新たな作風を模索していたのである。

後期のベートーヴェンの特徴づけるものとして、Solomon は次のような点を挙げている。対位法と多声的書法のきわめて熱心な探究、ヨハン・セバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685~1750) とゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル Georg Friedrich Händel (1685~1759) へのひたむきな関心、教会旋法の再認識、バロック様式で用いられたそれぞれに象徴的な意味をもつ「主題型」の使用、楽器によるレチタティーヴォへの回帰、表現力をもたせるために使われた前古典派風な豊かな装飾、単一主題による展開と変奏手法への没頭。これらは多くのドイツ・ロマン主義者たちが行ったような理想化された過去での回想だったわけではないし、尚古趣味的な探究であったわけでもない。むしろベートーヴェンが、新しい種類の心理的、社会的経験を象徴化する上で助けとなる内発的な要素や表現方法を模索していたことの現れである。

晩年のそうした特徴の中でも、対位法に関しては、重要な作品に印象深いフーガ部分を欠くものはほとんどない、といったほどに中心的なものであると言える。ベートーヴェンの対位法や多声的書法への関心や探究心については、1809 年、ルドルフ大公に対位法を教

³² ソロモン 1993 p. 500。

えているなどの伝記的事実や、彼のスケッチ帳にある、ヘンデルやバッハの対位法的な楽曲ばかりの「抜き書き」から垣間見ることができる。この「抜き書き」を通して、先人の作曲家から学ぼうとするベートーヴェンの姿勢は、「初期から晩年まで広い年代にわたって」いたが、1817年頃、特に集中的に行われており、「中期から後期への作風の移行期にあたって、ベートーヴェンはそのヒントをバロック音楽に求めていた」ことが推察される³³。後期に見られる彼のフーガは、以前にも増して緻密なものとなり、一つの様式にさえなっていた。中には、熟練した仕掛けによって隙間なく満たされた完全なフーガもある。ベートーヴェンは明らかに、フランツ・ヨーゼフ・ハイドン Franz Joseph Haydn (1732年～1809年) やヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756年～1791年) から継承した様式によって得られるものとは違った楽章構成法を探し求めている。Op. 106の最終楽章にも、「難解な対位法的工夫があふれ」³⁴ たフーガがある。「不自然なほどに、フーガの技法をごとごと使いすぎている」³⁵ などと評されることも多いが、この強烈な存在感を与えるフーガ楽章は、孤高な後期様式のはじまりを告げているかのようである。

ベートーヴェンの叙情性への関心もまた、後期を通じて深まっていった。1800～10年の頃には極めて表現力に富むゆっくりとした賛歌風の旋律を開拓している。こうした傾向はずっと続き、その過程で強化され、後期において大いに洗練されていく。また1809年～1820年にかけて、ジョージ・トムソン George Thomson (1757～1851) のために150曲を超える民謡を編曲しており、後期の四重奏曲などで民謡や民俗舞曲を思い起こさせる単純で短い調べがしばしば見られる。これらを踏まえると、ベートーヴェンが今まで以上に直截で、内的な伝達様式を追い求めていたように思われる。

1816年に作曲された《はるかなる恋人に》Op. 98は、最初の連作歌曲であり、ロベルト・シューマン Robert Schumann (1810～1856) やその他の多くの作曲家たちによる連作歌曲の創作に先鞭をつけたという点で、ベートーヴェンの生涯とその作品の中で特別な位置を占める。Kermanはベートーヴェンの後期作品への道が、この作品によって開かれていった過程を強調し、同時に、この連作歌曲を、後期のソナタや弦楽四重奏曲に見られる歌謡性にあふれた楽章や、第9交響曲のアダージョ楽章と《歓喜に寄せて》とにおいて

³³ 越懸澤麻衣 2020 『ベートーヴェンとバロック音楽 「楽聖」は先人から何を学んだか』東京：音楽之友社 p. 92。

³⁴ ソロモン 1993 p. 586。

³⁵ Riezler 1936: Walter Riezler, *Beethoven*, Berlin: Atlantis, p. 227.

結実した「声楽的衝動」の出発点と見なしている。Op. 106 の長大な Adagio にも、声楽的要素を見て取れるが、「スランプ期」に多く向き合った歌曲で得た成果が、後期作品の中に活かしていると言えるだろう。

2. 作品の成立³⁶

Op. 106 は、1817 年の 11 月ないし 12 月から 1818 年の夏の間にはスケッチされている。作曲は、第 1 楽章から楽章順にされた³⁷。ベートーヴェンは、1819 年 3 月 3 日にルドルフ大公に宛てた書簡³⁸の中で、書簡と同封する二つの楽章（Op. 106 の第 1、第 2 楽章）には「昨年の殿下の命名祝日の前には作曲してあったことを記した」と述べており、これら二つの楽章には、ルドルフの命名祝日である 4 月 17 日よりも前の日付が入っていたと推定される。つまり、1818 年 4 月の段階で第 1、第 2 楽章はすでに完成していたことになる³⁹。第 3 楽章は、1818 年初夏までに、終楽章のフーガは夏に集中して作曲され、秋頃までに全曲が完成したとみられる。ベートーヴェンは、1818 年 5 月中頃になって、自身の愛弟子である、当時同地に在住していたリースにロンドンの出版社への仲介を頼んでいる⁴⁰。ただし、ロンドンに筆写譜が送られたのは、おそらく 1819 年 1 月になってからのことである。ウィーンのための筆写譜がいつ作成されたのかは不明である。ともあれ、ウィーンのオリジナル版はアルタリア社によって 1819 年 9 月に出版され、ロンドンのオリジナル版はリージェンツ・ハーモニック・インスティテューションから同じ年の 12 月に出版された。

ロンドン原版の出版には、上記のように、ベートーヴェンから依頼を受けた弟子フェルディナント・リースが仲介役として重要な役割を担ったが、彼はベートーヴェンにとってどんな存在だったのだろうか。ここで少しリースについて述べることにする。

リースは、1784 年 11 月にボンに生まれた。リース家は、祖父ヨハネスの代から宮廷音楽家一族であった。同じく宮廷音楽家の血筋であるベートーヴェン家とは、代々同じ職業で、家も近くに構えており、その親交は深いものだったようだ。ベートーヴェンが、父の

³⁶ ここでの記述の多くは、以下の作品目録 2014 に拠っている：Kurt Dorfmueller, Norbert Gertsch und Julia Ronge, *Ludwig von Beethoven. Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis*, Revidierte und wesentlich erweiterte Neuauflage des Verzeichnisses von Kinsky, Georg und Halm, Hans, München: G. Henle, pp. 661-669.

³⁷ 横原千史 2013 『ベートーヴェン ピアノ・ソナタ全作品解説』 東京：アルテスパブリッシング p. 168.

³⁸ BGA 1292(4, pp. 245-247).

³⁹ 横原 2013 p. 168.

⁴⁰ BGA 1258(4, pp 187-190).

失職や、母を亡くすといった危機に直面するたびに、リースの父アントンは、ベートーヴェンの財政を気にかけて。宮廷に対して救済処置を願い出てくれたこともあった。しかし、これはリース家が一方的に助けてくれたというわけではなく、アントンはかつて、ベートーヴェンの祖父に、自身の宮廷ヴァイオリニストとしての就職の際に力を貸してもらっていた。つまり両家は、互いに助け合うといった良好な関係性を代々続けていた。そのような関係性から、ベートーヴェンがウィーンにやってきたリースを弟子として受け入れるのに時間はかからなかった。ベートーヴェンはリースを迎え入れると、演奏会のリハーサル、パトロンの屋敷、楽想を書き留めるための散歩に至るまで、あらゆる場所に連れ回した。リースはベートーヴェンのそばで、時に厄介な出版交渉の代行、交響曲のピアノや室内楽への編曲、パロン宅でのピアノ演奏の代役など、さまざまな活きた経験を積みさせてもらったのだった。ベートーヴェンとこうして時間を共にしたのは1801年～1805年の4年余りだったが、その後の1810年代～20年代のベートーヴェンの音楽活動の陰には、常に弟子のリースの助力があった⁴¹。こうして築いてきた確かな信頼関係の中で、Op. 106の出版においても、重要な役割を任されたのであった。ロンドン原版において、リースが行ったとされる校正等についての具体的な内容は、のちの章で述べる。

3. 初演

作品目録(2014)には、「はっきりと知られていない」とある。しかし当時のピアノ・ソナタにおいて一般的に「初演」ということが明らかになるはずもなく、問題になることもないということは押さえておくべきポイントであろう。ピアノ曲だけを採り上げる、現代の「リサイタル」のような演奏会文化が主流になるのは、ベートーヴェンの時代よりもう少しあとのことであり、そうした時代にはそもそも「初演」などという概念すらないと捉える方が正しいだろう。

それを踏まえた上で、Op. 106を公開で演奏したおそらく「初めて」の人物に、フランス・リスト Franz Liszt(1811～1886)の名を挙げることは出来よう。それは、1836年5月18日、パリ、サル・エラルで行われた⁴²。この演奏がどのようなものであったのかなどの詳細は、第2章で改めて述べる。

41 かげはら史帆 2020『ベートーヴェンの愛弟子 フェルディナント・リースの数奇なる運命』東京：春秋社 p. 143。

42 沼口隆 2014「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106『ハンマークラヴィーア』の2つの初版とイギリス初版の意義」『国立音楽大学研究紀要第48集』p. 29。

作品目録（2014）には、ヨーゼフ・カール・ベルナード Joseph Karl Bernard（1781?～1850）や、カール・ツェルニー Carl Czerny（1791～1857）の名も挙がる⁴³が、それらは諸説ある中の一つといった程度で、その真偽も不確かなうえ、実際に行われていたとしても公の場での演奏ではなく、あくまで身内の中で行われたに過ぎないようである。

4. まとめ

Op. 106 の作曲に至るまでのベートーヴェンを取り巻く状況は、大変な混乱の中にあった。健康面や恋愛事情、そして甥の後見をめぐる問題など、音楽とは別の部分での混乱をはじめ、作曲活動においてもいわゆるスランプに陥っていたのである。これを打破するきっかけとなった Op. 106 は、ベートーヴェンのこれまでの作品には類を見ないほどにまで「巨大」かつ「難解」な作品となった。伝記的な事柄と作品とを安易に結びつけて考えることはできないが、Op. 106 が難解であるとされるその「特異」な作品像の裏には、そうしたベートーヴェンの事情があったことは確かであろう。

本論ではこの先、エディションの問題について詳細に分析をしていくこととなるが、Op. 106 が抱えることになったエディションの問題も、Op. 106 のこうした特異な作品像や出版状況ゆえに起こったと言えるだろう。まず、その出版において、ロンドン原版の校訂には現地を訪れるなどして、ゲラを直接確認することが叶わなかったベートーヴェンだが、その背景に「健康面」の問題があったことは確かである。もし、ベートーヴェンが現地に行くことができ、それらを確認することができていたら、二つの原版による差異はこれほどまでに生まれなかつただろう。また、作曲者が現地を訪れることができないという条件が同じだったとしても、Op. 106 が彼の従来作風からこれほどまでに大きく変化せず、斬新なものでなければ、テキストの決定についてここまで難航することもなかつたであろう。楽譜の出版が創作の一部であることは、大崎も強調していることであるが⁴⁴、創作が作曲家の人生の中核にあるという前提に立つならば、Op. 106 のエディションの問題も、伝記的事実と切っても切れない関係にあると言えるだろう。

こうした状況の中で生まれた Op. 106 は、ウィーンとロンドンで、それぞれ 1819 年の 9 月と 12 月に出版された。この二つの原版については、その概要を第 1 章で、テキスト内容に関しては第 3 章で述べる。

⁴³ Dorfmueller et al. 2014, p. 664.

⁴⁴ 大崎滋生 2018『ベートーヴェン像 再構築』東京：春秋社 p. 18、p. 76 等。

初演については、はっきりとは明らかになっていないものの、フランツ・リストが 1836 年 5 月 18 日にパリで行ったとする説が有力であろうことがわかった。初演や演奏史に関する詳しい事項は、第 2 章で改めて述べる。

第1章 一次資料の精査

本章では、Op. 106の一次資料について、現存するものを精査し、それを踏まえて消失したものの内容についても可能な限り推論した。これにより、ベートーヴェンの意向を整理していく。これまでは、ウィーン原版の方がベートーヴェンの意向がより多く反映されたものとして知られてきたが、本調査により、ロンドン原版にもベートーヴェンの意向が大いに反映されているという事実が明らかになる。

1. 現存するもの

1.1. スケッチ

Op. 106のスケッチは、34点確認されている⁴⁵。序章で触れた、作品の成立時期や作曲順序についても、このスケッチをもとに明らかにされている⁴⁶。自筆譜が残っていないOp. 106にとって、自筆による楽譜資料はスケッチのみであり、貴重な資料であることは言うまでもない。しかし本論の、二つの原版の相違を見ていく上では、スケッチの内容がその考察に直結するものは残念ながら見出せなかった。そのため、ここでスケッチ内容についての詳細には言及しない。

1.2. 書簡

Op. 106に関する書簡からは、作品の着想、二つの原版の準備や訂正、変更に至るまでの詳細を追うことができる。ここでは、その書簡の中でも特に重要なものを採り上げ、Op. 106がどのように出来上がり、二つの原版がいかにして出版されるに至ったのかを時系列を追って整理していく。

⁴⁵ Dorf Müller et al. 2014: Kurt Dorf Müller, Norbert Gertsch und Julia Ronge, *Ludwig von Beethoven. Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis*, Revidierte und wesentlich erweiterte Neuausgabe des Verzeichnisses von Kinsky, Georg und Halm, Hans, München: G. Henle, pp. 664-666.

⁴⁶ ノッテボーム・グスターフ 1887 (1952)『第二ベートーヴェニアーナ 上』山根銀二訳 東京：音楽之友社 pp. 139-156。

①1818年5月中頃 ベートーヴェンがリースへ宛てた手紙⁴⁷

[ウィーン 1818年5月19日もしくはその直前] ⁴⁸

親愛なるリースへ！

[……] 私は、あなたが下記の2作品、ピアノのための大ソロ・ソナタ [Op. 106] と、ピアノ・ソナタ⁴⁹から2つのヴァイオリン、2つのヴィオラ、1つのチェロのために私自身で編曲した五重奏 [Op. 104] をロンドンの出版社に売ってくれたらと願っています。二つの作品で、おそらく金の50デュカット [を得ること] はあなたにとって簡単でしょう。それと注意です。(より多ければもっといいです) 儲かったっていいはずですよ!!!! 出版社は、両方の作品をいつ出版したいかを知らせるだけで良いです。そうすれば、私自身が、ここでも同時に出版できるでしょう。当地では、私が校正を手掛けさえすれば、どんどん出版はするのです。

[……]

ベートーヴェン

これは、Op. 106についての初めての言及として知られる書簡である。この書簡からは、1818年5月中頃、ベートーヴェンが弟子のリースに、ロンドンでの出版における、出版社との仲介役を頼んだことがわかる。

②1818年12月18日 リースがベートーヴェンに宛てた手紙⁵⁰

[ロンドン 1818年12月18日]

[リースは、Op. 104とOp. 106のためにロンドンで二つの出版社を見つけたので、これらの作品の彫版見本の送付を頼んでいる。

[……]

リースはOp. 106のためのメトロノーム指定を示してくれるように頼み、改めてベートーヴェンの肖像画を求めている。彼はロンドンでのOp. 104とOp. 106の出版に関する以前の手紙を受け取ったかどうか尋ねている。]

⁴⁷ BGA 1258 (4, pp. 187-190).

⁴⁸ この手紙はベートーヴェンがメードリングに居住する直前または当日 (1818年5月19日) に書かれた。(BGA 1258 Anm.1; 4, p. 188.)

⁴⁹ ベートーヴェンは、ここでピアノ・ソナタと書いたが、これはおそらくピアノ・トリオ(Op. 1-Nr. 3)の間違いである(Dorfmueller et al. 2014, p. 662)。

⁵⁰ BGA 1274 (4, p. 217)。原本は不明。1819年1月30日の手紙1285から推論されたもの (Quelle)。

この書簡の内容からは、ロンドンでの仲介役を頼まれたリースが、それを受け、Op. 106の彫版見本やメトロノーム指示の送付を要請していることがわかる。また、ベートーヴェンに対し、以前の手紙を受け取ったかどうかを尋ねていることから、手紙のやり取りがスムーズに行えていなかった様子が垣間見られる。

③1819年1月30日 ベートーヴェンがリースへ宛てた手紙⁵¹

ウィーン 1819年1月30日

親愛なるリースへ！

ようやく今日、昨年12月18日の手紙⁵²にお返事ができます、あなたに関わってくれて私は嬉しいです。今はロンドンに行くことは不可能で、あまりに多くの状況⁵³に巻き込まれていますが、神は私に、来年の冬にはロンドンへ確実にに行けるように助けてくれるでしょう。そのとき、私は新しい複数の交響曲も持ってきます⁵⁴。

[……]

あなたはアレンジした五重奏⁵⁵とこのソナタ⁵⁶をもう受け取っていることでしょう。何としても、両方の作品、特にこの五重奏が直ちに彫版されるようにしてください。ソナタは無論、いくらかゆっくりとで構わない。しかし私は、少なくとも2ヶ月以内、長くても3ヶ月で出版されることを願っています。あなたが言っていたあなたの、以前の手紙を私は受け取っていません。だから、私は遠慮なく二つの作品を当地でも高く売りつけました⁵⁷。

注意：つまりドイツのためだけにです。そうこうするうちに、このソナタが当地で出版されるまでに同じく3ヶ月が経つでしょう。

[……]

あなたは、このソナタのメルツェルのメトロノームのテンポを次の郵便で受け取るで

⁵¹ BGA 1285 (4, pp. 230-231).

⁵² BGA 1274 のことである。この手紙は残っていない (BGA 1285 Anm. 1; 4, p. 231)。

⁵³ ベートーヴェンはおそらく、1818年12月以来彼が関与した法的後見人の訴訟のことを言っている。1818年12月15日の手紙(BGA. 1273)および1819年2月1日の手紙(BGA. 1286)を参照のこと(BGA 1285 Anm. 2; 4, p. 231)。

⁵⁴ ベートーヴェンは1817年の夏に、「1818年1月にロンドンへ出向き、交響楽団のために二つの交響曲を作曲する」という約束をしている (BGA 1285 Anm. 3; 4, p. 231)。

⁵⁵ Op. 104 (BGA 1285 Anm. 8; 4, p. 231)。

⁵⁶ Op. 106 (BGA 1285 Anm. 9; 4, p. 231)。

⁵⁷ ウィーンのアルタリア社 Artaria&Comp.へ売った。1819年2月にOp. 104が、同年9月にOp. 106が出版されている (BGA 1285 Anm. 11; 4, p. 231)。

しょう。⁵⁸ パウル・エステルハージ侯の配達人デシュミットはこの五重奏とソナタを持って行きました。

[……]

友人 ベートーヴェン

この書簡から、ベートーヴェンは、リースがロンドンでの出版において仲介役として携わってくれることを好意的に思い、彼に対し全幅の信頼を置いていることが窺える。また「このソナタ [Op. 106] をもう受け取っていることでしょうか」と述べていることから、ロンドンのための筆写譜はそれより前にリースの元へ送られていることが推察される。さらに、ベートーヴェンがこの時点で既に、ウィーン原版の出版社であるアルタリア社には作品を売っていたことが明らかであり、ロンドンでも可能な限り早く売って欲しいという願望を持っていたことがわかる。

④1819年3月8日 ベートーヴェンがリースへ宛てた手紙⁵⁹

ウィーン 1819年3月8日

[……]

私のことを忘れないでください。このソナタの中には嫌になるほどたくさん間違いがあるに違いない。あなたは今後の郵便で訂正リスト⁶⁰を受け取ります。すべては素早く書かれたものです。私の写譜師のシュレンマーはすでに年老いました⁶¹。

[……]

ベートーヴェン

リースに宛てた、この手紙のひとつ前（1月30日）の時点では、Op. 106に「間違いがある」ことに一切触れていなかったことから推察するに、ベートーヴェンは2月以降になってようやく、彼の手許にあった筆写譜の内容を確認したものと思われる。そして、すでにロンドンへ送っていた筆写譜にも同じく誤りが多いかもしれないことを危惧し、慌てて「訂

⁵⁸ ベートーヴェンは1819年4[6?]月16日の手紙(BGA. 1309)でメトロノーム指示を送った(BGA 1285 Anm. 13; 4, p. 231)。

⁵⁹ BGA 1294 (4, pp. 248-51)。

⁶⁰ Hammerklaviersonate Op. 106の訂正リストは、1819年3月19日の手紙(BGA 1295)で送られた(BGA 1294 Anm. 4; 4, p. 251)。

⁶¹ Wenzel Schlemmerはその頃59歳。1823年に亡くなっている(BGA 1294 Anm. 5; 4, p. 251)。

正リスト」を作成したのだろう。また、筆写を担当した人物に「シュレンマー」がいたことも推察される。

⑤1819年3月19日 ベートーヴェンがリースに宛てた手紙⁶²

[ウィーン 1819年3月19日]⁶³

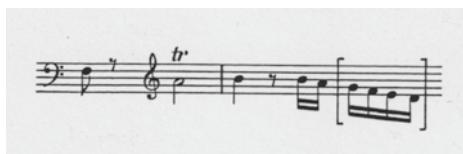
[訂正の詳細が列挙されている]

親愛なる R. [リース]、私があなたに引き起こしている面倒をどうか許してください、このソナタの筆写譜にどうしてこんなにたくさん間違いが入り込んだのか理解できない。急いだのも原因でしょうし、写譜師が自分でやらず、他の者に写させたのも原因でしょう。当地にある筆写譜を弾いてみて初めて間違いが見つかったが、ひょっとしたらすでに以前に訂正されたものも多いかもしれない。10から20、100、200などの小節数を数えて書き留めてください。そうすれば、すべてを素早く適切に改善するのが簡単になるでしょう。それが引き起こす費用を私に、ただ私に書いてください。メトロノームが壊れているので、まだテンポはありません⁶⁴。私は数日以内にやっとそれを手に入れるでしょう。間違った写譜が生じるのは、私がもはやこれまでのように自分のコピストを維持できないがゆえだろう。⁶⁵これらの状況がすべてを引き起こしたのだ。

[……]

ソナタがロンドンに適していない場合は、別のソナタを送ることができます。

または、ラルゴを省いて、直接フーガで最終楽章を始めても良い。



または第1楽章、それからアダージョ、3つ目にスケルツォとし、第4楽章はラルゴもアレグロ・リゾルトも全て省略しても良い。あるいは第1楽章とスケルツォだけを選んで良い [1つの完全なソナタとして]。私はあなた [リース] にこの点につい

⁶² BGA 1295(4, pp. 254-263).

⁶³ リースは1819年4月19日と覚書の中で記す。しかし、1819年4月6日のロンドンの消印は、手紙が1819年3月に送られたに違いないことを示している。もしかしたら Ries は、今日断片的にしか残っていない最初のページで、完全な形での日付表記を見たのかもしれない (BGA 1295 Anm. 1; 4, p. 263)。

⁶⁴ ベートーヴェンによるテンポ指示は、1819年6 [4] 月16日の手紙 (BGA 1309) にて通知された (BGA 1295 Anm. 4; 4, p. 263)。

⁶⁵ 下線は、ベートーヴェン自身による。

て、あなたがどれを1番良いと思うかに委ねます。

今のところ、別のことでとても忙しいので、新しいものを書くのはとても気後れします。このソナタは衝動に突き動かされて書かれました。パンのためだけに書くことは過酷だからです。そして私は、ただここまで⁶⁶やり遂げたのです。ロンドンに行くことに関しては、また連絡を取り合いましょう。それは私にとって確かに、この悲惨で心配に満ちた状況からの唯一の救いとなるでしょう。いま私は健康であることがまったくなく⁶⁷、より良い状況であればできるようなことも決してやり遂げられないのです。あなたが私に手紙を書くまで、私はここでソナタを出版するのを控えます⁶⁸。しかしなるべく早くしてください。それから、いつあなたが私にお金を送ることができるか、そして同時に、ソナタがいつロンドンで出版されるかを知らせてください。それに従って私はここで行動します、もちろんそのソナタはできるだけすぐにそこで出版されるべきです。そうでないと、当地の出版社は、あまりに長く待たなければならなくなるからです。英国の出版社には、すぐにイギリスのための所有権の文書を送ります。その頃には五重奏はおそらく彫版されているでしょう。

ベートーヴェン

この書簡からは、ウィーンの筆写譜の内容を確認したベートーヴェンが、Op. 106 に存在するあまりに多くの間違いに困惑していることがわかる。また「当地にある筆写譜を弾いてみて初めて間違いが見つかった」としていることから、二つの原版のための筆写譜の内容に関して、ベートーヴェンはよく把握していなかったことが窺える。「ひょっとしたらすでに以前に訂正されたものも多いかもしい」とするところからは「二つの筆写譜を単にぞんざいに、しかも様々な時点で修正した」⁶⁹ことも推察される。

またこの書簡で注目すべきは、ロンドン原版での大幅な作品像の変更を提案するというベートーヴェンの驚くべき態度である。これまでの他の作品でも（このあとの作品でも）、ここまでの変更を許した例は存在しないだけでなく、その決定権を、信頼を置く相手であ

⁶⁶ 下線は、ベートーヴェンによる。

⁶⁷ 下線は、ベートーヴェンによる。

⁶⁸ ベートーヴェンはロンドンからの手紙を受け取らなかった。そのためイギリスの状況はこれ以上考慮されることなく、一方のウィーン原版 (Artaria & Comp.) は9月に出版された (BGA 1295 Anm. 9; 4, p. 263)。

⁶⁹ Gertsch 2001: Norbert Gertsch, "Ludwig van Beethovens ‚Hammerklavier‘-Sonate Op. 106. Bemerkungen zur Datierung und Bewertung der Quellen", *Bonner Beethoven Studien*, Bd. 2, Bonn: Beethoven-Haus, p. 73.

るとはいえ、他人に与えたことは、特筆すべき点だ。こうした背景に、ベートーヴェンの、より多くの収入を得たいとする気持ちがあったにしてもである。

この書簡内にある「訂正リスト」の詳細は、後の節で採り上げる。

⑥1819年4（6？）月16日 ベートーヴェンがリースに宛てた手紙⁷⁰

ウィーン [1819年] 4 [6] 月 16日⁷¹

親愛なるリース、このソナタ [Op. 106] のテンポですが、第1楽章のアレグロは、

アレグロのみでアッサイを取り除かねばなりません。♩=138

第2楽章のスケルツォのメトロノームは♩=80

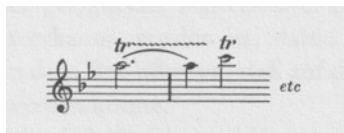
第3楽章は♩=92

ここで注意していただきたいのは、さらに第1小節が挿入されなければならないこと
で、つまり：



第4楽章 *Introduzione Largo* のメトロノームは ♩=76

第5楽章の 3/4 拍子



そして最終楽章は ♩=144

混乱を許してください。もしあなたが私の状況を知っていたら、このことには驚かず、むしろ私がそれでもなおやり遂げていることに驚くでしょう。五重奏曲は最終的にもはや停止できなくなり、近々出版されます。しかし、このソナタはむしろ、最終的にあなたからの回答と私が望んでいる報酬を受け取るまでは出版されません。

[……]

ベートーヴェン

⁷⁰ BGA 1309 (4, pp. 278-280).

⁷¹ ベートーヴェンは、Op.106 の当面のメトロノーム指示を、1819年5月25日の手紙の中でようやく、次の郵便集配日に送信されると通知した (cf. BGA 1302)。したがって、「4月」の月は正しくないはずである。消印によると、手紙は1819年7月13日にロンドンに到着したので、おそらく6月16日に書かれたのだろう (BGA 1309 Anm. 1; 4, p. 279)。

この書簡では、前回の書簡で予告された通り、メトロノーム記号が知らされている。それらのメトロノーム数値がロンドン原版に反映されていることから、この書簡は確かにリースに届いたと考えることができる。しかし、ロンドン原版の指示における、テンポの基準となる音符に関しては、ベートーヴェンの指示と異なる楽章がある。ロンドン原版の第1楽章は四分音符=138、第2楽章は二分音符=80なのである。この変更は、ベートーヴェンによるテンポ表記があまりに速すぎるといった理由から、おそらくリースによって修正されたものと考えられている⁷²。ベートーヴェンとリースによるテンポ指示が、どちらを採っても最適とは思われなような極端な指示であることも相まって、これらのテンポは、後世において長い間続く論争にまで発展した。このテンポの問題は、本論第2、第4章で考察する。

⑦1819年7月24日 ベートーヴェンがアルタリア社に宛てた手紙⁷³

ウィーン 1819年7月24日

校正刷りを添えてお送りします。それには誤りはないと思います。あなたの作品カタログには次のナンバーが欠けています。それらのナンバーを私はあらゆる努力にもかかわらずどこにも発見することが出来ませんでした。

[……]

また、校正を早急にご返送くださいますよう、謹んでお願い申し上げます。

この書簡からは、ベートーヴェンがウィーン原版の校正に携わっていたことが確認できる。

⑧1819年11月（10月？）10日 ベートーヴェンがリースに宛てた手紙⁷⁴

ウィーン 1819年11 [10] 月10日⁷⁵

愛すべきリースへ！

私はあなたに、ソナタがすでに出版されていることをお知らせします。しかし、約

⁷² Wiener Urtext Edition 2018 “Vorwort” p. III.

⁷³ BGA 1317 (4, pp. 294-297).

⁷⁴ BGA 1341 (4, pp. 322-323).

⁷⁵ Op. 106 が「2週間ほど」前に出版されたというベートーヴェンの声明が正しければ、この手紙は1819年10月に書かれた。しかし、ベートーヴェンは1819年10月10日にメードリングに滞在している。

14 日が過ぎたばかりです。五重奏曲とソナタの両方があなたに送られてから、もう
ほぼ 6 ヶ月が経っているから、こちらでは出版されてしまいました。

私はこちらから、数日以内に、宅配便で、彫版された五重奏曲とソナタの両方
お送りします。あなたは彫版された楽譜に倣って、両方の作品のすべてを修正でき
ます。

[……]

ベートーヴェン

この書簡からは、はっきりとした日付は把握できないものの、この時点で既にウィーン原
版が出版されていたであろうことがわかる。また、このあと数日以内に、ウィーンで出版
された Op. 106 の楽譜がリースへ送られたと読むことができるが、その後出版されたロン
ドン原版には、ウィーン原版を見ていけばすぐにわかるはずの作品番号すら付されていな
い。つまり、ロンドン原版の出版時点では、リースがウィーン原版を見ることができな
かったと考えられる⁷⁶。

1.3. 訂正リスト

前節で述べた通り、ここでは 1819 年 3 月 19 日の書簡にある訂正リストについて、その
内容を具体的に見ていく。

訂正リストに書かれた内容は、音やペダル記号の訂正がほとんどで、100 箇所を超える⁷⁷。
アーティキュレーションの訂正などは存在しないが、そこに付された譜例から、ベートー
ヴェンが意図していた可能性のあるものを読み取ることは可能である。

この訂正リストが書かれた時点で、存在していた楽譜はおそらく三つあり、ベートーヴ
ェンによる自筆譜、ウィーン、ロンドンのためのそれぞれの筆写譜である。これらの作成
順は、図 1 で示すように、ロンドンに送られた筆写譜（以下、筆写譜 I）が、自筆譜から
直接筆写され、ウィーンにあった筆写譜（以下、筆写譜 II）は、ロンドンのための筆写譜
から筆写されて作成されたと推察されている⁷⁸。

⁷⁶ Tyson 1962: Alan Tyson, “The Hammerklavier Sonata and its English Editions”, *The Musical Times* 103, p. 236.

⁷⁷ この訂正リストは一部消失してしまっており、残念ながらその全貌は明らかでないが、現在確認できるだけでも 100 箇所以上存在している。

⁷⁸ Gertsch 2001, p. 73.

図 1 : 楽譜の作成順



この作成順が正しいものであるかに関しては、あとで訂正リストの内容を見ながら精査することにする。

訂正リストに話を戻すと、ウィーンにいたベートーヴェンが、手元にあった自筆譜と筆写譜 II とを照らし合わせて気が付いたミスを一覧にしたのがこの訂正リストであり、この時すでにロンドンに送られていた筆写譜 I にその訂正を反映させてもらおうと作成された。

この訂正リストに関しての先行研究を追っていくと、矛盾する言及が見つかった。作品目録 (2014) とウィーン原典版 (2018) には、二つの原版において、この訂正リストが考慮されている旨の記述がある⁷⁹。その一方で、J. Fischer は、ロンドン原版には「訂正リストが考慮されていない」⁸⁰ということを示している。つまり Fischer は、ロンドン原版のための筆写譜 I がもともと正しいものを示していたか、もしくはベートーヴェンが見直した時に、すでに訂正を加えた箇所だったと推察しているのだ。実際ベートーヴェンも訂正リストが載った同じ手紙の中で「当地にある筆写譜を弾いてみて初めて間違いが見つかったが、ひょっとしたらすでに以前に訂正されたものも多いかもしれない。」⁸¹と記している。

本論では、これを踏まえ、全訂正箇所について二つの原版でそれが反映されているのかの調査を行った。すると、両原版で訂正リストと一致する箇所が多く存在した一方で、ウィーン原版のみ一致する箇所も存在し、更にはロンドン原版のみ一致する箇所もあった。以下に示すのは、書簡集にある訂正リストの譜例とその内容、そして二つの原版の譜例である。ウィーン原版 (=W) とロンドン原版 (=L) の両方が、訂正リストの内容と一致する場合には「W&L」を、どちらかの原版のみが一致する場合には「Wのみ」「Lのみ」を、どちらにも一致が見られない場合には「WもLもなし」と記載した。また、訂正リス

⁷⁹ それぞれの見解は以下の通りである。「ウィーン版でもロンドン版でもこの訂正が考慮されていることがわかっている」(Dorfmueller et al. 2014, p. 662)。「両初版の中で全ての訂正が同時に考慮されたわけではなかった」(Wiener Urtext Edition 2018 “Vorwort” p. II.)。

⁸⁰ Fischer 2016: Johannes Fischer, *Ludwig van Beethoven Große Sonate für das Hammerklavier op. 106*, Begleitheft, Prien am Chirmsee: Edition Johannes Fischer, p. 20.

⁸¹ BGA 1295(4, pp. 261-262).

トの内容が「一義的に解釈され得ない」⁸² 箇所には「？」を付している。必要に応じて、
 () 付きで説明を加えた項目もある。

以下の譜例の掲載は、左から「訂正リストの内容」、「ウィーン原版」、「ロンドン原版」
 の順になっている。

訂正リスト⁸³

第1楽章

1. [178小節目] H音の二つの♯

Wのみ (L: 2番目の♯が付されていない)

2. [179小節目] H音の♯

Wのみ

3. [180]小節目 同様に [H音の♯]

Wのみ

⁸² Gertsch 2001, p. 76.

⁸³ ベートーヴェンが記した小節数には誤りが多数存在する。小節数に限らず、訂正および補足が必要と考えられる箇所は、BGAに従うなどして訂正・補足し、[] で表記した。また、音名の表記はベートーヴェンが示したものに従った。

4. [239] 小節目 A音の♭

255ter T.
♭ vor A
[I, 239]

Cantabile e legato

Cantabile e le

Lのみ!

5. [243] 小節目 A音の♭

259ter T.
♭ vor A
[I, 243]

W&L

6. [244] 小節目

260ter T.
[I, 244]

W&L

[第2楽章]

7. 31 小節目 H音の♮

31ter Takt
♮ vor H
[II, 31]

W&L

8. 34 小節目 H音の♭⁸⁴

34ter Takt
♭ vor H
[II, 34]

Wのみ (L: 臨時記号は付されていないが調号により b²音になっている)

⁸⁴ コメントには H の ♭ とあるが、譜例には ♮ が書かれている。ここでは「♭」として捉えた。

9. < 6小節目 > < D音のb >

< 6ter T. >
< b vor D >
[II, 6]

[gestrichen]



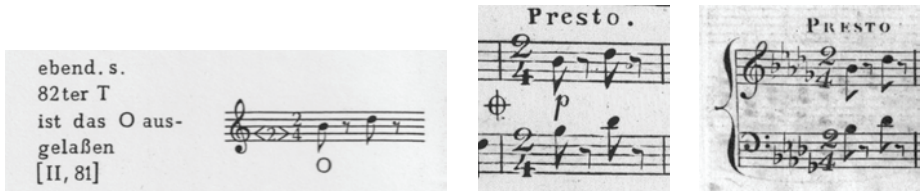
W&L

10. [81] 小節目 ちょうど O の部分で [ペダル] をはなす

ebend. s.
82ter T
ist das O aus-
gelaßen
[II, 81]

Presto.

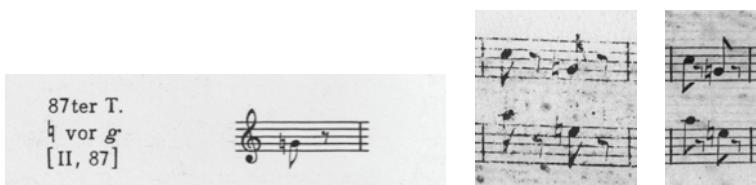
PRESTO



WもLもなし

11. 87小節目 g音の♯

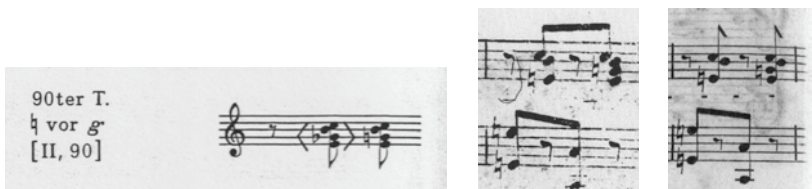
87ter T.
♯ vor g
[II, 87]



W&L

12. 90小節目 [右手] g音の♯

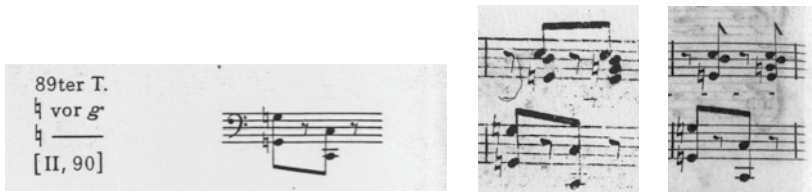
90ter T.
♯ vor g
[II, 90]



W&L

13. [90] 小節目 [左手] g音の♯

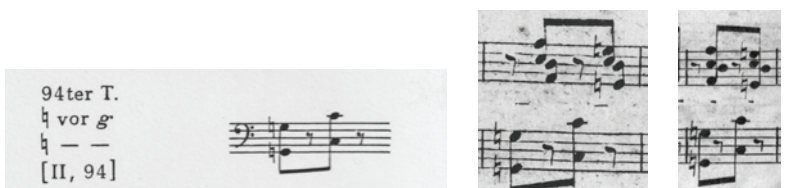
89ter T.
♯ vor g
[II, 90]



W&L

14. 94小節目 g音の♯

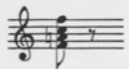
94ter T.
♯ vor g
[II, 94]



W&L

15. [98] 小節目 A音の ♩


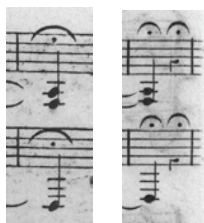
9<7>8ter T.
 ♩ vor *A*
 [II, 98]




Wのみ

16. [112] 小節目 ♩ の代わりに ♩ へ <高音部記号も低音部記号のどちらも>

11<0>2ter T.
 statt einer ♩
 <müssen
 in violin
 u. Baß>
 muß in
 beyden ein
 viertel ♩ seyn.
 [II, 112]

Wのみ⁸⁵

17. 117 小節目 F音の ♩

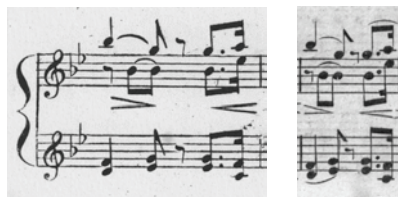
117ter T.
 ♩ vor *F*.
 [II, 117]




W&L

18. 124 小節目

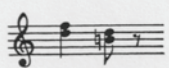
124 T.
 [II, 124]

W&L

19. 129 小節目

129ter T.
 [II, 129]




W&L

⁸⁵ 訂正リストで指摘されている4分音符にする、という指示に関しては両版ともに一致しているように見えるが、Lにある4分休符は、訂正リストの譜例には存在しないため、Lは訂正リストと一致していないと捉えた。

20. [141] 小節目 H音の \sharp

14<0>1ter T.
 \sharp vor *H*
 [II, 141]




W&L

21. 145小節目 H音の \sharp

145ter T.
 \sharp vor *H*
 [II, 145]





W&L

22. [164] 小節目 D音の \sharp は削除

165ter T.
 hier wird
 ein \sharp vor
D stehen,
 welches weg-
 gewischt werden
 muß. —
 [II, 164]

un poco ri =

un poco

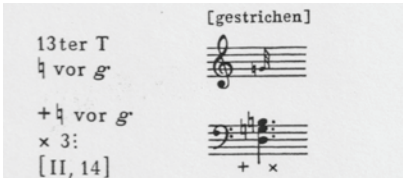

W&L

第3楽章 Adagio 6/8

23. [14] 小節目

13ter T
 \sharp vor *g*
 + \sharp vor *g*
 × 3:
 [II, 14]

[gestrichen]

g 音の \sharp W&L /

[低音部譜表] + *g* 音の \sharp W&L /

× 3 : W&L

24. [16] ⁸⁶小節目



g 音の# Wのみ (L: 調号により音は間違いではない) /

C 音の# W&L /

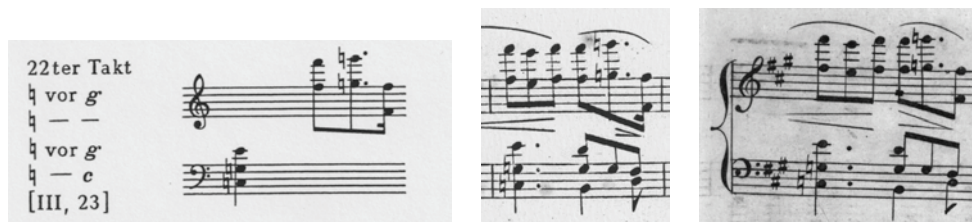
g 音の# Wのみ (L: 調号により音は間違いではない)

25. [22] 小節目



× g 音の \flat W&L / \flat の \flat W&L

26. [23] 小節目



[高音部譜表: oct. の] g 音の \flat W&L /

[低音部譜表の] g 音の \flat W&L /

c 音の \flat W&L

⁸⁶ BGA では、ベートーヴェンの書いた「15」小節のままの記載になっている (BGA 1295; 4, p. 255)。

27. [24] 小節目 c 音の# / g 音の#

23ter T.
für c
— g
[III, 24]

W&L

28. [42] 小節目 F 音の#

40ter T.
vor F
[III, 42]

W&L

29. [57] 小節目 F 音の#

56ter T.
vor F
[III, 57]

L. H.

W&L

30. [72] 小節目 Ped.

71ter T.
Ped.
[III, 72]

ped. cresc.

W&L

31. [76] 小節目

75ter T.
+ h vor h
+ b — A
+ punct. hinter
H. + red. + o red. o
+ 0 + red. + 0
b vor A
[III, 76]

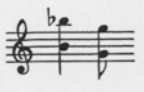
+ h 音の# W&L / +A 音のb Wのみ (L: 調号により音は間違いではない)

+H 音の後ろに付点 Lのみ! / +Ped. +O +Ped. +O W&L

A 音のb WもLもなし (調号により音は間違いではない)

32. [77] 小節目 H の b

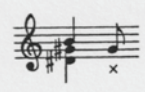
76ter T.
b vor H
[III, 77]




W も L もなし (調号により音は間違いではない)

33. [80] 小節目

79ter T.
vor g
— D
das # bey x
muß weg.
[III, 80]



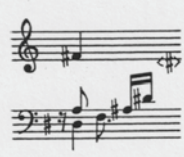


g 音の # W&L /

D 音の # W&L /

× [がついている箇所の] # は削除 W&L

34. [83] 小節目 もしかすると正しくなく書いた

82ter T.
vielleicht
nicht richtig
geschrieben
[III, 83]

W のみ

35. [88] 小節目 × [印の音は] cis 音

87ter T.
x cis
[III, 88]




W&L

36. 90 小節目 / 91~98 小節目

90ter T.
fehlt g#
— g#
bey der vor-
zeichnung

調号の g 音の # が抜けている W&L

u. dieses g#
fehlt überall
im diskant
u. Baß bis
zum 97ten
Takt. —
[III, 91-98 in
einem unbekann-
ten Manuskript]

そして、[91~98] 小節の [知られていない Manuskript の中で] 高
音部・低音部譜表のあらゆるところで g 音の # が抜けている ?

37. [93] 小節目 [oct. 両方の] A 音の#

92ter T.
h vor A
h —
[III, 93]

W&L

38. [94] 小節目

9<4>3ter T.
[III, 94]

W&L

39. [95] 小節目 E 音の #

94ter T
vor E
[III, 95]

W&L

40. [97] 小節目

96ter T.
hier muß es
statt heißen.
[III, 97]

W も L もなし (W : 直前の音の臨時記号によって音は間違いではない)

(L は、訂正リストが間違いとして示すように f 音の表記はしていないが、W に存在する臨時記号が欠けているため、e¹ 音を示している。しかし左手が同時に e[#] 音を奏するよう指示があり、明らかな抜けであることは想像がつく)

41. [103] 小節目 E 音の #

102ter T.
vor E
[III, 103]

W&L

42. [106] 小節目 [低音部譜表 : oct. の] E 音の #

105ter T.
vor E
— —
[III, 106]

W のみ

(L : e 音は、前の e 音に # があるため結果的に # になっているが、E 音は # なし)

43. [108] 小節目



g 音の W&L /

[高音部譜表 : oct. の] g 音の W のみ (L : g² 音には あり、g¹ 音は小節頭に臨時記号で あり、結果的に音に誤りは ない) /

[低音部譜表 : 三つの] W のみ (L : 最初の ありのみあり)

44. [109] 小節目



c 音の W&L /

[三つの] g 音の W のみ (L : G 音には あり)

45. [109] 小節目 [×のついた二つの] g 音の



W のみ (L : g¹ 音は あり)

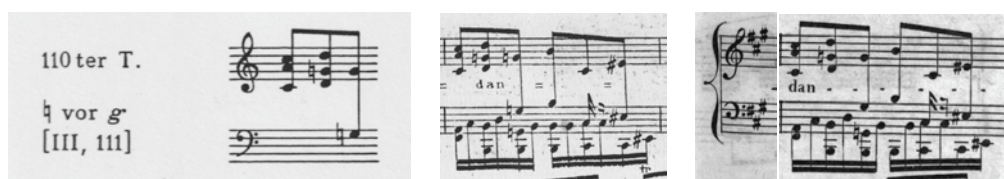
46. [110] 小節目



[3 oct. それぞれの三つの] c の # W のみ (L: c² 音は臨時記号はないが、調号により指示されており結果的に音は間違いではない) /

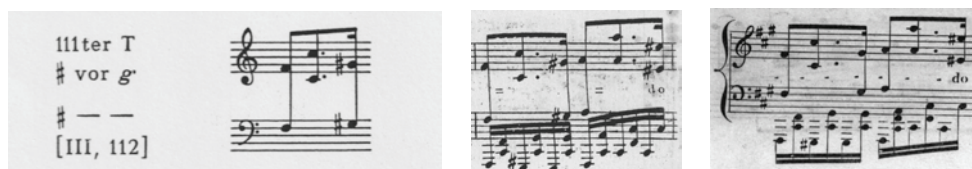
g 音の # W のみ (L: 調号により結果的に音は間違いではない)

47. [111] 小節目 g 音の ♯



W のみ (L: g¹ 音に ♯ はあるが、g 音に ♯ はない)

48. [112] 小節目 [oct. の] g 音の #



W のみ (L: 調号により結果的に音は間違いではない)

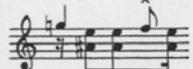
49. [115] 小節目 + [印の音は] g 音、 + [印の音は] A 音



W&L

50. [120] 小節目 e音/ais音 より前に×fis音があるべきである


119ter T.
 x hier muß
 das *fis* vor
 dem *ais* stehen.
 [III, 120]





W&L

51. [123] 小節目 最初の和音に fis²音が抜けている

122ter T.
 hier fehlt
 das  etc
 im ersten
 Akkord
 [III, 123]

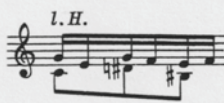



W&L

52. [126] 小節目 D音の \sharp

125ter T.
 \sharp vor D
 [III, 126]

l. H.



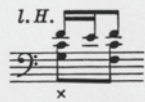


W&L

53. [127] 小節目 最高声部は、g音ではなく fis音

126ter T.
 die oberste
 Note *fis*
 nicht *g*—
 [III, 127]

l. H.






W&L

54. [142] 小節目 E音の♯


141ter T.
♯ vor E
[III, 142]



W&L

55. [145] 小節目 ped.と u.c. の指示


144ter T.
× ped u.c.
○
[III, 145]



Wのみ

56. [147] 小節目

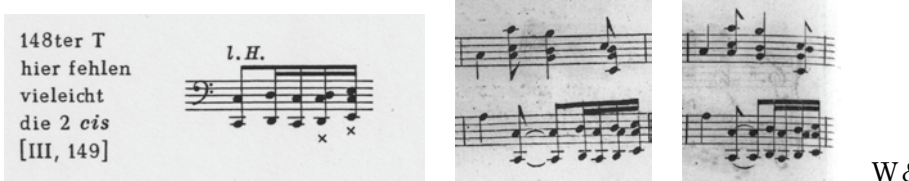
146ter T.
[III, 147]



Wのみ (L: 調号により結果的に音は間違いではない)

57. [149] 小節目 もしかすると、二つの cis 音が抜けている


148ter T
hier fehlen
vielleicht
die 2 cis
[III, 149]



W&L

58. 169 小節目 [譜例×の箇所] D音の♯と D音の♯

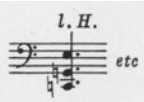
169ter T.
♯ vor D
♯ — —
[III, 169]



W&L

59. [171] 小節目 c音の♯


172<2>1ter T.
♯ vor c
[III, 171]




W&L

60. [172] 小節目 c音の♯


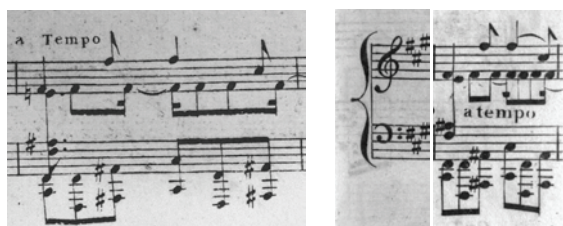
172ter T.
♯ vor c
[III, 172]




W&L

61. 174 小節目 第一線の E 音を挿入せねばならない


174ter T.
hier muß
noch das E
auf der ersten
Linie einge-
schaltet werden.-
[III, 174]

W&L (L: 臨時記号の♯はないものの、間違いなく E 音としてそこに付されている。)

62. 176 小節目 g音の♯

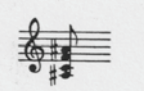
176ter T.
♯ vor g
[III, 176]




W&L

63. 182 小節目 A音の♯

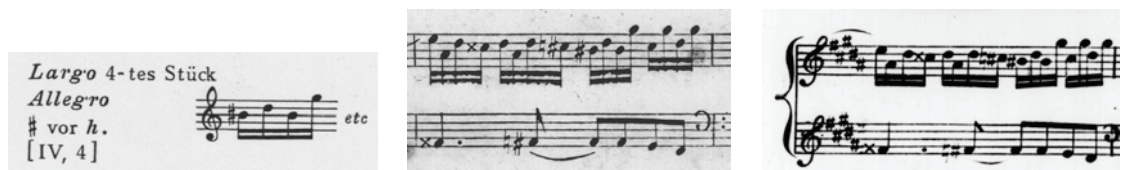
182ter T.
♯ vor A
[III, 182]




W&L

第4楽章 Largo

64. Allegro [4小節目] h音の#

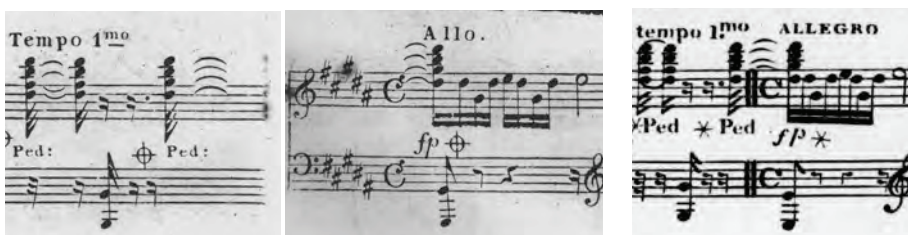


W&L

65.

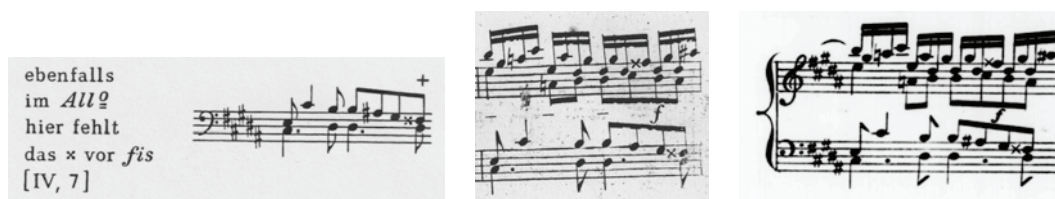
Nb: auch ist gleich beym *All^o* der C beyzufügen, so wie die Taktstriche / / bey 2 Taktten / / ausgelassen sind. _____

アレグロが始まるところに C [拍子記号] を補い、2つの小節の間の複縦線は取るべきである



拍子記号 : W&L / 複縦線 : Wのみ

66. [7小節目] 同様に Allegro のここ [+の部分] の fis 音はダブルシャープ



W&L

67.

gleich nach dem *Allegro* muß wieder *Tempo primo* stehen, welches ausgelassen — [IV, 8]



[8小節目] 同じく、*Allegro* のあとは、再び（書き落とされた）*Tempo primo* が書かれなければならない。W&L

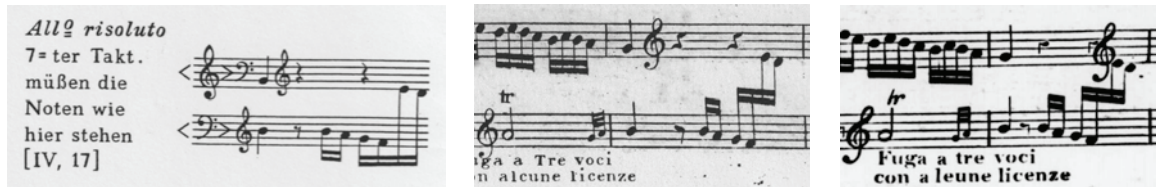


Hier fehlt das ♯ vor D [IV, 10]

[10小節目] ここはD音の♯が抜けている。W&L

68. *Allegro risoluto* [17] 小節目 ここで書かれたように記譜されねばならない

All^o risoluto
7=ter Takt.
müssen die
Noten wie
hier stehen [IV, 17]



Fuga a Tre voci in alcune licenze
Fuga a tre voci con a leune licenze

[音部記号のことであると考えられる]

Wのみ (L: 二つ目の4分休符の後にト音記号が書かれる)

69. [47] 小節目 Des音とB音

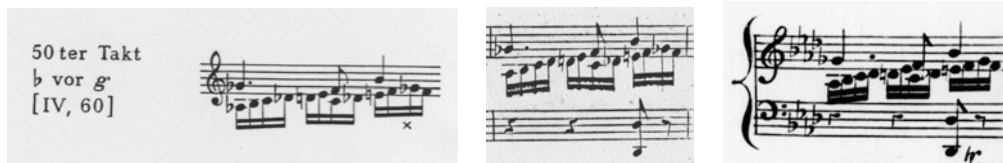
37ter T.
Des
B. [IV, 47]



W&L

70. [60] 小節目 [譜例×の箇所の] gのb

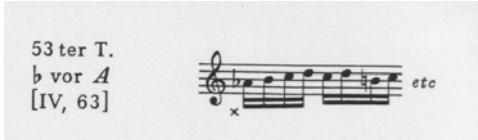

50ter Takt
b vor g¹ [IV, 60]



Wのみ (L: ×の箇所にbは無いが、小節冒頭のbによって結果g¹音はbになっている)

71. [63] 小節目 [譜例×の箇所] A音の♭

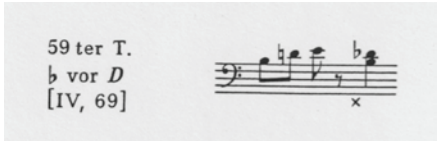

53 ter T.
♭ vor A
[IV, 63]

W&L

72. [69] 小節目 [譜例×の箇所] D音の♭

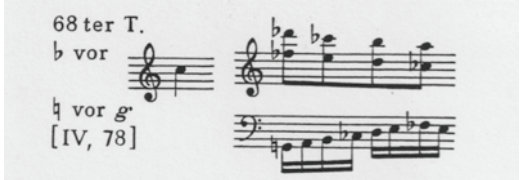

59 ter T.
♭ vor D
[IV, 69]

W&L

73. [78] 小節目

68 ter T.
♭ vor
♯ vor g
[IV, 78]






[高音部譜表の] c音の♭ W&L /

[低音部譜表の] g音の♯ W&L

74. [79] 小節目



69 ter T.
♭ vor c
♭ - c
♯ vor D
[IV, 79]

c³音の♭ W&L / c²音の♭ W&L / [譜例×の箇所] D音の♯ W&L

75. [81] 小節目 c音の♭

71 ter T.
♭ vor c
[IV, 81]

W&L

76. [82] 小節目 trの前にb

72 ter T.
b vor dem tr
[IV, 82]

W&L

77. [83] 小節目 c音のb

73 ter T.
b vor c
[IV, 83]

W&L

78. [95] 小節目

85 ter Takt
x F
punct. vor
[IV, 95]

[×印の音は] は F 音である W&L / ?

79. [102] 小節目 D音のb

92 ter T.
b vor D
[IV, 102]

W&L

80. [105] 小節目 A音のb

95 ter T.
b vor A
[IV, 105]

W&L

81. [113] 小節目 この二つの tr の後打音が抜けている

103 ter T.
hier fehlen
die Nachschlä-
ge der beyden
tr
[IV, 113]

W&L

82. [115] 小節目 Es 音の箇所には B 音があるならば、取るべきである？

105 ter T.
+ wenn zu
dem Es hier
noch B steht
muß das letztere
weg. —
[IV, 115]

83. [118] 小節目 [譜例×の箇所の] E 音の♯

108 ter T.
♯ vor E
[IV, 118]

W&L

84. [120] 小節目 E 音の♭

110 ter T.
♭ vor E
[IV, 120]

W&L

85. [117] 小節目 4分音符 E 音の♯

107 ter T.
♯ vor E
[IV, 117]

Wのみ (L: E₁ 音には♯なし)

86. [118] 小節目 [オクターヴ両方の] E音のtr

108 ter T.
 ♭ vor E
 [IV, 118]

Wのみ (L: 前の小節からタイで結ばれ、♭はなし)

87. [118/19] 小節目

108 ter T.
 u. 9 ter T.
 [IV, 118/19]

trの表記を小節間で分けて書く WもLもなし

88. [121/22] 小節目

111 u 12 ter T.
 [IV, 121/22]

trの表記を小節間で分けて書く WもLもなし

89. [124] 小節目 まだ連続した tr.

114 ter T.
 noch fort-
 laufender
 tr.
 [IV, 124]

Wのみ

90. [125] 小節目 後打音

115 ter T.
Nachschlag
[IV, 125]

W&L

91. [126] 小節目

116 ter T.
♯ vor g

♯ vor g
[IV, 126]

[高音部譜表の] g 音の♯ W&L /

[低音部譜表の] g 音の♯ W&L

92. [163] 小節目 E 音の♯

153 ter T.
♯ vor E

[IV, 163]

[unteres System gestrichen]

W&L

93. [194] 小節目 16 分音符は下向きと上向きの符尾で、左手は休符に

184 ter T.
hier müßen
die 16 tel so
herunter u
herauf gestrichen
werden — u.
die Pausen für
die L. H.
[IV, 194]

W&L

94. [198] 小節目 h 音の付点 D 音の付点

188 ter T.
 · vor h
 · — D
 [IV, 198]

W&L (L: 譜面の書き方は異なる)

95. [199] 小節目 A 音のh

189 ter T.
 h vor A
 [IV, 199]

W&L (L: 譜面の書き方は異なる)

96. [205] 小節目 c 音のh / [譜例×の箇所は] D 音

195 ter T.
 h vor c
 x D
 [IV, 205]

W&L

97. [224] 小節目 g 音の#

214
 # vor g
 [IV, 224]

W&L

98. [229] ⁸⁷小節目 A 音のb / h 音のb

21<8>9 ter T.
 b vor A
 b — h
 [IV, 239]

W&L

⁸⁷ BGA には 239 小節とあるが、229 小節目の間違いであろう。

99. [245/46] 小節目

ここで#を間違えたと思う　そして、正しくはこの連桁の分割である

25 u. 26 ter T.
hier ist die
vorzeichnung
glaube ich ver-
fehlt u. die
richtige Noten-
Eintheilung.
[IV, 245/46]

: W&L /

連桁の分割 : W のみ

100. [272] 小節目　D音の#

262 ter T.
vor D
[IV, 272]

W&L (どちらの原版にもスラーは付されていない)

101. [286] 小節目　E音のb

276 ter T.
b vor E
[IV, 286]

W&L

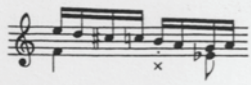
102. [283] 小節目　h音のb

273 ter T.
b vor h.
[IV, 283]

W&L

103. [305] 小節目 ここで F 音の後ろに付点が欠けている

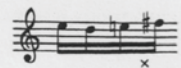
295
hier fehlt
der · hinter
F.
[IV, 305]



W&L

104. [309] 小節目 F 音の #


299
vor *F*
[IV, 309]



W&L

105. [315] 小節目 E 音の b

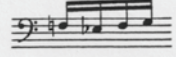
305 ter T.
b vor *E*
[IV, 315]



Wのみ (L: 調号により結果的に音は間違いではない)

106. [316] 小節目 E 音の b

206 ter T.
b vor *E*
[IV, 316]


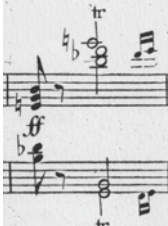
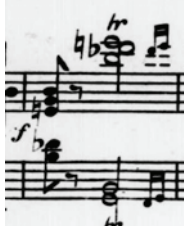


W&L

107. [333] 小節目

323ter T.
 ♩ vor *E*

× nachschlag
 hinunter zu
 gestrichen.
 [IV, 333]

E 音の W&L /

[譜例×の箇所の] 後打音は下向きの符尾にする Wのみ

108. [344] 小節目 A 音の代わりに B 音

334
 statt *A*
 × *B*
 [IV, 344]





W&L

以上の結果を一覧にすると以下の通りである。

	楽章	小節数	ウィーン原版	ロンドン原版
1	第1楽章	178	○	×
2		179	○	×
3		180	○	×
4		239	×	○
5		243	○	○
6		244	○	○
7	第2楽章	31	○	○
8		34	○	△
9		6	○	○
10		81	×	×
11		87	○	○
12		90	○	○
13		90	○	○
14		94	○	○
15		98	○	×
16		112	○	×
17		117	○	○
18		124	○	○
19		129	○	○
20		141	○	○
21		145	○	○
22		164	○	○
23	第3楽章	14	○	○
23		14	○	○
23		14	○	○
24		16	○	△
24		16	○	○
24		16	○	△
25		22	○	○
25		22	○	○
26		23	○	○
26		23	○	○
26		23	○	○
27		24	○	○
28		42	○	○
29		57	○	○
30		72	○	○
31		76	○	○
31		76	○	△
31		76	×	○
31		76	○	○
31		76	△	△
32		77	△	△
33		80	○	○
33		80	○	○
33		80	○	○
34		83	○	×
35		88	○	○
36		90	○	○
36		91-98	?	?
37		93	○	○
38		94	○	○
39		95	○	○

	楽章	小節数	ウィーン原版	ロンドン原版
40		97	△	×
41		103	○	○
42		106	○	×
43		108	○	○
43		108	○	△
43		108	○	×
44		109	○	○
44		109	○	×
45		109	○	×
46		110	○	△
46		110	○	△
47		111	○	×
48		112	○	△
49		115	○	○
50		120	○	○
51		123	○	○
52		126	○	○
53		127	○	○
54		142	○	○
55		145	○	×
56		147	○	△
57		149	○	○
58		169	○	○
59		171	○	○
60		172	○	○
61		174	○	○
62		176	○	○
63		182	○	○
64	第4楽章	4	○	○
65		4	○	○
65		4	○	×
66		7	○	○
67		8	○	○
67		10	○	○
68		17	○	△
69		47	○	○
70		60	○	△
71		63	○	○
72		69	○	○
73		78	○	○
73		78	○	○
74		79	○	○
74		79	○	○
74		79	○	○
75		81	○	○
76		82	○	○
77		83	○	○
78		95	○	○
78		95	?	?
79		102	○	○
80		105	○	○
81		113	○	○
82		115	?	?

	楽章	小節数	ウィーン原版	ロンドン原版
83		118	○	○
84		120	○	○
85		117	○	×
86		118	○	×
87		118/19	×	×
88		121/22	×	×
89		124	○	×
90		125	○	○
91		126	○	○
91		126	○	○
92		163	○	○
93		194	○	○
94		198	○	○
95		199	○	○
96		205	○	○
97		224	○	○
98		229	○	○
99		245/46	○	○
99		245/46	○	×
100		272	○	○
101		286	○	○
102		283	○	○
103		305	○	○
104		309	○	○
105		315	○	△
106		316	○	○
107		333	○	○
107		333	○	×
108		344	○	○

以上を見て明らかなように、訂正リストにある表記の多くが W と L に見られるが、W のみ一致する箇所も存在し、逆に L のみ一致する箇所も存在するのである。W のみ一致する箇所が多数存在することから、Gertsch は L に対し「ロンドン原版に関しては [その訂正状況について] もっとひどい」⁸⁸と指摘している。しかし Fischer の指摘のように、ロンドン原版に訂正リストが考慮されていないのであるとすると、L にも多くの箇所です訂正リストと一致する箇所が存在した事実は、ロンドン原版のための筆写譜 I がもともと正しいテキストを示していた可能性につながる。また、L のみが訂正リストと一致している箇所も存在することから、それぞれの筆写譜の作成順に関して、ロンドン原版のための筆写譜 I の方が自筆譜によ

り近い内容を持っている、つまり自筆譜から直接作成された可能性が浮かび上がってくる。したがって、自筆譜からロンドンのための筆写譜 I が作成され、筆写譜 I からウィーンのための筆写譜 II が作成されたという Gertsch の推察は、正しい可能性が高いと言えるだろう。このことは同時に、L が、ベートーヴェンの意向の多寡の面で、W にも劣らない可能性をも示していよう。つまり、訂正リストには言及のない、二つの原版の様々な相違について、どちらの表記を採用すれば良いかを考える時、L を優先すべき可能性があることをも示しているのではないか。

訂正リストには、“Nachträglich”として、このあとに追加の事項が示されるが、その楽章名には注目すべき記載がある。詳細と合わせて見てみよう。


⁸⁸ Gertsch 2001, p. 79.

追加

109. 最終楽章 Allegro risoluto

[218] 小節目 [譜例×の箇所の] 8分休符が欠けている

im letzten Stücke *All^o*
risoluto
28ter T.
hier fehlt
die 7 Pause
[IV, 218]



W&L

110. 第2楽章 Adagio

[116] 小節目 fis音の代わりに dis音であるべき

im 2ten Stück *Adagio*
115ter T.
statt $\sharp f$
muß $\sharp d$
es *dis* seyn.
[III, 116]

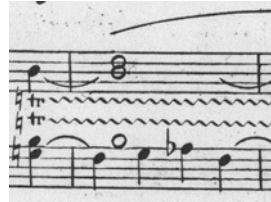


Wのみ

111. 第1楽章

[365/66] 小節目

im 1-ten Stück *All^o*
<382ter T.>
381 u.
82ter Takt
hier fehlen
die 2-Bindungen
u. vor steht ein
tr, welches weg
muß. —
[I, 365/66]



ここの二つのタイが抜けている Wのみ /

取るべき [譜例×の箇所の] trがある W&L

112. 第3楽章 scherzo

[92] 小節目 [オクターヴの] g 音の♮

3-tes Stück
scherzo
93ter Takt
♭ vor g'
♭ — —
[II, 92]

W&L

113. 第4楽章 Largo

<Zu> bey dem 4-ten Stück
Largo muß zur
Aufschrift noch hinzu-
gefügt werden,,
Nb: per la Misura
<del Largo> si conta
nel Largo sempre
quattro semicrome
cio é ♩ ♩ ♩ ♩

Per la misura si conta nel largo sempre
quattro semicrome, cio é ♩ ♩ ♩ ♩

Maelzel's Metronom
♩ = 76.
Largo.
Ped: p dolce * Ped * Ped * Ped *

— INTRODUZIONE —
Maelzel's Metronome ♩ = 76
Largo
Ped p dolce * Ped * Ped * Ped *

標題にまだ付け加えられなければならない

“per la Misura <del Largo> si conta
nel Largo sempre Quattro semicrome
cio é ♩ ♩ ♩ ♩

Wのみ

先ほど同様に、以上の結果を一覧にすると以下の通りである⁸⁹。

	楽章	小節数	ウィーン原版	ロンドン原版
109	第4楽章	218	○	○
110	第3楽章	116	○	×
111	第1楽章	365/66	○	×
111		365/66	○	○
112	第2楽章	92	○	○
113	第4楽章	0	○	×

筆者が二重線を引いた楽章名に注目したい。第2楽章には Adagio が記され、第3楽章に Scherzo が記されているのだ。これは、のちにロンドン原版が採ることになる楽章順で

⁸⁹ この表では、No. 110 および No. 112 の楽章名を、この訂正一覧でベートーヴェンが示した楽章名ではなく、ウィーン原版のそれと統一させた。

の呼び方である。この楽章順がベートーヴェンから提案されるのも同じ書簡の中である。したがって、まだロンドンでそのような楽章順になることがわからない時点で、その呼び方を一部で記載しているのである。つまり、ロンドン原版で採用されることになった楽章順が出版における「単なる妥協の一案」ではなく、ベートーヴェン自身がその楽章構成も「有り得るひとつの作品像」として迷っていた可能性が垣間見えるわけだ。

では、訂正リストの精査から明らかになったことをここにまとめる。ロンドン原版には、ウィーン原版と同じくらい、時にはそれ以上に、ベートーヴェンの意向が大いに反映されているという事実が明らかになった。さらにはロンドン原版の楽章構成もまた、ベートーヴェンが最後まで迷っていた作品像であった可能性を見ることになった。

1.4. 二つの原版

ここまでも何度か触れたが、Op. 106 には、ウィーンとロンドンで、それぞれほぼ同時期に出版された二つの原版が存在している。自筆譜や筆写譜が残っていないため、作品の形として残っている最初期のものがこの二つの原版であり、Op. 106 において最も重要な資料となっている。ここでは、二つの原版の外観を示し、詳しいテキスト内容については、第3章で触れることにする。

1.4.1. ウィーン原版

ウィーン原版は、1819年9月にウィーンのアルタリア社より出版された。ウィーンのための筆写譜がいつ作成されたかについては明らかになっていないが、その筆写譜は、前節で述べた通り、おそらくロンドンのための筆写譜からさらに筆写を重ねられて作成された可能性が高い。前節の書簡の精査により明らかになった、ロンドンのための筆写譜が1月30日以前に発送されていたことを踏まえると、二つの原版のための筆写譜は、1819年の1月中には完成していたと見て良いだろう。

写譜を担当した人物については諸説あり、ウィーンのための筆写譜はシュレンマーか、ランブルかのどちらかが担当したようだ。これに関しては、後の筆写譜の項で詳しく述べる。いずれにせよ、ベートーヴェンが書簡でリースに伝えていた通り、ウィーン原版のための筆写譜には「たくさん間違いが入り込んだ」⁹⁰ 状態だった。

Op. 106 の出版当時ウィーンに居たベートーヴェンは、ウィーンでの出版に関しては積

⁹⁰ BGA 1295(4, p. 261).

極的に携わることが可能であり、前節の書簡の項でも触れたが、ベートーヴェンはウィーン原版の校正段階にも関わっていた。加えて、ベートーヴェンは出版のギリギリまで訂正を加えたことも明らかになっている⁹¹。

これらを踏まえるとウィーン原版は、ベートーヴェン本人が最後の最後まで目を通していただけでなく、直接校正にまで携わっていたわけで、Op. 106 の作品像について考える際ウィーン原版さえあれば、その答えがすぐ見出しそうである。しかし、そのウィーン原版には、明らかなミスが多数存在する⁹²。また、ウィーン原版が間違っている多くの箇所、ロンドン原版が正しいものを示している⁹³というのだから、この問題はやはり複雑だ。では、もう一方のロンドン原版についても見ていこう。

1.4.2. ロンドン原版

ロンドン原版は、1819年12月にリージェンツ・ハーモニック・インスティテューションから出版された。この出版には、本論でも何度か触れたように、当時同地に在住していたベートーヴェンの弟子フェルディナント・リースが仲介役として重要な役割を担った。彼は、ベートーヴェンからの依頼を受け、適切だと思う箇所を大いに変更したと考えられる。

ロンドン原版における、リースによる変更点で重要なポイントは、大きく二つあろう。一つ目はその作品像を大きく左右する楽章構成である。ロンドン原版の楽章順は、ベートーヴェンによって提示された選択肢のひとつであった「第1楽章→第3楽章→第2楽章」の順でそれだけで一つの作品、また第4楽章は別の単独作品として売り出された。

二つ目はテンポ表記である。書簡の精査の項でも触れたが、リースによるその変更は、かなり大きなものであった。

これについて、ベートーヴェンがどのように考えていたのかを整理するため、ロンドン原版の出版にベートーヴェンがどの程度関わっていたのかを述べたい。ベートーヴェンはロンドンのための筆写譜が完成した段階で、それに何度か目を通したことは明らかである⁹⁴。しかし、その後ベートーヴェンがロンドンの楽譜テキストを校正したというような記録は残っていない。つまりベートーヴェンは、ロンドン原版の内容について、版下用筆写

⁹¹ Gertsch 2001, p. 81.

⁹² Tyson 1962, p. 235; Gertsch 2001, p. 81.

⁹³ Tyson 1962, p. 235.

⁹⁴ 3月19日の書簡で「前に訂正した」と述べている (BGA 1295; 4, pp. 261-262).

譜をチェックして以降、把握することはなかったと見られる。その一方で、その後に送った長大な訂正リストや、メトロノーム記号と *Adagio* の第 1 小節目の追加事項を書簡にて伝えることで、ベートーヴェンの意向は、より後まで反映されることになった。結果的に出版後もベートーヴェンの目に触れることはなかったと考えられるロンドン原版だが⁹⁵、リースは師匠であるベートーヴェンにチェックされる可能性は存分にあっただろうし、当時のベートーヴェンの作曲家としての位置に鑑みても、あまりに出鱈目な楽譜を作成すれば、ベートーヴェンのみならず、その周囲からも批判にさらされた可能性だってあったに違いない。つまりリースは、師ベートーヴェンからの信頼に応え、かつて務めたベートーヴェンのコピストやアレンジャーとしての経験をもとに、必要と思われる訂正を行い、ロンドン原版的出版に至ったものと推察される。

実際、リースによる訂正が功を奏したのか、もしくは先ほどの訂正リストの精査から明らかになったロンドン原版のもともとの正確さのためか、ウィーン原版よりもロンドン原版の方が正しいテキストを示す箇所が多く存在することは、注目すべき重要なポイントである。

2. 消失したもの

2.1. 自筆譜

Op. 106 のベートーヴェンによる自筆譜は、現在消失しており、その内容を確認することは出来ない。またその成立時期も定かでない。しかし、ベートーヴェンの書簡をもとに、おおよその時期は推察できる。手がかりとなるのは、前節の書簡③である。ベートーヴェンは、Op. 106 の彫版見本を 1 月 30 日の書簡③より前に発送したと言及しているため、自筆譜は遅くともその時点まで（1818 年末頃⁹⁶？）には完成していたと考えられる。

2.2. 2 種類の筆写譜

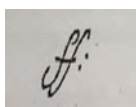
ウィーンとロンドンでの出版に向けて、それぞれ準備された版下用筆写譜もまた、自筆譜同様に消失してしまった。そのため、その内容はもちろん確認することは出来ないが、J. Fischer は二つの原版や書簡等を精査することで、二つの筆写譜の内容を推察している⁹⁷。

⁹⁵ ベートーヴェンが Op. 106 の作品出版後にロンドン原版を見た、もしくはそれを踏まえて校訂をしたなどという記録等は明らかになっていない。

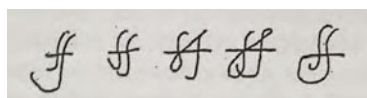
⁹⁶ Wiener Urtext Edition 2018 “Vorwort” p. II.

⁹⁷ Fischer 2016, pp. 9-15.

まず Fischer は、二つの原版のための筆写譜がそれぞれ誰によって筆写されたものであったのかを、ベートーヴェンの写譜師たちの筆跡から明らかにした⁹⁸。具体的には、写譜師ランプルの「ff」の特徴的な書き表し方からの推察である。Fischer によると、ロンドン原版に見られる多数の「sf」が、ウィーン原版を見ると「ff」を表記している事実から、ランプルが書いた「ff」をロンドン原版の彫版師が「sf」と読み間違い、そう記した結果であるとの結論を導き出した。



ベートーヴェンの「ff」



ランプルの「ff」

【Fischer 2016, p. 5】より引用

つまり、ロンドンのための筆写譜 I はランプルによって筆写されたものであり、ウィーンのための筆写譜 II は書簡にも名前のあがったシュレンマーによるものだという。

しかし Fischer とは相対する見解が、ウィーン原典版（2018）にある。この序文には、筆写譜 I の写譜師は、シュレンマーであると書かれている。その論拠は、ベートーヴェンによる3月の書簡にある。ベートーヴェンの述べた「このソナタの中には嫌になるほどたくさん間違いがあるに違いない。あなたは今後の郵便で訂正リストを受け取ります。すべては素早く書かれたものです。私の写譜師のシュレンマーはすでに年老いました」⁹⁹ や、別の書簡での「このソナタの筆写譜にどうしてこんなにたくさん間違いが入り込んだのか理解できない。急いだのも原因でしょうし、写譜師が自分でやらず、他の者に写させたのも原因でしょう。当地にある写譜譜を弾いてみて初めて間違いが見つかったが、ひょっとしたらすでに以前に訂正されたものも多いかもしれない。」¹⁰⁰との言葉から、ベートーヴェンは「シュレンマーを筆写譜 I の写譜師として疑問視している」と解釈し、一方のウィーンにある筆写譜は名前の記されていない「他の者」がそれを担当したと結論付ける。

筆者は、Fischer の見解に賛同したい。というのもベートーヴェンは、自分の手許にあったウィーンのための筆写譜 II にある多数の誤りをまず嘆いていたのであって、シュレンマーへの疑問視は、内容を確認出来ないロンドンのための筆写譜ではなく、手許にあった筆写譜に向いているように感じるからである。また、Fischer が論拠にしたランプルの筆

⁹⁸ Fischer 2016, p. 5.

⁹⁹ BGA 1294 (4, p. 251).

¹⁰⁰ BGA 1295(4, pp. 261-262).

跡は、確かに「sf」とよく似ていること、さらにエディション比較から、「ff」と考えられるかなり多くの箇所、ロンドン原版が「sf」としていた点からも Fischer の見解がより正しいと考えられるからである。

二つの筆写譜の作成順に関して、Fischer は Gertsch が示したものに同じく、ベートーヴェンの自筆譜からまずロンドンのための筆写譜 I が作成され、その筆写譜からウィーンのための筆写譜 II が作成されたとしている。先ほどの「訂正リスト」の項でも触れたが、やはり、よりベートーヴェンの自筆譜に近い位置にあったのが、ロンドン原版であったと考えて良いだろう。このことは、二つの原版の表記が異なる全ての箇所で、どちらを採用すべきかの判断に迷った際のひとつの指標となる重要なポイントである。

ではここからは、Fischer が推察した二つの筆写譜の内容について、詳細を以下に示しながら考察する。

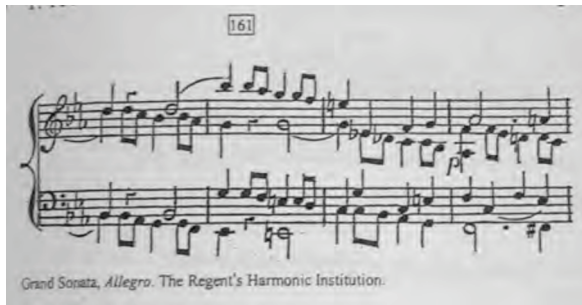
2.2.1. ベートーヴェンによる筆写譜 I への訂正箇所

以下に挙げるのは、Fischer の推論による、ベートーヴェンがロンドンのための筆写譜 I の校正時に訂正したと考えられる箇所である。本論ではこれらが、二つの原版でそれぞれどのように表記されているのか、再検証を行った。まずは、Fischer (2016) からその訂正箇所を引用する。

第1楽章 Allegro

- ・ 11/2 小節目 右手 スラー a²音-f²音
- ・ 12/3 小節目 右手 タイ f²音-f²音
- ・ 73 小節目 左手 4番目の4分音符 c¹音の tr
- ・ 74 小節目 右手 スラー f²音-a²音
- ・ 91-93 小節目 スタッカート
- ・ 96 小節目 sf→fp
- ・ 112 小節目 右手 1番目の4分音符 スタッカート
- ・ 147/8 小節目 フガートの中声部 アウフタクトの b 音 4分音符→8分音符

- ・ 161-163 小節目 おそらく、確実な最終稿



【ロンドン原版¹⁰¹】

[おそらく以下の5点を指している。]

1. 第 161 小節目 下段/下声部 1 拍目の E_s 音の \flat を 2 拍目に移動させる
 2. 第 162 小節目 上段/上声部 1 拍目裏の es^1 音の \flat
 3. 第 162 小節目 下段/上声部 1 拍目裏の g 音が 4 分音符である
 4. 第 163 小節目 上段/下声部 1 拍目の f^1 音がある
 5. 第 163 小節目 下段/上声部 スラーが 1 拍目裏からスタートしている]
- ・ 169、171 小節目 左手 sf
 - ・ 177 小節目 $ped.$
 - ・ 234/5、236/7、239/40 ¹⁰²小節目 左手 タイ



【ロンドン原版¹⁰³】

- ・ 239 小節目 右手 1 番目の 4 分音符 a^2 音の \flat
- ・ 252 小節目 右手 スタッカート
- ・ 258 小節以降 右手 スタッカート
- ・ 326/7 小節目 sf
- ・ 328 小節目 fp
- ・ 339 小節目 左手の g 音と、右手オクターヴ g^2 音/ g^3 音 のナチュラルの削除
- ・ 362/3 小節目 左手 スラー



¹⁰¹ Fischer 2016, p. 9.

¹⁰² Fischer 2016 には「238/9 小節目」とあるが「239/40 小節目」の間違いである。

¹⁰³ Fischer 2016, p. 9.

第2楽章 (※Adagio)

表題 Adagio は、*espressivo* を追加されるべきである

- ・新しい1小節目 p とスラー
- ・2小節目 ped. ○ (○=*)
- ・4小節目 1～3拍目のスラー
- ・7小節目 右手 4～6拍目のスラー
- ・9小節目 左手 6番目の8分音符 cis/fis/a 音 (Manuskript-Fassung?)
→cis/gis/h 音¹⁰⁴
- ・13小節目 右手 6番目の8分音符 3度 e¹音, g¹音の \sharp ¹⁰⁵
- ・19/20小節目 上段 
- ・24小節目 
- ・27-29小節目 cresc. p cresc.
- ・29小節目 左手 1番目の16分音符 cis音が eis/gis/h/cis¹音の和音に追加
- ・33小節目 右手 スラー
- ・42小節目 左手 4番目の8分音符 A音の \sharp
- ・53小節目 p
- ・112小節目 左手 8番目の16分音符 Cis/A音 → Cis/Fis/A音の和音
- ・127小節目 左手 6番目の16分音符 c¹音の \sharp
- ・185/6小節目 左手 10度の和音 小節をまたぐタイ
- ・186小節目 左手 4拍目のA音の \sharp

3楽章 (※Scherzo)

- ・1小節目 p
- ・30小節目 p
- ・76小節目 2拍目 ○
- ・77小節目 3番目の4分音符 ped.
- ・110小節目 右手 sf

¹⁰⁴ 今回、筆者が確認したウィーン原版は3種類あるが、そのうちの2種類 (© Österreichische Nationalbibliothek SH.Beethoven.427、© Österreichische Nationalbibliothek L18.Kaldeck MS40122-4^o) はこれが修正されている。

¹⁰⁵ 同上。

- ・ 112 小節目 2分音符にフェルマータ | (Manuskript-Fassung)
→ 4分音符と4分休符にそれぞれフェルマータ | (小節線)

第4楽章 Introduzione Largo

ベートーヴェンは、楽章の名称の上に *Introduzione* と書いている

- ・ 10 小節目 (Prestissimo) A₁音-A音のオクターヴ ○


Allegro risoluto¹⁰⁶

- ・ 27 小節目 右手 e²音の tr
- ・ 37 小節目¹⁰⁷ 右手 1拍目裏の8分音符のスタッカート
- ・ 53/4 小節目 左手 フーガのテーマの4分音符 スタッカート
- ・ 85/6 小節目 右手¹⁰⁸ スタッカート
- ・ 95 小節目 右手 10~12番目の16分音符 スタッカート
- ・ 97、99 小節目 右手 3拍目の4分音符 sf
- ・ 105-7 小節目 左手 3拍目の4分音符 sf
- ・ 112/3 小節目 左手 オクターヴ 小節をまたぐタイ
- ・ 117/8 小節目 左手 オクターヴ 小節をまたぐタイ
- ・ 119 小節目 左手 3拍目の4分音符 sf
- ・ 120 小節目 右手 3拍目裏の8分音符 sf
- ・ 132 小節目 右手 スタッカート
- ・ 134 小節目 右手 3拍目の4分音符 sf
- ・ 135-142 小節目 スタッカート
- ・ 142/3 小節目 右手 タイ es¹音-es¹音
- ・ 148 小節目 右手 2拍目の4分音符 sf
- ・ 149 小節目 左手 スタッカート、sf
- ・ 152 小節目 右手 スタッカート
- ・ 155/6 小節目 中声部 スラー

¹⁰⁶ Fischer 2016 では、これを「第5楽章」としているが、本論では他の多くのエディションと統一し、第4楽章として小節数を書き換えた。

¹⁰⁷ Fischer 2016 には、28 小節目（本論でいう 38 小節目）もここに挙げられているが、28 小節目はウィーン原版にもスタッカートが見られるため、ここでは省いた。

¹⁰⁸ T. 86 は左手である。

- ・ 161/2 小節目 中声部 スラー
- ・ 164/5/6 小節目 右手 スラー
- ・ 165 小節目 左手 1-2 拍目 スラー
- ・ 173/4 小節目 下段 
- ・ 183 小節目 左手 スラー
- ・ 184 小節目 non ligato (下段 レガート?)
- ・ 193 小節目 左手 3 拍目の 4 分音符 sf
- ・ 204 小節目 p
- ・ 220 小節目 右手 2 拍目の 4 分音符 sf
- ・ 254 小節目 右手 スラー
- ・ 258-264 小節目 右手 スラー
- ・ 264/5 小節目 左手 スラー
- ・ 273-4 小節目 右手 スラー
- ・ 275-6 小節目 右手 スラー
- ・ 277 小節目 スラー
- ・ 291 小節目 右手 sf、sf
- ・ 292 小節目 右手 sf
- ・ 330 小節目 左手 3 拍目の 8 分音符スラー
- ・ 362 小節目 左手 スタッカート
- ・ 364 小節目 中声部 スラー
- ・ 372 小節目 右手 1 拍目の 4 分音符 sf

以上の全項目は、どの表記もロンドン原版にのみ見られる表記であり、ウィーン原版には見られなかった。Fischer の指摘に従えば、上記のロンドン原版にのみ見られる表記は、ロンドンでの独自の追加ではなく、ベートーヴェンが指示したものとして捉えることを可能にする。ただし Fischer が何を根拠として、これらを挙げているのかが不明であるため、この見解をそのまま受け入れることは危険である。よって扱いには十分に注意を払う必要はあるものの、多くの先行研究で指摘されてきた、“ロンドン原版にのみある指示のほとんどは、ベートーヴェン以外の誰かによって変更されてしまったものである” という偏った見方とは異なる視点を提供している点で非常に興味深い。今後の資料研究の基礎ともなる

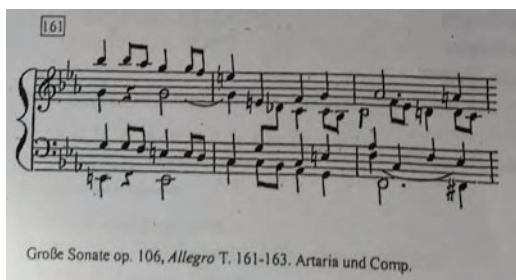
見解であるようにも思われる。

2.2.2. ベートーヴェンによる筆写譜 II への訂正箇所

以下の校正箇所は、当時ウィーンに居たベートーヴェンの手元にあった筆写譜 II と自筆譜との照合により行われたものとして Fischer が推論したものである。本項においても、二つの原版でそれぞれどのように表記されているのか、再検証を行った。まずは Fischer (2016) からその訂正箇所を引用しよう。

第1楽章 Allegro

- ・アウフタクト 1小節目 $f \rightarrow ff$
- ・15/6小節目 左手 F₁音の#、F音の \sharp もしかすると、テンポを (Allegro assai ではなく Allegro へと) 遅くしたことに関係しているのか
- ・38小節目 右手 フェルマータの拡大 (4分休符と8分休符をフェルマータに入れる)
- ・39小節目 p 1拍目裏 \rightarrow 1拍目 (Schlemmer?)
- ・64/5小節目 左手 タイ g音-g音
- ・124小節目 右手 2拍目裏の4分音符 スタッカート
- ・153小節目 2拍目裏: 欠けている中声部が補われている
- ・161-3小節目 対立した調号と運声法 原稿の前段階?
- ・162小節目 間違った声部
- ・163小節目 上段 1番目の4分音符 f^1 音はなし



【ウィーン原版¹⁰⁹】

- ・176/7小節目 アウフタクト ped.
- ・177小節目 $f \rightarrow ff$
- ・214-221小節目: 再現部への移行は、次のように改変している。
- ・214小節目 下段 2分休符は消される

¹⁰⁹ Fischer 2016, p. 12.

- ・ 214/7 小節目 左手の p の追加
- ・ 217/8 小節目 右手 fis¹– e² 音の 7 度進行 → ais¹ – e² 音の 5 度進行
(三全音、異名同音)
- ・ 234/5、236/7、239/40¹¹⁰小節目 左手 タイなし
- ・ 243 小節目 右手 タイ ges² 音 – ges² 音
- ・ 248 小節目 右手 4 番目の 4 分音符 des³ 音 f²/ as²/ f³ の和音に des³ 音を追加
(Schlemmer?)
- ・ 266 小節目 左手 fis/cis¹ 音の 5 度の下 pp
- ・ 266 小節目 新しいペダル ○ ped. ○
- ・ 266/7 小節目 左手 アウフタクト f → ff
- ・ 306 小節目 左手 4 番目の 4 分音符 d¹ 音が補われる
- ・ 362/3 小節目 中声部 スラー [W も L もあり]
- ・ 403 小節目 新しいペダル

第 2 楽章 Scherzo

- ・ 1 小節目 p なし
- ・ 30-33 小節目 アクセント
- ・ 52 小節目 左手 3 番目の三連符の 8 分音符 B 音 → As 音
- ・ 80 小節目 右手 [真ん中に表記] pp [L は下段]
- ・ 81 小節目 ○
- ・ 112 小節目 \hat{f} | (Manuskript-Fassung) → \hat{f} 小節線なし
- ・ 再現部 „Tempo primo“
- ・ 128-131 小節目 アクセント (Schlemmer?)

第 3 楽章 Adagio

表題 Adagio に *sosutenu* が追加される。脚注に以下が挿入される “Una Corda(:U:C:) bedeutet Eine Saite, Tutte Corde (:T:C:) bedeutet Drey Saiten, poi a poi due tre Corde nach und nach 2. und 3. Saiten.”

- ・ 9 小節目 右手 4～6 拍目の スラー

¹¹⁰ Fischer 2016 には、「238/9 小節目」とあるが「239/40 小節目」の間違いである。

- ・ 9 小節目 左手 6 番目の 8 分音符（間違い？） cis/fis/a 音の和音が訂正されない [W の間違い?] ¹¹¹
- ・ 14 小節目 右手 16 分音符の前打音は 16 分音符のまま (!)
- 22、108、170 小節目 ♪、♪ → ♪
- ・ 27 小節目 *cresc.* [W も L もあり] 28 小節目 *p* なし 29 小節目 *cresc.* なし
- ・ 35 小節目 左手 7 番目の 16 分音符 eis/gis/h/cis¹ 音の和音に cis 音の追加
- ・ 38 小節目 *più cresc.*
- ・ 42 小節目 中声部 3 番目の 16 分音符 h¹ 音の ♭
- ・ 44 小節目 最後の 16 分音符 ○ → 4 番目の 16 分音符 ○
- ・ 55 小節目 左手 6 番目の 8 分音符 d¹ 音の ♯
- ・ 108 小節目 右手 12 番目の 16 分音符 fis² 音 → d²/fis² 音の三度
- ・ 116 小節目 右手 1 番目の 16 分音符 fis³ 音 → dis³ 音
- ・ 127 小節目 左手 6 番目の 16 分音符 c¹ 音の ♯ → c¹ 音 ♯
- ・ 129 小節目 ○
- ・ 138 小節目 右手 4 番目の三連符 16 分音符 cis² 音 → ais¹ 音
- ・ 145 小節目 ○ *ped.* ○
- ・ 180 小節目 左手 指使い
- ・ 185/6 小節目 左手 10 度の和音がタイで結ばれない。A 音の ♯が、2 拍目から 1 拍目へ前にずらす

第 4 楽章 Largo


指示が新しくなる：

Per la misura si conta nel largo sempre quattro semicrome, ciò è ♩ ♩ ♩ ♩

- ・ 9 小節目 右手 最後の 32 分音符のオクターヴ a² / a³ 音タイから三連符のオクターヴ a² / a³ 音へのタイ
- ・ 10 小節目 *cresc.* を、C-Dur の 3 度 (accel.) から、前の G-Dur の 3 度にずらす


¹¹¹ 今回、筆者が確認したウィーン原版は 3 種類あるが、そのうちの 2 種類 (© Österreichische Nationalbibliothek SH.Beethoven.427、© Österreichische Nationalbibliothek L18.Kaldeck MS40122-4^o) はこれが修正されている。

Allegro risoluto¹¹²

- ・ 18/9 小節目 フーガのテーマの4分音符 スタッカート
- ・ 35 小節目 1 番目の4分音符 sf→f
- ・ 37 小節目 右手 2 番目の4分音符 sf
- ・ 38 小節目 欠けている中声部 4～6 番目の8分音符が補われる
- ・ 42 小節目 右手 2 番目の4分音符 sf
- ・ 64 小節目 右手 1、2 番目の8分音符 スタッカート
- ・ 65 小節目 中声部 指使い
- ・ 66 小節目、67 小節目 左手 スタッカート
- ・ 78 小節目 右手 3 番目の8分音符 sf
- ・ 96-98 小節目 *mano destra*、*mano sinistra*、M:D:
- ・ 97 小節目 右手 8 分音符のけた：
1 番目の8分音符の *es*² 音が独立した8分音符として他の8分音符から引き離される。
[vgl.] 反行形の相応箇所 115 小節目の左手
- ・ 112/3、117/8 小節目 左手 タイなし
- ・ 117 小節目 2 重トリルマーク（間違った配置？）が消去される
- ・ 119、122 小節目 *mano sinistra*
- ・ 122 小節目 左手 3 番目の4分音符 sf
- ・ 123 小節目 右手 6 番目の8分音符 sf
- ・ 134 小節目 f
- ・ 146 小節目 右手 1 番目の4分音符 sf
- ・ 151 小節目 右手 スタッカート
- ・ 153 小節目 右手 3 番目の4分音符 p
- ・ 157¹¹³ 小節目 上声部 *h*¹ – *fis*¹ – *d*² 音 スラー
- ・ 166 小節目 中声部 スラー
- ・ 166/7 小節目 下声部 スラー
- ・ 173 小節目 左手 スラー
- ・ 174/5 小節目  は、L にもあり]

¹¹² Fischer 2016 では、これを「第5楽章」としているが、本論では他の多くのエディションと統一し、第4楽章として小節数を書き換えた。

¹¹³ Fischer 2016 には、「146 小節目」とあるが、「147 小節目（本論では 157 小節目）」の間違いである。

- ・ 175/6 小節目 中声部 スラー
- ・ 178 小節目 左手 スラー
- ・ 182/3 小節目 右手 4分音符 スタッカート
- ・ 184 小節目 左手 スラーが消去される
- ・ 191/2 小節目 中声部 休符
- ・ 193 小節目 右手 sf [WにもLにも見られる]
- ・ 202 小節目 右手 2番目の4分音符 sf
- ・ 204/5 小節目 タイ $e^2 - e^2$ 音
- ・ 209 小節目 左手 2番目の4分音符 sf
- ・ 215 小節目 中声部 タイ $a^1 - a^1$ 音
- ・ 231/2 小節目 左手 反行形：4分音符 スタッカート
- ・ 236、237 小節目 sf
- ・ 238 小節目 1番目の8分音符¹¹⁴ f
- ・ 245/6 小節目 右手 8分音符のけた→ 2つの8分音符のはた
- ・ 250 小節目 U.C.
- ・ 278 小節目 左手 1番目の4分音符 f音の \flat
- ・ 279 小節目 T.C.
- ・ 294 小節目 左手 3番目の4分音符 sf (300小節目 ,, 抜けている“)
- ・ 319 小節目 p
- ・ 320 小節目 中声部 指使い
- ・ 333 小節目 f → ff
- ・ 372/3 小節目 
- ・ 377 小節目 右手 中声部 2番目の4分音符 g音の \flat
- ・ 389 小節目 f → ff

二つの原版を再検証した結果、ごく一部はロンドン原版にも見られる表記であったが、そのほとんどの項目が、ウィーン原版のみで見られる表記であった。つまり Fischer は、ウィーン原版のみで見られるこれらの表記もまた、ベートーヴェンによるものとしている。彼のこうした推察をもとに作成されたフィッシャー版が、どのようなエディションになっ

¹¹⁴ Fischer 2016 には、「4分音符」とあるが「8分音符」の間違いである。

ているのかについては、本論第3章と第4章で詳細に述べる。

3. 章のまとめ

ここまで見てきたように、一次資料を精査することで、ロンドン原版にもベートーヴェンの意向が大いに反映されているという事実が明らかになった。

書簡の精査からは、ベートーヴェンが弟子のリースに、ロンドンでの出版に関して全幅の信頼を置いていたことや、ロンドンにいるリースとのやりとりをスムーズに行えなかった様子、そしてそうした状況の中でもベートーヴェンがロンドン原版に自分の意向を強く反映させようと努めたことが明らかになった。

訂正リストの精査からは、ロンドン原版がよりベートーヴェンの自筆譜に近い楽譜であった可能性と、ベートーヴェンの意向がより多く反映されているという意味でウィーン原版にも劣らないという重要な事実が明らかになった。これにより、訂正リストには言及のない、二つの原版の様々な相違箇所、ロンドン原版を優先すべき可能性すら垣間見ることになった。さらに、訂正リストにおいて、ベートーヴェンがロンドン原版の楽章順で各楽章を呼ぶ箇所が存在していたことから、ロンドン原版の作品像も、ベートーヴェンが最後まで悩んだ一つのあり得る形であったことも明らかになった。

残念ながら現在消失している、特に二つの筆写譜に関しては **Fischer** の分析をもとに考察したが、これにより、二つの原版にあるそれぞれの表記は、そのどちらもがベートーヴェンが異なる時期に、手を加えた結果である可能性が見出された。つまり、どちらもベートーヴェンの意向として「正しい」と見なすことが可能であるかもしれないわけである。

次章では、Op. 106 の作品受容において、ロンドン原版がどのような位置にあったのかについて考察する。

第2章 Op. 106 の受容とロンドン原版

本章では Op. 106 の演奏史とエディションについて見ることで、ロンドン原版の存在が、作品の受容にどれほど影響を及ぼしていたのかを明示する。現代においては軽視されがちなロンドン原版だが、作品が世に広まり始める 19 世紀には特に、大きな影響力をもっていたことが明らかになる。

1. 演奏史と演奏批評

Op. 106 の 19 世紀における受容についての論考に Newman (1969)¹¹⁵がある。その中で、Op. 106 の重要なピアニストとして以下の名が挙げられている。リスト、モルティエ・ドゥ・フォンテーヌ Mortier de Fontaine (1816~1883)、ヴィクトリーヌ・ファランク Victorine Farrenc (1826~1859)、イグナーツ・モシェレス Ignaz Moscheles (1794~1870)、アラベッラ・ゴッダード Arabella Goddard (1836~1922)、アレクサンドル・ビレ Alexandre Billet (1817~?)、フランツ・ヴェルナー Franz Wüllner (1832~1902)、クララ・シューマン Clara Schumann (1819~1896)、ハンス・フォン・ビューロー Hans von Bülow (1830~1894) である。彼らの演奏実態を追ってみると、興味深い点が二つ浮かび上がる。一つは、彼らの中には、ロンドン原版と関係が深いと考えられる者が多いこと、そして二つ目は、そのピアニスト達が、Op. 106 の受容において特に重要な位置にいることである。これはつまり、ロンドン原版が、作品の受容において影響力を持ったピアニストと強く結びついたことにより、結果的に影響力を持つことになったことを意味する。よって本節では、Op. 106 の受容において特別な位置にいるピアニストに焦点を当て、彼らの演奏実態を見ることで、Op. 106 の受容を整理し、ロンドン原版の位置について明らかにすることを目的とする。

1.1. モルティエ・ドゥ・フォンテーヌ

1.1.1. 略歴¹¹⁶

フォンテーヌは、1816 年 5 月 13 日ヴォルギーニのヴィシュニヴェーツィに生まれた、

¹¹⁵ Newman 1969: William S. Newman, "Some 19th-century consequences of Beethoven's Hammerklavier sonata, opus 106." *Piano Quarterly*, 18(67), spring, 1969, pp. 12-18.

¹¹⁶ Fétis 1880: F. -J. Fétis, *Biographie universelle des musiciens et bibliographie générale de la musique. Tome Second*, Bruxelles: Culture et Civilisation, pp. 243-244. 「MORTIER DE FONTAINE」より引用。

ポーランドの傑出したピアニストである。生まれてすぐミラノに定住し、7才で **Domenico Scappa** という名の教授からピアノの初めてのレッスンを受ける。その少し後、ウィーンで **Antoine Hladislas** の弟子になった。それから、ポーランドに戻って、彼は傑出した芸術家 **Maurice Ernemann** と一緒に過ごし教育過程を終えた。**Ernemann** は当時 **Conservatoire de Varsovie** の教授であった。まさにこの時期、自分の夢が経済的に家族を悩ましたので、若きフォンテーヌは自らもピアノ教師としてレッスンを始めねばならなかった。16歳になったとき、彼は生まれ故郷を離れ、旅に出た。そして彼にとって特別華々しいものとなるはずの名演奏家としての生涯に一步を踏み出した。彼が最初のコンサートを行ったのはダンツィヒにおいてである。ほとんど時を移さず彼はコペンハーゲンへ行く。そこで彼はデンマークのフランス大使 **M. de Montebello** という人物から支援を受けるようになる。それからフォンテーヌはパリに赴く。そこで彼は、彼の同国人のフレデリック・ショパン **Frédéric Chopin** (1810~1849) を最初に訪ねた。ショパンは彼を兄弟のように迎えた。

Theatre-Italien のオーケストラ、**l'Opéra-Comique**、**Société des concerts du Conservatoire** で、フォンテーヌは聴衆に鮮やかな成功を収めて受け入れられ、そしてフェリックス・メンデルスゾーン **Felix Mendelssohn** (1809~1847) のいくつもの作品、とりわけ美しいコンチェルト第1番をフランスで初めて認知させた。

彼はミラノで、リストを共演者として二台ピアノのデュオを行う。この時期を出発点として、過去の音楽の中に自らの知的探求を始めた。それは、とりわけバッハとヘンデルの忘れられた作品や知られざる作品を明るみに出すことであった。またこの時期にヨーロッパの新聞が、彼の才能の分析を始め、極めて優れた彼の演奏の独創性を取り上げるようになる。彼は1842年の春にパリに戻って来る。**Conservatoire** で大きなコンサートを催し、そこで120人の音楽家たちのオーケストラと一緒に、また80人の芸術家たちと一緒に、エクトル・ベルリオーズ **Hector Berlioz** (1803~1869) の指揮で、**Beethoven** の **Fantaisie Op. 80** を演奏した。彼は大成功を収めた。新聞も大衆と同じように、満場一致で拍手喝采した。その後、ベルリン、ライプツィヒ、ドレスデンで彼が行った演奏活動もまた、同じく勝利を収めた。

フォンテーヌは、古典音楽の純粋な伝統に育まれた極めて傑出した芸術家である。そして彼の才能は強烈で、偉大な功績をあげた。それは誠実で好感のもてるものだった。しかし芸術家が最も熱のこもった賛辞を受ける権利を持つのは、演奏者であることに限られな

い。フォンテーヌは、いわゆる「普及させる人 vulgarisateur」であった。そしてほとんど「改革者 novateur」でもあった。そしてこの報告から見て、彼の芸術家としての生涯は真の独創性を呈示する。彼によって、我々はドイツとイタリアの偉大なかつての巨匠の諸作品へ立ち還らねばならない。彼こそが、とりわけヘンデルとバッハの協奏曲を明るみに戻したのである。Beethoven の後期ピアノ・ソナタを聴かせ、もしそう言ってよければ、普及させたのは彼が最初である¹¹⁷。これら様々な資質により、フォンテーヌは例外的に秩序正しい芸術家として考えられる人物である。

1.1.2. フォンテーヌと Op. 106

Op. 106 の初演者はフランツ・リストであるとする説が有力であると先述したが、フォンテーヌが Op. 106 を最初に公開演奏した人物と言われることもある¹¹⁸。1843年にドイツ、1847年にウィーン、1853年にはサンクトペテルブルクと複数回 Op. 106 を演奏したらしいことも明らかになっている¹¹⁹。Op. 106 の初演については諸説あり、フォンテーヌが実際に Op. 106 の最初の演奏者であったかは定かではないものの、難曲である Op. 106 を公の場で演奏した記録が複数回存在していること、そして先述の通り「Beethoven の後期ピアノ・ソナタを普及させた」最初の人物であることに鑑みると、彼が Op. 106 の演奏史において重要な位置にいることは明らかである。また彼は、演奏だけでなく、ロンドン原版の改訂にも関わっていたとされ¹²⁰、彼が演奏の際「ロンドン原版や、その系譜に属するエディションを用いていた」¹²¹ことが推察できる。Op. 106 を演奏出来たフォンテーヌが、ロンドン原版の改訂や、ロンドン原版の系譜に属するエディションに携わったという事実は、Op. 106 の初期の受容において重要な位置にいる演奏家が、ロンドン原版と強い結びつきがあったことを意味する。つまり、ロンドン原版は「演奏」と常に結びついた形で影響を及ぼしていたようである。

¹¹⁷ 下線は引用者によるものである。

¹¹⁸ Tyson 1962: Alan Tyson, “The Hammerklavier Sonata and its English Editions”, *The Musical Times* 103, p. 237.

¹¹⁹ Newman 1969, p. 13.

¹²⁰ Tyson 1962, p. 236.

¹²¹ 沼口隆 2014 「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106 『ハンマークラヴィーア』の2つの初版とイギリス初版の意義」『国立音楽大学研究紀要第48集』p. 29.

1.2. アラベッラ・ゴッダールド

1.2.1. 略歴¹²²

1836年1月12日にサン＝マロに生まれ、1922年4月6日にブローニュで没したイギリス人ピアニスト。6歳の時、フリードリヒ・カルクブレンナーFriedrich Kalkbrenner (1785～1849) に師事するためパリへと移る。1848年革命の後にはイギリスに行き、ルーシー・アンダーソン Lucy Anderson (1797～1878) とジギスモント・タールベルク Sigismond Thalberg (1812～1871) に師事した。また、ジョージ・アレグサンダー・マクファーレン George Alexander Macfarren (1813～1887) のもとで和声を学んだ。彼女のピアニストとしてのロンドンデビューは、1850年10月23日、ハーマジエスティアーズ劇場にてである。その後、1873年から1876年にかけて、アメリカ、オーストラリア、インドをツアーで回った。1880年代初頭に演奏活動からは引退するが、1883年の王立音楽大学の創設時には教授の一人となり、教鞭を執り続けた。

19世紀後半のほとんどの間、ゴッダールドはイギリスを代表するピアニストとして見なされており、また一流のレパートリーを有することで有名だった。彼女が暗譜で成し遂げたベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106 の演奏は、Op. 106 の最初期の演奏の一つに数えられており、彼の晩年のピアノ・ソナタに挑んだ最初の演奏者の一人でもあった。ゴッダールドは、ベートーヴェンのピアノ・ソナタの演奏で重要な貢献をした人物だった。彼女のテクニックは広く賞賛され、ジョージ・バーナード・ショーGeorge Bernard Shaw (1856～1950) は、彼女の「wonderful manipulative skill=素晴らしき操り術」について書いている。

アラベッラ・ゴッダールドの遺産は、ピアニストの解釈の領域にしっかりと残っており、現代のコンサートアーティストの初期の例といえる。

1.2.2. ゴッダールドと Op. 106

ゴッダールドは、出身のイギリスの地で数多く Op. 106 を演奏している。上で見たように、当時演奏不可能とも言われたこの作品を、世に広めたピアニストとして重要な位置にいたようだ。『国際音楽雑誌目録 Répertoire international de la presse musicale』(RIPM)

¹²² Grove Music “Goddard, Arabella”、および Ellsworth 2007: Therese Ellsworth, “Victorian Pianist as Concert Artists: The Case of Arabella Goddard (1836- 1922).” *The Piano in Nineteenth-Century British Culture. Instruments, Performers and Repertoire*, Chapter 7, Aldershot, England; Burlington, VT: Ashgate. pp. 149-169.より引用。

を用いて Op. 106 の演奏批評の調査¹²³を行うと、全 108 件中 22 件をゴッダールドが占め、どのピアニストよりも多い件数となった。つまり、このことからゴッダールドが 19 世紀において Op. 106 を数多く公開で演奏した一人であると言えるだろう。

イギリス人ピアニストの神童として現れた彼女は、出身地のイギリスを中心に活躍したことから、沼口は、彼女がロンドン原版に由来するエディションを用いていたことに「疑いの余地がない」¹²⁴と指摘している。彼女の実際の演奏実態は、いかなるものであったのか。以下に彼女の演奏に対する批評を、時系列を追って整理し、より具体的に探ることとする。

1.2.3. ゴッダールドの Op. 106 に関する演奏批評¹²⁵

ゴッダールドが公の場で初めて Op. 106 を演奏したのは、筆者が確認した限りでは 1853 年の 4 月 14 日[?]にロンドンにてである。その時の演奏批評に次のようなものがある。

その作品はとてつもなく難しかったので、たとえてみれば、アマチュアとピアノフォルテの教授にとっては封印された本であった。そしてベートーヴェンの才能を崇拝していた人たちは皆、その作品をベートーヴェンの最も高尚な業績の一つと見なしたが、例外的な才能を持った演奏家以外は、誰もそれを私的な場で、ましてや大勢の聴衆の前で演奏しようとはしなかった。¹²⁶

つまり、1853 年の時点で、Op. 106 の難しさゆえに、公の場で演奏した人物はいないに等しかったことが窺える。そのような状況の中で、ゴッダールドが演奏した Op. 106 は、非常に賞賛されたようだ。

ゴッダールドがベートーヴェンのソナタを完全に理解し、それを完璧に演奏したと語ることは、他のどのピアニストについて語られてきたこと以上のことを語ることである。[……] 観客がこの若い芸術家の奮闘努力の進展を心から励まし、最後に

¹²³ *RIPM Online Archive*, EBSCOhost. 「and 検索」を用い、次のような検索を試みた。“ ”の中はキーワード、()内の数字の分母はヒット件総数、分子はゴッダールドの Op. 106 に関する記事の件数、年代は Op. 106 が出版された 1819 年から第一次世界大戦終戦頃の 1920 年に絞った：“Beethoven” & “Hammerklavier” (0/12); “Beethoven” & “op. 106” (22/96)。 (2020 年 9 月 1 日確認)。

¹²⁴ 沼口 2014 p. 29。

¹²⁵ 引用文における下線は、引用者による。

¹²⁶ *The Musical World*, April 23, 1853, Vol. XXXI, No. 17, Author: [Anon.], p. 256.

は、舞台への呼び戻しと、公演ではめったに見られないような満場一致の共感と賛同の表明とをもって、彼女の名誉を讃えた [……]。¹²⁷

この時、彼女は弱冠 17 歳であり、しかも女流のピアニストが、これまで多くの先人たちが避けてきた大曲の演奏を見事にやってのけたという、良い意味で衝撃的な演奏会だったことがわかる。

この演奏から 4 年後の 1857 年の批評には、彼女が Op. 106 の演奏において、当時を代表するピアニストにまでなったことが窺える記述もあった。

非常に若い芸術家、英国人女性が封印を破り、これまで [Op. 106 を] 聴く機会がなかった人達を、このソナタを聴くように誘った。[……]

アラベラゴッダールドのおかげで、Op. 106 はベートーヴェンのピアノ・ソナタの中で最も一般的に賞賛され、人気さえあるものの 1 つになった。¹²⁸

ゴッダールドが Op. 106 の演奏史において重要なピアニストであることが改めて確認できる。

ここで、もう一度ゴッダールドの最初の Op. 106 の演奏について注目したい点がある。それは、彼女が演奏した楽章順についてである。演奏の楽章構成を確認することは、ウィーンとロンドンのどちらの原版を採用し演奏していたかが明らかになる意味で重要な視点である。下の批評には、それに関連するであろう言及がある。

ゴッダールドは、最高の榮譽に値する力強さと正確さと冷静さと完全な知性とをもって、最初の 3 つの楽章を暗譜で演奏したのである。¹²⁹

この批評からは、ゴッダールドが、第 1、2、3 楽章を暗譜で演奏したことがわかる。さらに、これと同じ演奏会の別の批評には、次のようなものがあった。

¹²⁷ *The Musical World*, April 23, 1853. p. 256.

¹²⁸ *The Musical World*, May 9, 1857, Vol. 35 - No. 19, Author: [Anon.], p. 298.

¹²⁹ *The Musical World*, April 23, 1853, Vol. XXXI, No. 17, Author: Brinley Richards, p. 257.

アレグロ、アダージョ、スケルツォであろうと、フィナーレであろうと、最も優れた、予想外の芸術の工夫が、ほとんどすべての小節で見られる。¹³⁰

つまり、これら二つの批評を踏まえると、ゴッダールドが「最初の3つの楽章を暗譜で演奏した」あと、第4楽章だけは楽譜を見て演奏したことがわかる。ゴッダールドが第4楽章だけ楽譜を見たということになると、第4楽章の前に、少なくとも楽譜を準備するなど、何かしらの間を取ったことが考えられる。このことは、二つ目の批評で、作品を二部分に区切って説明する文脈からも明らかである。また、その記述の順番からは、「最初の3つの楽章」は、「アレグロ、アダージョ、スケルツォ」の順で演奏されたことを読み取ることができ、彼女がここで演奏した形は、ロンドン原版の作品像（第1→3→2楽章と第4楽章）であったことがわかる。

さらに、ゴッダールドの演奏に対する別の批評の中には、当時の演奏習慣が垣間見える記述も見られた。

高い評価を得ている野心的なピアニスト達は、[……] **Op. 106**（注目のソナタ）の最初の三つの楽章では、懸命に努力し、多かれ少なかれ成功を収めてきたものの、彼らの殆どが、前代未聞のフィナーレ [……] を怖がっている。¹³¹

これは、ロンドン原版を底本にした作品像（最初の3楽章のみの演奏）が、当時多く演奏されていたことの証左となろう。つまりこれらの演奏批評から、ゴッダールドをはじめとする当時のピアニスト達が、ロンドン原版を底本にした演奏をしていた事実が明らかになる。難曲である **Op. 106** の特に初期の受容に関しては、ロンドン原版の作品像が大いに役立っていたことがわかる。

しかしその10年後のゴッダールドの演奏に対する批評には、ウィーン原版と同じ楽章構成で演奏したと思われるものが出てくる¹³²。つまり、受容の初期には一般的であったロンドン原版をもとにした演奏習慣は、1860年代後半頃には徐々にウィーン原版をもとにしたものに移り変わっていったと見られる。

¹³⁰ *The Musical World*, April 23, 1853, Vol. XXXI, No. 17, Author: [Anon.], p. 253.

¹³¹ *The Musical World*, May 9, 1857, p. 299.

¹³² *The Musical World*, March 23, 1867, Vol. 45 - No. 12, Author: [Anon.], p. 175.

1.3. フランツ・リスト

1.3.1. 略歴¹³³

リストは、1811年10月22日、ショプロン近郊ライディング（現オーストリア、ブルゲンラント州）に生まれ、1886年7月31日バイロイトに没した、ハンガリー生まれのドイツの作曲家、ピアニスト、教師である。ここでは、本論で採り上げるピアニストとしてのリスト像にフォーカスするため、ピアニストとしての事項を中心にまとめる。

リストは6歳のときから、父アーダム・リスト Adam Liszt（1776～1827）のピアノ演奏に熱心に耳を傾け、ジプシー音楽と宗教音楽にも興味を示した。父から音楽的才能を見出された彼は、7歳になる頃にはその父からピアノを習い始め、8歳のときにはバーデンで初めて聴衆を前に演奏し、9歳になると、1820年10月と11月に行われたエーデンブルク（現ショプロン）とポジョニ（別称プレスブルク、現ブラチスラヴァ）での演奏会に出演し、この演奏会のあとハンガリーの地方貴族たちから、音楽教育の学費を全額提供することを決定された神童だった。

1822年、リスト一家はウィーンに移り、フランツはツェルニーにピアノを、また当時ウィーンの宮廷楽長を務めていたアントーニオ・サリエリ Antonio Salieri（1750～1825）に作曲を学ぶ。同年12月1日にリストがウィーンで行った最初の公開演奏会は、大成功を収めた。彼はオーストリアとハンガリーの貴族界に迎えられ、ベートーヴェンとも会っている。1823年秋、リストは家族とともにパリに移るが、その道すがらミュンヘン、シュトゥットガルトをはじめとするドイツの諸都市で演奏会を行った。パリでは、外国人であるという理由から、ルイジ・ケルビーニ Luigi Cherubini（1760～1842）にパリ音楽院への入学を拒否されるも、個人的にアントニン・レイハ Anton Reicha（1770～1836）に音楽理論を、フェルディナンド・パエール Ferdinando Paer（1771～1839）に作曲を学ぶことができた。リストは、パリ社交界で成功を収め、名士の集う多くの演奏会で演奏した。

1835年、リストは新設されたジュネーヴ音楽院で教鞭を執った。また、ピアノ教本も書き（のちに消失）、パリの《Revue et gazette musicale》誌に論説を幾つか掲載している。1839年からの8年間、リストはアイルランドからトルコ、ポルトガルからロシアに至るヨーロッパ全域で演奏旅行に明け暮れた。このころが、コンサート・ピアニストとしての最盛期であった。彼は至るところで賛辞を浴び、幾つもの栄誉を受けた。

¹³³ 『ニューグローヴ世界音楽大事典』第19巻 東京：講談社 pp. 380-416 「リスト, フランツ」より引用。

リストがおそらく音楽史上最大のピアニストであることは、一般に認められている。鍵盤テクニックの観点から見れば、これまで彼の偉業を凌駕する者はおろか、肩を並べる者すらほとんどいなかったことは確かである。

また、現代的なピアノ・リサイタルを考え出したのは、ほかならぬリストである。リスト以前の時代には、ピアニストは他の出演者とともに、様々な演目を集めたプログラムの一部を担うのが通例であった。一晚の演奏時間全体を格調高いピアノ音楽に充てるのを公開演奏会の標準的形態としたのは、リストその人であった。当時のピアニストとしての影響力もさることながら、今日まで続くリサイタル文化の創始者としても名を轟かせるほどの音楽家である。

1.3.2. リストと Op. 106

彼とベートーヴェンのピアノ・ソナタとを考える上で、演奏は勿論のこと、楽譜校訂も重要な鍵となる。ここでは主に「演奏」について採り上げ、楽譜校訂に関してはあとの節で述べる。

リストは、Op. 106 の公開初演者とされることが多く、実際それはかなり有力な情報のようである¹³⁴。彼の Op. 106 の演奏は、記録が残っているだけでも複数回存在する。ベートーヴェンの他のピアノ・ソナタに関しても、演奏した記録が多数残っている彼だが、中でも Op. 106 は、最も演奏したピアノ・ソナタの一つであった¹³⁵。1819 年に出版されてから 20 年弱、公で演奏されることが（おそらく）なかった Op. 106 の演奏を初めて可能にしたリストは、気に入ってこの曲を何度も採り上げたのだろうか。いずれにせよ、これまで演奏困難とされてきた Op. 106 を「比類のない熟達した技能をもって、すべての技術的困難を克服した」¹³⁶リストによる演奏が、当時どれほど大きなインパクトを与えたのか、それは想像に難くない。

では次に、演奏批評を見ていくことで、より具体的にリストの Op. 106 の演奏実態に迫っていこう。批評からは、リストとロンドン原版との関係を思わせる大変興味深いものがある。次の節で、年代を追って見ていくこととする。

¹³⁴ Newman 1969, p. 12.

¹³⁵ Newman 1972: William S. Newman, "Liszt's Interpreting of Beethoven's Piano Sonatas." *Musical Quarterly* 58, p. 192.

¹³⁶ Newman 1972, pp. 187-188.

1.3.3. リストの Op. 106 に関する演奏批評

Op. 106 の初演と考えられている 1836 年にパリで行われたリストのリサイタルに対し、ベルリオーズが述べた批評は次の通りである。

この崇高な詩は、今日までほとんどのピアニストにとってスフィンクスの謎に他ならなかった。[ひとりの] 新しい [若い] オイディプス、即ち、リストは作曲家がそれを聞くことができたならば、彼の墓の中で、誇りと喜びで震えたに違いないような方法でそれを解いたのである。一つの音符も省略されず、一つの音符も追加されなかった（私はスコアを注意深くフォローした）。[……] とりわけアダージョでは、ベートーヴェンの精神が広大に一人で舞い上がりながら単独で歌ったように見えるこの不思議な詠唱の演奏で、彼 [リスト] は作曲家の考えのレベルに着実に追いついてきた [……]。¹³⁷

また、ロシアの音楽評論家で作曲家のアレクサンドル・セローフ Alexander Serov (1820～1871) は、リストが 1858 年にワイマールで行なった Op. 106 の演奏に対し、次のような批評を残している。

[リストは、]まるで天国の幻影によって変貌したかのようにアダージョで歌った。墓の向こうに横たわる世界の目撃者として。彼自身は深く感動し、彼は [他の人たちを感動させ] 涙を流させた [……]。フーガについて言えば、この恐ろしい声部の混乱は、ほとんど信じられないようなテンポで演奏され、最小音符さえ失われなかった、そして、終わりのトリルを、リストはオクターヴで演奏した。¹³⁸

これらの批評を見るとやはり、演奏困難とされてきた Op. 106 を、非常に効果的に、そして原典に忠実に演奏するリストの演奏実態を垣間見ることができる。中でもアダージョの演奏は、特に心を打つものであったらしいことも明らかであろう。

セローフの批評と同じ、1858 年のワイマールで行われたリストによる Op. 106 の演奏に対してヴェンデルリン・ヴァイスハイマー Wendelin Weißheimer (1838～1910) による

¹³⁷ *Revue et gazette musicale de Paris*, 1836 Author: Louis Hector Berlioz. p. 200.

¹³⁸ Lenz 1860: Wilhelm von Lenz, *Beethoven. Eine Kunst-Studie V*, Hamburg: Hoffman & Campe, pp. 49-50.

批評¹³⁹には、注目すべき点がある。それは “リストが *scherzo* の前に *adagio sostenuto* を採り上げた” ことが推測される点だ。これはつまり、リストがロンドン原版の楽章順で演奏していたことになる。Op. 106 の初演を果たしたリストが、ロンドン原版の形で演奏していたとするならば、この作品が鳴り響いた最初の作品像は、ロンドン原版の方であったことが窺える。のちの本章第2節や、第3章では、リストの校訂楽譜を見ることで、彼とロンドン原版との関係についてより詳細に触れるが、この批評によって明らかになった、リストの採用した「楽章順」に限って見ても、リストとロンドン原版との結びつきは明らかである。リストの場合にもまた、「演奏」と「ロンドン原版」との関わりが見て取れる。

1.4. ハンス・フォン・ビューロー

1.4.1. 略歴¹⁴⁰

ビューローは、1830年1月8日にドレスデンに生まれ、1894年2月12日にカイロに没したドイツの指揮者、ピアニストである。9歳からフリードリヒ・ヴィーク Friedrich Wieck (1785～1873) に音楽の手ほどきを受け、次いでドレスデンでマックス・エーベルヴァイン (不明) に学び、ライプツィヒではルイ・プレディ Louis Plaidy (1810～1874) と、モーリッツ・ハウプトマン Moritz Hauptmann (1792～1868) のもとで研鑽を積んだ。1846年から48年にかけて、シュトゥットガルトでヨアヒム・ラフ Joachim Raff (1822～1882) をはじめとする音楽家たちと知り合うが、両親の意向によりライプツィヒで法律を学ぶことになり、そのかわりハウプトマンに対位法の指導を受けた。49年にはワイマールでリストと出会い、同年、ベルリン大学に入学する。1850年にワイマールでリストの指揮による〈ローエングリン〉の初演を聴いて法律の勉強を放棄し、リヒャルト・ワーグナー Richard Wagner (1813～1883) の指導を仰ぐため、チューリヒに赴く。ワーグナーはビューローの才能に感銘を受け、50年から51年にかけて彼がチューリヒとザンクトガレンで指揮の経験を積むことができるよう計らった。51年、ビューローは、これまでの自分の演奏は未熟でつたないものであったと宣言し、ワイマールに赴いてリストにピアノを学ぶ。リストは最高の「楽人」が現れたとビューローを絶賛し、「彼の才能をもってすれば第一級のピアニストになれる」とその両親に請け合った。53年、最初の演奏旅行を行い、

¹³⁹ *Erlebnisse mit Richard Wagner, Franz Liszt und vielen anderen Zeitgenossen nebst deren Briefen*. 3rd ed. 1989, pp. 17-20.

¹⁴⁰ 『ニューグローヴ世界音楽大事典』第14巻東京：講談社 pp. 246-247 「ビューロー, ハンス (・クイード)・フォン」より引用。

ウィーン、ペスト、ドレスデン、カールスルーエ、ブレーメン、ハンブルク、ベルリンを訪れた。その後、55年から64年にかけてはベルリンのシュテルン音楽院、マルクス音楽院のピアノ科主任教授を務め、そのかわり演奏会やリサイタルを主催して、新ドイツ派の作品の宣伝に努めた。

57年にリストの娘コジマ Cosima Wagner (1837~1930) と結婚するが、その12年後の69年には、コジマはワーグナーのもとへ去ってしまう。これまでワーグナー派を代表していたビューローだったが、離婚後ワーグナーから離れ、ヨハネス・ブラームス Johannes Brahms (1833~1897) との親交を深め、その作品を積極的に採り上げるようになった。

ビューローの演奏の真髓について、エドワード・ダンロイター Edward Dannreuther (1844~1905) は「情熱的な知性」と評し、さらにこう付言している。「すみずみまで考え抜かれ、どんな細部も完全に知り尽くされている。あらゆる効果が分析され、このうえなく綿密に計算されているが、それでいて全体に温かみのある自然な印象を受ける」。それに対して、クララ・シューマン（ビューローは彼女の演奏を見下していた）をはじめとする人々は、彼の演奏は「計算」されすぎているとし、ブルーノ・ワルター Bruno Walter (1876~1962) は「ある種の押しつけがましさ」を指摘している。エイミー・フェイ Amy Fay (1844~1928) はビューローを「巨大な芸術家」と呼び、その偉大さをこう要約している。「彼の演奏からは、音楽的想念を表現する手段としてのみ楽器を用いているという印象を受ける。したがって彼の演奏中は、ピアノという楽器のことはすべて忘れ、ひたすら音楽的想念と情熱に没頭するばかりである」。彼女はまた、ビューローのユーモアと同時に、聴衆に対する尊大な態度にも触れ、気分次第で客席に顔を向けたり、背を向けたりできるようにリサイタルのときは舞台の上に2台のピアノを備えておくのを好んだ、と伝えている。リヒャルト・シュトラウス Richard Strauss (1864~1949) によれば、ビューローの手は小さく、辛うじて1オクターヴに届くほどだったが、大ピアニストが輩出した当時においてさえ、その技巧は傑出していた。

ビューローは特に新作を積極的に採り上げた。並外れた知性と分析力の持ち主であったため、難解な新作もたちまち吸収、理解し、暗譜で演奏することができた。また、ベートーヴェンにも傾倒していた。彼のベートーヴェンを聴いたエドゥアルト・ハンスリック Eduard Hanslick (1825~1904) は、興奮して次のような賛辞を寄せている。「休みなく働くその冴えた頭脳とありあまるほどのエネルギーは、北風のように吹きすさび、我々の

日常的音楽生活に見られるよどんだ自己満足を一掃し、活性化してくれた」(1881)。このとき、ビューローは1回のリサイタルでベートーヴェンの最後の5曲のソナタを演奏した。後期ソナタ5曲を採り上げる演奏会については、後で(1.4.3.)改めて見るが、1881年が初めてのことでなく、またその後も数多く行っている。

1.4.2. ビューローと Op. 106

ビューローと Op. 106 との関係を考える上で最も特徴的な点は、生涯にわたるその演奏頻度の高さと演奏地域の広さだろう。『国際音楽雑誌目録 Répertoire international de la presse musicale』(RIPM)を用いた調査¹⁴¹の結果、全108件中16件をビューローが占め、ゴッダールドの22件に次いで2番目に多かった。またその演奏記録を見ると、ビューローの演奏地域が多岐にわたっていることがわかる。ベルリン、シュテッティン、カールスルーエ、ドレスデン、ハンブルク、パリ、ロンドン、サンクトペテルブルクなどである。つまり、演奏不可能とされてきた Op. 106 を演奏で世に広めていった最重要ピアニストとしてビューローの名を欠かすことはできない。では次に、批評から、より具体的にビューローの演奏実態とその評価を見ていこう。

1.4.3. ビューローの Op. 106 に関する演奏批評¹⁴²

1.4.3.1. 1860年代

ビューローが公の場で初めて Op. 106 を演奏したのは、筆者が確認した限りではケーニヒスベルクにて1858年12月6日であり、そこから1860年代にかけて実に10回を超える公開演奏を行なっている。60年代の批評を見ると、Op. 106 は、当時の聴衆に対して戸惑いのようなものを与えていた作品であることがわかる。それは Op. 106 の尋常ではない規模、交響曲をも思わせる壮大で複雑な響きなど、他の作品とは比にならない特異な作品像ゆえである。先述の通り、ビューロー以前に演奏したピアニストはいたが、Op. 106 は、まだ一般に広く受け入れられていたとは言い難い状況だったのだろう。

この夜、いまだに一般に未解決の問題という状態にあるベートーヴェンの B dur

¹⁴¹ RIPM Online Archive, EBSCOhost. 「and 検索」を用い、次のような検索を試みた。“ ”の中はキーワード、()内の数字の分母はヒット件総数、分子はビューローの Op. 106 に関する記事の件数、年代は Op. 106 が出版された1819年から第一次世界大戦終戦頃の1920年に絞った：“Beethoven” & “Hammerklavier” (1/12); “Beethoven” & “op. 106” (15/96)。 (2020年9月1日確認)。

¹⁴² 引用文における下線は、引用者による。

大ソナタ (Op. 106) が初めて演奏され [……。]。それは、深さを測り知るのがそれほど簡単ではない巨大な作品であり、初めて聴いたときそれは魔術的に作用する。¹⁴³

私は公開でそれを聞いたのはようやく2回目だった。[……。] それは45分にわたる独特な音楽であった。ソナタ Op. 106 は、それをおおよそ理解するだけでも、そのソナタのために特別に修練を積んだ聴衆を必要とする。¹⁴⁴

ビューローは、これまで演奏機会の少なかった Op. 106 を幅広いエリアで演奏し、広めていった第一人者だということが改めてわかる。しかも彼の演奏は、Op. 106 が受け入れられていない当時の聴衆の戸惑いを超えて、感動をも呼んでいた。

フォン・ビューロー氏によるこのソナタの演奏は、同様に驚くべき、真に圧倒的な行為であることが証明された。[……。] 活気に満ちた呼び出しの繰り返して終わった熱狂的な表明による外的成功もまた、我々の意見では、余りにも明白なほどであり、実際にさらに言及する必要もないくらいである。そうだと、フォン・ビューローの演奏には磁力があり、彼が演奏するのを聴けば聴くほど、それをもっと聴きたい、もっと長く聴きたいという一層激しい欲求を刺激するのだ。¹⁴⁵

H. v. ビューローはそのソナタを熱狂的に、素晴らしく、演奏する、[……。] この演奏の仕方は最高度に目覚ましい効果を挙げている。多くの機械的で煩わしく仕立てられたいくつかの個所はおのずから勝手に進行し、最高に難しい個所は濁りなくスムーズに誘い出されたように現れる。¹⁴⁶

1.4.3.2. 1870年代とそれ以降

1870年代に入ると、もはやビューローが Op. 106 を採り上げることへの驚きはなくな

¹⁴³ *Neue Zeitschrift für Musik*, Leipzig, den 19. Februar 1864. LX. Band Sechzigster Band. No 8, Author: Y. v. A, p. 64.

¹⁴⁴ *Neue Zeitschrift für Musik*, Leipzig, den 29. Juli 1864. LX. Band Sechzigster Band. No 31, Author: L. Köhler, p. 271.

¹⁴⁵ *NZfM* February 19. 1864 p. 64.

¹⁴⁶ *NZfM* July 29. 1864 p. 271.

り、Op. 106 を演奏する権威としての地位をも築いていった。

フォン・ビューロー博士は、暗譜でベートーヴェンの巨大なソナタ B-Dur Op. 106 を演奏した。[……] たとえ最高位のピアニストであっても、個人的に行ったものはどうあれ、公の場でそれを試みようとする挑んだピアニストは殆どない。¹⁴⁷

フォン・ビューローにとってそのソナタは単なる子供の遊びである。[……] 彼の他のどの存命の芸術家も達成したことのないようなことを達成する。——つまり、最も複雑なパッセージを可能な限り明確にする、そしてそのソナタをまとまりのある解り易い全体として聴き手に提示する。その全体は、他の弾き手に任せたら、混乱を極め、理解不可能に思われるだろう。[……] その演奏は、容易に忘れられない感動を膨大な数の聴衆に与えて完結された。特に聴衆の熱狂ぶりは彼らがスケルツォと驚異的なフーガをもう一度聴きたいという欲求を示すほどであった。¹⁴⁸

また 1875 年には、新たな挑戦を試みている。当時 Op. 106 と共に演奏不可能と言われていたディアバリ変奏曲を、Op. 106 と並べてひとつのリサイタルで、どちらも暗譜で演奏したのだ。Op. 106 を演奏するだけでも偉業であったときに、それと並んで別の難曲を暗譜で弾きこなしてしまう彼は、当時のピアノ界において群を抜いていた。

フォン・ビューロー博士の他の公演のうち、おそらく今年でもっとも注目に値するのは、ベートーヴェンのソナタ変ロ長調とディアバリ変奏曲が暗譜で連続して演奏された驚くべきリサイタルであった。これは殆ど類を見ない偉業である。¹⁴⁹

さらに彼は、驚くべきことに、1878 年にまたも偉業を成し遂げる。ベートーヴェンの後期 5 大ソナタを一夜にまとめて採り上げたのである。現代では、チクルスとして複数のピアノ・ソナタを採り上げることは、よく行われるが、当時としては斬新な企画であった。ましてや、後期のピアノ・ソナタは、当時まだ難解な作品とされており、それを並べて、

¹⁴⁷ *Dwight's Journal of Music*, January 10, 1874. Vol. XXXIII, No. 20, Author: [Anon.], p. 160.

¹⁴⁸ *The Metronome: A Monthly Review of Music*, February 1874, Vol. III, No. 11, Author: [Anon.], p. 83.

¹⁴⁹ *Concordia*, Saturday, September 4, 1875, Vol. I, No. 19, Author: H. H. Stratham, p. 299.

しかも暗譜での演奏会を行うなど衝撃的だったことだろう。それ以降ビューローは、Op. 106 を弾く際には後期の他の4つのソナタと一緒に演奏することがほとんどで¹⁵⁰、その回数は筆者が確認できただけでも実に32回に及ぶ。それでもビューローの演奏は、評価され続け、当時の聴衆に対し衝撃のみならず、ベートーヴェン音楽の持つ精神をも伝え続けた。

ハンス・フォン・ビューロー博士は最近、ベートーヴェンのピアノフォルテソナタの5つを一つのリサイタルで演奏した。[……]これは素晴らしい偉業であり、[……]。そもそもこれらの5つのソナタを演奏するのは簡単なことではない。それらを一度に演奏するのはさらに驚くべきことであるが、すべてを一度に暗譜で演奏するのは本当に驚くべきパフォーマンスである。¹⁵¹

その演奏は非常に完璧であり、非常に優れていたため、まるで磁力によって引きつけられるかのように、必然的に後に続かざるをえなかったのである。ベートーヴェンの解釈者としてのビューローは、最近ではライバルをそれほど簡単に見つけられない。実際彼はかかる解釈者としては唯一無二である。演奏に個性的な色合いの魅力を与えたり、演奏のために何かをぎっしり詰め込んだりするどころか、彼は文字通り芸術作品の精神に溶け込み、音の詩人の志向の深奥から全体を形態化する。スタイルと完全に調和しないようなニュアンスの影を付け加えたりはしない。¹⁵²

1.4.3.3. ビューローへの批判

もちろん、その彼にも批判の声が無かったわけではない。しかしそれは、Op. 106 を含んだ後期ソナタを並べた、斬新なプログラミングに対しての批判が中心だった。

我々は名人芸の並外れた誇示 [5大ソナタを一度に演奏すること] に断固として抗議する。——しかもどんなに抗議しても抗議しすぎることはないと感じる。それらは

¹⁵⁰ ビューローは、1886年以降、Op. 106 を後期5大ソナタの組み合わせではなく、Op. 120、Op. 129 と組み合わせ、ベートーヴェンチクルスの第4夜として演奏することもあった。

¹⁵¹ *Dwight's Journal of Music*, January 4, 1879, Vol. XXXIX, [Whole] No. 984, Author: [Anon.], p. 3.

¹⁵² *Musikalisches Centralblatt*, 4. März 1881, I. Jahrgang, Nr. 9, Author: E. Schelle, p. 93.

芸術にとってよいことではない。それらは芸術家にとって利点ではない。それらは聴衆にとってよいことではない。それらは作曲家にとって不当である。これらの理由から、我々はそれらに反対せざるを得ない。[……] 一つのコンサートには一つのソナタで十分である。¹⁵³

正直なところ、この音楽の英雄的功績をどれほど称賛せざるを得ないとしても、私は内部に基礎づけられた芸術的必然性をその中に認識することはできない。[……] ベートーヴェンは確かに、これらの五つのソナタにこのように互いに連結されるという規定を与えようとは思っていなかった。私は Op. 106 で既にかなり飽和状態となり、その後の Op. 110 からは演奏をただそれとして追うことしかできなかったということを躊躇いなく告白しておこう。[……]。¹⁵⁴

これらのビューローに対する批判は、言い換えれば Op. 106 に代表される後期作品がもつ難解なイメージや、それに伴う戸惑いや敬遠する姿勢とも受け取れる。実際、次のような批評も見られた。

もしもかなりの数の聴衆にとっては、多くの難解さが迫ってきて、作曲者によって作品の幾つかの個所に与えられた意味を、覆い隠すことがあったとしても、何頁にも亘って広がった崇高さの高みに、いつも立っているドウ・ビューロー氏の欠陥では全くないのである。¹⁵⁵

難解とされていた作品に果敢に挑戦し続けたビューローの存在は、賛否はあれど、当時の聴衆へ影響力を持ち続けたことが明らかである。

ビューローは、これまで採り上げてきたピアニストに比べ、その演奏回数や、驚くべきプログラミングなどから明らかなように、圧倒的な存在感を放っている。その彼が校訂した楽譜については次章で詳しく述べるが、Op. 106 の受容を大いに担うこととなったビューローとロンドン原版の結びつきを再確認することは、ロンドン原版の位置をより具体的

¹⁵³ *Dwight's Journal of Music* January 4, 1879, p. 4.

¹⁵⁴ *Musikalisches Centralblatt* 4. März 1881, p. 93.

¹⁵⁵ *Revue et gazette musicale de Paris*, 5 février 1860, 27e année, no 6, Author: Adolphe Botte, p. 44.

にする大きな手がかりとなりそうである。

ビューローの演奏記録で興味深いのは、第4楽章のみで演奏している演奏会が4回を数えることである¹⁵⁶。この背景には、ロンドン原版の1、2、3楽章と4楽章とが分離した形で出版されたことと関係があるように思える。沼口（2014）でもその可能性が指摘されているが、19世紀の演奏習慣にロンドン原版の形が色濃く反映されていたことが、ビューローのこの例からも推察される。ビューローのこうした演奏は、1872～1873年に行われており¹⁵⁷、ゴッダールドがウィーン原版の楽章順で演奏するようになったと見られる1860年代後半よりも後のことである。

2. 楽譜出版

本節ではOp. 106の楽譜の観点から、ロンドン原版が作品受容に及ぼした影響を見ていくが、具体的なエディションに焦点を当てる前に、19世紀の楽譜出版事情が、どのようなものであったのかについて見るところから始めたい。注目すべきは、以下の2点である。まず、そこに「原典主義」の意識がどの程度あったのか。そして、後で具体的に見る諸エディション（いわゆる「解釈版」などに分類される版）は、当時の楽譜出版の中で、どういった位置付けにあったのかという点である。これらを整理した上で、より具体的なエディションの内容へと話を進めていくこととする。

2.1. 19世紀における原典主義と楽譜

現代において、エディションの選択をする際、多くの場合「原典版」を採用することが基本となっている。では「原典」を最も重んじる「原典主義」は、いつから、いかにして始まったのだろうか。

2.1.1. 1850年頃まで

1850年頃までは、いま我々が一般的にイメージする「原典主義」は存在していなかったに等しい。しかし、作曲者が亡くなった後など、その作品を楽譜として遺そうとしたときに、原本に忠実であろうとする姿勢は、少しずつ広まっていたと捉えられよう。というのも、18世紀の後半までの音楽出版物は、主に新しい（又はほぼ新しい）作品に集中してい

¹⁵⁶ 演奏会記録についての記述は、*RIPM*、および Birkin 2011: Kenneth Birkin, *Hans von Bülow. A Life for Music*. Cambridge: Cambridge University Press.より調査、集計したものである。

¹⁵⁷ 巻末表「19世紀におけるOp. 106の演奏会記録」を参照されたい。

たのである。古い音楽の印刷は、全くなかったとまではいかないが、演奏レパートリーとして、十分に人気があるものに限られていた。例えば、ジョヴァンニ・ダ・パレストリーナ Giovanni da Palestrina (1525?~1594) の作品は 1689 年にローマで印刷され、チューダー王朝の宗教音楽は、1641 年にロンドンで出版されている。こうした過去の音楽への関心が、「原典主義」への最初の第一歩につながった。また、音楽史の初期の作家が歴史的音楽コレクションも編集したことは注目に値する。過去の音楽は、独自のテキストで正確に提示されるべきであるという認識があり、編集者は本物の読みを生成するためにオリジナルのソースを調査し始めたようだ。そのようなエディションの初期の例は、ボイスの大聖堂音楽 (1760-63) やアーノルドの同じ名前の出版物 (1790) である。正確な音楽テキストに対する関心は、お気に入りの作曲家の音楽作品全体をまとめたエディションを制作する取り組みにもつながった。以下に挙げるのは、全集版の構成に向けて、取り組まれた作曲家である。1787 年から 97 年、および 1845 年から 58 年にかけて行われたヘンデル、1798 年から 99 年、および 1798 年から 1806 年のモーツァルト、1802 年から 43 年のハイドン、1803 年から 19 年のムツィオ・クレメンティ Muzio Clementi (1752~1832)、1828 年から 45 年のベートーヴェン、1835 年のフランツ・シューベルト Franz Schubert (1797~1828) である。しかし、これらの取り組みは全て、完成には至らなかった。

いずれにせよ、この頃の楽譜には、特別な編集基準は存在していなかった。各編集者は、自身の判断のもと校訂していた。ソースの完全性は、編集者自身の、より高度な音楽知識によって置き換えることができると考えられ、維持されなかったのである。例えば、数字の付されたベースラインからふさわしいピアノの伴奏を作った箇所では、元のテキストや装飾をわざわざ載せるなど不要だと考える、といった具合である。また編集者たちは、単一の情報源のみを底本とする場合が多く、他に一致する情報源を探すといったことはめったになかった。さらに、初期の表記法の多くは、後世の学者によって初めて明らかにされた。つまり、この当時の楽譜編集は、数ある楽譜から情報を精査し、校訂をするという姿勢ではなかったことがわかる。先述した通り、1850 年頃までの楽譜の在り方は、今日の「原典主義」などとは直結しない。

しかし、だからと言って「原典主義」に通じる概念が全くなかったわけではないことはここでおさえておきたい。過去の音楽を記譜し遺そうとした 19 世紀以前にも少しずつ浸透し始め、その取り組みや基準は完全ではなかったものの、すでに存在していたのである。

2.1.2. 1850年から1950年

現在の「原典主義」に直結する考え方は、19世紀半ば頃に始まったと言えるだろう。なぜならこの時期になると、完全性が例外ではなく規則となった大規模な全集版の出版がされるようになり、現代にも通じる編集の基準が確立され始めたからである。この新しい局面は、単一の作曲家の全集版で最初に明らかになった。バッハ協会が発行した、1851年出版のバッハの全作品の校訂版である。これは、第二次世界大戦まで続いた全集版の活動の激動時代を開始した。これらの大多数は、ライプツィヒの Breitkopf & Härtel 社によって発行された。主な全集とその開始年は次の通りである。1851年のバッハ、1858年のヘンデル、1862年のジョヴァンニ・ダ・パレストリーナ Giovanni da Palestrina (1525?~1594)、1862年のベートーヴェン、1874年のメンデルスゾーン、1877年のモーツァルト、1878年のフレデリック・ショパン、1880年のシューマン、1884年のシューベルト、1907年のハイドン、1926年のブラームスなど。

これらの全集を見て明らかなのは、この時期の編集者たちが、自身の時代の観点からそれを塗り直すのではなく、作曲家の時代の観点から作曲家自身の意図を反映すべきであるという意識が高まっていることである。編集者は、リガトゥラや通奏低音に至るまで、元の表記法も示すことがますます重要であると感じていた。また演奏者側にも、プロの演奏家や真面目なアマチュアなどの間で、オリジナルの情報源を詳しく読んだ新しい“Urtext”版に依拠し始める者が出てきた。これこそまさに、現代における「原典主義」の始まりと言えよう。

2.1.3. ベートーヴェン作品の楽譜

ベートーヴェン作品の楽譜出版に限って見ると、1862年に出版が開始された全集版、いわゆる「旧全集」が楽譜校訂における一つの分岐点と捉えることが出来る。それ以前よりも、「原典」への意識が強く持たれたことは注目すべき点である。本論では、幅広い年代の楽譜を対象にしているが、この1862年というラインを意識し論じていく。

交響曲では、ごく最近まで「旧全集」を底本として楽譜校訂が行われていたほどに、出版から重要な位置に在り続けた。では、ピアノ・ソナタにおいてはどうかだろう。それは、交響曲の状況とは少し違った。「旧全集」が価値あるものとして存在していた一方で、少し時を経て登場する、いわゆる Henle 版が大きな存在感を誇り、絶対的な影響力を持った。Henle 版もまた「原典版」を謳うエディションなのだが、「旧全集」の“Urtext”とは異な

る。なぜならその内容は、「原典」の提供を目指していると同時に、著名な演奏指導者や音楽家と共同で楽譜制作を行うことにより、「演奏実践」への配慮も重要視されているからだ。こうした点で、資料学的に批判されることが多いのも事実であるが、現在に至るまで、世界的に非常に広く使用されている「原典版」のひとつである。

いずれにせよ、こうした“Urtext”版の登場は、その後のベートーヴェン作品の楽譜校訂において、大きな影響を与えた。

2.1.4. 解釈版

これまで見てきた「原典主義」や「原典版」の確立の一方で、他方、19世紀後半にかなりの影響力を持っていたのが「解釈版」の存在である。「解釈版」とは、作曲家による楽譜テキストに加えて、校訂者自身の美学的思考や、演奏実態の工夫などを書き入れた、演奏の手引きのような楽譜のことである。19世紀における「解釈版」でも、やはり個性的で直感的なアプローチをもとに校訂されていたが、それを作成していたのが、当時活躍していたピアニストとなれば、それが持つことになった影響力の大きさは相当なものであったことが明らかだろう。例えば、カール・ツェルニー、イグナーツ・モシェレス、フランツ・リストやハンス・フォン・ビューローに代表されるような著名なピアニストたちがそれを担当していた。「解釈版」が影響力を持った背景には、校訂者が著名なピアニストや作曲家であったこと以外にも理由があった。それは、「解釈版」の値段設定と、市民階級の音楽的教養に対する関心の高まりである。これまで見てきた「原典版」は、古典的教養財の伝達を担う学問的性格の強いエディションであり、当時「演奏」にはまだまだ遠い位置にあった。しかし一方の「解釈版」は、その対象を一般向けとし、安価な値段設定がされ、作品をいかに演奏すべきかのヒントを散りばめた、教育的な性格を持つエディションだった。つまり、より一般に広く出回ったのは「解釈版」の方であり、その作品像こそが多くの人に知れ渡ることになるのである。Op. 106の伝承・受容について考える本章では、「解釈版」を、当時の作品像の形成に直結した重要な存在と捉え、精査するに至った。

しかし現代の我々が「解釈版」を扱う際、少なからぬ配慮が必要であることは、一応記しておこう。というのも、「解釈版」の楽譜テキストには、作曲家自身による指示と校訂者によるものとの区別がされていないものがほとんどで、またその様々な指示も、校訂者の個人的な見解に過ぎないものも多く含んでいる可能性があるからである。こうした理由から、20世紀のハインリヒ・シェンカーHeinrich Schenker (1868~1935)をはじめとする

音楽家たちからは痛烈な批判を受けてきた。しかし、近年になりようやく、「解釈版」は、録音の残っていない時代の音楽理解を洞察する目的において、再評価されるようになってきた。加えて、先ほど（第2章 2.1.1）踏まえた通り、原典を大切に扱おうとする姿勢が、“Urtext”版の正式な登場よりも前から、すでに存在した点に鑑みても、本論でこれから扱う「解釈版」が「＝校訂者の恣意的な考え方」であるという短絡的な見方は正しくないだろう。個々の校訂姿勢などを慎重に見ていく必要はあるものの、当時の作品像を明らかにする上で重要な資料であることは言うまでもない。

19世紀の楽譜出版状況を踏まえた上で、ここからは様々な「解釈版」をもとに、Op. 106の「作品像」に迫っていくこととしよう。以下で採り上げるエディションは、ロンドン原版をもとにしていることが明らかなもの¹⁵⁸である。その数は決して多くはないが、19世紀から現代に至るまで、ロンドン原版を底本にする楽譜は確かに存在していたことが明らかになる。では、年代を追って見ていく。

2.2. イグナーツ・モシェレス版

モシェレス校訂による楽譜は、出版された年代、国などで様々な種類があるが、ここで述べるのは、クラマー社によって1841年までには出版されたと考えられているエディションである。この楽譜の底本には、ロンドン原版のプレートが用いられていることがわかっている¹⁵⁹。よってモシェレス版は、ロンドン原版系統の楽譜と言える。モシェレスは、ベートーヴェンと直接の接点を持った人物であり、さらに「[19]世紀半ばまで、ベートーヴェンの解釈や校訂に関する問題においては、絶対的な権威」¹⁶⁰であったために、彼の校訂楽譜が、当時及ぼした影響力はかなりのものだったと考えられる。つまりロンドン原版は、Op. 106の受容の初期に、こうした影響力を持つ人物と繋がり、普及し始めることになったわけである。この楽譜テキストの内容については、第3章で詳しく言及する。

2.3. フランツ・リスト版

リスト版は、1857年にヴォルフエンビュッテルのホレ Holle 社より出版された。リスト

¹⁵⁸ ここで採り上げた19世紀のものは、先行研究によりロンドン原版のプレートが用いられていることが明示されているもの、もしくはそれを引き継いでいることが明らかにされているものである。また、20世紀以降のものは、校訂報告などにより「ロンドン原版」を底本にしている、もしくは「ロンドン原版」を採り入れることを表明しているものである。

¹⁵⁹ Tyson 1962, p. 236.

¹⁶⁰ Oppermann 2001: Annette Oppermann, *Musikalische Klassiker-Ausgaben des 19. Jahrhunderts. Eine Studie zur deutschen Editions-geschichte am Beispiel von Bachs Wohltemperiertem Clavier und Beethovens Klaviersonaten*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, p. 133.

の公式の伝記作家であり批評家であったリナ・ラマン Lina Ramann (1833~1912) は、リストのベートーヴェン版について次のように語っている。

巨匠は、高潔な遺言執行人の謹厳さと几帳面さをもって各々の音符に相對していた。周期的な分節化、音型と経過旋律の分節化、数々の演奏指示は、偉大な、いや最も偉大なスタイルの限りなく純粋な古典主義が、ベートーヴェンの精神のロマン主義的主観性の深みによって根底から温め抜かれたものである。¹⁶¹

リストがベートーヴェンの作品に真摯に向き合い解釈していた様が見て取れる。

Axel Schröter は、リスト版について次のように語っている。「リスト版は、[……] 根底に横たわるベートーヴェン理解を再構成するには、極めて興味深い。[……] 彼のベートーヴェン版は、単にピアノ・ソナタの版にとどまらず、一般に如何なる恣意的な設定や、補足も認められない」¹⁶²。リストが、「オリジナル楽譜を入念かつ慎重に扱」っていた姿が垣間見られる。つまりリストのベートーヴェン版は、演奏構築を視野に入れた自身の解釈を盛り込むばかりでなく、オリジナルに実に忠実な姿勢を取った楽譜でもあった。

Schröter はリスト版の Op. 106 の底本について、これまでの研究者と同じように、ウィーン原版をもとに楽譜の校訂を行ったとする立場から、リスト版に見られるウィーン原版からの逸脱箇所、リスト独自の解釈が見られるとした。しかし Bartels (2002) はこれを否定し、リスト版の底本はロンドン原版を底本とするモシェレス版であり、間接的にロンドン原版が基礎となっていることを明らかにしている。さらに、リスト版にはウィーン原版の解釈も意図して反映させているであろう箇所が存在していることを明示することで、リストが二つの原版にあたり、それらを取捨選択することで楽譜を校訂したことを示唆する。

つまり、モシェレスから受け継がれたロンドン原版は、モシェレス同様に大きな影響力を持っていたリストの楽譜を通じて、Op. 106 の 19 世紀における作品像において、決定的な役割を果たしたと言っても過言ではない。次章では、エディション比較から明らかになった、より具体的な特徴について触れる。

¹⁶¹ Ramann 1894: Lina Ramann, *Franz Liszt, Als Künstler und Mensch*. Leipzig: Breitkopf & Härtel, p. 234.

¹⁶² Schröter 1999: Axel Schröter, “Der Name Beethoven ist heilig in der Kunst”. *Studien zu Liszts Beethoven-Rezeption*, Sinnzig: Studio, p. 292.

2.4. ハンス・フォン・ビューロー版

ビューロー版は、シュトゥットガルト音楽学校の教授であったジークムント・レーベルト Sigmund Lebert (1823~1884) とイマヌエル・ファイスト Immanuel Faisst (1823~1894) によって Op. 53 より前の作品まで校訂が済んでいたプロジェクトに、ビューローが協力する形で 1868 年より始動したものである。出版は、1871 年コッタ J. G. Cotta 社よりされた。楽譜テキストの下に詳細な脚注が付されているこの版は、彼のピアニストとしての美的考察に、より深く迫ることのできる版である。

ビューロー版は、師であるリストから特に評価された。リストは、ビューローに対して次のように述べている。「特にベートーヴェンへの理解において、長年に亘って研究を重ね、この点で彼に肩を並べるなど不可能に思われるほどにまで究明した」¹⁶³。リストは、そのビューローが校訂した楽譜を、レッスンの際に自身の校訂楽譜よりも好んで使用した¹⁶⁴ほど、気に入ったようだ。

ビューローが、ピアニストとして最前線で活躍していたことは、これまで述べてきた通りであるが、彼は同時に教育者としての強い自覚を持ち、ベートーヴェンのピアノ作品の伝達を始める。彼は自らの教育的野心の実現をめざし、テンポや、フレージングの徹底した修正のみならず、部分的に極めて自分勝手なプログラムデザインをも行った¹⁶⁵。

「自らの注釈によってベートーヴェンのソナタのテキストを演奏へ導こうとした」ビューローは、「根源的に実践的なものとして構想された版」を作った。ビューロー版は、ベートーヴェン作品の最も著名な解釈者であるという彼の権威に基づき「多くの使用者にとってとにかく演奏不可能な後期の諸作品の非常な難しさの中に何かしらの承認を得る」ものになっている¹⁶⁶。つまり、実際に演奏を成し遂げられるビューローの、教育的性格をもつ楽譜であり、演奏不可能とされた Op. 106 をはじめとする後期 5 大ソナタに関しては、特に影響力を持つことになった。後期 5 大ソナタに関する彼の解釈は、Op. 106 を公で初めて演奏し始めた 1860 年当時から賞賛されていた。

精神を高め、鍛え、熟考を重ねて、彼はベートーヴェンの後期の作品の全く独特の研究を成し遂げたように見える。彼はそれらの作品の秘密を認識しており、彼以前の多くの演奏家たちがそれを発見できなかった様々な美を彼は発見し、最後にそれらの

¹⁶³ Schröter 1999, p. 316.

¹⁶⁴ Oppermann 2001, p. 232.

¹⁶⁵ Oppermann 2001, p. 227.

¹⁶⁶ Oppermann 2001, p. 230.

美を愛し、確信に満ちた全ての解釈者がそうであるように、彼は、それらの美が自分に吹き込んだ感嘆の情を他にも分かち与えたいという欲求をもっている、と我々は感じるのである。¹⁶⁷

2.4.1. ビューローの校訂姿勢

先行研究において、ビューロー版には、師リストからの影響があった可能性が指摘されているが¹⁶⁸、実際そうした影響はどれほどあったのだろうか。また、ビューロー版は Op. 106 においてどのような校訂姿勢をとったエディションなのだろうか。以上の問いに関して、本節では Bartels の先行研究 (2002) をもとに考察する。

2.4.1.1. 第3楽章 5小節目 (譜例は1～8小節目)

Bartels は、リスト版の第3楽章 5小節目に関して、ある問題点を指摘している。



【リスト版】¹⁶⁹

それは、2番目の和音のアクセントについてである。彼は、「アクセント記号とデクレッシェンド記号をグラフィカルに区別するという面倒な問題」としてそのことに触れ、次のような解決を見出している。「ここでは間違いなく、デクレッシェンドマーク [……] を意味している。この孤立したコードをはっきりと、おそらくはさらに強く叩いて、その後に反響を与える。それにもかかわらず、リストはこの基本的に明らかな考えを拒否し、代わりに両手にアクセントマークを付けてスポットを明確にし続ける。」つまり、リストの両手に付されたアクセントを否定し、あくまでもベートーヴェンはここで、デクレッシェンドを意図していたと述べる。では、ビューロー版はどうなっているだろうか。

¹⁶⁷ *Revue et gazette musicale de Paris*, 5 février 1860, p. 44.

¹⁶⁸ 沼口 2014 p. 30.

¹⁶⁹ Bartels 2002: Ulrich Bartels, “Zwischen Ausgabe und Quelle. Zu den Beethoven-Editionen von Franz Liszt und Ignaz Moscheles mit textkritischen Überlegungen zur Hammerklaviersonate B-Dur op. 106”, *Musikalischen Quellen – Quellen zur Musikgeschichte. Festschrift für Martin Staehelin zum 65. Geburtstag*, Ed. by Ulrich Konrad, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, p. 382.



【ビューロー版】

ビューロー版には、リスト同様に両手にアクセントが付されるが、Bartels が指摘したデクレッシェンドも同時に付されている。

ここで、二つの原版にも着目しておきたい。ウィーン原版では、両手のアクセントはないが、デクレッシェンドに見える記号が右手と左手の間に付されている。ロンドン原版も、両手のアクセントはないが、デクレッシェンドともアクセントとも受け取れるような記号が右手と左手の間に付されている。つまり、師リストを受け継いだと考えられるビューロー版は、アクセントの表記は一致しているものの、そこにはデクレッシェンドの表記も追加されており、無批判にリストの版だけを踏襲せず、ウィーン原版（もしくはそれに由来する版）を参照し採り入れていることが明らかになる。

2.4.1.2. 第3楽章 65小節目（譜例は61～68小節目）

Bartels は、モシェレス版とリスト版の第3楽章 65小節目のフレージングに着目している。

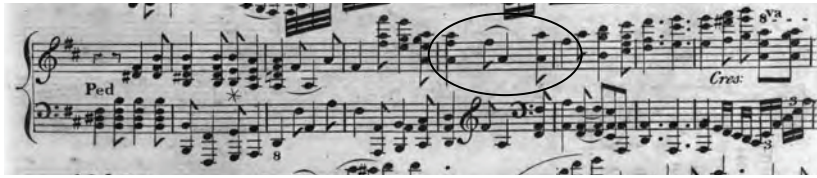
Notenbeispiel 4a und 4b: Satz 3, T. 61-68 nach Moscheles und Liszt



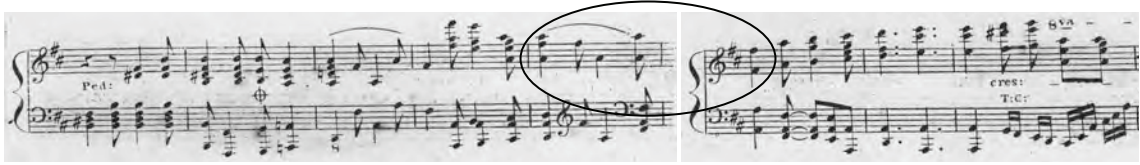
【上：モシェレス版 下：リスト版】¹⁷⁰

この二つの版は同じフレージングを示しており、これを「ベートーヴェンが意味したものに最も近い」として賛同している。では、二つの原版はどのような表記になっているだろうか。

¹⁷⁰ Bartels 2002, p. 384.



【ロンドン原版】



【ウィーン原版】

ロンドン原版は、モシェレス版、リスト版と同様に fis^2 音からフレージングが始まっており、フレーズの終わりは、 a^1 音までの短いスラーで結ばれている。一方ウィーン原版は、65 小節の 1 拍目から、1 小節間ひとつのフレージングで結ばれている。モシェレスとリストがこの二つの原版の解釈のどちらを採択しているかをはっきり答えることは難しいが、フレーズの始め方はロンドン原版と同じであることが明らかである。では次にビューロー版を比較する。



【ビューロー版】

ビューロー版は、明らかにロンドン原版と同じフレージングであり、また 65 から 66 小節目にかけてのフレージングはモシェレス版やリスト版と通じるものを感じさせる。つまり、ビューロー版はロンドン原版の形とモシェレス版、リスト版の形との折衷のような表記をしていることがわかる。ここでは、師リストの版のみならず、ロンドン原版を採用している（もしくはウィーン原版を採択していない）姿勢が見て取れる。

2.4.1.3. 第4楽章 184 小節目

Bartels は、二つの原版にある “non legato” に着目し、モシェレス版、リスト版がそれを受け継いでいることに言及する。一方で、旧全集には、その反対の意味を指す “ben legato” 表記がされている点に触れ、この表記がどこからくるものか不明であるとしている。ビューロー版も、“non legato” 表記をしているが、注目すべきはその箇所の注釈である。

新しいライブツィヒの版には“ben legato”がある。これに対して、最も古い版 (Wien-Artaria-1819)においては、“non legato” という指示が上声と下声とにおいて二度までも全く明確に読み取ることができる。この古い方の読みは、おそらく無条件に優先させてよいだろう。何故なら、このエピソードの挑戦的にエネルギッシュな性格は、「ノンレガート」の奏法による方が、遥かに迫力をもって耳を打つからである。¹⁷¹

ビューローの言う「新しいライブツィヒの版」とは、おそらく旧全集のことである。この注釈からは、彼が旧全集、そしてウィーン原版の二つの楽譜を参照していたことが明らかである。つまり、この箇所のみならず Op. 106 を校訂する際、ビューローは、ウィーン原版や旧全集を手許に置き、必要に応じてそれらの解釈を採択していたことも明らかになる。先述した箇所では、ウィーン原版ではなく、ロンドン原版を採用していたビューローであることから、様々な資料にあたりそれらを取捨選択することで、二つの原版の解釈を意図して採り入れていることがわかる。

2.4.2. 二つの論争に見るビューローの位置

Op. 106 には、長きに亘り議論され続けた二つの論争がある。いわゆる a-ais 問題とテンポ問題である。これらは一次資料である二つの原版に起因して起こり、近年出版された原典版の楽譜¹⁷²を見てもいまだに、はっきりとした答えは出ていない¹⁷³。本節では、これらの論争におけるビューローの位置を見ることで、Op. 106 の受容における彼の存在がどのようなものであったのかを探る。

2.4.2.1. A-Ais 問題¹⁷⁴

A-Ais 問題とは、Op. 106 の第1楽章の224-226小節においてベートーヴェンが A と Ais のどちらを意図したのかという問いである。

¹⁷¹ Ed. Bülow 1871, p. 65.

¹⁷² Wiener Urtext Edition 2018 や Bärenreiter 2019 を参照。

¹⁷³ 楽譜だけでなく、様々な年代の録音資料を比較しても、a-ais のどちらの解釈も同じくらい存在し、テンポの解釈も様々であることから、これらの論争にはっきりとした答えが見出せない現状が明らかである。

¹⁷⁴ ここでは、A も Ais も、複数の高さの音が議論の的になるため、凡例で示したような音名の呼び方ではなく、すべて共通して A と Ais と表記する。



【旧全集より引用】

この箇所は、再現部の直前の部分だが、調号が#5つである。したがって臨時記号のナチュラルが付されなければ当然Aisになるわけだ。二つの原版で確認すると、臨時記号などは見当たらない。つまり楽譜上にはAisが記されていることになる。しかし、そこがB-Durの再現部への移行部分であることを考えると、ドミナントの響きを作るaだと考えるほうが「より自然な響き」¹⁷⁵であり、よって結論を出すのが難しい問題となっている。ビューローは、自身の校訂楽譜の中で次のように述べている。

ベートーヴェンの訂正屋は、この巨匠の後期作品がほとんど非難されていた時、次に続く2小節間の“ais”を“a”に変えてしまった。したがって、異名同音による独創性を半音の平凡さに、おとしめた。“ais”は、冒頭テーマの再現の前の最後の小節までH-Durの導音として考えられるべきである。“f”は差し当り“eis”で考える。それゆえに冒頭テーマは、本来ならば観念上の調（譜面上とは異なる調）“Ais-Dur”で再現する。¹⁷⁶

Badura-Skodaは、「ハンス・フォン・ビューローが、難しいこの部分を指摘しなければ」この問題はここまで顧みられることはなかったと述べている¹⁷⁷。つまり、楽譜上にAisが付されていたにも拘らず、「より自然な響き」であるAと考えるのが一般的だった当時に、ビューローがAisであると主張したことが、論争の始まりだったと言えるだろう。実際には様々な見解を、時系列を追って整理すると以下のような図になる。【図2】

¹⁷⁵ Badura-Skoda 2012: Paul Badura-Skoda, “Should we play A \flat or A \sharp in Beethoven’s ‘Hammerklavier’ sonata, Opus 106?”, *Notes*, Vol. 68, No. 4 (June 2012), Music Library Association, p. 751.

¹⁷⁶ Ed. Bülow 1871, p. 30.

¹⁷⁷ Badura-Skoda 2012, p. 751.

【図2】A-Ais見解比較図¹⁷⁸

Ais派	Ais?	A派
リスト版(1857)	ウィーン原版(1819) ロンドン原版(1819) モシェレス版(1841以前/58)	
ビューロー版(1871)	旧全集(1862-65) ハスリンガー版(1865頃) ブライトコッフ版(1867)	ダム版(1878) ライネッケ版(1878) シェンカー版(1918-21) トーヴィ版(1931)
ダルベール版(1902-04) トーヴィ版(1931) シュナーベル版(1949)	ヘンレ版(1953/1980) フィッシャー版(1975/2005) アラウ版(1978)	スコダ(1980)
ローゼン(1997) 園田高弘版(2003)	ウィーン原典版(2001/2018)	ローゼン(1997) バドゥラ=スコダ(2012) ペーレンライター版(2019)

「Ais派」とは、調号の他に臨時記号をあえて付け足すなどしてはつきりとAisを主張するものであり、逆に「A派」は、ナチュラルを付けるなど、はつきりとAを主張するものである。「Ais?」は、ベートーヴェンの記譜通り調号のみでAisを示しており、実際AisもAも強く主張しているとは判断がつかないものをここに分類した。

この図から明らかなのは、ビューローがAisを主張した1871年以降、Aをわざわざ明記するものや、ビューローに同じくAisを主張するものが出てきたことである。ビューロー以前のリストも同じくAisを主張しているが、先に挙げたBadura-Skodaの指摘通り、ビューローが主張したのちに議論が活発化したことがわかる。つまりこれは、ビューローの声明の与えた影響力の大きさが窺える事柄であろう。

2.4.2.2. テンポ問題

Op. 106は、ベートーヴェンのピアノ作品の中で唯一メトロノーム記号が記されているが、このテンポ設定があまりにも速すぎるために疑問視されている。特に第1楽章のテンポ♩=138が問題になることが多い。ツェルニーは、Op. 106について「この作品で最も難しいのは、作曲家自身がつけた、異例に速い、燃えるようなテンポ指示 [……] を純粋に

¹⁷⁸ Tovey は、文献学的見地からAが正しいとしながら、「もしベートーヴェンがそのこと[Ais]は考えていなかったのだから、[……]彼はそれを喜んだのではないか、という理屈で、われわれはそれを弁護することができる！」と述べており、Ais派であることを示唆している(トーヴィ注釈版1931)。そのため、図中では矢印表記を行った。また同じ理由で、Rosenも同じ表記をしている。Rosenは、Toveyの意見に賛同し、Aが正しいとしながらも、「A#の方がその楽音の音によりよくフィット」する、「Beethovenの音楽的な潜在意識がその誤りを惹き起こしたのではないか」、「ペンがスリップしたということは、本能が働きそのように仕向けたということの最も説得力のある証明であろう」などとAに対して疑いの目を持っている(Rosen 1997)。

実践することである。」¹⁷⁹と述べており、19世紀においてもこのテンポ指示が「=速い」という感覚であったことが明らかである。

ツェルニーは、自身の校訂楽譜の中で、ベートーヴェンの指示した数値♩=138を守った。また、ツェルニー以降の楽譜校訂者も、ベートーヴェンの数値に従った。しかし、「この流れをとめたのはビューローだった」¹⁸⁰。ビューローは、♩=112を示している。筆者が確認できた楽譜の中で、ビューロー以前に「138」以外の数値を指定するものは一つも無かった。ビューローは、自身の校訂楽譜の中で次のように述べている。

ツェルニーの言う♩=138は、どのように考えても第1楽章のどっしりとした重厚なエネルギーの表出には速すぎる。多分これは当時のウィーン流行の、響きの欠如したピアノでは正当化されるものであっても、現代のモダンなコンサートピアノでは、ツェルニーの指示したテンポでは、混乱したぼんやりとした印象しか与えられない。¹⁸¹

つまりビューローは、ベートーヴェンによるテンポ表記を無視し、恣意的なテンポを指定したのではなく、新しい時代の楽器の特徴や、演奏環境の変化に鑑みた適切なテンポを提唱したのだろう。演奏不可能とも言われたOp. 106を、世界の様々な地域で数多く演奏してきたビューローのこうした声明は、当時大きな影響を持ったことは想像に難くない。このことは、テンポ表記の他の様々な見解を、時系列を追ってまとめた以下の図からも明らかである。【図3】

¹⁷⁹ Czerny 1839: Carl Czerny, *Die Kunst des Vortrags der altern und neuen Claviercompositionen. Oder: Die Fortschritte bis zur neuesten Zeit. Supplement (Oder 4ter Theil) zur grossen Pianoforte-Schule. In 4 Capiteln. Nebst einem Verzeichniss der besten Clavierwerke aller Tonsetzer seit Mozart bis auf die neueste Zeit, zur Erleichterung der Auswahl für Lehrer, Schuler, Künstler und Dilettanten. Op. 500*, Wien: A. Diabelli u. Comp, p. 65.

¹⁸⁰ 藤本一子 2002 「ベートーヴェンのピアノソナタにおけるメトロノーム表示」『国立音楽大学音楽研究所年報 15』p. 143.

¹⁸¹ Ed. Bülow 1871, p. 23.

【図3】テンポ表記比較図

<p style="text-align: center;">♩ = 138</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ロンドン原版(1819) ・ モンシェレス版(1841以前/58) <p style="text-align: center;">ビューロー版 (1871) ♩ = 112</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ダルベール版(1902-04) ※二分音符 = 112 ・ トーヴィ版(1931) ※二分音符 = 80-92 	<p>Allegroのみ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 旧全集(1862-65) ・ ハスリンガー版(1865頃) ・ プライトコップフ版(1867) ・ ライネッケ版(1878) 	<p style="text-align: center;">♩ = 138</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ウィーン原版(1819) ・ リスト版(1857) ・ ツェルニー版(1856-68) <ul style="list-style-type: none"> ・ ダム版(1878) ※二分音符 = 138 but = 100 ・ シェンカー版(1918-21) ・ シュナーベル版(1949) ・ ヘンレ版(1953/80) ・ J. フィッシャー版(1975) <ul style="list-style-type: none"> ・ アラウ版(1978) ※二分音符 = 138 but = 112 ・ 園田高弘版(2003) ・ J. フィッシャー版(2005) ※二分音符 = 138 (116) ・ ウィーン原典版(2001/2018) ・ ペーレンライター版(2019) ※二分音符 = 138 所によっては二分音符 = 120
---	--	---

ベートーヴェンが指示したテンポである♩ = 138、Allegro表記のみのもの、そして♩ = 138と3つに図式化している。ウィーン原版は♩ = 138である。対してロンドン原版は、♩ = 138と倍遅くなるテンポ表記をしている。この表記の変更は、第1章で

触れたように、ロンドンでの出版において、ベートーヴェンと出版社との仲介役としてベートーヴェンから絶大なる信頼を置かれていた弟子のリースが訂正を加えたことが関係していると考えられている。

ビューローが、♩ = 112を主張したのち、1902～1904年に出版されているダルベール版でも同じく♩ = 112が記されている。また、♩ = 138を明記する中にも、注などで♩ = 100、112、116、120などと説明するものが出てきたことがわかる。つまり、ビューローの声明以降、ベートーヴェンの速すぎるテンポ表記に縛られない表記が見られるようになる。

では♩ = 112というビューローの数値は一体どこに由来しているのだろうか。もしくは、ビューロー自身から生まれた独自のテンポなのだろうか。これを確かめるために、ビューロー以前のモンシェレス、リストに注目する。楽譜の中では、♩ = 138と指定するモンシェレスの言説が以下の通りである。

私はこのソナタの私の版の中で第一楽章のテンポをメルツェルのメトロノームに従って138と表記した。何故なら、ベートーヴェン自身がこの数を指定していたからである。彼自身、[……] 二分音符を指定し、私は四分音符を指定している。実際、私の意見によれば、両方の指定のどちらもその楽章の性格を正当に判断することはできない。二分音符だと、その楽章をベートーヴェンが意図し得ないような恐ろしい *prestissimo*へと速める。というのも彼がAllegroにもともと前置きしておいた修飾語のAssaiを消すように望んでいるからである。[しかし一方で] 四分音符は楽章をあま

りに遅くする。そして私は私の版の中でベートーヴェンの数を偉大な人間への畏敬の念をもって設定したが、実際私としては、両者の中間 $J=116$ を提案する。¹⁸²

モシェレスの楽譜のテンポ指示 $J=138$ は、「ロンドン初版の範例が彼に役立ったに違いない」¹⁸³。これは、モシェレスが、テンポ表記においてロンドン原版の系譜に位置することを意味する。また、楽譜の中では $J=138$ を指示する、ビューローの師リストには、次のような言説が残っている。「ソナタ作品 106 の 4 つの楽章はほとんど 1 時間持続する。」¹⁸⁴ $J=138$ より少し速いテンポで演奏すると約 48 分であることから、リストも楽譜には $J=138$ と表記しているが、ロンドン原版と同様の $J=138$ に近い演奏をしていたことが推測される。つまり、ビューローの「 $J=138$ は、速すぎるがゆえ $J=112$ を提案した」声明の背景に、ロンドン原版の流れを継ぐモシェレス、リストの影響が垣間見える。しかし、モシェレスの提案する「 $J=116$ 」はビューローの「 $J=112$ 」とは異なる数値ではあり、そのままビューローに受け継がれたとは言い難い。だが、両者がここまで近い数値であること、ビューローが「特にベートーヴェンへの理解において、長年に亘って研究を重ね」¹⁸⁵ た人物であることから、モシェレスの指摘を知らずに「 $J=112$ 」を提唱したのではないだろう。

Op. 106 の二つの論争におけるビューローの位置を整理すると、ビューローが提唱したことの影響力の大きさを見ることになった。それは、彼の存命中のみならず、後世においても大きなものとなったことが明らかである。さらにそこには、ロンドン原版の影響が垣間見られた。演奏不可能とも言われた Op. 106 の演奏を可能にした人物の裏に、ロンドン原版の存在があったことを踏まえると、やはりロンドン原版は、「演奏」に常に影響を与え続けた存在であることも明らかになる。

2.5. ヨハネス・フィッシャー版

Johannes Fischer は、1936 年にライプツィヒに生まれ、フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディにより設立された音楽大学（現ライプツィヒ音楽大学）にてピアノ、作曲合唱指揮を学び、ベルリン交響楽団や、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団との

¹⁸² Moscheles 1841: Ignaz Moscheles, *Life of Beethoven*, II. London: William Clowes and Sons, p. 252.

¹⁸³ Wiener Urtext Edition 2018, “Vorwort” p.VII.

¹⁸⁴ Wiener Urtext Edition 2018, “Vorwort” p.VII.

¹⁸⁵ Schröter 1999, p. 316.

共演、ピアノ・リサイタル、数多くのラジオ録音により、J. S. バッハ、W. A. モーツァルト、L. v. ベートーヴェンの作品の現代の演奏家として活躍した人物である。1975～1990年までは、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Peters 版の編集者を務め、Op. 106 の出版¹⁸⁶にも携わっている。その後、ベートーヴェンの写本やスケッチ、ソナタの初版を求め、世界中の図書館やコレクションを旅してまわり、その成果として 2005 年には新たに Op. 106 を出版している¹⁸⁷。

彼の Op. 106 のエディションで特筆すべきは、ロンドン原版を校訂の底本として扱っている点である。Peters から 1975 年に出版された楽譜は、20 世紀後半に入ってから出版されたものであるにも拘らず、ロンドン原版の楽章順を採用している。こうした例は、筆者が確認した中では唯一であった。2005 年に新たに出版されたエディションは、楽章順こそウィーン原版の形を採用するようになったものの、注目すべき次のような記述がある。このソナタは「一つの作品で二つのアイデンティティ」を持っており、最終的にそのどちらのアイデンティティを採用するのかについては「ピアニストの責任」である、というのだ¹⁸⁸。つまり、ロンドン原版を重要な位置に据え校訂するという、当時の Fischer の姿勢は何ら変わっていないのである。楽譜テキストの内容については、次章で述べる。

2.6. 現代の原典版

ウィーン原版を底本にする姿勢を採る楽譜が多いなか、近年になってロンドン原版を重要視した原典版が二つ出版された。

2.6.1. ウィーン原典版 (2018)

この楽譜の特徴は、「ウィーン原版が最重要」という従来の考え方にプラスして、「ロンドン原版も不可欠で信頼できる資料」という新たな校訂姿勢を採る点である。底本はウィーン原版とし、ロンドン原版も採り入れるべきと判断された箇所は、それが () 付きで楽譜内に表記されている。楽譜内には採用されない箇所でも、巻末註にロンドン原版の表記に関する説明が載せられている。

¹⁸⁶ Ed. Johannes Fischer 1975 (Peters).

¹⁸⁷ Ed. Johannes Fischer 2005.

¹⁸⁸ Fischer 2016, p. 33.

2.6.2. ベーレンライター版 (2019)

この楽譜もウィーン原典版 (2018) に同じく、ロンドン原版を重要視する原典版楽譜として売り出された。校訂報告を見ると、底本にしているのはあくまでもウィーン原版であることがわかる。しかし、ロンドン原版も「正規の出版譜」¹⁸⁹として扱っており、再評価する姿勢をとっていることは注目すべき点である。

これら二つの最新の原典版についても、具体的な楽譜テキスト内容については第3章で述べるが、原典版にすらロンドン原版の要素を積極的に採り入れる動きが出てきたことは、ここで押さえておくべきポイントである。

3. 章のまとめ

ここまで見てきたように、ロンドン原版と作品の受容は切っても切れない関係にあることが明らかになった。

まずそのきっかけとして、難曲である Op. 106 の演奏を可能にした人物たちがロンドン原版を手にしたことが大きかった。つまり、Op. 106 が演奏され始めた頃の作品像は、ウィーン原版よりもむしろロンドン原版の方だった可能性が高い。また、ベートーヴェンが提案したロンドン原版の作品像が、受容の面において功を奏したと言えるだろう。19世紀当時、演奏する側も、聴衆も、戸惑いを隠せなかったこの大曲が、もし複雑なフーガが組み込まれた、長大かつ難解な作品像 (ウィーン原版) しか存在していなかったら、受け入れられるまでもっと時間がかかったかもしれない。ロンドン原版の作品像があつてこそ、Op. 106 は少しずつ受け入れられるようになったと言っても過言ではないだろう。

その一方で、ロンドン原版をもとにした演奏習慣は、1860年代後半頃になると徐々にウィーン原版をもとにしたものへと移り変わっていった可能性も垣間見えた。その後の1872～3年にビューローが第4楽章のみを独立させた演奏 (ロンドン原版の作品像に同じ) をしていることから、この頃にもロンドン原版の存在は完全に消えていったというわけではなかったのだろうが、ウィーン原版の形の方が多数派になっていったと見られる。

しかし、楽章順に関してはウィーン原版を採用されることが通例となったあとも、ロンドン原版にある様々な要素は、脈々と受け継がれ続けたことが、ビューロー版を中心に、エディションを比較することで明らかになった。例えば、テンポ問題にはそのことが顕著に表れていた。当時のピアノ界を席卷していたビューローが、ロンドン原版にあった「四

¹⁸⁹ ベーレンライター校訂報告 p. 1。

分音符＝138」の系譜を受け継ぎ、数値こそ異なるが、ウィーン原版の「二分音符＝138」に縛られないテンポを提示したことで、その後の多くのエディションがロンドン原版の系譜の上に立ったと言っても過言ではない。こうした流れは、キンスキー＝ハルムの作品目録（1955）がロンドン原版を強く批判した後でもなお、途絶えることはなかった。それどころか、ロンドン原版の重要性を主張する論文（Tyson 1962）や、ロンドン原版を底本にした楽譜（J. フィッシャー校訂譜 1975）まで出てきたのである。さらに、ロンドン原版を重要視する考え方は、いまや現代の「原典版」にまで及ぶようになった。

次の章では、ここで採り上げなかったエディション（ロンドン原版を底本にしないと思われるもの）も含め、それらを比較検討することによって、より具体的な楽譜内容に焦点を当て、二つの原版がどのように扱われてきたかの変遷をたどる。

第3章 エディション比較

本章では、作品出版当時から現代に至るまでのエディションを対象に比較検討を行い、そこから明らかになる各エディションの校訂の特徴と系譜を整理する。これにより、Op. 106 の伝承・受容において、二つの原版がどのように扱われてきたのかの変遷をたどることを目的としている。いかに多くのエディションに、ロンドン原版が踏襲されているのかを見ることになるだろう。

1. 19世紀におけるエディションの概要

エディションを比較する上で、19世紀における Op. 106 の楽譜にはどのようなものがあつたのかを調査した。その調査方法は、バイエルン州立図書館、オーストリア国立図書館、大英図書館の各 OPAC と、ボンのベートーヴェンハウスの目録、国立音楽大学附属図書館所蔵ベートーヴェン初期印刷楽譜目録を使用し、Op. 106 の出版年 1819 年～1900 年のものに絞り、抽出するというものである。その結果は、巻末の表「19世紀の Op. 106 のエディション一覧」を参照されたい。

2. 各エディションの校訂の特徴

ここで採り上げるエディションは、以下の選定基準のいずれかに該当するものである。

1. 原版の後続版や訂正版といった、オリジナル版から直結した流れを組むものであること。2. 先行研究などで多く採り上げられ、重要な資料であることが広く知られている「解釈版」であること。3. 一般に「原典版」に分類されるエディションであること。

2.1. ウィーン原版の異刷り (Artaria: ウィーン) 1819 年以降出版¹⁹⁰

これは、本論の比較箇所ではウィーン原版との違いはなかった。つまり、ウィーン原版と同じ内容を持つものと言える。

¹⁹⁰ *Grande Sonate pour le Piano-forte*. Wien: Artaria und Comp. [not before 1819]. 国立音楽大学附属図書館所蔵 [S12-151]

2.2. ロンドン原版の訂正版 (Royal Harmonic Institution : ロンドン) 1820 年出版¹⁹¹

これは 1819 年の出版後すぐに修正が加えられ、おそらく翌年には出版されたものである。修正には、1819 年 9 月に出版されたウィーン原版が用いられ¹⁹²、おそらくリースによって行われたと考えられる。しかしそれらの修正は、必ずしもウィーン原版と一致するものばかりでなく、新たな「独断の補充」¹⁹³と捉えられるものが多数存在している。また、楽章順はロンドン原版同様に、第 1 → 第 3 → 第 2 楽章でひとつ、第 4 楽章は独立した形を維持しており、修正を加えられてもなお、ロンドン原版の要素を大いに引き継いだ楽譜である。

この訂正版は、ロンドン原版を見直す昨今の「原典版」において、ロンドン原版系統の楽譜として原版同様に重宝され、その内容は積極的に採用されている¹⁹⁴。ウィーン原版の第 2 版が作品出版から 40 年近くあとになって出版された資料であるのに対し、このロンドン原版の訂正版が、原版から 1 年も経たずして出版された楽譜であることも、その資料価値が認められる理由だろう。

では訂正内容を具体的に見ていこう。それらは大きく分けて、3 パターンに分けられる。1 パターン目は、L を訂正した結果、W と一致するもの。2 パターン目は、W と L の両方にある明らかな誤りを訂正したもの。3 パターン目は、先行研究で指摘されたように、「独断の補充」ととれるようなスラーの追加などである。それぞれの箇所を以下に挙げる。まず、1 パターン目の L の訂正の結果 W と一致する、第 1 楽章の第 240 小節目である。

【W】	【L】	【L 訂正版】
		

上の譜例を見て明らかなように、○で囲った g^2 音は、L では「b」が付されていない

¹⁹¹ *Grand Sonata, for the Piano Forte. (Part 1) Introduction & Fugue, For the Piano Forte. (Part 2)* London: The Regent's Harmonic Institution. [1820].

¹⁹² Tyson 1962: Alan Tyson, "The Hammerklavier Sonata and its English Editions", In: *The Musical Times* 103, p. 236.

¹⁹³ Gertsch 2001: Norbert Gertsch, "Ludwig van Beethovens 'Hammerklavier'-Sonate Op. 106. Bemerkungen zur Datierung und Bewertung der Quellen". In: *Bonner Beethoven Studien*, Bd. 2. Bonn: Beethoven-Haus. Gertsch 2001, p. 87.

¹⁹⁴ 巻末エディション比較表を参照されたい。

が、訂正版では「b」が付され、Wと一致している。つまり、Lの訂正を行った結果、Wと一致しているのだ。ここで注意したいのは、L訂正版が、Wの表記を積極的に採り入れているわけではない点である。Wと一致するのはあくまでも、Lにあった明らかなミスを訂正した結果にすぎず、Wの要素を混ぜ込んでいる楽譜というわけではない、ということである。

次の譜例は2パターン目の、WとLにあった明らかな誤りを訂正した箇所、第2楽章の第140小節目である。

下段はこれまでト音譜表であったが、WとLで抜けていた「へ音記号」が、L訂正版では追加されていることがわかる。この訂正は、今回比較検討した、後の全ての楽譜に反映されていた。

次の譜例は3パターン目の、「独断の補充」とみなされるようなスラーの追加箇所、第3楽章の第63小節目である。

下段のスラーの有無に注目したい。WとLには無かったスラーが、L訂正版には追加されている。このスラーは、それ以前の資料には見られず、L訂正版によるものと考えられる¹⁹⁵。しかしこれは、その後の多くのエディションで引き継がれていた¹⁹⁶。さらに特筆すべきは、このスラーがWの第2版（1856年出版）にも見られる点である。つまりこの加筆は、単なる「独断」によるものとは言い切れない、意味ある加筆であると言えるだろう。

L訂正版は、その出版時期、そしてその意味ある訂正・加筆の内容から、現代に至るまで重要な位置を占める楽譜であることが明らかとなった。

¹⁹⁵ Wiener Urtext Edition 2018, p. 62.

¹⁹⁶ 巻末のエディション比較表を参照されたい。

2.3. イグナーツ・モシェレス版 (Cramer, Beale&Co : ロンドン) 1841 年以前出版¹⁹⁷

前の章でも少し触れたが、モシェレス版は、様々な出版社から複数出版されていることがわかっており、またそれぞれの出版時期も幅広い。このモシェレス版は、1841 年までには出版されていたと考えられるものである。後で、別のモシェレス版にも触れるため、このモシェレス版は (Cramer) として表記する。

モシェレス版 (Cramer) には、ロンドン原版のプレートが用いられていることが明らかになっている¹⁹⁸。つまり、このエディションはロンドン原版の系譜に属しているというわけだ。このことは、エディション比較の結果からも一目瞭然である。まず第一に、楽譜の体裁がロンドン原版と全く同じであった。よって自明のことだが、楽章構成や二つに分割した作品像もロンドン原版と同じだ。また、付録のエディション比較表を見ると明らかだが、全楽章において、ほとんどの箇所では L (=ロンドン原版) と一致している。特徴的な箇所をいくつか見てみよう。第 1 楽章の冒頭、テンポ表記は以下のようにになっている。

【W】 【L】 【モシェレス版】



ウィーン原版は、2 分音符=138 なのに対し、ロンドン原版とモシェレス版は、4 分音符=138 と示している。

次に第 3 楽章の冒頭 (第 1 小節～第 2 小節目) を見てみよう。

【W】 【L】 【モシェレス版】



W は、第 1 小節目の右手が下段に書かれ、スラーは付されていないが、一方の L とモシェレス版では右手が上段に書かれ、スラーが両段に付される。第 2 小節目にもスラーが付さ

¹⁹⁷ *Grand Sonata. For the Pianoforte. Op. 106.* Ed. by Ignaz Moscheles. London: Cramer, Beale & Co, [1858, etc].© British Library Board (Music Collection h. 395.)




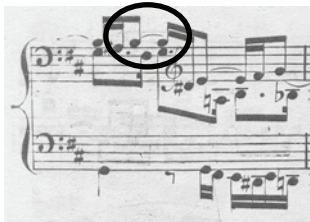
¹⁹⁸ Tyson 1962, p. 236.

れ、また「Ped.」と「*」も付されており、モシェレス版が L に共通しているのは明らかである。これらのことから、モシェレス版がロンドン原版系統に属する楽譜であることがわかる。

その中で、W に一致する箇所も存在した。これには大きく分けて2つのパターンがあった。1 パターン目は、このモシェレス版が、先ほどの L 訂正版のプレートを底本にした楽譜である¹⁹⁹ゆえのものである。つまり、L 訂正版で既に修正を加えた結果 W と一致していた箇所の踏襲である。例えば、第3楽章の第83小節目を見てみよう。

【W】	【L】	【L 訂正版】	【モシェレス版】
			

1 拍目の a 音は、ベートーヴェンによる訂正リストによって8分音符であることが明らかとなっている箇所だが、L では4分音符になっていた。しかし、L 訂正版ではそれが訂正され W と同じく8分音符になっている。これをモシェレス版がそのまま引き継いだ結果、W と一致したというものである。第4楽章の第199小節目も見てみよう。

【W】	【L】
	
【L 訂正版】	【モシェレス版】
	

1 拍目から2拍目にかけての h 音のタイの有無を見てもらいたい。W にはタイがあるが、L には無い。この小節に関しても、先ほどの例と同じく、ベートーヴェンによる訂正リストによって、タイが必要なことが明らかとなっている箇所であり、つまり L が間違っている箇所だ。L 訂正版では、それを訂正しタイが追加され、これをモシェレス版が引き継いだ結果、W と一致するというわけである。

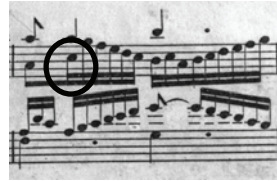
¹⁹⁹ Tyson 1962, p. 236.

2パターン目は、L訂正版には見られなかったWの表記をモシェレス版で新たに採用しているというものである。例えば、第3楽章の第138小節目を見てみよう。

【W】



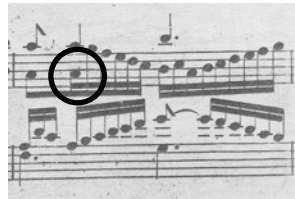
【L】



【L訂正版】



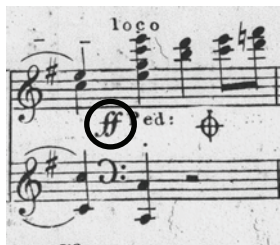
【モシェレス版】



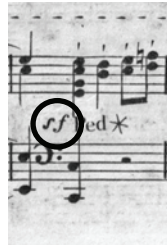
○で囲った音が、ais¹音であるWに対し、LとL訂正版ではcis²音を示している。しかしモシェレス版は、上の譜例を見て明らかなようにWに同じくais¹音を示している。つまりモシェレス版は、L訂正版には見られない新たな修正が加えられ、その結果としてWと一致する箇所が存在することがわかる。しかし、こうした修正がWを参照することによって実現したのかは明らかでない。この箇所は類似箇所が存在し、そことの統一から、修正することも可能だからである。さらに、こうした訂正が、モシェレスによるものかもここで断定することはできない。というのも、L訂正版とモシェレス版との間にも訂正が加えられていることが明らかとなっており²⁰⁰、そこでの修正を踏襲している可能性も考えられるからである。

また興味深い例として、以下を挙げておこう。モシェレス版の修正箇所には、今まで見てきた、Lを修正した結果Wと一致する箇所ばかりでなく、Lの要素をより強めているかのような加筆も存在する。例えば、第1楽章の第91小節目である。

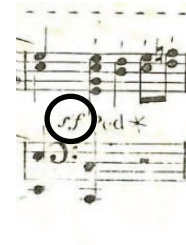
【W】



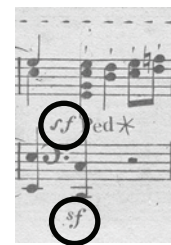
【L】



【L訂正版】



【モシェレス版】



この小節は、Wでは「ff」が付され、Lでは「sf」が付されているという違いがあるが、注目すべきはモシェレス版の下段の下に追加された「sf」である。これは、Lにあった「sf」

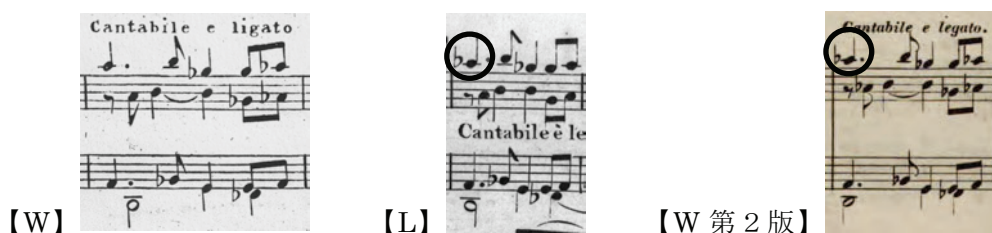
²⁰⁰ Tyson 1962, p. 236 タイソンはここで楽譜テキストの詳細については述べていない。

表記を改めて左手に追加することで、Lの要素を補強するような意味合いと捉えられよう。加えて、その字体がLにもともとあった「sf」とは異なっていることも興味深い。明らかな加筆箇所であることが改めて明らかになる。

本論では、これらの修正がどの段階で、誰によってなされたものかを明らかにすることは、資料不足から断念せざるを得ないが、モシェレス版がLを底本としており、ロンドン原版系統に位置する楽譜であること、そしてL訂正版には無かった新たな修正・加筆も見られるエディションであることが明らかになった。

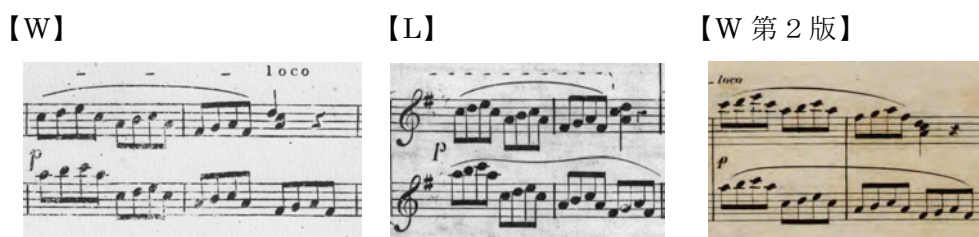
2.4. ウィーン原版の第2版 (Artaria: ウィーン) 1856年出版²⁰¹

概要については先ほど少し触れた通りであるが、このWの第2版は、原版出版から37年経って出版されたものである。原版同様アルタリア社から出版されたが、どのような変更があったのか具体的に見ていこう。まずは、ウィーン原版にあった明らかな誤りの訂正箇所、第1楽章第239小節目である。



上段1拍目の音に注目したい。Wでは、a²音に「b」は付されていなかったが、LとWの第2版では「b」が付される。これは、ベートーヴェンの訂正リストにある指示であり、Wが誤っていることが明らかな箇所である。これをWの第2版では修正しており、結果Lと一致した。

別の例も見てみたい。先ほどL訂正版の項で出てきた例のように、明らかにWの間違いとは言い難い箇所に加筆した例が多く見られる。例えば、第1楽章の第49小節～50小節目もそれに該当するだろう。



²⁰¹ *Große Sonate für das Hammer-Klavier op. 106. Zweite Original Ausgabe.* Wien: Artaria und Comp. 1856. © Bayerische Staats Bibliothek (BSB-ID 1887000)

下段のスラーに注目したい。W では無かったスラーが W 第 2 版では追加され、L と一致している。しかしこれが、L によるものとは言い切れない。このモチーフは曲中に何度も現れ、上段ではスラーが付される箇所が多いため、上段との統一の意味で付されたとも考えられるからである。つまり、W 第 2 版に見られる L との一致がイコール L 系統の要素を積極的に採用した結果とは断言できないのである。その修正・加筆は、L の訂正版がそうであったように、もとにしている原版の要素を底本に、そこに必要な修正・加筆を加えただけで、あくまでも W 系統の楽譜であることがわかる。

W 第 2 版のもう一つの大きな特徴として、その後のエディションに与えた影響力の大きさをあげることができよう。W の第 2 版には、二つの原版には見られない、独自と思われる記譜がいくつも存在した。例えば、第 1 楽章の第 26 小節目である。

【W】 【L】 【W 第 2 版】

○で囲った音を見てみると、W と L では a¹ 音を示しているのに対し、W 第 2 版では b¹ 音を示している。これは、その後ほとんどの楽譜に受け継がれ、1975 年／2005 年の Fischer 版や 2018 年のウィーン原典版で訂正されるまで、ずっと b¹ 音が主流になっていた。もう一つ、類似の例を見てみよう。W 第 2 版の第 3 楽章の第 76 小節目には、明らかにベートーヴェンの意図に沿わない独自の表記がある。

【W】 【L】

W も L も、○で囲った音は as²-f² 音だが、W 第 2 版の表記は以下の通りである。

【W 第 2 版】

W 第 2 版は、驚くべきことにへ音記号が付され as-f 音へと変更されており、さらにはの

ちの多くのエディションに受け継がれていた。この例は明らかな間違いであり²⁰²、現代の我々が、それをひとつの重要な解釈として受け取るべき内容ではないものの、W 第2版でおそらく初めて示されたこの表記が、その後のエディションに引き継がれたという事実は注目すべきポイントである。つまり、W 第2版は、それだけ多くのエディションに影響を与えた可能性が明らかになった。

2.5. フランツ・リスト版 (Holle : ヴォルフエンビュッテル) 1857 年出版²⁰³

リスト版は、先行研究によって「間接的にロンドン原版を底本」にしていることが明らかとなっている²⁰⁴。この「間接的」というのは、リスト版が、L を底本とするモシェレス版を底本にした楽譜であることからそう言われる。リストが底本にしたモシェレス版は、Holle 社のモシェレス版である。本調査では Holle 社のモシェレス版は参照できていないが、Cramer 社のモシェレス版とリスト版を比較することからも、リスト版がロンドン原版系統にある楽譜であることを裏付けることは出来た。リスト版は、多くの箇所でもシェレス版 (Cramer) と一致し、結果的に L と一致しているのである。特徴的な箇所を見よう。まず、第1楽章の第173~175小節目である。

W には sf の表記が見られないが、L には 5 つの sf 表記が見られる。モシェレス版 (Cramer) とリスト版は以下の通りである。

【モシェレス版 (Cramer)】

【リスト版】

²⁰² ベートーヴェンによる訂正リストを見ると、これはベートーヴェンによって意図されていないことが明らかである。

²⁰³ *Sonaten für das Pianoforte solo. Erste vollständige Gesamtausgabe. Unter Revision von Franz Liszt.* Wolfenbüttel: L. Holle. not before 1857. © Bayerische Staatsbibliothek (BSB-ID 12567726)

²⁰⁴ Bartels 2002: Ulrich Bartels, “Zwischen Ausgabe und Quelle. Zu den Beethoven-Editionen von Franz Liszt und Ignaz Moscheles mit textkritischen Überlegungen zur Hammerklaviersonate B-Dur op. 106”, *Musikalischen Quellen – Quellen zur Musikgeschichte. Festschrift für Martin Staehelin zum 65. Geburtstag.* Ed. by Ulrich Konrad. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, p. 378.

リスト版は、モシェレス版に同じく L の表記 sf を引き継いでいることが明らかである。
 ではもう一箇所見てみよう。次の譜例は第 4 楽章の第 173～174 小節目である。

【W】		【L】	
【モシェレス版 (Cramer)】		【リスト版】	

第 174 小節目の下段 ais 音の 2 分音符に向けた、クレッシェンド・デクレッシェンドマークの有無に注目したい。W にはそのような表記は無いが、L、モシェレス版、リスト版にはそれがある。

これらを踏まえると、リスト版がモシェレス版を底本としたことによってロンドン原版を間接的に底本にしていることがわかる。

しかし、同時に注目すべきは、ロンドン原版のみを底本にしたモシェレス版 (Cramer) よりも、リスト版には多くの箇所 W と一致している箇所が存在することである。まず、リスト版が採用している楽章順を見ると、それはロンドン原版のものではなく、ウィーン原版のものとなっている。また細かく楽譜テキストを見てみても、そのことは明らかだ。例えば、第 1 楽章のテンポ表記も W と一致している。

【W】		【L】		【リスト版】	
-----	--	-----	--	--------	--

第 4 楽章の第 117～118 小節目にも、リスト版と W との一致が見られる。

【W】	【L】	【リスト版】

L にあった上段の「tr.～」が、リスト版には W と同じく存在しない。

これらのことから、リスト版にはロンドン原版系統の楽譜のみが底本になっているわけではなく、同時にウィーン原版系統の楽譜の要素も採択しているエディションとなっていることがわかる。リストが W の要素を何から得たのかは明らかでないが、直接 W を見た可能性もあろう。

リスト版は、ロンドン原版系統の楽譜を底本にしたことで、L の要素を多く含んだ楽譜となった一方で、W の要素も採り入れた楽譜であることも明らかになった。現代の多くのエディションの中に見られる、二つの原版の要素の混在は、このあたりの楽譜から見られるようになったと言えるだろう。

2.6. モシェレス版 (Hallberger : シュトゥットガルト) 1858 年出版²⁰⁵

このモシェレス版は Cramer 社のそれと区別するため、(Hallberger) と呼ぶ。モシェレス版 (Hallberger) は、Cramer 社のモシェレス版とは異なり、W の要素が多く組み込まれたエディションであることがわかった。楽章順は、W と同じであり、さらに当時は L を示していた多くの箇所でも W の表記への変更が見られた。例えば、第 1 楽章の第 147 小節目である。

【W】 【L】 【モシェレス (Cramer)】 【モシェレス (Hallberger)】

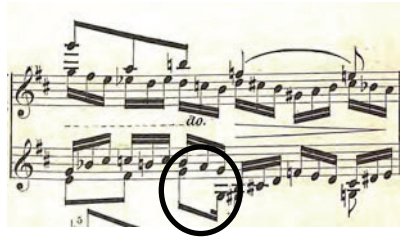


○で囲った音符の種類に注目したい。モシェレス版 (Cramer) は、L と同じく 8 分音符になっているのに対し、モシェレス版 (Hallberger) は、W と同じ 4 分音符になっているのがわかる。もうひとつ例を見てみよう。第 3 楽章の第 56 小節目である。

【W】 【L】 【モシェレス (Cramer)】



²⁰⁵ *Sämtliche Sonaten für Pianoforte. [Title].* Ed. by J. Moscheles. Stuttgart: Eduard Hallberger. [1858]. 国立音楽大学附属図書館所蔵 [S11-458]



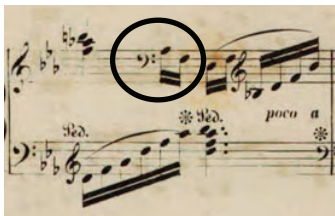
【モシェレス (Hallberger)】

○で囲った二つの音符は、W では 8 分音符と 16 分音符となっているが、L ではどちらも 16 分音符である。モシェレス版 (Cramer) では L と同じ表記をしていたが、(Hallberger) では W の表記へと変更されている。

つまり、(Hallberger) では、W の要素を新たに多く採り入れていることがわかる。

(Hallberger)には、先ほどの W 第 2 版に見られた多くの独自の表記も踏襲されていた。

第 3 楽章の第 76 小節である。



【W 第 2 版】



【モシェレス (Hallberger)】

これは、モシェレスが W 第 2 版を直接受け継いだ結果なのだろうか。もしそうであるなら、(Hallberger) は、W 系統の楽譜に位置すると考えるべきなのだろうか。これらの答えは簡単に出るものではないが、エディションの比較をする中でひとつ気になる点があった。それは、モシェレス版 (Cramer) とモシェレス版 (Hallberger) との違いを、単純にモシェレスの考えの変化と捉えてよいのかという点である。というのも、Op. 106 の二つの原版による差異は、大きなものから細かなものまで多岐にわたるため、モシェレス版がもとにしたプレートが W と L のどちらの系統だったかということが原因で起こってしまった、意図しない変化もあったように感じるからである。例えば第 2 楽章の第 61 小節目のペダルを取るマークの有無についてである。

【W】

【L】

【モシェレス版 (Cramer)】

【モシェレス版 (Hallberger)】



モシェレス (Cramer) では L と同じく「*」マークを付していたにも拘らず、(Hallberger) では W に同じく無くなっている。しかし、ここは他の多くのエディションで L、もしくは L に似た表記をする箇所であり、またそこでペダルを取ることなく踏み続けることは、響

きの面からも考えにくい。よって、これはモシェレスの考えの変化というよりかは、底本にした楽譜が L だった (Cramer) と、おそらく W 系統の楽譜を底本にした (Hallberger) との間に起きた変化である可能性が見て取れる。こうした立場に立つと、(Hallberger) に見られる「W と一致する箇所増加」の裏に、どこまでモシェレスの考えの変化を表しているのかは、その箇所ごとに慎重に受け取るべきであろう。

ここまでは、(Hallberger) の多くの箇所に、W の要素が入り込んでいた側面に注目してきたが、その一方で、変わらず L を採用する箇所も多く存在している。つまりこのエディションは、リスト版に見られた二つの原版的混在が、より複雑に入り組んだような楽譜であると言えるだろう。このことは、もう少し大きな視点で見ると、L を底本としていた校訂者 (モシェレス・リスト) たちの楽譜にも、どこまで意図的かは明らかでないものの、W の要素が強く反映されるようになってきたことがわかる。つまり、現代まで続いている W を最重要視する考え方は、この頃から既に始まっていたとも捉えられよう。

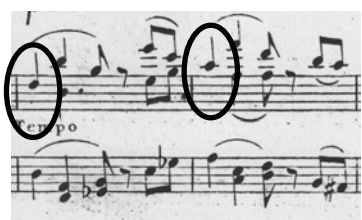
2.7. 旧全集 (Breitkopf und Härtel: ライプツィヒ) 1862-1865 年出版²⁰⁶

旧全集は、前章で述べたが 1862~65 年に「原典主義」の考え方のもと出版された、ベートーヴェン作品において初めての「原典版」である。この「原典版」が Op. 106 の底本として採用したのは、ウィーン原版であろう。このことは、おそらく作曲家自身が出版のギリギリまで目を通すことのできた可能性を踏まえると当たり前の姿勢であり、エディション比較の結果からも明らかである。ほとんどの箇所で W と一致し、ごく少数の L と一致する箇所は、ミスや不可欠なスラーなどを補ったことによる一致だった。つまり、旧全集には、リスト版やモシェレス版 (Hallberger) に見られた二つの原版的混在は無いと言って良いだろう。

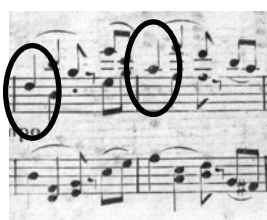
しかし旧全集の中には、注目すべきこととして、次のような箇所が存在した。両原版的にはない修正や独自の表記があったのである。例えば、第 1 楽章の第 299、300 小節目を見てみよう。

²⁰⁶ Ludwig van Beethovens Werke, Serie 16, Nr. 152 (pp. 55-96) Leipzig: Breitkopf und Härtel. 1862-65.

【W】



【L】



【旧全集】



○で囲った音は、WとLでは上声部のみの表記だが、旧全集では下の声部の4分音符を示す、棒が足されているのがわかる。エディション比較表を見ると明らかだが、この表記はのちの多くのエディションで採用されている。

また第3楽章の第104小節目にも、同じく二つの原版には見られない表記がある。

【W】



【L】



【旧全集】



二つの原版の○で囲った箇所は、Eis音の音から「8va」が付されている。ここは、多くのエディションでオクターヴ下の音を重ねて示すものが通例となっている。旧全集も同じくそのように示すが、注目すべきはその開始音である。()付きではあるものの Cis₁音が付されていることがわかる。この表記は、今回のエディション比較において、旧全集以前には見られず、また一方でその後の多くのエディションに引き継がれていた。

この2例は、二つの原版には見られない表記であり、重要な解釈として受け取るべき内容ではないと考えられるが、おそらく旧全集の独自のものだった表記が、その後のエディションに引き継がれたという事実は注目すべきポイントである。つまり、旧全集がのちのエディションへ影響を与えていることが明らかである。また、本論で後から触れることになる多くのエディションの中には、旧全集を底本にしていることが明らかなものも多数存在しており、「初の原典版」である旧全集の存在は、作品の伝承・受容においてとても大きいものであったことが窺える。

2.8. ハスリンガー版 (C. Haslinger : ウィーン) 1865 年頃出版²⁰⁷

トビアス・ハスリンガー社は、ベートーヴェン存命中から、彼の全集楽譜の出版を試みた出版社のひとつだった。ハスリンガー版は、「オリジナル版を尊重し、オリジナル版を基にまずは版の整備という方向から出版し」たものであり、また「ベートーヴェンの弟子でもあったカール・ツェルニーという演奏家を、一貫した校訂者とし、音楽表現上の表示を意図的に加え」られたエディションである²⁰⁸。しかし、Op. 106 に関しては、著作権の問題から初期のハスリンガー版には Op. 106 の掲載がない²⁰⁹。本論で確認することができたハスリンガー版は、経営者トビアス・ハスリンガー Tobias Haslinger (1787~1842) のなきあと、その息子があとを継ぎ名前を変えたカール・ハスリンガー社が出版した全集²¹⁰である。したがって、このエディションの Op. 106 に関して、カール・ツェルニーが校訂しているかどうかは定かでないと言えるだろう。

エディション比較から明らかになった特徴は、以下の通りである。このハスリンガー版は、旧全集と同じ表記をする箇所が多い。例えば、旧全集の項で挙げた、「独自の表記」の箇所は、ハスリンガー版でも同じ表記をしていた。

第1楽章の第299、300小節目



【旧全集】

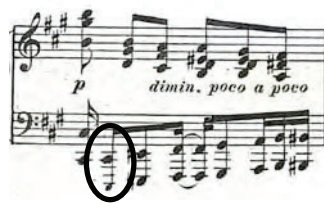


【ハスリンガー版】

第3楽章の第104小節目



【旧全集】



【ハスリンガー版】

²⁰⁷ *Clavier-Sonaten zu 2 Händen. Neue wohlfeile Original-Ausgabe.* Wien: C. Haslinger. [ca. 1865]. 国立音楽大学附属図書館所蔵 [S11-460]

²⁰⁸ 藤本一子 2001 「ハスリンガーによるベートーヴェン・ピアノソナタ全集の意義について」『国立音楽大学音楽研究所年報 14』 p. 103.

²⁰⁹ 藤本 2001 p. 106.

²¹⁰ これは、トビアス・ハスリンガーの全集の第2版である (国立音楽大学附属図書館所蔵 ベートーヴェン初期印刷楽譜目録 <http://www.ri.kunitachi.ac.jp/lvb/cat/1295.html> : 2021年8月29日確認)。

つまり、旧全集と同じく基本的には W を底本としている楽譜になっていると言えよう。しかし、旧全集で W を示す箇所、L と一致する箇所が複数存在した。例えば、第 2 楽章の第 1 小節目である。

【W】	【L】	【旧全集】	【ハスリンガー版】
			

譜例を見て明らかのように、ハスリンガー版には L と同様に、W や旧全集には無い「p」の表記がある。もうひとつ見てみよう。第 1 楽章の第 96 小節目である。

【W】	【L】	【旧全集】	【ハスリンガー版】
			

強弱記号に注目したい。W と旧全集では「sf」を示す一方で、L とハスリンガー版は「fp」を示している。

これらの例を見ると、旧全集と同じ表記をすることが多かったハスリンガー版の中にも、旧全集とは異なり、L と一致する要素があることがわかる。おそらく、L の要素を何かから得ることができたと考えられる。いずれにせよ、ハスリンガー版にも、ロンドン原版の要素が入り込んでいることが明らかである。

2.9. ハンス・フォン・ビューロー版 (J. G. Cotta : シュトゥットガルト) 1875 年出版²¹¹

ビューロー版の概要は、第 2 章で述べた通りであり、ロンドン原版の影響が見られるエディションであることは既に言及したが、ここではビューロー版のより詳細な特徴を見ていく。

²¹¹ *Sonate für das Pianoforte.* (pp. 23-74) Ed. by Hans von Bülow. Abdruck New York: Edward Schubert & Co. 1891. (Stuttgart: J. G. Cotta. n. d. ca. 1875. Plate 35.)

ビューローによる脚注を読み、まず明らかな点は、複数のエディションを参照して自身の楽譜を校訂していることだ。注釈内でビューローが名前を出しているものは以下の通りである。“ältesten Ausgabe”、“Artariasche Ausgabe”、“erste Ausgabe”、“neue Leipziger Ausgabe”、“neue Härtel Ausgabe”であった。“Artariasche Ausgabe”と“ältesten Ausgabe”は、ウィーン原版のことを指していることが明らかであり²¹²、“neue Leipziger Ausgabe”と“neue Härtel Ausgabe”は、1862～65年に出版された『旧全集』を指すものと考えられる。しかし“erste Ausgabe”は、具体的に何を指すものなのかが不明である。ウィーン原版の“ältesten Ausgabe”や“Artariasche Ausgabe”と呼び方を区別していることから、ロンドン原版であるとも推察できるが、特に区別しているのではなく、ウィーン原版を指すものかもしれない。いずれにせよ、ビューローは複数の楽譜にあたり自身のエディションを完成させたことがわかる。

ビューローは、第2章で見たように、二つの原版の要素を取捨選択し、エディションを作っている。ウィーン原版に関しては、注に名前やその内容の言及が見られるため、確認することが可能だったと考えられる。つまり、ビューロー版にあるWの表記は、直接Wから採用されたと考えるのが普通であろう。しかし、先ほどのハスリンガー版と同じように、旧全集独自と思われる表記が、ビューロー版の中にも見られた。

第1楽章の第299、300小節目



【旧全集】



【ビューロー版】

第3楽章の第104小節目



【旧全集】

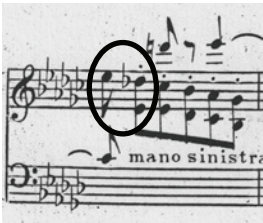

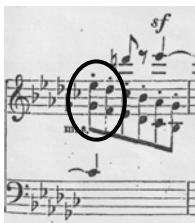



【ビューロー版】

つまり、旧全集の内容は、ビューロー版の中に大いに反映されていると考えられる。よって、ビューロー版がWと一致する箇所も、Wから直接採用したものもちろんあろうが、旧全集を引き継いだことによるものもあるだろう。

²¹² ältesten Ausgabe は Wien-Artaria-1819 であるとの記述がある (Ed. Bülow p. 65 a)。

では一方のロンドン原版の要素は、どのように知り得たのだろうか。ロンドン原版に関しては、注などに具体的な言及はなく、ビューローがロンドン原版の現物を見るのが可能であったかは明らかでない。もし、ロンドン原版を見ていなかったとするならば、考えられるものとしては、やはりロンドン原版系統にある師リストの楽譜から引き継いだ可能性だろう。ビューローの楽譜に、師リストからの影響が及んでいることは、先行研究でも推察されていた²¹³が、その影響は今回のエディション比較から、はっきりと明らかになった。ビューローがLを採用している箇所は、リスト版でも同じくLを採用していることが多かったのだ。更に、おそらくリスト版にしか見られない記譜法がビューロー版に存在することを確認できた。前章でも触れたが、「A-Ais 問題」においてもリスト版とビューロー版が初めて「Ais」を示している点で共通している。他の箇所も見てみよう。次の譜例は、第4楽章の第97小節目である。

【W】	【L】	【リスト版】	【ビューロー版】
			

二つの原版では、○で囲った箇所は es^2 音、 es^1-des^2 音の8分音符だが、リスト版とビューロー版は、①1番目の8分音符には ges^1 音が足され、②2番目の8分音符は下の音が f^1 音へと変更されている。ビューロー版が大いに採り入れていた旧全集にも、②の変更は見られるものの、①の表記は見られない。ここにリスト版とビューロー版の繋がりを見て取れる。他にもこういった箇所は存在する。例えば、同じく第4楽章の第344小節目を見てみよう。

【W】	【L】	【リスト版】	【ビューロー版】
			

スラーの有無に注目したい。Wには見ての通り、どこにも付されていないが、Lには右手

²¹³ 沼口隆 2014 「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106『ハンマークラヴィーア』の2つの初版とイギリス初版の意義」『国立音楽大学研究紀要第48集』p. 30。

の2拍分だけにスラーが見られる。リスト版とビューロー版はLの要素を補うかのように1拍ずつ3拍全てに、しかも両手どちらにもスラーが追加されている。こうした表記はリスト版とビューロー版以前には見られなかった。

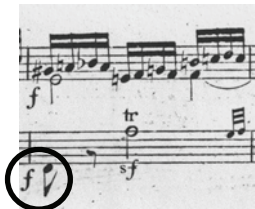




第3楽章の第84小節目にも類似の例がある。

【W】	【L】	【リスト版】	【ビューロー版】
			

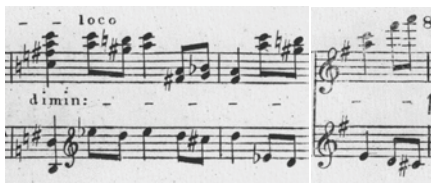
WとLは、右手にも左手にも、1拍目からミに「#」が付されるが、リスト版とビューロー版は↑の箇所ですら「#」が付される。旧全集にも、その他の版にもそのような表記は見られない。

これらを踏まえると、ビューロー版の注の中にリスト版の名は登場しないものの、彼が参照した楽譜の中に、確かにリスト版があったと見て良いだろう。

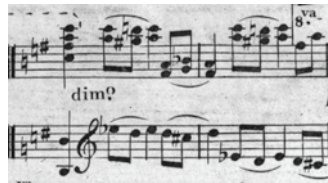
上の特徴に加えて、例外的ではあるが、リスト版や旧全集がLと異なる表記をしているにも拘らず、ビューロー版にLの表記が見られる箇所も存在した。以下の通りである。まず、第4楽章の第35小節目である。

【W】	【L】	【リスト版】	
			
	【旧全集】		【ビューロー版】

左手の1拍目の強弱記号に注目したい。旧全集ではWの「f」を採用し、リスト版に至っては何も付記がないが、ビューロー版はLの「sf」を採用している。もう一箇所見てみよう。次の譜例は、第1楽章の第45小節～46小節目である。



【W】



【L】



【リスト版】



【旧全集】



【ビューロー版】

ここでは、スラーの有無に着目したい。リスト版と旧全集は W と同じくスラーを示していないにも拘らず、ビューロー版は L と同じくスラーが付されている。

つまり、ビューローがリスト版以外の資料から、L の要素を知り得た可能性が浮かび上がってくるわけだ。

以上のことをまとめると、ビューロー版は、純粋に二つの原版のどちらかだけを底本にして作成された楽譜ではないことが窺える。注釈の中に名前が出た、ウィーン原版、旧全集、またそこに名前はないものの、師リストの楽譜や、ロンドン原版系統の楽譜をも参照することで、二つの原版の要素を取捨選択し校訂する姿勢が見て取れるだろう。

ここで少し話が変わるが、ビューロー版の後世における評価について少し述べておきたい。前章でも少し触れたが、ビューロー版をはじめとするいわゆる「解釈版」は、原典主義の立場においては「真正性」が低いものとして、強く批判、排除されてしまった時期があった。ビューロー版は、その影響力も相まってか、「解釈版」の中でも特に批判的の的にされることの多いエディションだったと言えるだろう²¹⁴。そんなビューロー版だけに、今回のエディション比較をもとにおさえておきたい重要なポイントがある。それは、ビューロー版には、ほとんどの箇所二つの原版のどちらかの表記を見ることができるという点である。これは一見、当たり前のことのように聞こえるが、言い換えれば、ベートーヴェンの一次資料を大切に扱い、そこに解釈的な加筆はあっても、恣意的な大きい修正が加えら

²¹⁴ シェンカーが彼のエディションを批判したことはよく知られている。

れていないということである。もちろん恣意的なものが全く含まれないとは言えないが、ビューロー版は、あくまでもベートーヴェン音楽の紐解きの手本としての加筆、修正がなされたに過ぎないのである。こうした彼の校訂姿勢からは、ビューロー版をはじめとする「解釈版」が、長年批判されてきた所以である、校訂者自身の恣意的な内容ばかりを載せたものという側面とは異なり、その楽譜の持つ正当性が、改めて見て取れる。

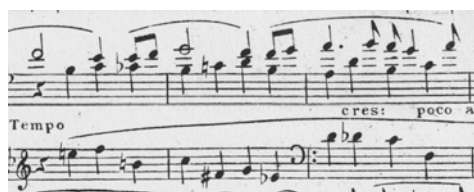
2.10. ダム版 (Steingraber : ライプツィヒ) 1878 年出版²¹⁵

ダム版は「1878 年という早い時期の刊行にもかかわらず、今日の批判校訂版楽譜に近い、多くのソースを比較校合するという学問的な校訂作業を行って編集された、当時としてはきわめて水準の高い楽譜」²¹⁶として知られる。これは、楽譜の脚注を見れば一目瞭然である。そこには、参照された多くの楽譜名と、詳細な考察が載せられている。名前の挙げたエディション名を下に記す。“Cramer & Co.” (おそらく第 3 章 2.3. のモシェレス版)、“London 1820” (おそらく第 3 章 2.2. L 訂正版)、“Dunst Frankfurt 1820”、“Artaria’s Originaldruck” (ウィーン原版)、“Czerny”、“Moscheles” (モシェレス版の何を指すかは不明)、“Bülow” (第 3 章 2.9. ビューロー版)、“Londoner Originaldruck” (ロンドン原版)、“Köhler” である。ここで注目すべきは、二つの原版が考慮されている事実と、加えてロンドン原版をウィーン原版同様に“Originaldruck”とする点である。これまでの大多数のエディションは、ウィーン原版かロンドン原版かのどちらかを底本とし、そこに混在はあっても、あくまでも底本はひとつであった一方で、「多くのソースを比較校合する」という極めて高水準にあったダム版が、二つの原版をまさしく「原版」として認め、どちらも重要視している点は、特筆すべき点である。では、実際の楽譜内容を詳しく見ていこう。

まず、楽章順については、W と同じである。この点では、他の多くのエディションのように、W 系統であると言えよう。しかし、このエディションは多くの箇所 L を採用している。その数や内容から、底本は L なのではないかと思われるほどである。特徴的な第 1 楽章の冒頭を見てみよう。以下の譜例は、第 1 楽章の第 9～11 小節目である。

²¹⁵ *Sonaten. (Damm.) 5. Band.* (pp. 358-387) Leipzig: Steingraber Verlag. [1878?]. 国立音楽大学附属図書館所蔵 [S11-462]

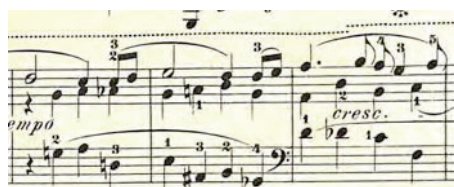
²¹⁶ 渡辺 2001 p. 390。



【W】



【L】



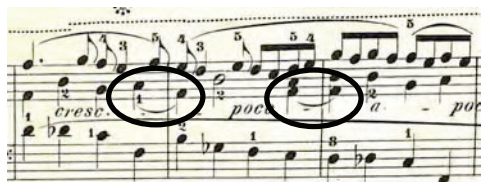
【ダム版】

下段のスラーに注目したい。Wでは、スラーが途切れることなく続いているが、Lとダム版では、9～10小節目でひとつのスラー、11小節目から新たなスラーがかかっている。続けて第1楽章の第11～13小節目を見てみよう。

【W】



【L】



【ダム版】

○で囲った、スラーやタイの有無に注目したい。Wに無いこれらのスラー、タイは、Lとダム版にはある。

また、巻末のエディション比較表を見ると明らかだが、ダム版にはLとの一致箇所が明らかに多い。しかも、第1楽章の冒頭は、他の多くのエディションでWを採用しているにも拘らずである。

【本論巻末内エディション比較表 第1楽章冒頭部分の一部抜粋】

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版 (L)	ウィーン原版 (W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリンガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)
			テンポ表記	4分音符=138	2分音符=138	なし	なし	2分音符=112	W (2分音符=100)
0				f	ff	W	W	W	W
1				sf	ff	なし	W	1拍目アクセント/強弱記号はなし	1拍目sf
9-15	下段		スラー	T. 9からT. 10とT. 11からT. 15の2つのスラー	T. 9からT. 15まで1つのスラー	W	W	W(T. 16の2拍目まで)	L
10-11	上段		スラー	T. 10の2拍目裏のみ	T. 10の2拍目裏からT. 11の最後まで	W	W	W	L
11-12	上段/下声部		a ⁺ -f ⁺ 音のスラー	あり	なし	W	W	W	L
12-13	上段/下声部		f ⁺ -f ⁺ 音のタイ	あり	なし	W	W	W	L
15	上段/上声部		スラー	as ⁺ -a ⁺ 音	g ⁺ -as ⁺ -a ⁺ 音	Wタイで結ばれた1つ前のg音から	Wタイで結ばれた1つ前のg音から	Wタイで結ばれた1つ前のg音から	L
19, 20			ベダルとるマーク	T. 20の1拍目	T. 19とT. 20の間	L	T. 19の最後	T. 19の最後	L
22-24	上段		記譜法	オクターヴ記号で	locoで	W	W	W	L
24			cresc. の位置	1拍目裏	2拍目	W	W	W	L
26	下段	2	和音の最高音	a ⁺ 音	a ⁺ 音	b ⁺ 音	b ⁺ 音	b ⁺ 音	b ⁺ 音
32			p	1拍目裏	2拍目	W	W	W	L
38			フェルマータ	1つめの8分休符	4分休符と8分休符	W	L	W	L
39			p	1拍目裏	1拍目	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	L
45-46	上段		スラー	あり	なし	W	W	L	L
45-48	下段		スラー	あり	なし	L(W(T. 47,48のみスラーあり))	L(W(T. 47,48のみスラーあり))	L	L
49-50	下段		スラー	あり	なし	L	L	(L)開始がT. 48の2拍目裏-	L

つまりダム版は、二つの原版を重要視した楽譜ではあるが、同時期の他のエディションに比べ、Lの要素を大いに取り込んでいる楽譜であると言える。またその結果起こる二つの原版の混在も、リスト版やモシエレス版 (Hallberger) で起こったものとは性格が異なると言って良いだろう。というのも、多くのエディションを校合した結果起きた混在だからである。加えて重要な点は、ダム版では表記の出典を、できる限り示していることにある。よって、様々な箇所に見られる、二つの原版の要素は、意味ある採択の結果である可能性が非常に高い。

以上を踏まえた上で、ダム版で抑えておくべきポイントをまとめる。ダム版は、1878年という比較的早い段階で、多くの楽譜を校合し完成した高水準のエディションであり、Op. 106においては「二つの原版がある」という立場に意識的に立った上で、それぞれを選び取っていたという注目すべき校訂姿勢が明らかになった。言い換えれば、ロンドン原版の要素を「正しい」ものとして意識的に反映させている楽譜が19世紀に存在したという事実も明らかになったわけである。

2.1 1. ライネッケ版 (Breitkopf&Härtel: ライプツィヒ) 1878年出版²¹⁷

このエディションの校訂者カール・ライネッケ Carl Reinecke (1824~1910) は、著名な音楽理論家として広く名を知られていた父のもとで音楽的素養を身につけ、作曲家、ピアニスト、また指揮者、教育者として活躍した人物である。ライプツィヒ音楽院では、作

²¹⁷ *Sonaten für Pianoforte. Zum Gebrauch beim Conservatorium der Musik in Leipzig genau bezeichnet und herausgegeben von Carl Reinecke. Zwei Bände. Band II.* (pp. 120-149) Leipzig: Breitkopf & Härtel. [not before 1891]. 国立音楽大学附属図書館蔵 [S11-461]

曲とピアノの教授として 40 年以上もの間、教鞭を執り続けた。これにより、彼が当時のドイツの音楽界に与えた影響はかなりのものとなったようである。バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、カール・マリア・フォン・ウェーバー Carl Maria von Weber (1786~1826) から同時代の作曲家に至る多くのピアノ作品の楽譜校訂をしたことでも知られる。これらが教材として、当時のドイツで模範的な位置を占めていたのだろう。ベートーヴェンのピアノ・ソナタに関して言えば、その解釈と演奏法をテーマにした著作もある²¹⁸。

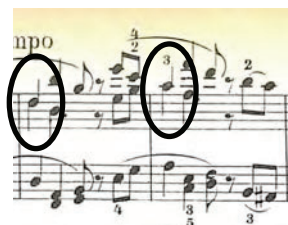
では Op. 106 のライネッケ版について、テキストの詳細を見ていこう。

ライネッケ版は、前に述べたハスリンガー版と同じように、旧全集と同じ表記をすることが多い。例えば、旧全集の項で挙げた「独自の表記」は、ライネッケ版にも見られた。

第 1 楽章の第 299、300 小節目



【旧全集】



【ライネッケ版】

第 3 楽章の第 104 小節目



【旧全集】



【ライネッケ版】

さらに、旧全集由来であると考えられる誤りの表記²¹⁹、第 4 楽章の第 184 小節目の “ben legato” の指示も、ライネッケ版に同じく見られた。



【旧全集】



【ライネッケ版】

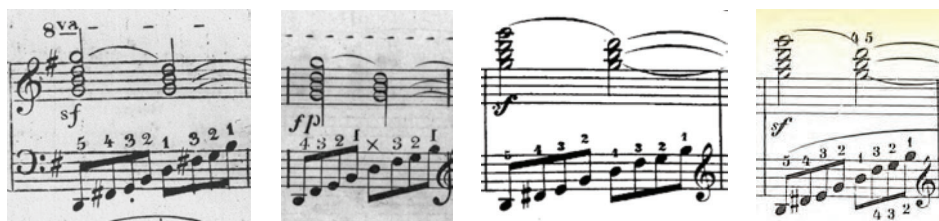
つまりライネッケ版は、旧全集から影響を受けたエディションであることが推察され、旧

²¹⁸ Reinecke 1897: Carl Reinecke, *Die Beethoven'schen Clavier-Sonaten*. Leipzig: Verlag von Gebrüder Reinecke.

²¹⁹ 本論第 2 章 2.4.1.でも触れた通り、この小節は二つの原版ともに “non legato” の指示がある。しかし旧全集には、なぜかその反対の意味である “ben legato” と指示があり、それ以前の楽譜にはそのような指示は見られない。

全集に同じく W を底本とした楽譜であると言うことができよう。加えて、二つの原版の系譜を確認しやすい箇所²²⁰である第 1 楽章の第 96 小節目の 1 拍目の強弱記号を見ても、ライネッケ版はやはり W と一致している。

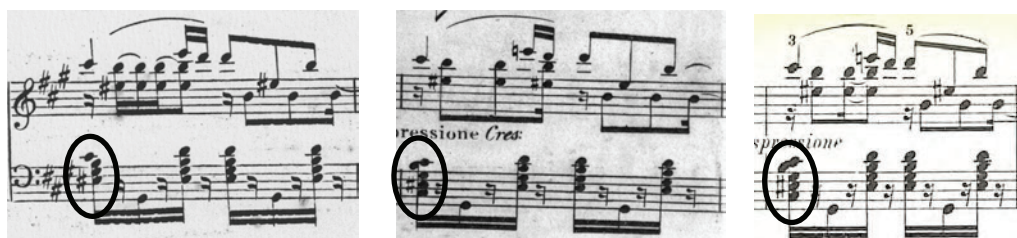
【W】 【L】 【旧全集】 【ライネッケ版】



以上の点を踏まえると、ライネッケ版に見られる多くの W との一致は、実際に W から直接採用している可能性もちろんあろうが、旧全集を底本にしたことにより結果として W の要素を引き継いだ可能性も大いにあり得ると言えるだろう。ちなみに、ライネッケ版が採用している楽章順も、やはり W と一致している。

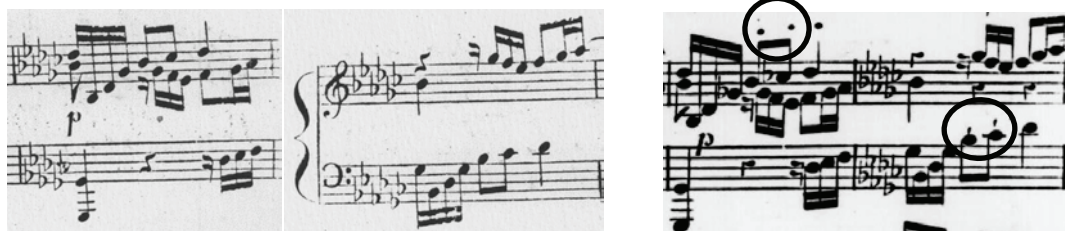
これまで見てきたように、多くの箇所でも W と一致するライネッケ版であるが、L の要素が踏襲される箇所も存在する。例えば、第 3 楽章の第 29 小節目を見てみよう。左手の音に注目したい。

【W】 【L】 【ライネッケ版】



W は、左手の和音の最低音が eis 音であるのに対し、L とライネッケ版では cis 音になっている。もう一つ同じような例を見てみよう。第 4 楽章の第 85、86 小節目である。

【W】 【L】



²²⁰ Tyson 1962, p. 237.



【ライネッケ版】

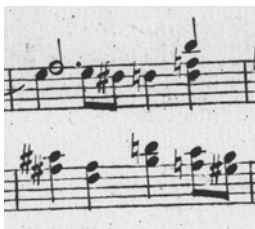
○で囲ったスタッカートに注目したい。Wには無いスタッカートが、Lとライネッケ版にはある。この二つの例はどちらも、旧全集ではWと一致している箇所である。つまり、この箇所ではL、もしくはそれに由来する何かから踏襲している可能性が見てとれるわけである。また、ライネッケ版がLと一致する表記をする箇所には以下の譜例のように、()付きでそれを示すものもあった。

第1楽章の第73小節目

【W】

【L】

【ライネッケ版】



第3楽章の第42小節目

【W】

【L】

【ライネッケ版】



ライネッケ版には二つの原版由来ではない表記にも () 付きで表記する箇所も存在したため、Lの要素を () 付きで表記したとは一概に言えないが、Wを () 表記する箇所は見られなかった。つまり、Wではない表記をした際に () を付けて表記したのであることは推測できる。言い換えれば、ライネッケ版がWを底本としたエディションであることが改めて明らかになる。それと同時に、Lと一致する表記が、() が付いた状態のこともあれば、何も付記がないままに示されていたことから、Lの表記も一部混在したエディションであることがわかる。

2.1 2. ダルベール版 (C. Fischer, Inc. : ニューヨーク) 1902-04 年出版²²¹

オイゲン・ダルベール Eugen d' Albert (1864~1932) は、幼少期に父親からピアノの手ほどきを受け、その後はしばらく独学で勉強を続け、後年にはリストに弟子入りし活躍したピアニスト、作曲家である。ヴィルトゥオーゾとしてその名を知られており、ベートーヴェン、リスト、ブラームスの演奏では第一人者と謳われた人物でもある。ビューローに師事した説もあり、その系譜はリストやビューローから継いでいる。では、具体的にエディション比較から明らかになるダルベール版の具体的な特徴を見ていこう。

ダルベール版の特徴的な点として、やはり師であるリストやビューローのエディションとの一致の多さを挙げることができよう。第2章2.4.2.の二つの論争の項でも触れたが、ダルベール版は第1楽章の A-Ais 問題の箇所、リスト版やビューロー版に同じく Ais を示しており、また、第1楽章の問題視されるテンポ指示に関しても、ビューロー版のそれと全く同じ「二分音符=112」を示している。もう少し具体的なテキスト内容も例に挙げて見てみよう。

第4楽章の第344小節目

【W】



【L】



【リスト版】



【ビューロー版】



【ダルベール版】



Wには全く無く、Lには一部あったスラーをリストが補ったと見られるこの箇所は、ビューロー版にも同じスラーが見られたことを、ビューロー版の項で確認したが、ダルベール

²²¹ *Sonatas for Piano volume 2B (Sonatas 26-32)* (pp. 64-113) Critically rev. ed. with explanatory annotations and fingering by Eugen d' Albert. New York; Carl Fischer, Inc. 1981.

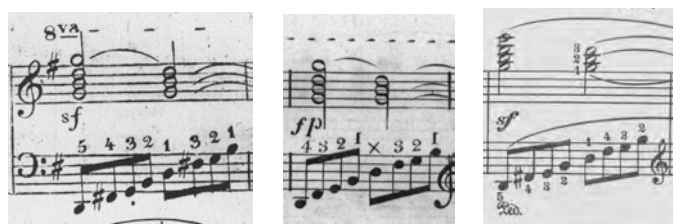
版にも同じくスラーが確認できる。さらに注目したいのは、ビューロー版で追加されている両段の拍頭のアクセントも、ダルベール版に見られる点である。

つまり、ダルベール版は、リスト版やビューロー版の内容を受け継いだエディションであると言えるだろう。リスト版やビューロー版は、これまで見てきた通り L の要素を大いに引き継ぐエディションであることは述べてきたが、ダルベール版もその系譜に位置することは重要なポイントである。

しかし、全ての面でリスト版やビューロー版と一致するわけでは勿論なく、二つの原版の系譜を確認しやすい箇所²²²である第1楽章の第96小節目の1拍目の強弱記号は、ダルベール版は W と同じ「sf」となっていたり、リストからビューローへは確実に受け継がれていた独自の表記も、ダルベール版には見られなかったりという箇所も存在する。

第1楽章 第96小節目

【W】 【L】 【ダルベール版】



第3楽章 第84小節目

【W】 【L】 【リスト版】 【ビューロー版】



【ダルベール版】



つまり、ダルベール版は、リスト版やビューロー版の系譜には位置しながらも、その他の

²²² Tyson 1962, p. 237.

エディションも参照し選び取ることで校訂され、結果としてリスト版やビューロー版とは異なった形で二つの原版が混在した楽譜であると言えるだろう。ダルベール版には、脚注が付される箇所も存在するが、底本にした楽譜が何であるかや、何の楽譜を参照し校訂しているかなどが明記されていないため、二つの原版を直接参照しているか定かではないが、本論でこれまで見てきたように、ダルベール版が出版された 1902～1904 年以前の多くのエディションで、すでに二つの原版の混在が見られることから、それらを引き継ぐ、もしくは底本にした結果、ダルベール版にも二つの原版の混在が起こることはむしろ自然とさえ言え、それまでの Op. 106 の受容のあり方の流れを汲んだエディションであると言えるだろう。こうした二つの原版の混在は、同じ箇所と同時に二つの原版の要素を採用しているかに見える場合もあった。

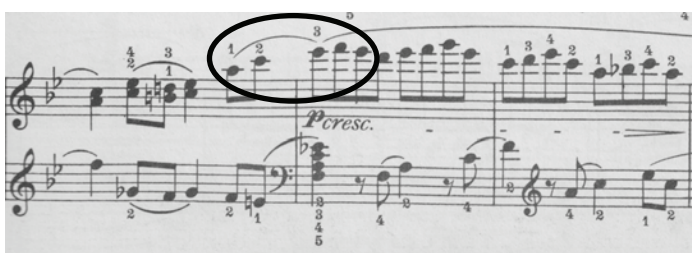
第 1 楽章 第 278～280 小節目 スラーの開始

【W】

【L】



【ダルベール版】



第 4 楽章 第 175～176 小節目 スラー

【W】

【L】

【ダルベール版】

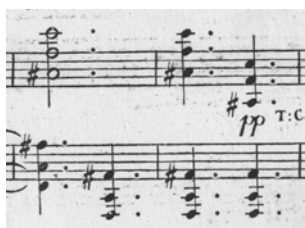


2.1 3. シェンカー版 (Universal Edition : ウィーン) 1918-21 年出版²²³

シェンカーは、オーストリアの音楽学者で、シェンカー理論の創始者である。ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全集を校訂したことで知られるが、中でも後期ピアノ・ソナタについては詳細な研究が残っている。しかし、後期ソナタである Op. 106 の研究は公にならなかった。というのも、彼の校訂や研究の姿勢は、いわゆる「解釈版」楽譜を排除し、作曲家自身の自筆稿やスケッチなどの一次資料をもとに行うというものだった。Op. 106 は、一次資料がかなり限られた作品であることは本論でもこれまで触れてきたことであるが、それゆえにシェンカーは、拠り所とする自筆譜を見出せない Op. 106 に関しては、詳細な研究成果を世に出せなかったと考えられる。その一方で、そのような状況においても、シェンカーが Op. 106 の詳細な分析を試みていたことも指摘されたりする²²⁴が、作品の本来のあり方を根拠に論じようとするシェンカーにとって、その拠り所を見出せなかったことは Op. 106 の分析を出版できなかったことの大きな要因であったことは明らかであろう。とは言え、Op. 106 の校訂楽譜は出版されているため、その楽譜内容を確認することはできる。ではここからは具体的な楽譜内容を参照していこう。

シェンカー版について、ここまで触れてきたことを踏まえると、Op. 106 に関してシェンカー版の採る姿勢は、純粹に W を底本にしていると考えるのが自然のように思われる。なぜなら、何度も触れてきたように Op. 106 で遡れる最も作曲家に近い資料は、スケッチとウィーン原版であるためである。実際、エディション比較からもそのことが裏付けられた。例えば、楽章順に関してシェンカー版は W と一致している。また、第3楽章の第185～186小節目にある注を見ると、W を底本としている可能性を見ることができる。

【W】



【L】



【シェンカー版】



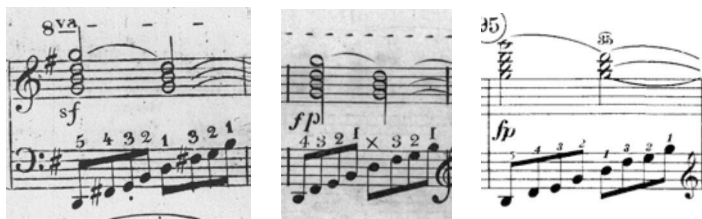
小節をまたぐ左手のタイの有無に注目したい。タイが無い W に対し、L とシェンカー版にはタイが見られるが、シェンカー版にはここに次のような注が付されている。「オリジナル

²²³ *Complete Piano Sonatas* (pp. 511-556) Ed. by Heinrich Schenker. Wien: Universal Edition. 1918-21.

²²⁴ Marston 2013: Nicholas Marston, *Heinrich Schenker and Beethoven's 'Hammerklavier's Sonata*. Farnham, Surrey, England; Burlington, VT: Ashgate.

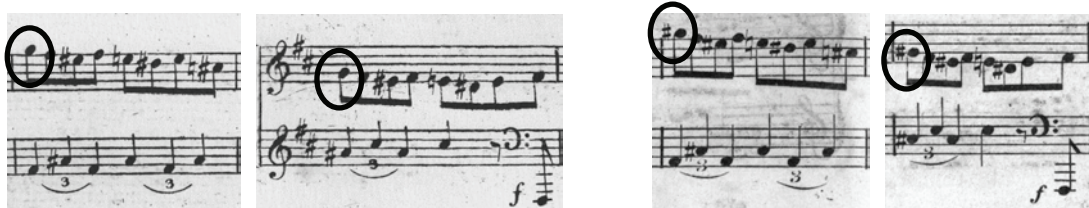
にはタイが欠けている。」つまり、シェンカーが「オリジナル」とするのはWであることがわかるのである。ここで同時に注目すべきは、Wをオリジナルであるとしながらも、Lと一致させている、という点である。シェンカー版では驚くべきことに、この箇所のようにLと一致している箇所も多数見られた。例えば、先ほどから何度も例に挙げている、第1楽章の第96小節目においてもシェンカー版はLと同じ「fp」を示している。

【W】 【L】 【シェンカー版】



第1楽章の第210、212小節目にも、Lとの一致が見られる。

【W】 【L】



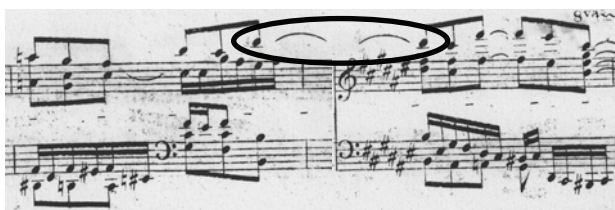
【シェンカー版】



これらを見ると、Lを採用する箇所も少なくないことがわかる。Lから直接採用したかどうかは定かでないものの、原典を最重要視するシェンカー版にすらLとの一致箇所が存在することは注目すべきポイントであろう。また、次に示すように二つの原版の折衷を示すような箇所も存在した。

第3楽章 第127～128小節目

【W】



【L】



【シェンカー版】



○で囲った上段のタイは、Wでは上声部の d^3 音に付されるが、Lでは下声部の fis^2 音に付されている。しかしシェンカー版は、このどちらもがタイで結ばれているのである。つまり、二つの原版の要素のどちらもが採用されているかのようである。校訂報告が付されるエディションではないため、その旨を確認することは不可能だが、Lを採用するだけでなくWもLも同時に採用するような箇所もあることは大変興味深い。シェンカー版が、Lも同時に原典資料として認めていた可能性が垣間見えるためである。シェンカー版の場合にもまた、Lの要素は必要不可欠なものとして存在していたことが明らかになった。

2.1 4. トーヴィ版 (Associate Board... : ロンドン) 1931年出版²²⁵

ドナルド・フランシス・トーヴィ Donald Francis Tovey (1875～1940) は、音楽学者、音楽理論家、作曲家、音楽エッセイストとして活躍した人物である。校訂楽譜のみならず、楽曲分析の著作も残している²²⁶。

トーヴィは Op. 106 の出版に際した特異性について以下のように述べている。

²²⁵ ピアノ・ソナタ集 第3巻 148-206頁 ハロルド・クラクストン編 ドナルド・トーヴィ注釈 山根銀二訳 東京：全音楽譜出版 1931

²²⁶ ベートーヴェンのピアノ・ソナタの分析に関する著作は、以下の通りである。Tovey 1931: Donald Francis Tovey, *A Companion to Beethoven's Pianoforte Sonatas*. London: The Associated Board of the R. A. M. and the R. C. M.

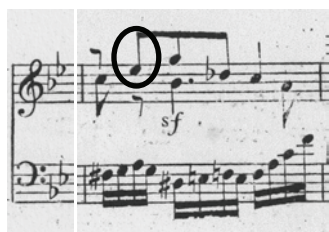
ソナタ作品 106 の最初の頃の英国版楽譜で、スケルツォをアダジオの後に入れてあるのがある。こういう混乱は、われわれを仰天させる。しかしそれよりもっと驚くべきことは、イギリスの楽譜購入者は終曲のフーガを弾くことはないだろうから、原調の楽章〔第2楽章〕でなら、このソナタを終らせてもいいという理由で、ベートーヴェンが自分でそのように指示したのではないとしても、そのことに同意したという事実である。常識のある編集者なら、このような版は異本としてまじめに受入れはしないであろう。しかし、その版がベートーヴェンの同意を得た上で出版されたことを、そのために疑うことはできないのである。²²⁷

つまり、トーヴィはロンドン原版を、「まじめに受入れ」ざる「異本」と捉えていることがわかる。しかし、ベートーヴェンがその形に「同意」した事実に相対し、困惑する様子も窺える。また、彼の注釈の中には、「ビューロー」の名をはじめとするそれまでの複数のエディションの名前が出てくる。彼が校訂の際に、様々なエディションを参照したことは明らかであろう。ではこれらを踏まえ、彼の校訂楽譜の内容を詳しく見ていくこととしよう。

まず、トーヴィ版の楽章順はやはり W に一致している。また、全体で見ても、W の明らかなミスを除いて、W と一致する表記が大半を占めている。つまり、トーヴィ版はウィーン原版を底本にしていると言って良いエディションであろう。しかし一方で、L と一致する箇所も存在する。例えば、第4楽章の第43小節目は、W にはなく、L にのみある es^2 音の \sharp が、トーヴィ版ではカッコ付きで記されている。

第4楽章 第43小節目

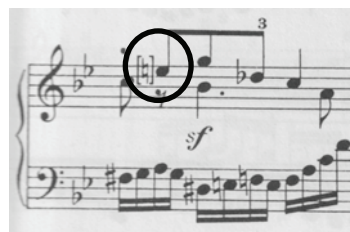
【W】



【L】



【トーヴィ版】



また、第4楽章の第134、135小節目にも同じく L にしかない sf がカッコ付きで表記されている。

²²⁷ トーヴィ版 1931 「序」 p. 3。

第4楽章 第134、135小節目

【W】



【L】



【トーヴィ版】



以上のように、トーヴィ版にはLと一致する箇所は確かに存在し、その表記はカッコ付きで示される。つまり、トーヴィ版はウィーン原版には存在しない表記かつ正しいか断定できない要素を付け加えた箇所にカッコをつけて表記していることがわかる。しかし、それらの表記が、単純にLから採用したかどうかは定かでない。その類似箇所を参照した上で追記した可能性や、和声的に正しいとした結果ロンドン原版の要素と一致したに過ぎない可能性もあるからである。しかしいずれにせよ、ここで抑えておくべきはWを底本としたトーヴィ版の中にも、Lと一致する表記が正しいものと判断され、追記されている点である。

2.1 5. シュナーベル版 (Curci : ミラノ) 1949 年出版²²⁸

アルトゥル・シュナーベル Artur Schnabel (1882~1951) は、20 世紀前半に活躍したピアニストであり、教育者、作曲家、楽譜校訂者として、多方面で重要な功績を残した。特に、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏の録音を史上初めて成し遂げた人物として、その名を広く知られている。また、楽譜校訂者としても有名である。

シュナーベル版の校訂作業は以下のように進められたようである。まず、多くのオリジナル資料「自筆譜、ベートーヴェンが校閲した、もしくは目を通した筆写譜、初版や第2版のうち、ベートーヴェンが校正刷りを見たもの」を調査する。さらに、「原典版」や「批

²²⁸ 32 Sonate per Pianoforte Vol. 3. (pp. 117-190) Ed. by Artur Schnabel. Milan: Curci. [ca. 1949].

判校訂版」と銘打たれた楽譜のみならず、他の校訂者による「解釈版」も検討対象に含んでいた。具体的にどんな資料や楽譜が入手可能であったかは、完全にはわからないものの、Op. 106 に関して言えば「ビューロー版」はその名を挙げる注が存在することから、手許に置いてあったと考えられる。また、校訂楽譜の原稿作成には、『旧全集』に加筆する形がとられた。²²⁹

では実際に Op. 106 の楽譜テキストの詳細を見ていこう。先に述べたように、シュナーベル版は『旧全集』をもとに楽譜が作成されたとの指摘があったが、本論のエディション比較でもそれを裏付ける結果が出た。つまり多くの箇所では『旧全集』と一致していた。したがってシュナーベル版は、基本的に W を底本とするエディションになっていると言えるだろう。このことは、シュナーベルが脚注の中で W を“First Edition”と呼び、L を“English edition”²³⁰と呼んでいることから明らかである²³¹。

しかしその一方で、L と一致する箇所も少なくない。それらには大きく分けて二つの表記方法があった。それは、何かしらの方法で L であることを示す場合と、何も付記のないままに L の表記をする場合である。例えば、第 1 楽章の第 96 小節目の強弱記号の書き方を見てみよう。

【W】	【L】	【シュナーベル版】
		

ここでシュナーベル版は L と一致する「fp」を示しているが、ここには注が付され、「L によるものである」旨が説明されている。

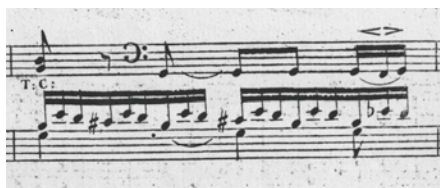
次に何も付記なしに L と一致する箇所を見てみよう。下の譜例は、第 3 楽章の第 158 小節目である。

²²⁹ 畑野小百合 2010 「A. シュナーベル校訂『ベートーヴェン ピアノ・ソナタ全集』に関する一考察」東京学芸大学修士論文 p. 13。

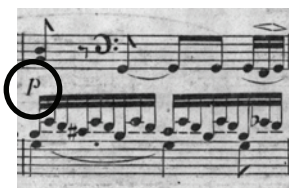
²³⁰ Ed. Schnabel ca. 1949, p. 168.

²³¹ Ed. Schnabel ca. 1949, p. 155 ではロンドン原版のことを“London Edition”と呼ぶ箇所もある。

【W】



【L】

【シュナーベル版】 * I. *tranquillo*

譜例を見て明らかなように、Lにしかない「p」の表記が、シュナーベル版ではカッコに入れられたり、注を付されたりせず表記されている。

詳細な注が用意されているエディションである上、Lの要素を表記する際にそのことがわかるようにカッコ付きで示す箇所が存在することから、何も説明のないLと一致する箇所は、Lの要素こそ正しいと判断した結果、Lを採用していると捉えることが可能であろう。つまり、二つの原版を無意識的に混在させてしまったエディションではない。こうした、確かな校訂姿勢をもったシュナーベル版の中でも、Lの要素は正しいものとして意図的に採用され、存在していることが明らかになった。

2.16. アラウ版 (H. Litolff's Verlag : フランクフルト ; C. F. Peters : ニューヨーク、ロンドン) 1978年出版²³²

クラウディオ・アラウ Claudio Arrau (1903~1991) は、南米チリ出身で、20世紀を代表する大ピアニストである。幼い頃から神童としてその名を知られ、7歳でベルリンに留学し、リストの高弟でドイツ音楽の権威マルティン・クラウゼ Martin Krause (1853~1918) に師事した。ここで彼は、ピアノのみならずドイツ音楽の伝統や様式、美学などについての英才教育を受けた。幅広いレパートリーを持つことで知られるが、特にドイツ系の作曲家の作品を得意とし、ベートーヴェンのピアノ・ソナタに関しては自身の校訂楽譜が出版されるほど、文字通り「ベートーヴェンの権威」としてもその名を残した。

²³² *Sonaten, für Klavier zu zwei Händen.* (pp. 229-274) Ed. by Claudio Arrau. Frankfurt: H. Litolff's Verlag, New York; London: C. F. Peters. 1978. EP 8100b: Copyright © 1978 by C.F. Peters, Leipzig

彼のエディションは、「演奏家が校訂したとは思えないほど禁欲的にしか書き込みが行われていない」²³³と評されるほどに、「原典」に即した楽譜であることが窺える。これはアラウ版が出版された時期が 20 世紀後半に差し掛かかり、いわゆる「新即物主義」や、「原典版」思想が盛んになってくる頃であることが背景にあらう。ではそのような性格を持つアラウ版の Op. 106 の楽譜内容について見ていこう。

アラウ版は、楽章順を含め W と一致する箇所が多い。つまり基本的にはウィーン原版を底本としたエディションであると言える。このことは、W と一致する箇所が多いことのみならず、アラウ版に見られる L と一致する箇所でのその表記の仕方からも垣間見える。というのも、L と一致する表記は、多くの箇所でカッコ付きで表記したり、スラーなどは点線で表しているのである。以下に何箇所か例を挙げる。

第 4 楽章 第 85 小節目 上段のスタッカート

【W】



【L】



【アラウ版】



第 1 楽章 第 65 小節目 上段のスラー

【W】



【L】



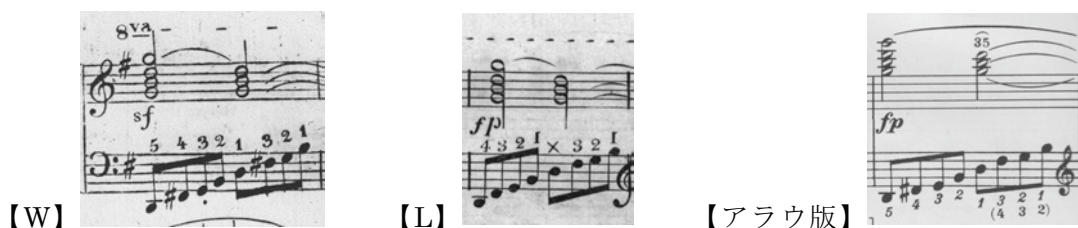
【アラウ版】



このように、L と一致する表記を区別して書き表す校訂姿勢から、まずアラウ版が W を底本にしていること、また L の要素（もしくはそれと一致する要素）を同時に採り入れている楽譜であることがわかる。このように L と一致する表記は、上に挙げた例以外にも決して少なくない頻度で存在していた。しかも、何の付記なしに L と一致する表記をする箇所すら存在する。

²³³ 渡辺 2001 p. 394。

第1楽章 第96小節目 1拍目のfp

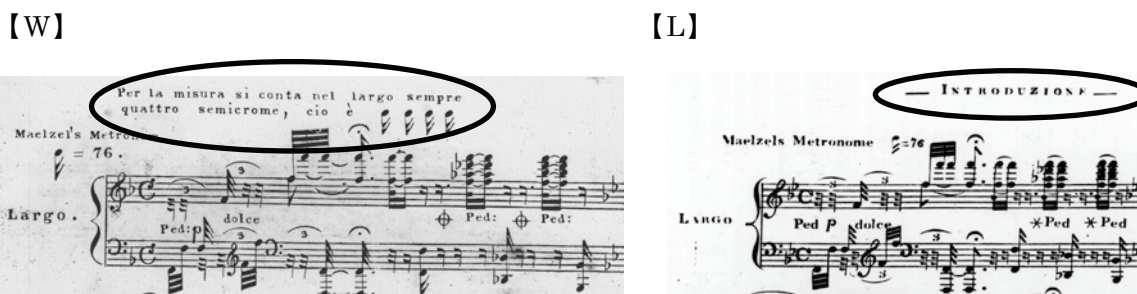


第1楽章 第73小節目 上段/下声部のスラー



先ほど見たように、おそらく底本にした楽譜以外の要素を区別して表記していた箇所も存在することから、上のようにLの要素が何の断りなしに表記されている事実は、アラウ版にはLが正しいものとして採用されていると捉えられよう。また同時に興味深いのは、WとLとを同時に採り入れる箇所が存在した点である。

第4楽章 冒頭



【アラウ版】



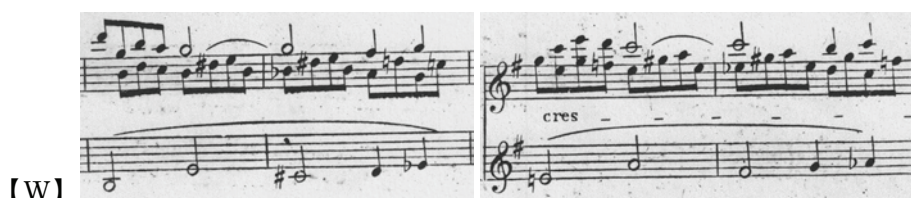
この箇所で二つの表記を併記させたエディションは、本論の調査ではアラウ版が初めてだった。アラウによる独自の判断であるのか、もしくはアラウが参照した他エディションで既にあったものを引き継いだのかははっきりとは明らかにならないが、いずれにせよ二つの原版的要素をどちらも重要なものとして併記された事実は重要なポイントであろう。

2.1 7. J. フィッシャー版 (Peters: ライプツィヒ) 1975 年出版²³⁴ / (Fischer: プリーン) 2005 年出版²³⁵

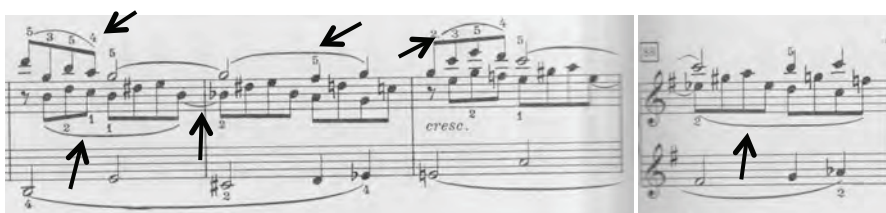
校訂者 Johannes Fischer の略歴や、このエディションの概要については、本論第 2 章を参照されたい。1975 年版も、2005 年版もロンドン原版を重要な位置に据えるという姿勢のもと校訂されたエディションであることはすでに述べたが、楽譜テキストを例にその特徴を具体的に見ていこう。

まず、巻末のエディション比較表から明らかだが、他のエディションに比べて、1975 年版でも 2005 年版でも、圧倒的に L と一致する箇所が多い。いくつか例を挙げておこう。

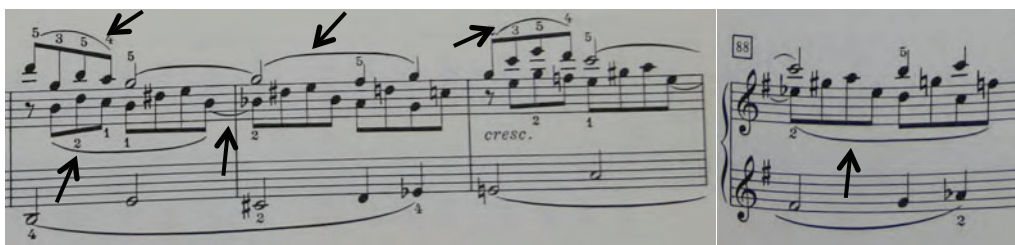
第 1 楽章 第 85~88 小節目 スラーの有無



【フィッシャー1975年版】



【フィッシャー2005年版】



²³⁴ *Große Sonate für das Hammerklavier B-dur Opus 106*. Ed. by Johannes Fischer. Leipzig: Peters, 1975. (Edition Peters Nr. 4029). EP 4029: Copyright © 1975 by C.F. Peters, Leipzig

²³⁵ *Klaversonate B-Dur Große Sonate für das Hammer-Klavier Opus 106*, Ed. by Johannes Fischer. Prien: Fischer. 2005.

第1楽章 第162小節目 声部の書き方

【W】 【L】 【フィッシャー1975年版】 【# 2005年版】



これらの箇所は、他の多くのエディションではWが採用されている箇所である。それにも拘らず、FischerがLを採用していることから、Lを底本とする彼の校訂姿勢は明らかである。

また、フィッシャー版の重要な特徴として、ロンドン原版のみならず、二つの原版を丁寧に掲げられる点が挙げられよう。というのも、二つの原版にはなく、あとのエディションの中で修正された箇所、多くのエディションがそれを踏襲し「習慣化」したかのように見える表記も、フィッシャー版では二つの原版に立ち返った表記をする箇所が多く存在したのである。例えば、第2楽章の第22小節目を見てみよう。のちに変更されたエディションを代表して、旧全集も例に挙げる。

【W】 【L】 【旧全集】 【フィッシャー1975年版】 【# 2005年版】



2拍目に見られるg音は、二つの原版では4分音符で記されるのに対し、旧全集では、1拍目から2分音符で伸ばされる形に変更されている。しかし、フィッシャー版では二つの原版と同じ形をしている。もう一つ、類似の例を見てみよう。次の譜例は、第4楽章の第97小節目である。

【W】 【L】 【旧全集】 【フィッシャー1975年版】 【# 2005年版】

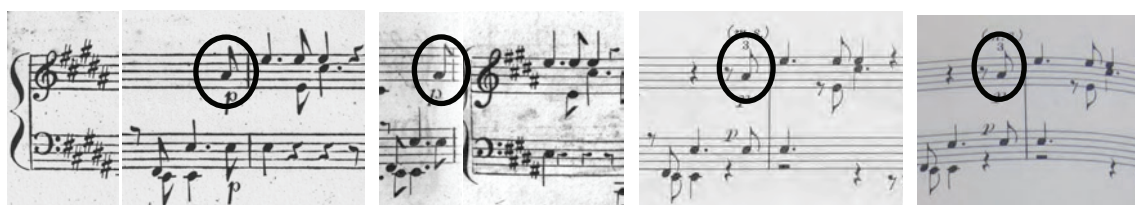


○で囲った音は、二つの原版では es^1 音を示すのに対し、旧全集では、 f^1 音へと変更されている。しかし、フィッシャー版では二つの原版と同じく、 es^1 音を示しているのである。原典に忠実であろうとする点で、信頼を置けるエディションであると言えよう。

先述した通り、フィッシャー版はロンドン原版を底本にしているエディションであるとはいえ、やはり **W** を採用している箇所も存在する。上で述べたように、二つの原版を丁寧に扱うエディションであることを踏まえると、無意識的な混在であるというよりも、**L** が間違っていると判断された箇所で **W** を意図的に採用していると見て良いだろう。例えば以下の箇所である。

第1楽章 第217小節目

【**W**】 【**L**】 【フィッシャー1975年版】 【# 2005年版】



○で囲った音は、**W** では ais^1 音を示すが、**L** では fis^1 音を示している。フィッシャー版は、1975年版、2005年版いずれも **W** と同じく ais^1 音を示している。Fischerは校訂報告(2016)の中で、これは、ベートーヴェンが意図して **L** から **W** の表記に変更したものであるとしてこの小節を挙げている²³⁶。

第3楽章 第131小節目

【**W**】 【**L**】 【フィッシャー1975年版】 【# 2005年版】



下段のスラーの有無に注目したい。ここは、他の多くのエディションでスラーは付されるものの、**W** と全く同じ表記をしているエディションは、今回比較した中にはフィッシャー版だけであった。

代表して旧全集をここに載せておく。

²³⁶ Fischer 2016, p. 13.

【旧全集】



他の多くのエディションは、旧全集に見るように二つのスラーに分けて書かれる。つまり Fischer が、他のエディションから無意識的にそれを採用したのではなく、W の形を意図的に、そして原版通りに採用していることが垣間見えるのである。

では次に、1975 年版と 2005 年版とを比較し、両者の間で変化した点にはどういった特徴があるのかを見てみよう。それらは大きく分けて二つのパターンに分けられる。一つは、かつては W を採用していたが L を採用するようになったという箇所、二つ目は、逆に L を採用していた箇所です。新しく W を採用するようになった箇所である。それぞれ具体的な箇所を見てみよう。まず W から L へと変更された箇所である。

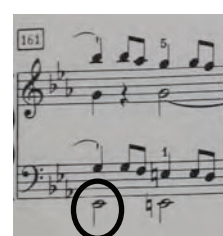
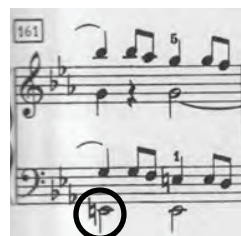
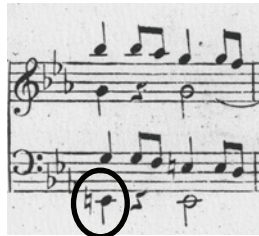
第 1 楽章 第 161 小節目

【W】

【L】

【フィッシャー1975年版】

【2005年版】



○で囲った音に注目したい。W では Es 音に ♩ が付されるが、L では 1 拍目には付されず、その後の 2 拍目になってようやく ♩ が付される。フィッシャー1975年版では W と一致していたが、2005年版では L に一致している。校訂報告（2016）の中でも、L が正しいことを示唆する指摘が見られる²³⁷。

ではもう一つのパターン、L から W へと変更された例も見てみよう。

²³⁷ Fischer 2016, p. 9.

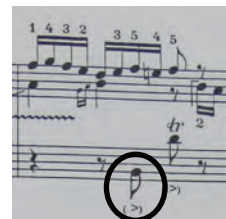
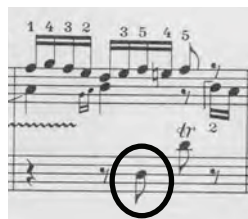
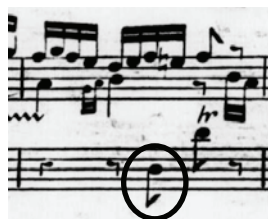
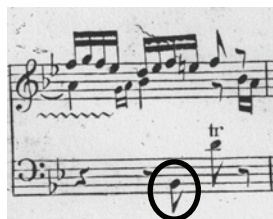
第4楽章 第350小節目

【W】

【L】

【フィッシャー1975年版】

【# 2005年版】



○で囲った音は、W では B 音、L では d 音になっている。フィッシャー1975年版では L と一致していたが、2005年版では W と一致している。

こうした例に加えて楽章順に関しても、1975年版では L を、2005年版では W を採用している。また Fischer が新たに W を採用することになった箇所において、特徴的なものとして「sf」の表記がある。これは本論第4章で詳しく述べる。

以上のように、1975年版と2005年版の両者を比較すると、新たに Wこそ正しいとする箇所、逆に新たに Lこそ正しいとする箇所が出てきたことがわかる。

ここまでフィッシャー版の特徴を述べてきたが、以上に共通する点として、それらの変更に対し、十分な説明がされていないことが挙げられる。多くの資料にあたり、校訂を進めたと考えられる Fischer の見解は、おそらく何かしらの根拠があつてのことだろうものの、それらが明記されていないことが多いため、その意図がはっきりとわからない。

では、フィッシャー版についてまとめる。このエディションは、20世紀中頃においてはおそらく唯一であろう、ロンドン原版を強く意識し、それを底本としたエディションとして出版された。これは Op. 106 のエディションの系譜において、大きな存在感を放つていえるだろう。すなわち、ウィーン原版を底本にすることが当たり前ようになっていた時期に、とても新しい立場をとったエディションであった。しかしその新しさは、決して奇を衒ったようなものではなく、二つの原版を丁寧に扱った上で取捨選択されて作られた信頼の置けるエディションであることは明らかであり、そうした作業を経た結果、ロンドン原版が多くの箇所で採用されたという重要な事実も明らかになった。

2.18. ヘンレ版 (G. Henle: ミュンヘン) 1953 年出版 (C)²³⁸ / 1980 年出版 (V)

239

ヘンレ社は「原典版の出版社」であり、その校訂の特徴を以下のように掲げている。

- ・ 改変されていない、信頼できる正しい内容の楽譜
- ・ 「批判校訂報告書」（ドイツ語と英語の 2 カ国語、フランス語も多くの作品に掲載）で出典をすべて明示、出典の評価、校訂作業の記録を含めた校異（原典史料を比較研究）結果一覧を記載²⁴⁰

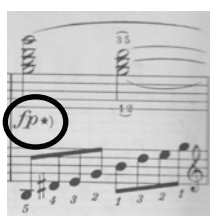
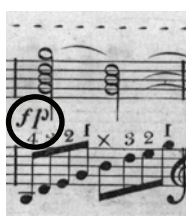
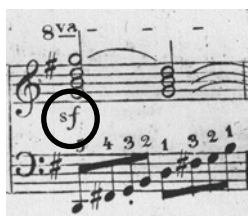
しかし、校訂報告が付されないことも多々あり、世界的に最も広く使用されているエディションであることも相まって批判的にされることも少なくない。ヘンレ版はまた、頻繁に改訂されることが多く、そのバージョンは楽譜の最終ページにある（ ）付きのアルファベットにて判別が可能である。筆者は今回、(C) (U) (V) の 3 種類を手にした。Op. 106 に関しては、二つの原版の相違箇所を比較した限り (U) と (V) での変更点はないと見られる。そのため、付録のエディション比較表では、(C) と (V) の 2 種類の内容を記載している。

(C) は、1953 年に出版された。エディション比較からこの楽譜が W を底本としていることが明らかである。ほとんどの箇所、W と一致しているのだ。また注釈の中で、W のことを“Orig. Ausgabe”と呼び、L のことを“Londoner Erstaussgabe”と呼んでいることから、(C) が W のみを原版と認定したことが明らかである。しかしその一方で、数は多くないが L を採用する箇所も存在した。例えば、第 1 楽章の第 96 小節目がそれである。

【W】

【L】

【ヘンレ版 (C)】



²³⁸ *Klaversonaten Bd. 2.* (pp. 227-272) Ed. by B. A. Wallner. München: G. Henle. 1953. Copyright © 1953 by G. Henle, München

²³⁹ *Klaversonaten Bd. 2.* (pp. 227-272) Ed. by B. A. Wallner. München: G. Henle. 1980. Copyright © 1980 by G. Henle, München

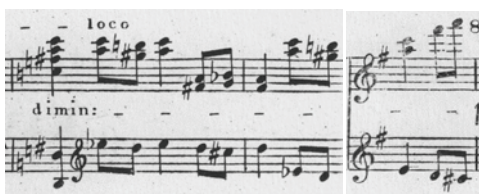
²⁴⁰ ヘンレ社 HP <https://www.henle.de/jp/the-publishing-house/was-ist-urtext/> (2021 年 8 月 8 日確認)。

「sf」を指示する W に対し、L では「fp」を指示している。ヘンレ版 (C) でも L に同じく「fp」を採用している。また、ページの下には注釈が付され、L による要素であることの説明がしっかりとなされている。

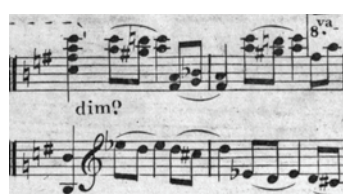
この他の箇所でも L を採用する箇所も、その旨の説明がされている。例外としては、第 2 楽章に見られる、L と一致する多数のスラー表記をあげることができよう。そこには、L による要素であることは説明されない。しかしこれは、W では必要なスラーが欠けている、との判断から、類似箇所等を参照するなどして統一を図る意味で追加されたスラーであると推察でき、その結果として L と一致しているのだろう。つまり、基本的には「混在」と呼ぶような状態にはなっていないと言える。(C) はあくまでも W を底本とし、必要に応じて L の要素を注ありで載せている楽譜である。

一方のヘンレ版 (V) に話を進めよう。(V) は、1980 年に出版された。こちらも (C) に同じく、基本的には W と一致する箇所が多く、底本にはウィーン原版を用いていることがわかる。注釈の中で、W を“Orig. Ausgabe”と呼び、L を“Londoner Erstaussgabe”と呼ぶことも (C) と共通している。では、同じく W を底本にするヘンレ版 (V) だが、(C) の出版から 30 年近くの時を経て L の扱い方に変化はあるのだろうか。

(V) が L と一致する箇所は、(C) に比べて格段に増えたと言えるだろう。その特徴は、特に第 1 楽章に顕著であった。例えば、第 1 楽章の第 45 小節～46 小節目である。



【W】



【L】




【ヘンレ版 (C)】



【ヘンレ版 (V)】

二つの原版のスラーの有無に注目すると、(C) では W のスラー無しを採用していたが、(V) では L と同様にスラーが付されている。ここには注もなく、() に入れた表記にもなっていない。

もう一つ例を見てみよう。第 1 楽章の第 234 小節～235 小節目、第 236 小節～237 小節目、第 239 小節～240 小節目のゼクエンツ部分である。

【W】 

【L】 

【ヘンレ版 (C)】 

【ヘンレ版 (V)】 

左手のタイに注目したい。ヘンレ版 (C) は、W と同じくタイは見られないが、(V) では L 同様にタイが付されている。譜例を見て明らかなように、ここでも注や () 表記は見られない。

こうした例で注目すべきは、1980 年の (V) 版になって、L の要素が増えたことだけにとどまらない。譜例を見て明らかなように (V) で L の要素を採用しているうちの多数で、そこに L によるとの注が付されていないことは重大なポイントであろう。さらに、もともと (C) では L の要素を () 付きなどで表記していた箇所、(V) では () を取り去り、その要素が L によるものであることがわからない状態へと変わってしまった箇所まで存在した。例えば、第 1 楽章の第 178 小節目の「p」表記である。

【W】 【L】 【ヘンレ版 (C)】 【ヘンレ版 (V)】



Wには存在しない「p」表記をヘンレ版（C）では（ ）に入れた形で表記していたにも拘らず、（V）ではその（ ）は取り除かれてしまった。

つまり、ヘンレ版（V）は二つの原版の混在を生み出しているものである。しかも、以前の版になかった混在をより新しい楽譜の中で生み出していることも、見逃すことのできない重大な事実であろう。もしかしたらこれは、Lを一次資料の一つとして、W同様に大いに採り入れるようになったことの一つの表れとも受け取れるかもしれないが、校訂報告の無い楽譜の中で、その表記をいかにして採用したのかが明らかでない以上、この混在は許されざることと言えよう。

演奏家に広く使用されているヘンレ版にすら、Lの要素は必要不可欠なものとして存在すること、加えて二つの原版を混在させてしまっている問題視すべき事実が明らかになった。

2.1 9. ウィーン原典版（Schott：マインツ；Universal：ウィーン）2001年出版²⁴¹／2018年出版²⁴²

ウィーン原典版は、ウィーンユニヴァーサル・エディション、マインツのショット、音楽之友社が連携し出版され、今日広く使用されている「原典版」のひとつである。ウィーン原典版の校訂は、それが「Urtext（原典版）」と名乗っていることから明らかなように、「作曲家の自筆譜や筆写譜、初版本、版下などを比較検討し、確実な出典に基づいて校訂・編集され」²⁴³ている。具体的には、底本となる一次資料による情報が主に記載され、それ以外の加筆・修正については（ ）や〔 〕表記に入れ区別し、また必要に応じて、注が添えられる形だ。

ウィーン原典版のOp. 106は、現在2001年版と2018年版の二つを見ることができる²⁴⁴。2001年版に関しては、楽譜内に別途の校訂報告を参照するよう促す箇所も存在するが、おそらくその校訂報告は出版されないまま、2018年版の新しい楽譜が出版されたと思われ、

²⁴¹ *Sonaten für Klavier Band 3* (pp. 78-132) Ed. by Peter Hauschild. Wien: Wiener Urtext Edition, Mainz: Schott; Wien: Universal. 2001.

²⁴² *Klaversonate op. 106*. Ed. by Peter Hauschild. Wien: Wiener Urtext Edition, Mainz: Schott; Wien: Universal. 2018.

²⁴³ 音楽之友社 HP <https://www.ongakunotomo.co.jp/series/wiener/index.html> (2021年8月8日確認)。

²⁴⁴ 2020年にピアノ・ソナタ全集の第3巻の中に収められての出版もされているが、2018年版の単独版からの内容の変更は、おそらくないと考えられる。

手にすることができない²⁴⁵。

2001年版が、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全集であるのに対し、2018年に新たに出版されたエディションは、Op. 106の単独出版である。2018年版の特徴は、序文にある「ウィーン初版が最重要であるが、ロンドン初版もまた、不可欠で信頼できる資料である」という言葉からも明らかである。つまり、ロンドン原版を重要視した校訂になっているのである。このことを踏まえ、本論では2001年版と2018年版の両方を比較対象とし、その内容の変更がいかなるものであったのかを調査した。

まず楽章順に関しては、2001年版も2018年版もウィーン原版のものを採用している。2001年版ではロンドンの楽章順について次のように述べている。

ロンドン版はおそらく商業的販売上の理由からと思われるが、4楽章まとめでの出版ではなく、2つに分けて出版されたのである [……]。そればかりでなく、この出版過程において中間の2つの楽章 [……] の配列を入れ替えてしまっている。²⁴⁶

2018年版には以下の記述が見られる。

これ [ロンドン原版の楽章構成] は当然ベートーヴェンも了承したのだが、それは単にイギリスでのよりよい刊行の機会または販売の機会の到来を願う窮状打開策としてのみ提案されたのである。²⁴⁷

つまり、どちらの版も楽章順についてはウィーン原版こそが正しいあり方としていることに変わりはない。しかし、2018年版の方が若干ではあるが、「ベートーヴェンも了承した」などと真純性を認めるニュアンスが新たに含まれているようにも感じられる。

では次に、具体的な楽譜テキスト内容へと話を進めていこう。2001年版と2018年版とを比較した結果、多くの箇所でその内容に大きな相違がないことがわかった。これは一見、新たにロンドン原版に注目し、それを大いに採り入れたかに見えた2018年版でもウィーン原版ばかりを尊重しているという結果かと思われるが、それは違う。実は2001年版の

²⁴⁵ Wiener Urtext Edition のカタログによると、校訂報告は2019年時点でも準備中との記載がある。https://wiener-urtext.com/files/daten/catalogue/en/ue_catalogues/UT-Katalog-englisch.pdf (2021年8月10日確認)。

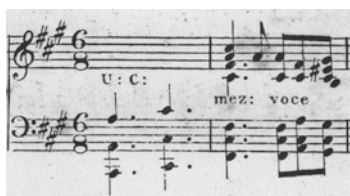
²⁴⁶ Wiener Urtext Edition 2001, “Vorwort” p. IV.

²⁴⁷ Wiener Urtext Edition 2018, “Vorwort” p. III.

時点で既に、ロンドン原版は大いに採り入れられ、二つの原版による要素の混在が起こっていた、というわけである。2018年版ではその混在を整理し、ロンドン原版による要素を全て（ ）に入れた形へと変更していた。例として第3楽章の冒頭を見てみよう。

【W】

【L】



【ウィーン原典版 2001年版】

【ウィーン原典版 2018年版】



© 2001 by Wiener Urtext Edition, Musikverlag Ges. m. b. H. & Co., K. G., Wien

© Reproduced by kind permission of Universal Edition AG, Wien

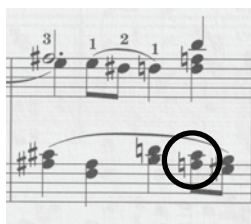
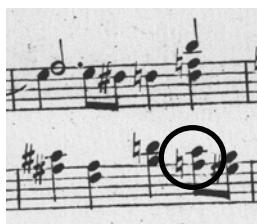
譜例を見てわかるように、2001年版ではLだけに見られるスラーや「p」表記を、何も注を付けることなく記載し、WとLとを混在した楽譜になっていた。一方の2018年版ではLの表記を（ ）に入れ、その混在を整理していることがわかる。また必要に応じて、巻末には注も付されている。

もちろんかつての2001年版でウィーン原版を採用していた箇所を、ロンドン原版の表記へと変更した例も見られた。先ほどの譜例で言うと、Lの要素である2小節目「Ped.」や「*」が2018年版で新たに追加されている。他の例も見てみよう。以下の譜例は、第1楽章の第73小節目である。

【W】

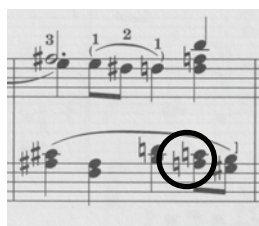
【L】

【ウィーン原典版 2001年版】



© 2001 by Wiener Urtext Edition, Musikverlag Ges. m. b. H. & Co., K. G., Wien

【ウィーン原典版 2018 年版】



© Reproduced by kind permission of Universal Edition AG, Wien

○で囲った c^1 音に \natural が付される否かに注目したい。2001 年版では W と同じく \natural は付されず、前の臨時記号から cis^1 を示しているが、2018 年版では L に同じく「 \natural 」が付され c^1 音を示している。

ヘンレ版にも同じことが言えたが、原典版に属する『ウィーン原典版』の中で、これまで長い間、二つの原版の要素が何の断りなく混在していた事実は、ロンドン原版の影響の大きさやその重要性を物語る一方で、問題視すべき点と言えるだろう。

2.20. 園田高弘版（春秋社：東京）2003 年出版²⁴⁸

園田高弘（1928～2004）は、戦後の日本の音楽界を牽引したピアニストであり、古典から近現代まで実に広範なレパートリーをもった人物だった。ベートーヴェン作品の演奏に限って見ても、ベートーヴェンの生誕 200 周年の折にベートーヴェン全ピアノ作品の連続演奏会の企画、実行を成し遂げたことでも知られる。

では、園田版の詳しい内容を見ていこう。まず、園田は序文にて、「ベートーヴェンのピアノ・ソナタの出版にあたって」と題し、全曲に（もしくは他作曲家の作品にも）共通する彼の「エディション」に対する考えが見て取れる。

最近の原典ブームは凄まじいものがある。世の中はあたかも幾種類もの「原典」によって、それ以外の昔から使用されてきた注釈版、解釈校訂版は、まるでそれらがすべて間違いだらけの出版物であるかのごとく片隅に追いやられている。これは現実の音楽教育にとってゆゆしき事実であり、将来にわたってはまことに危機的な影響を及ぼすことである。

[……]

²⁴⁸ ピアノ・ソナタ 第 29 番 変ロ長調 作品 106 「ハンマークラヴィーア」編集・校訂 園田高弘 東京：春秋社 2003。

「原典版」のみにたよっては問題は決して解決しない。

このたび、新しくベートーヴェンのピアノ・ソナタを出版するにあたって、以上のような音楽の歴史的経緯を考慮し、現代の近代的なピアノという楽器によって演奏するためには、どのようにベートーヴェンの「原典」を読み、それに基づく演奏表現のための詳細な指示、つまり演奏譜とでもいうべきもの、それによって最小限度の読譜解釈を認知することを、この版によって示すことができればと願った。²⁴⁹

つまり彼は、原典版信仰とでも呼べるような当時の状況を批判し、解釈版などに分類されるエディションも重要な位置に据え、校訂をした姿勢が見て取れる。実際、彼の校訂楽譜の中に示された「校訂方針」の項でも、校訂の際に参照したエディションとして、以下のような解釈版が明記されていた。

校訂にあたっては、自筆譜²⁵⁰および Breitkopf & Härtel の Urtext 版 (1898, Krebs 校訂)、Henle の Urtext 版 (Wallner 校訂) をはじめ、各種の校訂版—Liszt (Holle [全音楽譜出版社])、Bülow-Lebert (Cotta)、d' Albert (Forberg)、Schnabel (Ullstein)、Casella (Ricordi)、Arrau (Peters) などを参照した。²⁵¹

ここで気になる点が二つある。まず一点目に、園田は「自筆譜」を参照した楽譜として名を挙げるが、Op. 106 の場合には消失してしまっているためにここで何を指しているのかが不明な点である。ただし、同エディション内の「作品解説」²⁵²において、「スケッチ」について触れる箇所があり、それを「自筆譜」として表記している可能性はあろう。二点目は、自筆譜が消失してしまっている Op. 106 にとって最重要になってくる一次資料「二つの原版」が参照されていない可能性である。このことは、上記の「校訂方針」の中に名前が挙がっていないことのみならず、「作品解説」においても疑問の残る指摘があることから推察される。園田は Op. 106 の第 1 楽章のテンポ問題について以下のように語っている。

²⁴⁹ 園田版 2003 p. i。

²⁵⁰ Op. 106 の自筆譜は消失しているため、ここでいう「自筆譜」が何を指しているのかは不明である。

²⁵¹ 園田版 2003 p. iv。

²⁵² 園田版 2003 巻末「作品解説」p. (2)。

ベートーヴェンによるこの指定〔二分音符＝138〕は速すぎる。ポール・デュカの編纂による『ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ全集』によれば、この速度指示はおそらく、ベートーヴェンの弟子カール・ツェルニーによるものであり、古い版には四分音符＝138となっていると記述があるということである。²⁵³

これまで本論でも見てきた通り、二分音符＝138としたのはカール・ツェルニーではなく「ウィーン原版」であり、一方の四分音符＝138としたのは「古い版」ではなく、そのルーツは「ロンドン原版」にある。つまり、ポール・デュカの指摘において、Op. 106の二つの原版の存在はその範疇にない可能性が垣間見え、誤った情報を載せていると言える。しかし園田は、その指摘をそのまま、批判的なコメントなどを添えることなく引用しており、そうしたところを見ても、園田自身も二つの原版を参照していなかった可能性が見取れるのである。

では以上のことを踏まえつつ、園田版では二つの原版がどのように扱われているのか、エディション比較の結果から見ていこう。

園田版は、楽章順を含め、Wと一致する箇所がほとんどであった。つまり、基本的にはWを底本としたエディションになっていると言えよう。しかし、その背景には、園田が参照した楽譜として名前を挙げていた「ヘンレ版」の存在が大きいように思われる。というのも、園田版にはLと一致する箇所も存在するが、そうした箇所も含めてほとんどの箇所がヘンレ版（特に1980年版）と一致していたからである。本論では、園田がヘンレ版と並んで名を挙げた「1898, Krebs 校訂の Urtext 版」の内容を確認できていないため、園田版にある「ヘンレ版」との一致の全てが、純粋にヘンレ版のみから引き継がれているとは断言できないものの、ヘンレ版を含む「原典版」を底本に、そこに自身の見解を書き加えたのが園田版であることが窺えた。

もう一点、園田版で抑えておきたいポイントは、Lを採用した場合のその表記方法である。本論でこれまで見てきたいくつかのエディションにあったように、Lの要素をカッコに入れたり、小さく表記したり、点線で表記するといった二つの原版の要素の区別は見られなかった。つまり、どちらの原版を採用する際にもその旨の説明は特に無いのである。さらには、Lと一致するペダル表記をする箇所でも、「ベートーヴェンによるペダル指示」である、とする箇所も存在した。

²⁵³ 園田版 2003 巻末「作品解説」p. (3)。

【W】



【L】



【園田版】 254



先ほど、園田版の作成において、二つの原版が参照されていない可能性を指摘したが、以上のすべてのことを総合的に見ると、園田版では Op. 106 の二つの原版に対する問題意識がそこまで大きなこととして捉えられていないような印象を受ける。つまり園田版は、これまでのエディションにあった二つの原版の混在を、どこまで意識的か明らかでないものの大いに引き継いだエディションになっており、L の要素も正しいものとして採用しているエディションになっていると言えよう。

2.2 1. ベーレンライター版 (Bärenreiter : カッセル) 2019 年出版²⁵⁵

2019年、ベーレンライター社から Jonathan Del Mar 氏による批判校訂版が出版された。ベーレンライター版は「あらゆる資料を学術的に調査したうえで編集する批判校訂版のみを“Urtext”と呼んでおり²⁵⁶、2019年に出版されたベートーヴェンのピアノ・ソナタ集はまさに“Urtext”＝原典版」に位置し、ヘンレ社の『新全集』が出ていない現時点で、最も新しく権威ある「原典版」のひとつと言えるだろう。

この版は、その校訂報告から、底本にしているのはあくまでもウィーン原版であることがわかる。しかし、ロンドン原版も「正規の出版譜」²⁵⁷として扱っており、再評価する姿勢をとっていることは注目すべき点である。

エディション比較からも、その姿勢は見取れる。W と一致する箇所が多いが、L を採

²⁵⁴ 園田版では、ベートーヴェンによる指示は「Ped. * あるいは *sempre Ped.*」として示し、園田によるペダル記号を、線で表している（園田版「校訂方針」p. iv）。

²⁵⁵ *Grande Sonate in B dur op. 106*. Ed. by Jonathan Del Mar. Kassel: Bärenreiter. 2019.

²⁵⁶ ベーレンライター社 HP

https://www.baerenreiter.com/fileadmin/Service_Allgemein/Werbemittel/englisch/Flyer_Einzelseite_n_jap_web.pdf (2021年8月9日確認)。

²⁵⁷ ベーレンライター校訂報告 p. 1。

用する箇所も存在し、中には何の注もなしにLを採用する箇所をも存在していた。例えば、第4楽章の第173小節～174小節目である。

【W】

【L】

【ベーレンライター版】



下段のクレッシェンド、デクレッシェンドマークに注目すると、ベーレンライター版ではLの表記を採用していることが明らかである。また、巻末注にはその旨の説明はなかった。

校訂報告が付されており、慎重な取捨選択のもとで校訂する姿勢を提示しているベーレンライター版においてのこの混在は、問題視すべき点というよりも、むしろロンドン原稿の価値を裏付けるものとして受け取れるだろう。もちろん、その旨の説明はあった方が良いが、Lが採用されたこと背景には、おそらくLの方がベートーヴェンの意思に近いとの判断があり、Wの要素は誤りであるとした結果であると捉えることができよう。

第2章でも触れたが、最新の原典版においてもロンドン原稿が改めて評価され、その要素を見直し、採り入れる動きが出てきたことは、重要な事実である。

3. 系譜の整理

本節は、第3章の第1節、第2節の調査、およびエディション比較検討より明らかになった楽譜の特徴から、系譜を整理していく。まずは、ウィーン原稿系統の楽譜から整理する。

1819年に出版されたウィーン原稿には、後続版がいくつか存在した。巻末の「19世紀のエディション一覧」における、No. 41の[1828年以降]や、No. 6、24、27の[1832/33年]、No. 37、39、40、42、43、44、46の[1837年]がそれに当たる。表のNo. 57のウィーン原稿の異刷り²⁵⁸は、ウィーン原稿との差異はないものである。表No. 4、17、33、38、60のウィーン原稿の第2版²⁵⁹は、1856年にArtaria社から出版されているが、その楽譜内容は、ウィーン原稿にあった明らかなミスを訂正したものであり、二つの原稿にはない独自と思われる表記も見られたが、ウィーン原稿の内容を大いに引き継ぐエディショ

²⁵⁸ 本論第3章2.1.

²⁵⁹ 本論第3章2.4.

ンである。

以上の楽譜は、すべて同じプレート番号「2588」であり、ウィーン原版から直結するエディションである。

次は、上記の後を引き継いだと考えられるエディションへと話を進める。表 No. 55 のハルベルガー社のモシェレス版（1858 年出版）²⁶⁰ は、ウィーン原版の要素が多く組み込まれた楽譜であり、W 第 2 版にあった独自の表記を引き継いでいるように見える箇所も存在する。つまり、底本がウィーン原版の第 2 版だった可能性が垣間見え、ウィーン原版系統に属すると捉えても良いだろう。しかしそこには、ロンドン原版との混在が見られ、完全なウィーン原版系統と言い難い側面もあった。表 No. 2、61 の『旧全集』（1862-1865 年出版）²⁶¹ は、明らかにウィーン原版を底本としていた。また、「原典主義」の考えのもと出版されたこの楽譜は、後の多くのエディションの底本となっており、その影響力はかなりものだった。そうした「旧全集」がウィーン原版を底本としたことは、二つの原版の受容において大きな転換点だったと言えるだろう。それ以降、ウィーン原版を底本とする立場が基本となったのである。実際、その後のハスリンガー版（1865 年頃出版：表 No. 52）²⁶²、ビューロー版（1875 年出版）²⁶³、ライネッケ版（1878 年出版：表 No. 53）²⁶⁴、ダルベール版（1902-04 年には出版）²⁶⁵、シェンカー版（1918-21 年出版）²⁶⁶、トーヴィ版（1931 年出版）²⁶⁷、シュナーベル版（1949 年出版）²⁶⁸、アラウ版（1978 年出版）²⁶⁹ には、旧全集独自の表記が見られるなど、旧全集を底本にしている、もしくはそれを踏襲していることが明らかであり、結果的にウィーン原版を引き継ぐ楽譜になっていた。20 世紀後半以降の「原典版」では、旧全集独自の表記こそ無くなるが、ウィーン原版を底本にする姿勢は、『旧全集』から現代に至るまで受け継がれたと言えるだろう。

では一方のロンドン原版の系譜を整理していこう。

²⁶⁰ 本論第 3 章 2.6.
²⁶¹ 本論第 3 章 2.7.
²⁶² 本論第 3 章 2.8.
²⁶³ 本論第 3 章 2.9.
²⁶⁴ 本論第 3 章 2.1 1.
²⁶⁵ 本論第 3 章 2.1 2.
²⁶⁶ 本論第 3 章 2.1 3.
²⁶⁷ 本論第 3 章 2.1 4.
²⁶⁸ 本論第 3 章 2.1 5.
²⁶⁹ 本論第 3 章 2.1 6.

ウィーン原版同様 1819 年に出版されたロンドン原版は、すぐ翌年の 1820 年に「訂正版」²⁷⁰ が出版された。その訂正内容は、前節で触れた通り、おそらくウィーン原版をもとにミスが修正されたと考えられている。しかしその修正のあとも、楽章順などに代表されるように、明らかにロンドン原版を引き継いだ楽譜となっている。その後、このプレートは **Cramer** 社に買い取られ、モシェレス版（1841 年出版）²⁷¹として出版された²⁷²。つまりこれも、ロンドン原版系統に属する楽譜である。ここまでが、ロンドン原版から直結するエディションである。

次は、上記の後を引き継いだと考えられるエディションを整理していく。モシェレスが校訂した楽譜は、**Cramer** 社出版の他にも複数存在するが、その中でも **Holle** 社から出版されたモシェレス版が、リスト版（1857 年出版）²⁷³の底本になった²⁷⁴。つまりリスト版は、「間接的にロンドン原版を底本」にしているエディションである。しかしこの版は、ウィーン原版の楽章順を採用するなど、ロンドン原版のみで構成されるものではなく、二つの原版の混在が見られる楽譜であった。ウィーン原版の系譜の時に名前を挙げた、1858 年出版のモシェレス版の時にも同じことが言えたが、つまり 1857～58 年あたりから、二つの原版を混在させる楽譜が出てきたと見られる。これらの楽譜の存在を見ると、出版当時には二つの作品像を持っていた **Op. 106** が、徐々に一つの作品像へと融合していくといった受容の様相が浮かびあがってくる。実際この時期を境に、のちのエディションでは多かれ少なかれ、二つの原版の混在が見られた。しかも、それらは無意識に起こったものばかりでない。リストの弟子のビューローによる版は、ウィーン原版系統でも名前を挙げたが、ロンドン原版系統にも分類できるエディションである。多くの箇所ですりリストの版の要素を引き継ぎ、旧全集やウィーン原版をもとにしながらも、ロンドン原版の要素を積極的に採用していたのである。また、「多くのソースを比較校合するという学問的な校訂作業を行って編集された」というダム版（1878 年出版）²⁷⁵は、二つの原版を両方とも「原版」として捉えた上で、ロンドン原版を積極的に採用した楽譜であった。こうした流れは、驚くべきことに現代の「原典版」にまで引き継がれた。

二つの原版の混在は、なぜ起こったのだろうか。それはひとえに、「ロンドン原版」のも

²⁷⁰ 本論第 3 章 2.2.

²⁷¹ 本論第 3 章 2.3.

²⁷² Tyson 1962, p. 236.

²⁷³ 本論第 3 章 2.5.

²⁷⁴ Bartels 2002, p. 378.

²⁷⁵ 本論第 3 章 2.10.

つ重要性ゆえであると言えよう。本論第1章で見たように、ロンドン原版は、ベートーヴェンの意向が大いに反映されており、ウィーン原版に劣らないオーセンティシティをもっている。混在が見られた全てのエディションが、ロンドン原版を意図的に採用したかどうかは定かではないものの、ロンドン原版のそうした位置を意識した上で、ロンドン原版を採用したエディションは確かに存在し、それらを通して、後世へと受け継がれていったのである。

「原典主義」に立つ我々は、こうした混在を受け入れるべきでないが、ここから明らかになったロンドン原版の意義を踏まえた上で、二つの作品像のあり方を正しく理解し、選択していくべきであろう。

第4章 二つの原版の相違に見る演奏解釈の可能性

本章では、これまで見てきたロンドン原版の重要性や意義を踏まえた上で、二つの原版を等しく重要であると見なし、その相違に見るそれぞれの解釈の可能性を提示する。

1. 楽章順について

ウィーン原版は「第1→第2→第3→第4楽章」であり、ロンドン原版は「第1→第3→第2楽章」と単独の「第4楽章」の形である。この楽章順に関しても、これまで多くの先行研究の中で様々な解釈が示されてきた。ここでは代表的なものを提示した上で、考察したい。それらは大きく分けて二つの立場に分類できよう。

一つ目の立場は、ロンドン原版の作品像は考えられないというものである。こうした立場は、その論拠の一つとして Op. 106 の作曲工程に着目する。Op. 106 は、本論序章でも述べたように、まず最初の二つの楽章が完成し、その後、時間を空けて、第3楽章、第4楽章が作曲されたが、最初の二つの楽章だけで出版することも可能であった状況の中で、あえて第3楽章と第4楽章を作曲したその背景に、ベートーヴェンの「精神の神秘的な意志」があったと考えている²⁷⁶。つまり、ベートーヴェンの無意識が作曲させ完成した楽章順を入れ替えたり、切り離して独立させたりするなどあり得ないと結論づけるのである。

二つ目の立場は、ロンドン原版の形もあり得る一つの作品像であったとするものである。ここでの論拠も、先ほど同様に Op. 106 の作曲工程にある。この立場は、最初の二つの楽章が完成してから、時間を空けて第3、第4楽章を作曲したのであれば、四つの楽章の「有機的なつながりは[……]彼の精神において、それほど密接なものではなかった」と考える。さらに、第3楽章にあとから足された冒頭の第1小節目に関しても、ロンドン原版の楽章順が、密接に関連している可能性があるとする²⁷⁷。

ロンドン原版を底本とする本論の立場では、二つ目の捉え方を採用することになるだろう。筆者は、この第3楽章の第1小節目に関する考察に、特に共感を覚えた。ロンドン原版の楽章順で演奏する場合に、この第1小節目があるか無いかで、その繋がり大きく異なる。もしこの第1小節目が挿入されていなければ、ロンドン原版の楽章順では、作品と

²⁷⁶ Rolland 1966: Romain Rolland, *Beethoven: Les grandes époques créatrices*, Paris: A. Michel, pp. 594-595.

²⁷⁷ Cooper 1970: Martin Cooper, *Beethoven: The Last Decade 1817-1827*, London; New York: Oxford University Press, p. 164.

して成り立たないと言えるほどである。

ロンドン原版の楽章順を採用し演奏する上で、ウィーン原版と大きく異なる点を述べたい。ウィーン原版で演奏する場合、その全体構造は、全4楽章という形ではありながらも、大きな3楽章構成とも捉えられる。つまり、B-Durの第1楽章と、同じくB-Durの第2楽章とでひとつの大きな冒頭楽章、続く第3楽章が中間楽章、そして最後に第4楽章の終楽章といった形である。この解釈をもとにすると、第1楽章の終わりから第2楽章の始めは、あまり時間をかけずに入る方が自然であるように思われる。一方のロンドン原版では、堂々たる第1楽章を終えた先に待っているのは、fis-MollのAdagioであり、それも第1楽章にあった堂々たる明るいイメージからは程遠い、深遠な精神世界である。そこには大きなギャップがあるため、すぐにその世界に入ることはできないことから、たっぷりと間を取る必要があるであろう。

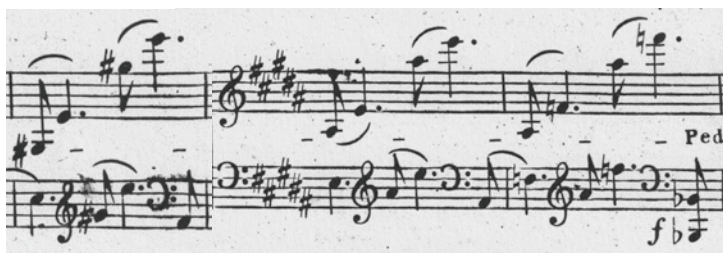
ウィーン原版のAdagioは、大きな冒頭楽章を終えた後に到達するため、それはゆっくりとしたテンポで演奏されても良いだろう。しかしロンドン原版のAdagioは、第1楽章を終えた後すぐに到達し、さらにその後にくる終楽章のScherzoは、スピーディに曲を閉じることから、Adagioがあまりにたっぷりと演奏されてしまうと、全体のバランスが保てなくなる心配がある。ロンドン原版のAdagioで求められるのは、挟まれた両方の楽章の明るいイメージの間で、「静」の雰囲気演出することだろう。よって、テンポ設定は遅すぎることなく、また歌い方は大げさにならずに、演奏されるべきであると考えられる。

これまで本論で見てきたように、ロンドン原版は、現代に至るまで重要な位置にあり続けた一方で、その楽章順を採用し演奏する立場は、受容のごく初期にしか見られなかった。このことを踏まえると、楽章順も含めたロンドン原版の形を採用する立場は、20世紀以降の受容史においては「新しい」演奏像のあり方として位置付けられるだろう。

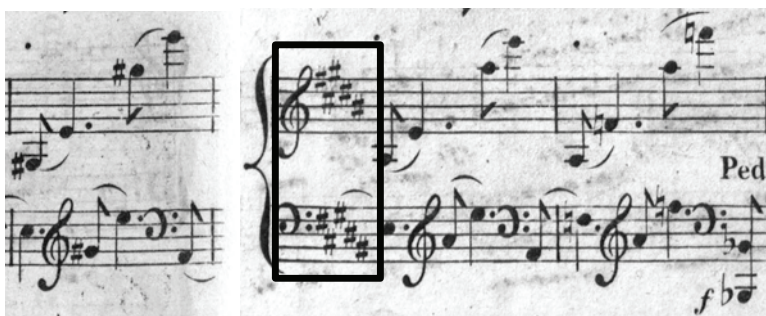
2. A-Ais 問題

このA-Ais問題についての概要は、第2章で示した通りである。これまでの研究では、二つの原版には調号によってAisが示されていることを前提として議論が続けられていたが、今回エディションを見ていく中で、ロンドン原版において興味深い点を発見した。注目すべきはその調号である。

【ウィーン原版】



【ロンドン原版】



驚くべきことに、ロンドン原版の該当箇所の調号は、5番目にあるはずのA#が、H#に替わっているのだ。しかも上段・下段ともである。単なるミスの可能性が高いのだろうが、他の小節を見てもそのような調号は存在していなかった。もし偶然であったとしても、このAかAisかと長年議論になっている箇所だけでこのような事態が起こったというのは、なんとも面白い。単なるミスとも思い難くなる。どの工程で生まれたミスかも不明であるため、全て憶測に過ぎないものの、ロンドン原版の出版において中心的役割を担っていたリースが、AisをAに訂正する意味合いでそのような調号へと変更した可能性もあるかもしれない。よって、ロンドン原版を底本とする本論の立場では、Aを演奏することになるう。

3. テンポ問題

この問題についての概要は、第2章で示した通りである。

ウィーン原典版（2018）には、メトロノーム記号についての論考が付されている²⁷⁸が、そこには、当時の楽器の特徴に関して斬新な見解が述べられている。

²⁷⁸ Sonnleitner 2018: Johann Sonnleitner, “Zu Beethovens Tempi und Metronomzahlen”. *Klaviersonate op. 106*. Vorwort, pp. V-IX. Ed. by Peter Hauschild. Wien: Wiener Urtext Edition, Mainz: Schott; Wien: Universal.

ベートーヴェンの時代のハンマークラヴィーアは、繰り返しの速度を1秒間に8タッチまで（1分間に480まで）許容する。セバスチャン・エラール 1821によって特許されたメカニックは、連打で1秒間に9,2（1分間に約552）タッチを目指している。即ち、Opus 106の第一楽章、Scherzo、Fugeのためのベートーヴェンのメトロノーム指示はその当時のウィーンの楽器の繰り返しの限度を超えている。技術が追いついてこないのである。²⁷⁹

ベートーヴェンは、楽器に対して人一倍興味を示し、そうした意味では革新的な姿勢をとることで知られるが、一方で、当時の楽器で存在しない音域を作品に使用することなどはなく、あくまでも目の前にある楽器で可能なことの中で創作をしていたとされる。しかし、上の指摘が本当であったとすれば、ベートーヴェンが当時の楽器では不可能なことを楽譜の中で指示したということになる。本当にそんな事実があるのだろうか。このことを確かめるため、筆者は2020年10月22日に国立音楽大学楽器学資料館にて、当時の楽器に近いものの試奏をさせていただいた。

試奏した楽器は、コンラート・グラーフ、1839年製のレプリカである。ウィーン式アクション（シングルエスケープメント）のこの楽器は、鍵盤が軽くて浅く、響きの明瞭さが特徴的だった。調査方法は、Op. 106の第1楽章を、ベートーヴェン指定のテンポ、二分音符=138をメトロノームでかけながら、筆者が演奏するというものである。先ほどの指摘が正しければ、このテンポでは楽器の構造上、演奏不可能ということになる。しかし結果的に、フォルテピアノの演奏に慣れていない筆者であっても、この指定テンポによる演奏は可能だった。むしろ、モダン・ピアノで演奏するよりも、軽く楽に打鍵できるような感覚すらあった。気温や湿度、その楽器の状態によって、もちろん結果は大きく変わってしまうような性質の話ではあるものの、やはり当時の楽器で不可能なテンポだったという見解は誤りであると言って良いだろう。

もう一つ、試奏した楽器がある。J. B. シュトライヒャー 1850年製のものである。これは、ビューローが活躍した時代（1850～60年代）の楽器に似たもので、先ほどの楽器と同じくウィーン式アクション（シングルエスケープメント）をもつが、鍵盤がとても重く、重厚な響きが特徴である。この楽器でも、同じく二分音符=138をかけながら、演奏をした結果、鍵盤が重すぎて連打が難しく、演奏不可能とも言える状態であった。これは、

²⁷⁹ Sonnleitner 2018, p. VI.

第2章で引用したビューローの言説²⁸⁰を裏付ける結果だった。

試奏を踏まえて明らかになった点をまとめる。二分音符=138というテンポは、当時の楽器で不可能なテンポではなかった。しかし、ツェルニーが「この作品で最も難しいのは、作曲家自身がつけた、異例に速い、燃えるようなテンポ指示 [……] を純粹に実践することである。」²⁸¹と述べていることや、ロンドン原版で四分音符=138と変更されていることから明らかのように、当時の人々にとっても「速い」と感じるテンポ指示だったことは確かである。さらに、時代を経るごとに豊かな響きを目指すようになるピアノの楽器の変化により、そのテンポ指示では、響きの面でも、鍵盤の重さの面でも、演奏不可能になっていった。

現代のピアノでは、楽器構造上の打鍵の面だけで考えるのであれば、そのテンポで演奏することは不可能ではない。だが、コンサートホールでのよく響く場での演奏や、演奏効果を考慮するとき、そのテンポでの演奏では、響きが混濁し、ただせわしないだけの演奏になってしまう危険性があり、やはり二分音符=138は、速すぎると考えられる。フォルテピアノ奏者、小倉貴久子氏にOp. 106についてのお話を伺った際、このテンポに関して次のようなお返事をいただいた。「この驚異的な速さは、ベートーヴェンの作品へのイメージだと思います。表出されるものがこの衝撃的な表現だと感じています。」²⁸²フォルテピアノや歴史的な奏法に精通されている方でも、このテンポを「速い」と捉えていらっしゃることは、樂器的には演奏が可能であっても、そのベートーヴェンの指定するテンポの数値に、ただ無批判に従うという姿勢は、やはり正しいものではないということを感じた。

この考え方は、ロンドン原版の指示と一致するだろう。しかし、ロンドン原版を採用する際にも、その数値をそのまま受けとることは無意味であるように思われる。モシェレスが指摘したように、ロンドン原版の「四分音符 [=138] は、樂章をあまりに遅くする」からである。つまり、「二分音符=138」から想起されるイメージを大切にしながら、その数値に縛られない姿勢をとることが、ロンドン原版を採用する際の適切な姿勢であると考え

²⁸⁰ ♩=138は、どのように考えても第1樂章のどっしりとした重厚なエネルギーの表出には速すぎる。多分これは当時のウィーン流行の、響きの欠如したピアノでは正当化されるものであっても、現代のモダンなコンサートピアノでは、[……] 混乱したぼんやりとした印象しか与えられない。(Ed. Bülow 1871, p. 23.)

²⁸¹ Czerny 1839: Carl Czerny, *Die Kunst des Vortrags der altern und neuen Claviercompositionen. Oder: Die Fortschritte bis zur neuesten Zeit. Supplement (Oder 4ter Theil) zur grossen Pianoforte-Schule. In 4 Capiteln. Nebst einem Verzeichniss der besten Clavierwerke aller Tonsetzer seit Mozart bis auf die neueste Zeit, zur Erleichterung der Auswahl für Lehrer, Schuler, Künstler und Dilettanten. Op. 500*, Wien: A. Diabelli u. Comp, p. 65.

²⁸² 2020年8月17日(木)のメールより引用。

る。

4. 楽器学の観点から

4.1. 音域の問題

ロンドン原版には、第1楽章の一部分で、**Ossia** が見られる。それは、 c^4 音を超える音域が出てくる箇所である。**Ossia** に、ベートーヴェンオリジナルの形が入れられ、ロンドン原版独自の変更されたモチーフが通常の五線上に記された形である。これはおそらく、ロンドンの楽器における音域の制約によるものであり、その対処として、リースが作成したものであるとされている²⁸³。当時の楽器の音域の制限による変更であるため、それをモダン・ピアノで採り入れることは何も意味をもたない。よって、ロンドン原版を採用する本論の立場であっても、それに従うことはしない。しかし、ここで注目しておきたいのは、たとえ **Ossia** に入れられたとしても、ベートーヴェンによる元の形を楽譜上に書き残している点である。もし本当にリースがこれを作成したのであると仮定すれば、ベートーヴェンから全権委任をされていた彼は、オリジナルの形を載せずに出版することも可能だったはずである。それでも、ベートーヴェンの書いた元のテキストを載せたという点に注目すると、そこに、オリジナルに忠実であろうとするロンドン原版の特徴が垣間見えるようである。これは、一見当たり前のことであるように思われるかもしれないが、ロンドン原版にある様々な要素が、第三者の恣意的な追加であるように語られがちなロンドン原版の側面を、見つめ直す重要な事柄であろう。

4.2. U.C. と T.C.

ウィーン原版とロンドン原版の異なる箇所、よく指摘される点として、**Adagio** における「U.C.」と「T.C.」の指示の有無が挙げられる。ウィーン原版に存在するこれらの指示は、ロンドン原版には一切存在していない。

この問題の背景について **Gertsch** は、「それらの指示は銅版原本にはなかったし、ベートーヴェンによる後からの補足である」と述べている²⁸⁴。つまり、ウィーンで後から追記された指示だったがために、ロンドン原版には存在していなくて当然であることを示唆している。

²⁸³ Wiener Urtext Edition 2018, “Vorwort” p. III.

²⁸⁴ Gertsch 2001, p. 84.

しかし、これとは違う見解を示すものもある。Jochen Reutter は、ロンドン原版にも「U.C.」と「T.C.」の指示は既にも書き込まれていた可能性を主張している²⁸⁵。というのも、ウィーン原版にあるペダル操作の指示は、ロンドン原版に全く存在しないのではなく、一部不完全な形ではありながらも存在するからである。詳細を見てみよう。ウィーン原版には、Adagio の 76 小節目以降に「poco a poco due e lora T:C:」という「次第に 2 本弦から、全ての弦へ」という指示が見られるが、一方のロンドン原版では「poco a poco due e lora」という不完全な形での記載が見られる。

【W】



【L】



ロンドン原版のその指示では、「T.C.」が抜け落ちているため、「次第に 2 本弦を経て…」という意味になるだろうか。つまり、こうした断片的な指示では、当然殆ど意味が見出せないのである²⁸⁶。こうした例をもとに導き出されたのが、当初はロンドン原版にも書き加えられていた「U.C.」と「T.C.」の指示が意識的に外された可能性である。加えて Reutter は、その背景に、当時のロンドンの楽器の機構が関連しているのではないかと指摘する。

当時のウィーンのハンマークラヴィーア [楽器] では、銀のような音色を出す Una-corda の使用は、19 世紀初めのイギリスのクラヴィーアでは、遥かに小さな音色変化を引き出すに過ぎなかった [……]。²⁸⁷

²⁸⁵ Wiener Urtext Edition 2018, “Vorwort” p. III.

²⁸⁶ Gertsch 2001, p. 84.

²⁸⁷ Wiener Urtext Edition 2018, “Vorwort” p. III.

しかし今回、エディション比較をする中で、ロンドン原版のすぐ翌年に出版された「L訂正版」を見ると、そこには「U.C.」と「T.C.」の指示が補われていた。たった1年くらいのことで、一般に広く使われる楽器に変化が見られることは考えにくいいため、そうなる
と Reutter の見解には多少の疑問が残る。ロンドン原版にも確認できた不完全な状態の指示の存在から、当初はロンドン原版の中にも存在していた「U.C.」と「T.C.」を、何らかの理由で意図して外したとする見解自体には説得力があるように思われるが、一方でその背景に楽器の機構が関係していたかは、定かでないと言えるだろう。

では、ロンドン原版を底本とする本論の立場では、「U.C.」と「T.C.」をどのように扱うべきだろうか。ロンドン原版にあった不完全な指示「poco a poco due e lora」の存在を見ると、やはりロンドン原版では何らかの理由で「U.C.」と「T.C.」の指示を断念せざるを得なかったように感じられる。また、その翌年出版されている「L訂正版」には補われていることから、「U.C.」「T.C.」は必要不可欠なものであると捉えられよう。よって、ロンドン原版を底本としても、「U.C.」「T.C.」の指示には忠実になるべきであろう。

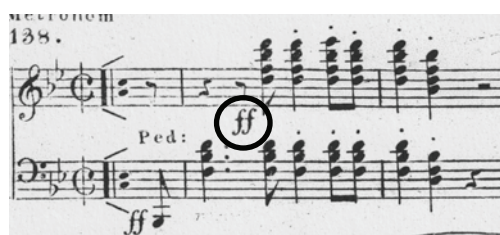
5. エディション比較から

5.1. sf と ff

ウィーン原版とロンドン原版を比較すると、ウィーン原版で「ff」と示す箇所、ロンドン原版では「sf」と示すという場合が多く存在する。これに関しては、本論第1章の2.2.でも少し触れたが、Fischerによるとロンドン原版の筆写を担当したランブルの書く特徴的な「ff」を、ロンドン原版の彫版師が「sf」と読み間違い、そう記した結果であるという²⁸⁸。Fischer が、その根拠として例に挙げるのは以下の2箇所である。

第1楽章の冒頭

【W】



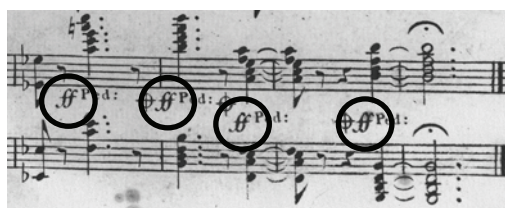
【L】



²⁸⁸ Fischer 2016: Johannes Fischer, *Ludwig van Beethoven Große Sonate für das Hammerklavier op. 106*, Begleitheft, Prien am Chirmsee: Edition Johannes Fischer, p. 5.

第4楽章の最後（第397～399小節目）

【W】



【L】



こうした例は、筆者が確認した限りでは上記の2箇所を含めて16箇所²⁸⁹存在する。Fischer (2005) では、この全ての箇所でも W を採用するが、その中には3つのパターンがあった。(1) かつての1975年版からもともと W を採用していた箇所、(2) 1975年版では L を採用していたが W へと変更した箇所、(3) 1975年版で L を採用していたところに、2005年版では新たに W の要素も併記するようになった箇所である。それぞれの例を一箇所ずつ挙げておく。

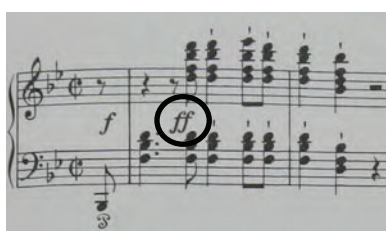
(1) 1975年版からもともと W を採用していた箇所

先ほど挙げた第1楽章の冒頭は、1975年版でも、2005年版でも W を採用している。

【1975年版】



【2005年版】



(2) 1975年版では L を採用していたが W へと変更した箇所

先ほど挙げた第4楽章の最後の部分（第397小節目～399小節目）は、1975年版では L が採用されていたが、2005年版において W へと変更された例である。

【1975年版】



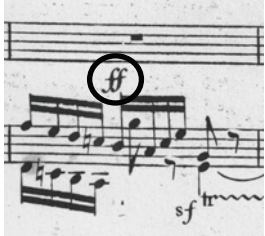
【2005年版】



²⁸⁹ 以下に挙げる小節がその箇所である。それぞれについては、巻末の「エディション比較表」を参照されたい。第1楽章 冒頭／＼ T. 91／＼ T. 120a／＼ T. 383／第4楽章 T. 52／＼ T. 196／＼ T. 208／＼ T. 229／＼ T. 235／＼ T. 248／＼ T. 294／＼ T. 300／＼ T. 301／＼ T. 365／＼ T. 369／＼ T. 397-399。

(3) 1975年版でLを採用していたところに、2005年版では新たにWの要素も併記するようになった箇所

第4楽章の第294小節目は、もともとLを採用し「sf」のみの表記だったが、2005年版ではWの「ff」も併記してある。

【W】	【L】	【1975年版】	【2005年版】
			

本論で比較した他の様々なエディションでも、Wの「ff」で意見が一致する箇所もあれば、Lの「sf」を採用するなど意見が割れる箇所も存在する。結果として、正解を導き出すことが難しい問題であることが改めて認識させられる。

では演奏解釈を行う前に、「sf」と「ff」の奏法について、当時どのように理解されていたのかを整理しておこう。現代において「sf」といえば、その音を強調する意味で用いられ、「ff」は付されたところの音楽全体の強弱記号として「とても強く」を意味することが多いと言えよう。またこの二つを比較すると、瞬発的な強さの点では「ff」よりも「sf」の方がより強いイメージがあろう。

この認識は、ベートーヴェンよりも前のモーツァルトの時代から共通していたようである。というのも、「sf」は一種のアクセントとして認識されていた。アクセントの中でも特に、「一番強い形、時として forte の頂点」²⁹⁰であった。つまり「sf」と示された箇所は、その音を特に強く演奏すると解釈して良さそうである。

二つの原版の sf と ff とが問題になる箇所は、アクセント的にある音に付される箇所もあれば、付された箇所の音楽全体の強弱記号として捉えられるような箇所も存在する。例えば、先ほど見た第4楽章の最後は、アクセント的にある音に付される例として挙げられよう。逆に、第1楽章の冒頭は、音楽全体の強弱記号であるように思われる。

本論の立場は、ロンドン原版を底本にするため、ベートーヴェンによる「訂正リスト」などに言及がなく、明らかな誤りであると判断されないものは、ロンドン原版を採用する。「訂正リスト」には残念ながら、この「sf」か「ff」かが問題になる箇所について手掛かり

²⁹⁰ エファ&パウル・バドゥラ＝スコダ 2016 『新版 モーツァルト 演奏法と解釈』今井頭監訳、堀朋平・西田紘子訳 東京：音楽之友社 p. 88。

になるような記述は見られないため、どちらが正しいのか、答えを出すことは難しい。しかし、「sf」をアクセントとして捉えるという視点を軸に考えるのであれば、ある音に付されるものは「sf」と判断し、その音楽全体の強弱を指す箇所は ff と捉えることは可能かもしれない。したがって、ロンドン原版にある「sf」が、ある音に付されているような箇所では、それを採用し演奏する。

5.2. 強弱記号

ロンドン原版にしか見られない要素として、強弱記号が挙げられる。例えば、第2楽章の冒頭、第3楽章の第53小節目、第4楽章の第204小節目を見てみよう。

第2楽章 冒頭

【W】



【L】



第3楽章 第53小節目

【W】

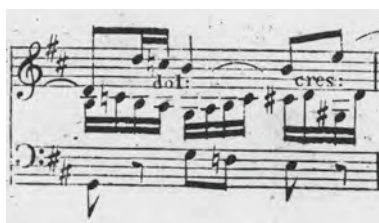


【L】



第4楽章 第204小節目

【W】



【L】



これらは、のちの多くのエディションの中でも重要なものとして採用されてきたことが、本エディション比較調査から明らかとなったが、Del Mar が校訂するベーレンライター版の校訂報告には、上に挙げた第4楽章の第204小節目に関して、次のような興味深い内容

が書かれている。

ベートーヴェンにとって、*dolce* はそれ自体がダイナミクスだった。[……]

ロンドン原版は、*p* を追加している。これはおそらく編集上の明確化である。²⁹¹

つまり、ロンドン原版にある強弱記号の「追加」は、意味あるものであった可能性を示唆している。こうした強弱記号が、ベートーヴェンによって書かれたわけではないのかもしれないが、ベートーヴェンをよく知る弟子のリースだったからこそ書くことのできた「明確化」だったというわけである。これを踏まえると、ロンドン原版を底本とする本論の立場ではなおさら、ロンドン原版にのみ存在する強弱記号も重要なものとして捉え、全てに忠実になる姿勢が望ましいだろう。

5.3. スラー・フレージング

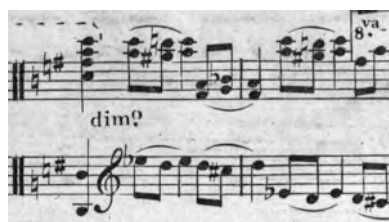
ロンドン原版には、ウィーン原版には見られないスラーやフレージングが多く存在する。代表的なものをここに挙げておこう。

第1楽章 第45～46小節目

【W】

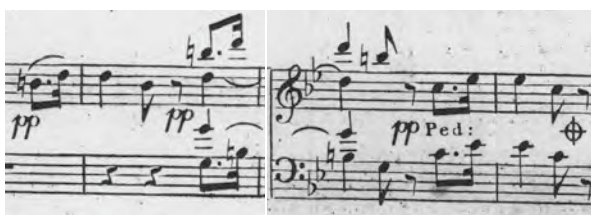


【L】



第2楽章 第39～42小節目

【W】



【L】



²⁹¹ Bärenreiter 2019, p. 64 (T. 204).

第4楽章 第161～162小節目

【W】



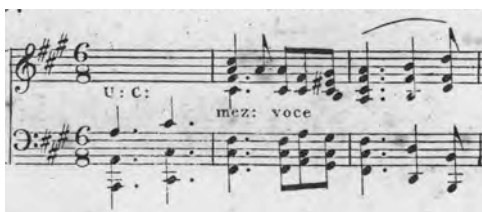
【L】



Gertsch は、ロンドン原版のみに見られるスラーについて、リースによる「改訂」や「校正」として捉え、それが「どれほど意味のあることであったとしても、ほとんどの場合にベートーヴェン自身に由来するものではない」²⁹²としている。その根拠として、第3楽章の冒頭を例に挙げている。詳しく見ていこう。

第3楽章 冒頭（第1～3小節目）

【W】



【L】



譜例に見る通り、ここにはロンドン原版にしか見られないスラーが多く存在している。Gertsch は、ベートーヴェンの書簡をもとに、ロンドン原版にあるスラーはベートーヴェンが意図したものではなく、ロンドンで「勝手に添えられたものである」²⁹³としている。その書簡の該当箇所²⁹⁴は以下の通りである。



これを見ると、Gertsch の指摘通り、ロンドン原版に見られるスラーは書かれていないことがわかる。特に第1小節目は、この書簡によって初めて追加が要求された小節であるため、そこにスラーがないにも拘らずロンドン原版にスラーが付されているという事実は、ロンドンで独自に追加されたことが窺える事柄であろう。しかし同時に注目したいのは、

²⁹² Gertsch 2001, p. 86.

²⁹³ Gertsch 2001, p. 85.

²⁹⁴ BGA 1309 (4, p. 278).

第3小節目にあるウィーン原版にしかないスラーも、この譜例の中には存在していない点である。ベートーヴェンが校訂作業にも携わったとされるウィーン原版に存在するスラーもまた、この書簡には示されていないのである。また、本論第1章の「一次資料の精査」で触れたように、ロンドン原版にのみ書かれた、正しいテキスト内容が存在したことを考慮にいったとき、書簡やウィーン原版にない要素が、正しいものである可能性も捨てきれない。これらを総合して考えると、追加された第1小節目は別としても、この書簡に示された中にスラーがないから、ロンドン原版にあるスラーは間違いであるとも言い切れないのではないか。つまり、Gertsch がそうしたように、第3楽章の第1小節目の例をもとにして、ここの箇所以外の全てのスラーにも応用し、答えを導き出すということは不可能であると言えよう。

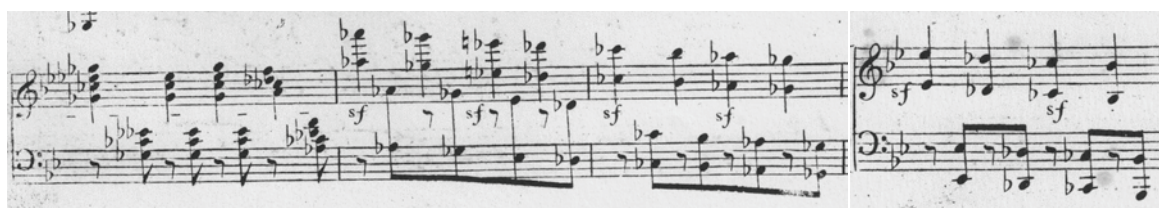
他方、受容という側面に目を向けてみると、ロンドン原版にあるスラーやフレージングは、のちの多くのエディションの中で、重要なものとして採用されてきたことが今回明らかになった。演奏史において受け継がれた事実があるから、それがイコール正しいと短絡的に考えることは危険であるものの、ここで今一度考えたいのは、ウィーン原版にも誤りがあるという事実と、「強弱記号」の項で述べたように、ロンドン原版における「追加」は意味あるものである可能性である。すなわち、ロンドン原版にのみ存在する全てのスラーが、リースによる独断のものであるとは言い切れず、同時に重要な要素である可能性が捨てきれない。

以上の理由から、ロンドン原版を底本とする本論の立場では、これらのスラーやフレージングにおいても、ロンドン原版に倣い演奏することとする。

5.4. スタッカート

ロンドン原版には、ウィーン原版にはないスタッカートが多く見られる。例えば、第1楽章の第258小節～第261小節目を見てみよう。

【W】



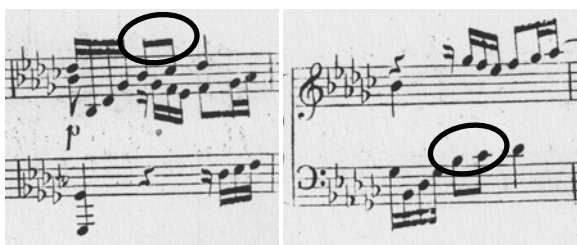
【L】



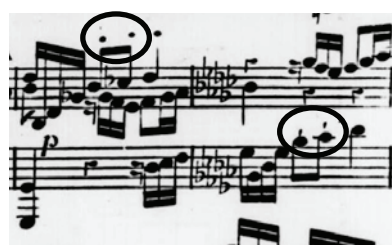
譜例を見て明らかなように、Wにはスタッカートはないが、Lの上段にはスタッカートが付されている。のちの多くのエディションでは、Lと一致するものが多かった²⁹⁵。しかし、Wに一致するものも無かったわけではなく、意見が割れている箇所とも言えよう。

もう一つ見てみよう。第4楽章の第85、86小節目である。

【W】



【L】

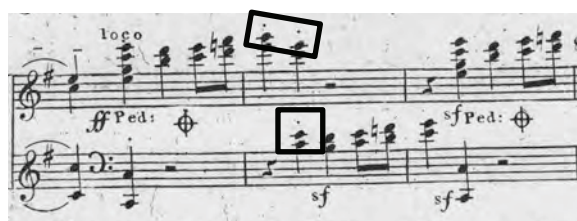


この箇所に関しても、のちの多くのエディションがLと一致しているものの、Wと一致するエディションも少なくない。つまり、ここに関してもまた、意見が割れている箇所である。ベートーヴェンによる訂正リストにも言及がないため、答えを導き出すことは難しい。ロンドン原版を底本とする本論の立場では、これらのスタッカートにも全て忠実な姿勢をとることになる。

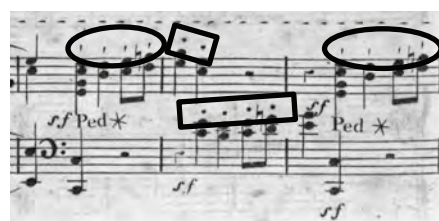
ロンドン原版のスタッカートにおいて、注目すべき点がある。それは、スタッカートが2種類存在する点である。「線」のスタッカートと「点」のスタッカートの存在を確認できた。これは、ウィーン原版には見られない区別である。いくつかの箇所を例に挙げてみよう。

第1楽章 第91～93小節目

【W】

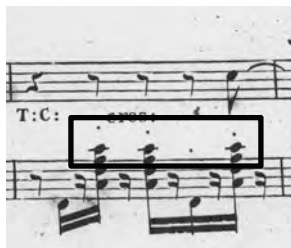


【L】

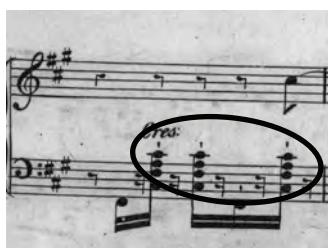


²⁹⁵ 巻末のエディション比較表を参照されたい。

【W】



【L】



この区別には意味があるのだろうか。児島新氏が提唱した「点」「線」スタッカートの区分²⁹⁶は有名な話であるが、ロンドン原版に見られるスタッカートの区別が、ベートーヴェンの一次資料に由来するものであれば、それは意味あるものとして捉えるべき重要な事項であろう。また、ロンドンのための筆写譜にあったスタッカートと、ロンドンでリースらが独自に補ったものとを区別した可能性も考えられよう。いずれにせよ、ロンドン原版にのみ見られるこうしたスタッカートの区別は、留意すべき事項である可能性がある。

5.5. ロンドン原版の特徴

これまで見てきたエディションの比較から明らかになるロンドン原版の内容の特徴をここに記し、本章を締めたい。

ロンドン原版は、ウィーン原版では「ff」とする箇所、「sf」と表記することが多い。この背景には、Fischerの推論のように、写譜師の書いた「ff」をロンドン原版の彫版師が「sf」と混同した結果である可能性が考えられるが、現存する一次資料からその明確な答えを導き出すことは困難である。

またロンドン原版には、ウィーン原版にはないスラーやフレージングが見られる。これらは、ウィーン原版を底本と考える Gertsch によると「どれほど意味のあることであったとしても、ほとんどの場合に、それはベートーヴェン自身に由来するものではない²⁹⁷」とされる。しかし、その後の多くのエディションでは、ロンドン原版にあるスラーやフレージングは重要なものとして受け継がれていた事実があった。また、現存する一次資料を見ても、ロンドン原版にある要素がベートーヴェンによるものではないと断言することはできない。逆にウィーン原版の正当性を証明するものも存在しなかった。

さらには、ロンドン原版にのみある強弱記号は、Del Mar が指摘したように、ベートー

²⁹⁶ 児島新 1985『ベートーヴェン研究』東京：春秋社 pp. 47-65。

²⁹⁷ Gertsch 2001, p. 86.

ヴェンの「くせ」を説明する意味合いが含まれた「重要な」加筆であった可能性も明らかになった。スタッカートの表記についても、「点」と「線」とで区別しているように見えるロンドン原版の表記は、強弱記号の例と同様に、意味ある「加筆・修正」として捉えられるかもしれない。

以上を踏まえると、ロンドン原版にしかない様々な表記の中に「ベートーヴェン」由来の、決して無視することのできない要素があることが改めて明らかになる。ロンドン原版は Op. 106 の作品像により深く迫ることを可能にしてくれる「重要な一次資料」なのである。

第5章 結論

本論ではこれまで、Op. 106 のロンドン原版とは何かという問いに対し、一次資料の精査、演奏史、エディションの調査をもとに考察してきた。以上を経て明らかになった点は、以下の通りである。

第一に、ロンドン原版のオーセンティシティである。Op. 106 のエディション問題は、特異な出版事情に加えて、一次資料のほとんどが消失しているという不運な状況が重なり、より複雑化していた。よって本論では、現存するものを精査し、それを踏まえて消失したものの内容についても可能な限り推論した。その結果、ロンドン原版が、ベートーヴェン自身の意向を大いに反映したもので、最も重要な資料のひとつであることが改めて明らかになった。書簡の精査からは、ベートーヴェンが弟子のリースに、ロンドンでの出版に関して全幅の信頼を置いていたことや、ロンドンにいるリースとのやりとりをスムーズに行えなかった様子、そしてそうした状況の中でもベートーヴェンがロンドン原版に自分の意向を強く反映させようと努めたことがわかった。訂正リストの精査からは、ロンドン原版がよりベートーヴェンの自筆譜に近い楽譜であった可能性と、ベートーヴェンの意向がより多く反映されているという意味でウィーン原版にも劣らないという肝要な事実が明らかになった。これにより、訂正リストには言及のない、二つの原版の様々な相違箇所、ロンドン原版を優先すべき可能性すら垣間見ることになった。さらに、訂正リストにおいて、ベートーヴェンがロンドン原版の楽章順で各楽章を呼ぶ箇所が存在していたことから、ロンドン原版の作品像も、ベートーヴェンが最後まで悩んだ一つのあり得る形であったことも明らかになった。

第二に、従来使用されてきたエディション、それも特に演奏で頻用されている楽譜に、二つの原版の要素が混在していたという事実である。このことから、ロンドン原版の影響力の大きさが明らかになった一方で、二つの原版の要素が断りもなく混在していたという問題視すべき点が浮き彫りになった。それが顕著に表れていたのは、ヘンレ版と従来のウィーン原典版である。特にヘンレ版においては、1953年に出版されたものには無い混在が、より後の1980年に出版されたものに見られるようになったという、見逃すことのできない重大な事実も明らかになった。演奏家に広く使用されてきたエディションだけに、それをもとにしたこれまでの多くの演奏は、無意識のうちに二つの原版を混在させてしまっていたことになる。

第三に、ロンドン原版は作品の伝承・受容にとって、とても重要な位置にあり、むしろ不可欠な存在として受け継がれてきたという事実である。まず、作品受容の初期においては特に、ロンドン原版の方が大きな影響力をもっていたことがわかった。この背景には、難曲である Op. 106 の演奏を可能にした人物がロンドン原版を手にしたことがあった。加えて、ベートーヴェンが提案したロンドン原版の作品像が、受容において功を奏したと言えるだろう。演奏批評から明らかになった、19 世紀当時の人々の Op. 106 に対する戸惑いを見ると、もし複雑なフーガが組み込まれた、長大かつ難解な作品像である「ウィーン原版」しか存在していなかったら、作品が受け入れられるまでにもっと時間がかかったかもしれない状況が窺えた。ロンドン原版の作品像があつてこそ、Op. 106 は少しずつ受け入れられるようになったと言っても過言ではない。その後、作品が知れ渡るようになると、ウィーン原版の方が一般的となった。この転換点では、いわゆる「原典主義」の考え方に則って出版された「旧全集」の存在が大きかった。その後の多くの「原典版」、「解釈版」の底本ともなり、ウィーン原版こそが最重要であるという考え方が揺るぎないものとして定着する原因となったと考えられる。しかしその一方で、ロンドン原版の要素は、多くのエディションの中に存在し、受け継がれた。20 世紀に入ってから、ロンドン原版を採り入れる楽譜や、ロンドン原版の価値を主張する立場は存在し続け、その結果として、二つの原版を混在させ融合した一つの作品像として受け継がれていったのである。その影響はいまや現代の「原典版」にまで及ぶようになった。つまり、Op. 106 の作品像において、ロンドン原版は無くてはならない存在であり、ロンドン原版を度外視して考えることなどはや不可能なのである。これこそが、ロンドン原版が本論において新たに獲得する意義である。

これら 3 点を踏まえると、演奏解釈にロンドン原版の要素を取り込むことは、第三者の恣意的な解釈を混ぜ込むということとは本質的に異なり、積極的に考慮されるべき事柄であることが明らかになる。しかしこれまでの多くのエディションのように、二つの原版を無自覚に混ぜてしまうことが、正しい姿勢であるとは言えない。ピアニストたちもまた、この二つの原版を精査し、正しく理解した上で、解釈を構築すべきだろう。つまり、Op. 106 のエディションの問題は、ピアニストが主体的に関わるべき問題であり、それを熟考して初めて Op. 106 を解釈し、演奏することができると言えよう。

Op. 106 の二つの原版をめぐるエディションの問題を考察してみると、ベートーヴェンの考える“作品像の在り方”の多様性が見えてくる。Op. 106 でベートーヴェンは、ウィ

ーンの原版、ロンドンの原版という二つの作品像の在り方を承認した。その背景に、経済的な状況が関係していることは確かであろうが、それを踏まえてもなお、二つの作品像を認めたという事実は、彼の書簡から確かに読み取れた。本論「はじめに」でも述べたように、ベートーヴェン作品において、Op. 106 ほどまでの作品像の変更に対し、彼自身が承認を与えた例は他に存在しないが、似たような例は存在する。例えば、《アンダンテ・ファヴォリ》(1803~1804 年作曲) がそれに該当するだろう。この作品は当初、ピアノ・ソナタ第 21 番《ワルトシュタイン》Op. 53 の第 2 楽章として作曲されたことで知られる。しかし、このソナタがあまりに長大すぎてしまうという友人からの忠告もあり、ソナタからは切り離し、独立した形で出版された。弦楽四重奏 Op. 133 《大フーガ》(1825~1826 年作曲) も似た例として挙げられよう。元々は、弦楽四重奏曲第 13 番の終楽章として作曲されたこの曲は、フーガの難解さゆえに不人気であったことが原因で、出版社から新たな終楽章を用意するよう言われ、このフーガは独立した形で出版されるに至った。さらに、上の二つの例とは年代も事情も異なるが、ピアノ協奏曲第 2 番 Op. 19 (1786 年作曲) も興味深い出版背景をもつ。作曲後、ベートーヴェン自身によって何度も改訂を重ねたことで知られるこの作品は、ベートーヴェンが出版時に「私の最良のものではありません」と記し、最後まで納得のいく形ではなかったことが示唆されている。つまり、これらの三つの例に共通するのは、ベートーヴェンの考える“作品像”に、決して「唯一のもの」が存在するわけではなかった点だ。これらの作品には、ベートーヴェンによって考案された作品像に、少なくともいくつかの可能性があったのである。

こうした例は、他の作曲家においては決して例外的なケースではない。例えば、ブラームス作曲のピアノ五重奏曲 Op. 34 は、その編成を、作曲家自身が 2 度も大きく変更したことが知られている。当初は弦楽五重奏のための作品だったが、のちに 2 台のピアノのためのソナタへと書き換え、さらにピアノ五重奏曲として書き直されたのが現在の形である。加えて興味深いのは、2 台のピアノのためのソナタはブラームス自身が気に入っていたために、その後 Op. 34b として出版もされている点である。似た例として、フランツ・リスト作曲の「メフィスト・ワルツ」が挙げられよう。この曲は、ピアノ作品でもあり、管弦楽作品でもある。またその両者は、どちらかの編曲版ではなく、各自独立した展開を見せる。つまり二つの作品像を示しているのである。

以上に見るように、複数の作品像に対して作曲家自身がオーソライズしたという例は、他の作曲家の場合では広く知られたことで、特別なこととして捉えられないが、ベートー

ヴェンにおいては違う。つまり、ベートーヴェンが認めた作品像は「一つ」であると考えるのが一般的なのである。しかし、Op. 106 をはじめとした複数の例を見てみると、ベートーヴェンにも他の作曲家と似たような状況は存在していたことがわかり、ベートーヴェン音楽に唯一の正解を求める姿勢は、無意味であるとさえ言えるのではないか。だからといってベートーヴェンの意図を無視し、そこに恣意的な解釈を持ち込んで良いという話では勿論ないが、彼の一つの作品について考えるとき、ベートーヴェンによって考えられた“様々な作品像”についても今一度考察することで、その解釈の可能性は格段に広がる。その意味で、本論で考察した Op. 106 のロンドン原版の意義は、ベートーヴェンの他作品の解釈の在り方にも共通しうる、作品理解、演奏解釈への多角的な視点をもたらすことが期待される。

参考文献一覧

【洋書】

- Badura-Skoda, Paul. 2012. "Should we play A^b or A[#] in Beethoven's 'Hammerklavier' sonata, Opus 106?", *Notes, Vol. 68, No. 4* (June 2012), pp. 751-757. Music Library Association.
- Bartels, Ulrich. 2002. "Zwischen Ausgabe und Quelle. Zu den Beethoven-Editionen von Franz Liszt und Ignaz Moscheles mit textkritischen Überlegungen zur Hammerklaviersonate B-Dur op. 106", *Musikalischen Quellen – Quellen zur Musikgeschichte. Festschrift für Martin Staehelin zum 65. Geburtstag*. Ed. by Ulrich Konrad. pp. 375-390. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Birkin, Kenneth. 2011. *Hans von Bülow. A Life for Music*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brandenburg, Sieghard. (Ed.) 1996~. *Briefwechsel Gesamtausgabe*. Bd. 1, 2, 4. München: G.Henle.
Copyright © 1996~ by G. Henle, München
- Cooper, Martin. 1970. *Beethoven: The Last Decade 1817-1827*. London; New York: Oxford University Press.
- Czerny, Carl. 1839. *Die Kunst des Vortrags der altern und neuen Claviercompositionen. Oder: Die Fortschritte bis zur neuesten Zeit. Supplement (Oder 4ter Theil) zur grossen Pianoforte-Schule. In 4 Capiteln. Nebst einem Verzeichniss der besten Clavierwerke aller Tonsetzer seit Mozart bis auf die neueste Zeit, zur Erleichterung der Auswahl für Lehrer, Schuler, Künstler und Dilettanten. Op. 500*. Wien: A. Diabelli u. Comp.
- Dorf Müller, Kurt, Norbert Gertsch und Julia Ronge. 2014. *Ludwig von Beethoven. Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis*. Revidierte und wesentlich erweiterte Neuausgabe des Verzeichnisses von Kinsky, Georg und Halm, Hans. München: G. Henle.

- Ellsworth, Therese. 2007. "Victorian Pianist as Concert Artists: The Case of Arabella Goddard (1836- 1922)." *The Piano in Nineteenth-Century British Culture. Instruments, Performers and Repertoire*. Chapter 7. pp. 149-169. Aldershot, England; Burlington, VT : Ashgate.
- Fischer, Johannes. 2016. *Ludwig van Beethoven Große Sonate für das Hammerklavier op. 106*. Begleitheft. Prien am Chirmsee: Edition Johannes Fischer.
- Fétis, F. –J. 1878. "GODDARD" *Biographie universelle des musiciens et bibliographie générale de la musique. Tome Premier*. p. 396. Bruxelles: Culture et Civilisation.
- . 1880. "MORTIER DE FONTAINE" *Biographie universelle des musiciens et bibliographie générale de la musique. Tome Second*. pp. 243-244. Bruxelles: Culture et Civilisation.
- Gertsch, Norbert. 2001. "Ludwig van Beethovens ‚Hammerklavier‘-Sonate Op. 106. Bemerkungen zur Datierung und Bewertung der Quellen". *Bonner Beethoven Studien*, Bd. 2. pp. 63-93. Bonn: Beethoven-Haus.
- Hinrichsen, Hans-Joachim. 1999. *Musikalische Interpretation Hans von Bülow*. (Beihefte zum Archiv für Musikwissenschaft. Band XLVI.) Stuttgart: Steiner.
- Kinsky, Georg und Hans Halm. 1955. *Das Werk Beethovens. Thematisch-Bibliographisches Verzeichnis seiner sämtlichen vollendeten Kompositionen*. München: G. Henle.
- Leitzmann, Albert. (Ed.) 1921. *Ludwig van Beethoven: Berichte der Zeitgenossen, Briefe und persönliche Aufzeichnungen*. II. Leipzig: Insel.
- Lenz, Wilhelm von. 1860. *Beethoven. Eine Kunst-Studie V*. Hamburg: Hoffman & Campe.
- Marston, Nicholas. 2013. *Heinrich Schenker and Beethoven's 'Hammerklavier's Sonata*. Farnham, Surrey, England; Burlington, VT : Ashgate.
- Moscheles, Ignaz. 1841. *Life of Beethoven, II* . London: William Clowes and Sons.
- Newman, William S. 1969. "Some 19th-century consequences of Beethoven's Hammerklavier sonata, opus 106." *Piano Quarterly*, 18(67), spring, 1969. pp. 12-18.

- . 1972. "Liszt's Interpreting of Beethoven's Piano Sonatas." *Musical Quarterly* 58. pp. 185-209.
- Nohl, Ludwig. 1867-1877. *Beethovens Leben*. III. Leipzig: J. Günther.
- Oppermann, Annette. 2001. *Musikalische Klassiker-Ausgaben des 19. Jahrhunderts. Eine Studie zur deutschen Editions-geschichte am Beispiel von Bachs Wohltemperiertem Clavier und Beethovens Klaviersonaten*. Güttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Ramann, Lina. 1894. *Franz Liszt, Als Künstler und Mensch*. Leipzig: Breitkopf & Härtel.
- Reinecke, Carl. 1897. *Die Beethoven'schen Clavier-Sonaten*. Leipzig: Verlag von Gebrüder Reinecke.
- Riezler, Walter. 1936. *Beethoven*. Berlin: Atlantis.
- Rolland, Romain. 1966. *Beethoven: Les grandes époques créatrices*. Paris: A. Michel.
- Rosen, Charles. 1997. *The Classical Style*. New York: W.W. Norton.
- Schröter, Axel. 1999. "Der Name Beethoven ist heilig in der Kunst". *Studien zu Liszts Beethoven-Rezeption*. Sinnzig: Studio.
- Schünemann, Georg. 1941-1943. *Ludwig van Beethovens Konversationshefte* III. Berlin: M. Hesse.
- Sonnleitner, Johann. 2018. "Zu Beethovens Tempi und Metronomzahlen". *Klaviersonate op. 106*. Vorwort. pp. V-IX. Ed. by Peter Hauschild. Wien: Wiener Urtext Edition, Mainz: Schott; Wien: Universal.
- Sterba, Editha and Richard. 1954. *Beethoven and His Nephew*. New York: Pantheon.
- Thayer, Alexander Wheelock., rev and ed. Elliot Forbes. 1964; rev. ed. 1967. *Thayer's Life of Beethoven*. 2 vols. Princeton, N. J.: Princeton Univ. Press.
- Tovey, Donald Francis. 1931. *A Companion to Beethoven's Pianoforte Sonatas*. London: The Associated Board of the R. A. M. and the R. C. M.
- Tyson, Alan. 1962. "The Hammerklavier Sonata and its English Editions". *The Musical Times* 103. pp. 235-237.
- . 1963. *The Authentic English Editions of Beethoven*. London: Faber and Faber.

【和書】

- Kerman, Joseph, Alan Tyson. 1994. 「ベートーヴェン、ルートヴィヒ・ヴァン」
平野昭訳 『ニューグローヴ世界音楽大事典』 第 16 巻 142-83 頁 東京：講談社
- Searle, Humphrey. 1994. 「リスト、フランツ」 野本由紀夫訳 『ニューグローヴ世界音楽大事典』 第 19 巻 380-416 頁 東京：講談社
- Warrack, John. 1994. 「ビューロ、ハンス（・グイード）・フォン」 本田脩訳 『ニューグローヴ世界音楽大事典』 第 14 巻 246-247 頁 東京：講談社
- エファ&パウル・バドゥラ＝スコダ 2016 『新版 モーツァルト 演奏法と解釈』
今井顕監訳、堀朋平・西田絃子訳 東京：音楽之友社
- 大崎滋生 2018 『ベートーヴェン像 再構築』 東京：春秋社
- カイザー・ヨーアヒム 1985 『ベートーヴェン 32 のソナタと演奏家たち 下』
東京：春秋社
- かげはら史帆 2020 『ベートーヴェンの愛弟子 フェルディナント・リースの数奇なる運命』 東京：春秋社
- 加畑奈美 2020 「ベートーヴェンのピアノ・ソナタの Op. 106 のイギリス原版とその重要性について—そのリスト版、ビューロー版への影響の検討を通して—」 『国立音楽大学音楽研究大学院研究年報第 32 輯』 209-224 頁
- 2021 「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106 とハンス・フォン・ビューロー」 『国立音楽大学音楽研究大学院研究年報第 33 輯』 55-70 頁
- 越懸澤麻衣 2020 『ベートーヴェンとバロック音楽 「楽聖」 は先人から何を学んだか』
東京：音楽之友社
- 児島新 1985 『ベートーヴェン研究』 東京：春秋社
- ソロモン・メイナード 1992、1993 『ベートーヴェン（上）（下）』 徳丸吉彦、勝村仁子訳 東京：岩波書店
- 沼口隆 2014 「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106 『ハンマークラヴィーア』 の 2 つの初版とイギリス初版の意義」 『国立音楽大学研究紀要第 48 集』 25-33 頁
- ノッテボーム・グスターフ 1887 (1952) 『第二ベートーヴェニアーナ 上』 山根銀二訳
東京：音楽之友社
- 畑野小百合 2010 「A. シュナーベル校訂『ベートーヴェン ピアノ・ソナタ全集』に関する一考察」 東京学芸大学修士論文

藤本一子 2001「ハースリンガーによるベートーヴェン・ピアノソナタ全集の意義について」『国立音楽大学音楽研究所年報 14』 97-114 頁

———— 2002「ベートーヴェンのピアノソナタにおけるメトロノーム表示」『国立音楽大学音楽研究所年報 15』 139-154 頁

真嶋雄大 2011『ピアニストの系譜 その血筋を追う』 東京：音楽之友社

横原千史 2013『ベートーヴェン ピアノ・ソナタ全作品解説』 東京：アルテスパブリッシング

渡辺裕 2001『西洋音楽演奏史論序説 ベートーヴェン ピアノ・ソナタの演奏史研究』 東京：春秋社

【批評】

Concordia, Saturday, September 4, 1875, Vol. I, No. 19, pp. 299-300. Author: H. H. Stratham.

Dwight's Journal of Music, January 10, 1874. Vol. XXXIII, No. 20, p. 160. Author: [Anon.]

Dwight's Journal of Music, January 4, 1879, Vol. XXXIX, [Whole] No. 984, pp. 3-4. Author: [Anon.]

Erlebnisse mit Richard Wagner, Franz Liszt und vielen anderen Zeitgenossen nebst deren Briefen. 3rd ed. 1989. pp. 17-20.

Musikalisches Centralblatt, 4. März 1881, I. Jahrgang, Nr. 9, pp. 92-93. Author: E. Schelle.

Neue Zeitschrift für Musik, Leipzig, den 19. Februar 1864. LX. Band Sechzigster Band. No 8, pp. 63-64. Author: Y. v. A.

Neue Zeitschrift für Musik, Leipzig, den 29. Juli 1864. LX. Band Sechzigster Band. No 31, pp. 271-73. Author: L. Köhler.

Revue et gazette musicale de Paris, 1836 pp. 198-200. Author: Louis Hector Berlioz.

Revue et gazette musicale de Paris, 5 février 1860, 27e année, no 6, p. 44. Author: Adolphe Botte.

The Metronome: A Monthly Review of Music, February 1874, Vol. III, No. 11, p. 83. Author: [Anon.]

The Musical World, April 23, 1853, Vol. XXXI, No. 17, pp. 253-254. Author: [Anon.]

The Musical World, April 23, 1853, Vol. XXXI, No. 17, pp. 255-256. Author: [Anon.]

The Musical World, April 23, 1853, Vol. XXXI, No. 17, pp. 257-258. Author: Brinley Richards.

The Musical World, May 9, 1857, Vol. 35 - No. 19, pp. 298-299. Author: [Anon.]

The Musical World, March 23, 1867, Vol. 45 - No. 12, pp. 174-177. Author: [Anon.]

【楽譜】 すべて L. v. Beethoven 作曲の Op. 106 である。表記は出版年順である。

Op. 106, Klaviersonate B-Dur. Wien: Artaria und Comp. 1819.

© Österreichische Nationalbibliothek (SH.Beethoven.427)

© Österreichische Nationalbibliothek (L18.Kaldeck MS40122-4°)

(IMSLP でも閲覧可能 : <http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/8/89/IMSLP51318-PMLP01486-Op.106.pdf>

; 2021 年 8 月 2 日確認)

Grand Sonata, for the Piano Forte. (Part 1) *Introduction & Fugue, For the Piano Forte*.

(Part 2) London: The Regent's Harmonic Institution. 1819.

© British Library Board (Music Collections h. 376.)

Grand Sonata, for the Piano Forte. (Part 1) *Introduction & Fugue, For the Piano Forte*.

(Part 2) London: The Regent's Harmonic Institution. [1820].

(IMSLP でも閲覧可能 : http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/3/38/IMSLP689925-PMLP1486-D1689-20_001

-converted-compressed.pdf ; 2021 年 8 月 25 日確認)

Große Sonate für das Hammer-Klavier op. 106. Zweite Original Ausgabe.

Wien: Artaria und Comp. 1856.

© Bayerische Staats Bibliothek (BSB-ID 1887000)

Sonaten für das Pianoforte solo. Erste vollständige Gesamtausgabe.

Unter Revision von Franz Liszt. Wolfenbüttel: L. Holle. not before 1857.

© Bayerische Staats Bibliothek (BSB-ID 12567726)

Grand Sonata. For the Pianoforte. Op. 106. Ed. by Ignaz Moscheles.

London: Cramer, Beale & Co, [1858, etc].

© British Library Board (Music Collection h. 395.)

Ludwig van Beethovens Werke, Serie 16, Nr. 152 (pp. 55-96)

Leipzig: Breitkopf und Härtel. 1862-65.

(IMSLP でも閲覧可能 : <http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/a/a7/IMSLP51803->

[PMLP01486-Beethoven_Werke_Breitkopf_Serie_16_No_152_Op_106.pdf](http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/a/a7/IMSLP51803-PMLP01486-Beethoven_Werke_Breitkopf_Serie_16_No_152_Op_106.pdf); 2021年8月15日確認)

Sonate für das Pianoforte. (pp. 23-74) Ed. by Hans von Bülow. Abdruck New York: Edward Schuberth & Co. 1891. (Stuttgart: J. G. Cotta. n. d. ca. 1875. Plate 35.)

(IMSLP でも閲覧可能 : <http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/5/57/IMSLP02020->

[Beethoven-op.106-cotta.pdf](http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/5/57/IMSLP02020-Beethoven-op.106-cotta.pdf) ; 2021年7月30日確認)

Complete Piano Sonatas (pp. 511-556) Ed. by Heinrich Schenker.

Wien: Universal Edition. 1918-21.

(IMSLP でも閲覧可能 : <http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/0/04/IMSLP00029->

[Beethoven,_L.v._-Piano_Sonata_29.pdf](http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/0/04/IMSLP00029-Beethoven,_L.v._-Piano_Sonata_29.pdf) ; 2021年8月6日確認)

ピアノ・ソナタ集 第3巻 148-206頁 ハロルド・クラクストン編 ドナルド・トーヴィ
注釈 山根銀二訳 東京：全音楽譜出版 1931

32 Sonate per Pianoforte Vol. 3. (pp. 117-190) Ed. by Artur Schnabel. Milan: Curci.
[ca. 1949].

(IMSLP でも閲覧可能 : <http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/1/1a/IMSLP502799->

[PMLP1486-Beethoven_\(ed._Schnabel\)_106.pdf](http://vmirror.imslp.org/files/imglnks/usimg/1/1a/IMSLP502799-PMLP1486-Beethoven_(ed._Schnabel)_106.pdf) ; 2021年8月6日確認)

Klaviersonaten Bd. 2. (pp. 227-272) Ed. by B. A. Wallner. München: G. Henle. 1953.

Copyright © 1953 by G. Henle, München

Große Sonate für das Hammerklavier B-dur Opus 106. Ed. by Johannes Fischer.

Leipzig: Peters, 1975. (Edition Peters Nr. 4029).

EP 4029: Copyright © 1975 by C.F. Peters, Leipzig

Sonaten, für Klavier zu zwei Händen. (pp. 229-274) Ed. by Claudio Arrau. Frankfurt:

H. Litolf's Verlag, New York; London: C. F. Peters. 1978.

EP 8100b: Copyright © 1978 by C.F. Peters, Leipzig

Klaviersonaten Bd. 2. (pp. 227-272) Ed. by B. A. Wallner. München: G. Henle. 1980.

Copyright © 1980 by G. Henle, München

Sonatas for Piano volume 2B (Sonatas 26-32) (pp. 64-113) Critically rev. ed. with explanatory annotations and fingering by Eugen d' Albert. New York; Carl Fischer, Inc. 1981.

Sonaten für Klavier Band 3 (pp. 78-132) Ed. by Peter Hauschild.

Wien: Wiener Urtext Edition, Mainz: Schott; Wien: Universal. 2001.

ピアノ・ソナタ 第29番 変ロ長調 作品106「ハンマークラヴィーア」編集・校訂 園田高弘 東京：春秋社 2003

Klaviersonate B-Dur Große Sonate für das Hammer-Klavier Opus 106, Ed. by Johannes Fischer. Prien: Fischer. 2005.

Klaviersonate op. 106. Ed. by Peter Hauschild. Wien: Wiener Urtext Edition, Mainz: Schott; Wien: Universal. 2018.

Grande Sonate in B dur op. 106. Ed. by Jonathan Del Mar. Kassel: Bärenreiter. 2019.

※ 転載に関して、Bärenreiter Verlag Kassel London New York Praha の許可を得ています。

(ベーレンライター校訂報告 西尾丈太訳 東京：アカデミア・ミュージック 2019)

[国立音楽大学附属図書館所蔵] 表記は出版年順である。[] 内 S 番号は資料番号である。

Grande Sonate pour le Piano-forte. Wien: Artaria und Comp. [not before 1819]. [S12-151]

Sämmtliche Sonaten für Pianoforte.[Title]. Ed. by J. Moscheles. Stuttgart: Eduard Hallberger. [1858]. [S11-458]

Clavier-Sonaten zu 2 Händen. Neue wohlfeile Original-Ausgabe. Wien: C. Haslinger. [ca. 1865]. [S11-460]

Sonaten. (Damm.) 5. Band. (pp. 358-387) Leipzig: Steingräber Verlag. [1878?]. [S11-462]

Sonaten für Pianoforte. Zum Gebrauch beim Conservatorium der Musik in Leipzig genau bezeichnet und herausgegeben von Carl Reinecke. Zwei Bände. Band II. (pp. 120-149) Leipzig: Breitkopf & Härtel. [not before 1891]. [S11-461]

【Web サイト】

音楽之友社 HP

<https://www.ongakunotomo.co.jp/series/wiener/index.html> (2021年8月8日確認)。

国立音楽大学附属図書館所蔵 ベートーヴェン初期印刷楽譜目録

<http://www.ri.kunitachi.ac.jp/lvb/cat/1295.html> (2021年8月29日確認)。

ベーレンライター社 HP

https://www.baerenreiter.com/fileadmin/Service_Allgemein/Werbemittel/englisch/Flyer_Einzelseite_n_jap_web.pdf (2021年8月9日確認)。

ヘンレ社 HP

<https://www.henle.de/jp/the-publishing-house/was-ist-urtext/> (2021年8月8日確認)。

Naxos music library.

<https://kcml.ml.naxos.jp/KeywordSearch2.aspx?word=Beethoven%20Op.%20106> (2021年8月16日確認)。

RIPM Online Archive, EBSCOhost.

<https://web.p.ebscohost.com/ehost/search/advanced?vid=1&sid=50368114-a84b-4dec-b2c5-b7b42af9883f%40redis> (2020年9月1日確認)。

Wiener Urtext Edition のカタログ

https://wiener-urtext.com/files/daten/catalogue/en/ue_catalogues/UT-Katalog-englisch.pdf (2021年8月10日確認)。

謝辞

本論文は、多くの方々のご指導、ご助言によって執筆を終えることができました。
この場を借りて、深く御礼申し上げます。

論文指導を担当してくださった沼口隆先生には、研究の軸となる多くのことをご教授いただきました。大変熱心にここまで導いていただいたこと、心より感謝申し上げます。

修士時代に、論文や研究についてご教示くださった友利修先生、実技指導を通して温かく見守ってくださった三木香代先生、ピリオド楽器についての貴重なご助言をくださった小倉貴久子先生、太田垣至先生をはじめ、ご助力いただいた全ての方々に感謝の意を表します。

また、貴重資料の提供にご協力くださった国立音楽大学附属図書館の皆さま、ピリオド楽器の試奏にご協力いただいた国立音楽大学楽器学資料館の皆さまへも、深く感謝致します。

本論の公開にあたり、楽譜資料の転載にご許可をいただきました各出版社の皆様にもこの場を借りて深く御礼申し上げます。Carl Fischer 社様と、Johannes Fischer 氏にも、連絡を試みておりますが、残念ながら今現在連絡がついていない状況です。今後も引き続き、連絡を試みます。

そして、学部入学時より温かく見守り、時に厳しく、演奏技術のみならず、音楽に真正面から向き合う覚悟や大切さをご指導いただいた花岡千春先生に心からの感謝を申し上げます。

お世話になった全ての方々への感謝の念にたえません。本当にありがとうございました。

付 録 ①

ウィーン原版

(著作権の関係上、付録①はインターネットでの公開をしておりません。

閲覧したい方は、国立音楽大学までご連絡ください。)

付 録 ②

ロンドン原版

(著作権の関係上、付録②はインターネットでの公開をしておりません。
閲覧したい方は、国立音楽大学までご連絡ください。)

付録③

Op. 106 の成立に関する年表

付録④

19世紀におけるOp. 106の演奏会記録

演奏者	年	月	日	都市 (国)	摘要/演奏プログラム等	参照
F. Liszt	1836	5	18	Paris		Newman, 1969
M. Fontaine	1843			Deutschland		Newman, 1969
M. Fontaine	1847			Wien		Newman, 1969
M. Fontaine	1853			StPetersburg		Newman, 1969
A. Goddard	1853	4	9以降			RIPM
A. Goddard	1853	4	14?	London	※4/23(土) の批評 木曜日のQuartet Associationにて (複数の批評より日程推測)	RIPM
A. Goddard	1856	7	9?	London		RIPM
A. Goddard	1857	5	6?	London? Goddardの家にて		RIPM
F. Liszt	1858			Weimar		Newman, 1969
A. Goddard	1858	5	14?			RIPM
H. v. Bülow	1858	12	6	Königsberg		Birkin, 2011
A. Goddard	1859	6	3	London		RIPM
H. v. Bülow	1860	1	6	Berlin		Birkin, 2011
H. v. Bülow	1860	1	27	Paris		Birkin, 2011
H. v. Bülow	1862	11	28	Stettin		Birkin, 2011
H. v. Bülow	1862	12	7	Berlin		Birkin, 2011
H. v. Bülow	1862	12	10	Leipzig		Birkin, 2011
H. v. Bülow	1862	12	12	Karlsruhe		Birkin, 2011
H. v. Bülow	1864	1	9	Dresden	Ist single-composer recital	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1864	2	12	Leipzig		Birkin, 2011
H. v. Bülow	1864	2	20	Hamburg		Birkin, 2011
H. v. Bülow	1864	4	11	StPetersburg		Birkin, 2011
A. Goddard	1867	3	18			RIPM
H. v. Bülow	1867	3	19	Stuttgart	Piano Sonata in B ♭ major Op. 106 (Introduction & Fugue)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1867	11	19	Munich		Birkin, 2011
A. Goddard	1869	3	13			RIPM
A. Goddard	1869	3	15	London ?		RIPM
A. Goddard	1869	3	29?	London		RIPM
H. v. Bülow	1872	1	18	Vienna	Piano Sonata in B ♭ major Op. 106 (Introduction & Fugue only)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1872	1	22	Berlin	Piano Sonata in B ♭ major Op. 106 (Intro. & Fugue only)	Birkin, 2011

演奏者	年	月	日	都市 (国)	摘要/演奏プログラム等	参照
H. v. Bülow	1872	8	21	Munich	Piano Sonata in B ♭ major Op. 106 (Introduction & Fugue only)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1873	12	3	London	Piano Sonata in B ♭ major Op. 106 + (Introduction & Fugue) [encore]	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1874	10	31	London		Birkin, 2011
H. v. Bülow	1875	9以前			Op. 106/Diabelli/pathétique?	RIPM
H. v. Bülow	1876	3	24	New York		Birkin, 2011
H. v. Bülow	1878	10	23	Berlin	Launch of Beethoven 1st Cyclus: the 'last five' pianoforte sonatas(2,790 RM for Bayreuth)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1878	11	11	Hamburg	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1878	11	20	London	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1878	11	23	Edinburgh	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	2	10	Bremen	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	2	21	Würzburg	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	3	10	Dresden	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	3	11	Leipzig	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	3	26	Berlin	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	4	7	Kassel	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	4	9	Cologne	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	10	28	Berlin	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	11	24	Cologne	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	12	9	Königsberg	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	12	11	Elbing	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1879	12	17	Hanover	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1880	1	26	London	Scherzo; Piano Sonata Op. 106 (encore)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1880	2	12	Munich	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas (For Bayreuth Fund)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1880	2	21	Frankfurt	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1880	4	15	Mannheim	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1880	4	16	Heidelberg	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1880	4	17	Karlsruhe	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas (All for Bayreuth Fund)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1881	2	10	Vienna	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1881	2	18	Budapest	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1881	4	8	Prague	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011

演奏者	年	月	日	都市 (国)	摘要/演奏プログラム等	参照
H. v. Bülow	1882	2	19	Prague	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1882	2	27	Breslau	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1882	5	2	Christiania	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1883	10	27	Lübeck	Op. 106/Diabelli/Op. 81a	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1886	10	19	Leipzig	2nd Beethoven Cyclus 4 (Op. 101/106/120/129)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1886	11	28	Breslau	2nd Beethoven Cyclus 4 (Op. 106/120/129)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1887	2	7	Vienna	2nd Beethoven Cyclus 4 (Op. 106/120/129)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1887	3	10	Berlin	2nd Beethoven Cyclus 4 (Op. 106/120/129)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1887	3	30	Hamburg	2nd Beethoven Cyclus 4 (Op. 106/120/129)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1887	4	14	Munich	2nd Beethoven Cyclus 4 (Op. 106/120/129)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1888	6	7	Cambridge	(10 th English tournée)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1888	6	26	London	2nd Beethoven Cyclus 4 (Op. 106/120/129)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1889	4	5	New York	2nd Beethoven Cyclus 4 (Op. 106/120/129)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1889	4	18	Boston	2nd Beethoven Cyclus 4 (Op. 106/120/129)	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1889	10	16	Hamburg	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1889	10	31	Hanover	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1890	1	10	Berlin	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1890	1	29	Berlin	1st Beethoven Cyclus 'last five' pianoforte sonatas	Birkin, 2011
H. v. Bülow	1890	4	19	Chicago	Beethoven 'American' Cyclus 4 (Op. 101/106/120/81a)	Birkin, 2011

付 録 ⑤

19 世紀の Op. 106 のエディション一覧

No.	タイトル	出版年	都市:出版社	プレート番号	図書館
1	L. v. Beethoven's sämtliche Sonaten für Pianoforte / 29: Op. 106	[ca. 1860]	Hallberger:Stuttgart	B. XXIX	Bayerische Staatsbibliothek
2	Beethoven's Werke / 152 = Serie 16: Sonaten für das Pianoforte, Dritter Band: Sonate (Hammerklavier) : op. 106	[1862 - 1865]	Breitkopf und Härtel:Leipzig	B 106 [B 152?]	Bayerische Staatsbibliothek
3	GROSSE SONATE für das Hammer-Klavier ... ERZHERZOG RUDOLPH VON OESTERREICH ... gewidmet von Ludwig VAN Beethoven. Op: 106. Eigentum der Verleger	[?]	[?]	Pl.Dr. N.o 2588	Bayerische Staatsbibliothek
4	Große Sonate für das Hammer-Klavier: op. 106	1856	Artaria:Wien	2588	Bayerische Staatsbibliothek
5	Grande sonate pour piano: op. 106	[1880?]	[Mayence?]: [les fils de B. Schott?], [Mayence?]	A. 6.	Bayerische Staatsbibliothek
6	Grosse Sonate für das Hammer-Klavier ...: d. ... Herr Erzherzog Rudolph von Oesterreich... gewidmet... ; op. 106	[1832/33]	Wien:Artaria	2588	Bayerische Staatsbibliothek
7	Sonaten: für Klavier	[?]	London:Ewer	(1 Bl., 45 S.)	Bayerische Staatsbibliothek
8	Sonate (grosse sonate für das hammer-klavier) no. 29	1888	Alexandria, VA : Alexander Street Press	[?]	Bayerische Staatsbibliothek
9	Sonaten für Clavier / 3. 188 S.: Sonaten für Clavier : Dritter Band	1898	Leipzig : Breitkopf & Härtel	[?]	Bayerische Staatsbibliothek
10	Overture-"Coriolan". Beethoven.-Valse. "Gross-Stadt Kinder [Op. 106.] Fetras, etc. <Conductor [and military band parts].>.	1899	London : Boosey & Co	[?]	British Library
11	Le Désir, valse de Beethoven [or rather F. P. Schubert] pour Piano. Op. 106.	[1864]	London : [?]	[?]	British Library
12	Grosse Sonate für das Hammer-Klavier ... Op: 106.	[1832]	Wien:[?]	[?]	British Library
13	Grosse Sonate für das Hammer-Klavier ... Op: 106.	[1819]	Wien : Bey Artaria und Comp	[?]	British Library
14	Grosse Sonate für das Hammer-Klavier ... Op: 106.	[1819]	Wien : Bey Artaria und Comp	[?]	British Library
15	Grand Sonata, for the Piano Forte ... 1st part. Op. 106.	[1819?]	London : [?]	[?]	British Library
16	Introduction & Fugue, for the Piano Forte ... 2nd part. Op. 106.	[1819?]	London : [?]	[?]	British Library
17	Grosse Sonate für das Hammer-Klavier ... Op. 106. Zweite Original Ausgabe.	1856	Wien : Bei Artaria und Comp	[?]	British Library
18	Grande Sonate b dur ... Op. 106, arrangée pour le Pianoforte à quatre mains par C. F. Ebers.	[1840?]	Berlin : Ed. Bote et G. Bock	[?]	British Library
19	Grande sonate pour le piano-forte. / Composée [...] par Louis van Beethoven. Oeuvre 106.	[1819]	A Vienne : chez Artaria et compag	2588	British Library
20	Grande Sonate pour le Piano-Forte ... Œuvre 106.	1867	[?]	[?]	British Library
21	Grand Sonata, for the Piano Forte.	[1819]	London : The Regent's Harmonic Institution	[?]	British Library
22	Introduction & Fugue, for the Piano Forte.	[1819]	London : The Regent's Harmonic Institution	[?]	British Library
23	Scherzo in B flat ... transcribed by J. de Sivrai. [Piano.]	[1879]	London : [?]	[?]	British Library
24	[Op. 106. Klaviersonate (B-Dur)]. Grosse Sonate für das Hammer-Klavier. Seiner Kais: Königl: Hoheit und Eminenz, dem Durchlauchtigsten Hochwürdigsten Herrn Herrn Erzherzog Rudolph Von Oesterreich Cardinal und Erzbischoff von Olmütz &.&.& in tiefster Ehrfurcht gewidmet von Ludwig Van Beethoven. Op: 106. Eigentum der Verleger.	[1832/33]	Wien : Artaria und Comp.	2588	Österreichische Nationalbibliothek
25	[Op. 106. Klaviersonate (B-Dur)]. Grosse Sonate für das Hammer-Klavier. Seiner Kais: Königl: Hoheit und Eminenz, dem Durchlauchtigsten Hochwürdigsten Herrn Herrn Erzherzog Rudolph von Oesterreich Cardinal und Erzbischoff von Olmütz &.&.& in tiefster Ehrfurcht gewidmet von Ludwig van Beethoven. Op: 106. Eigentum der Verleger.	[1819]	Wien : Artaria und Comp.	2588	Österreichische Nationalbibliothek
26	[Op. 106. Klaviersonate (B-Dur)]. Grosse Sonate für das Hammer-Klavier. Seiner Kais: Königl: Hoheit und Eminenz, dem Durchlauchtigsten Hochwürdigsten Herrn Herrn Erzherzog Cardinal und Erzbischoff von Olmütz &.&.& in tiefster Ehrfurcht gewidmet von Ludwig Van Beethoven. Op: 106. Eigentum der Verleger.	[1819]	Wien : Artaria und Comp.	2588	Österreichische Nationalbibliothek
27	[Op. 106. Klaviersonate (B-Dur)]. Grosse Sonate für das Hammer-Klavier. Seiner Kais: Königl: Hoheit und Eminenz, dem Durchlauchtigsten Hochwürdigsten Herrn Herrn Erzherzog Rudolph von Oesterreich Cardinal und Erzbischoff von Olmütz &.&.& in tiefster Ehrfurcht gewidmet von Ludwig van Beethoven. Op: 106. Eigentum der Verleger.	[1832/33]	Wien : Artaria und Comp.	2588	Österreichische Nationalbibliothek
28	[Op. 106. Klaviersonate B-Dur. "Grosse Sonate für Hammerklavier"]. Grande Sonate pour le Piano-Forte dediee a Son Altesse Imperiale l'Archiduc Rodolphe d'Autriche. Oeuvre 106.	1867	Paris : L. Farrenc	[?]	Österreichische Nationalbibliothek
29	Op. 106. Grosse Sonate für das Hammer-Klavier. Seiner Kais: Königl. Hoheit und Eminenz dem Durchlauchtigsten Hochwürdigsten Herrn Herrn Erzherzog Rudolph von Oesterreich, Cardinal und Erzbischoff von Olmütz & . & . in tiefster Ehrfurcht gewidmet.	[1819]	Wien : Artaria und Comp.	2588	Österreichische Nationalbibliothek
30	[Op. 106. Klaviersonate B-Dur.] Grosse Sonate für das Hammer-Klavier. Seiner Kais: Königl: Hoheit und Eminenz dem Durchlauchtigsten Hochwürdigsten Herrn Herrn Erzherzog Rudolph von Oesterreich, Cardinal und Erzbischoff von Olmütz etc. in tiefster Ehrfurcht gewidmet von Ludwig van Beethoven.	[September 1819]	Wien : Artaria und Comp.	2588	Österreichische Nationalbibliothek

No.	タイトル	出版年	都市:出版社	プレート番号	図書館
31	[Op. 106. Klaviersonate (B-Dur) "Grosse Sonate für das Hammerklavier"]. Grande Sonate pour le Piano Forte composé et dédié à Son Altesse Imperiale Monseigneur L'Archiduc Rodolphe d'Autriche Cardinal Et Prince Archeveque D'Olmütz && par L: van Beethoven Oeuv: 106.	[nach 1830]	Frankfort S/M [Frankfurt]: Fr. Ph. Dunst	232	Österreichische Nationalbibliothek
32	[Op. 106. Klaviersonate (B-Dur)]. Grande Sonate pour le Piano-Forte Composée et dédiée à Son Altesse Imperiale Monseigneur L'Archiduc Rodolphe d'Autriche, Cardinal et Prince Archevêque d'Olmütz &. &. par Louis van Beethoven. Oeuvre 106. Propriété des Editeurs.	[1819]	Vienne [Wien]: Artaria et Compag.: Leipzig: Peters	2595	Österreichische Nationalbibliothek
33	[Op. 106. Klaviersonate B-Dur.] Grosse Sonate für das Hammer-Klavier. Seiner Kais. Königl. Hoheit und Eminenz, dem Durchlauchtigsten, Hochwürdigsten Herrn Herrn Erzherzog Rudolph von Oesterreich, Cardinal und Erzbischoff von Olmütz etc. in tiefster Ehrfurcht gewidmet von Ludwig van Beethoven.	1856	Wien: Artaria und Comp.	2588	Österreichische Nationalbibliothek
34	Sonaten für Clavier. Dritter Band.	[c 1898]	Leipzig [usw.]: Breitkopf & Härtel	A.A.111-124	Österreichische Nationalbibliothek
35	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, C 106 / 1.	[1819]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
36	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, HCB C Md 38 Sammlung H. C. Bodmer.	[1819]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
37	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, C 106 / 17.	[1837]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
38	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, C 106 / 3.	1856	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
39	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, C 106 / 7.	[1837]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
40	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, C 246 / 86,27.	[nach 1837]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
41	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, C 246 / 89,2	[nach 1828]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
42	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, HCB C Md 71 Sammlung H. C. Bodmer.	[nach 1837]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
43	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, HCB C op. 106 Sammlung H. C. Bodmer	[1837]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
44	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, J. Van der Spek C 246 / 2, 1 Sammlung Jean Van der Spek.	[nach 1837]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
45	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, J. Van der Spek C op. 106 Sammlung Jean Van der Spek.	[1819]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
46	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588, Streicher C 246 / 3,9 Sammlung Streicher	[nach 1837]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
47	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Artaria, 2588; Teilsan, C 106 / 4	[zw. 1819 u. 1837]	Wien: Artaria	2588	Beethoven-Haus Bonn
48	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Dunst, 232, C 106 / 12.	[nach 1830]	Frankfurt: Dunst	232	Beethoven-Haus Bonn
49	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Dunst, 232, C 106 / 16.	[nach 1830]	Frankfurt: Dunst	232	Beethoven-Haus Bonn
50	Ludwig van Beethoven, Sammlung von Sonaten für Klavier op. 10 bis op. 111, Schlesinger, 1600-1604, 1729-1732, 9, 1861-1866, C 246 / 194.	[Ca. 1835]	Paris: Maurice Schlesinger	M. S. 1865	Beethoven-Haus Bonn
51	Ludwig van Beethoven, Sonate für Klavier (B-Dur) op. 106, Spehr, 2690, Helferich 25 c Sammlung Helferich.	[ca. 1847]	Brunswick: chez J. P. Spehr	2690	Beethoven-Haus Bonn
52	L. van Beethoven's / Clavier-Sonaten / zu 2 Händen. / Neue wohlfeile Original-Ausgabe. / WIEN / Verlag und Eigenthum von Carl Haslinger qm. Tobias / k. k. Hof-u. pr. Kunst-u. Musikalienhändler. / Medaille London 1862. / Complet Fl. 18-6. W. Jn 2 Bänden cart. à Fl. 10-6. W.	[ca. 1865]	Wien: C. Haslinger	Beethoven, I. No. 19.	国立音楽大学附属図書館
53	L. VAN BEETHOVEN / SONATEN / für Pianoforte. / Zum Gebrauch beim Conservatorium der Musik in Leipzig genau bezeichnet und herausgegeben / von / CARL REINECKE. / Zwei Bände / Band I No. 1-17. ÷ Band II No. 18-38. / Eigentum der Verleger für alle Länder / BREITKOPF & HÄRTEL / BERLIN-BRÜSSEL-LEIPZIG, LONDON-NEW YORK / V.A.418 I/II	[not before 1891]	Leipzig: Breitkopf & Härtel	V. A. 418. II.	国立音楽大学附属図書館
54	Pracht-Ausgabe der Classiker / Beethoven, Clementi, Haydn, Mozart, Weber. / Sämmtliche Sonaten / für das pianoforte / von / L. v. Beethoven. / Herausgegeben mit Begreichnung des Zeitmasses und Fingersatzes / von / J. Moscheles, / weil Professor am Conservatorium für Musik in Leipzig. / Mit instructiven Erläuterungen zu jedem einzelnen Werk. / Achte Auflage. / Vierter Band, / enthält: / Nro. 26, Es dur, op. 81.- Nro. 27. E moll, op. 90.- Nro. 28. à dur, op. 101.- Nro. 29. B dur, op. 106. Nro. 30. E dur, op. 109.- Nro. 31. As dur, op. 110.- Nro. 32. C moll, op. 111. / Stuttgart. Deutsche Verlagsanstalt (vormals Eduard Halberger)	[not before 1858]	Stuttgart: Deutsche Verlagsanstalt	B. XXIX.	国立音楽大学附属図書館

No.	タイトル	出版年	都市:出版社	プレート番号	図書館
55	L. v. Beethoven's / sämtliche / SONATEN / für / Pianoforte. / Hallberger's Pracht-Ausgabe der Classiker / Beethoven, Clementi, Haydn, Mozart. / [Each title] / Neu herausgegeben mit Bezeichnung des Zeitmasses und Fingersatzes / von / J. Moscheles, / Professor am Conservatorium zu Leipzig. / Stuttgart, / Stich, Druck und Verlag von Eduard Hallberger.	[1858]	Stuttgart: Hallberger	B. XXIX.	国立音楽大学附属図書館
56	SONATEN / für das / Pianoforte / von / L. van BEETHOVEN. / Zwei Bände. / Pr. complet 3 1/2 Thaler netto. / Zweiter Band. / Leipzig, Breitkopf & Härtel. / Mit Bewilligung der Originalverleger. / 11461. II.	[1867]	Leipzig: Breitkopf & Härtel	11461 II.	国立音楽大学附属図書館
57	GRANDE SONATE / pour le / Piano-Forte / Composée et dédiée / À SON ALTESSE IMPERIALE MONSEIGNEUR / L'Archiduc RODOLPHE d'Autriche, / CARDINAL ET PRINCE ARCHEVÊQUE D'OLMÜTZ &. &. &. / par / Louis VAN Beethoven. / Oeuvre 106. / Propriété des Editeurs. / À VIENNE / chez / ARTARIA et COMPAG: / Leipzig bey Peters, Breitkopf & Haertl(!), und Hoffmeister. Berlin bey Schlesinger. / Bonn bey Simmrok(!). Offenbach bey Andre. Augsburg bey Gombart. / Mainz bey Schott. Zürich bey Naegeli. München bey Falter & Sohn. / Mainz bey Zulehner. Hamburg bey Böhm. Mayland bey Riccordi. / und in den übrigen Kunst-und-Buchhandlungen von / Deutschland, Frankreich, England, der Schweiz, Russland und Pohlen.	[not before 1819]	Wien: Artaria & Co.	2588	国立音楽大学附属図書館
58	SONATEN / für das / PIANOFORTE SOLO / von / LUDWIG VAN BEETHOVEN. / Erste vollständige Gesamtausgabe / unter Revision / von / FRANZ LISZT. / II. Band: enthaltend / die letzten 18 Sonaten, Oeuvre 49 bis zum Schluss. / Preis 2 Thlr. 17 Sgr. / WOLFENBÜTTEL, / Druck und Verlag von L. Holle.	[not before 1857]	Wolfenbüttel: Holle	(39)	国立音楽大学附属図書館
59	[GROSSE SONATE / für das / Hammer=Klavier. / Seiner Kais: Königl.: Hoheit und Eminentz, / dem Durchlauchtigsten Hochwürdigsten / HERRN HERRN ERZHERZOG / RUDOLPH VON OESTERREICH / Cardinal und Erzbischoff von Olmütz &. &. &. / in tiefster Ehrfurcht gewidmet / von / Ludwig VAN Beethoven. / Op: 106. / Eigenthum der Verleger. / No. 2588. WIEN, bey ARTARIA und COMP:]	[not before 1819]	Wien: Artaria & Co.	2588	国立音楽大学附属図書館
60	GROSSE SONATE / für das / Hammer=Klavier. / Seiner Kais. Königl. Hoheit und Eminenz / dem Durchlauchtigsten Hochwürdigsten / HERRN HERRN ERZHERZOG / RUDOLPH VON OESTERREICH / Cardinal und Erzbischoff von Olmütz &. &. &. / in tiefster Ehrfurcht gewidmet / von / Ludwig VAN Beethoven. / Op. 106. / Zweite Original Ausgabe. / 1856. / [l.:] No. 2588. [c.:] Eigenthum der Verleger. [r.:] Pr. f. 3 C. M. / WIEN, bei ARTARIA und COMP.	[1856]	Wien: Artaria & Co.	(2588) on p. 3; A. & C. 2588. on p. 4-	国立音楽大学附属図書館
61	[Missing title page]	[between 1862 and 1865]	Leipzig: Breitkopf & Härtel	B. 152.	国立音楽大学附属図書館
62	GRANDE SONATE / b dur / composée de / L. v. Beethoven / Op. 106. / pour le Pianoforte à quatre mains / arrangée par / C. F. EBERS. / Enregistré dans l'archive de l'union. / l'Arrangement Propriété de l'Editeur. [r.:] Pr. 1 Rth. 18 Ggr. / Berlin, chez Maurice Westphal Breite Str. 20. / Par autorisation de Mrs. Artaria & Co., éditeurs et / propriétaires de l'édition originale pour le Piano seul.	[1834]	Berlin: Westphal	M. W. 5.	国立音楽大学附属図書館
63	SONATE / en [B d][ink] / POUR LE PIANOFORTÉ / par / L. VAN BEETHOVEN. / Oeuvre [106][ink] / London, by J. J. Ewer & Co. / 72 Newgate Street.	[between 1843 and 1852]	London: Ewer	T. 6	国立音楽大学附属図書館
64	SONATEN / für das / PIANOFORTE SOLO / von / LUDWIG VAN BEETHOVEN. / Erste vollständige Gesamtausgabe / unter Revision / von / FRANZ LISZT. / II. Band: enthaltend / die letzten 18 Sonaten, Oeuvre 49 bis zum Schluss. / Preis 2 Thlr. 17 Sgr. / WOLFENBÜTTEL, / Druck und Verlag von L. Holle.	[not before 1857]	Wolfenbüttel: Holle	(29)(respectively: (30)-(42)); (202)-(204) for WoO 47; (206) for Anhang 5	国立音楽大学附属図書館

付録⑥

エディション比較表

エディション比較表 凡例

- 二つの原版（ウィーン原版とロンドン原版）の異なる箇所について比較した表である。
- ウィーン原版と一致しているものを「W」、ロンドン原版と一致しているものを「L」で示す。
- しかし、「W」「L」としてそれぞれ示すものは、必ずしもそれらを意図して採用しているかどうかを示すものではない。つまり、本表での表記は、あくまでもそれらと「一致している」ことを示すものである。
- この表作成の目的は以下の4点である。
 - ① 二つの原版の相違箇所を明らかにすること
 - ② 出版当時から現代に至るまでのエディションを比較することで、各エディションの特徴を明らかにすること
 - ③ 二つの原版がどのように扱われてきたのかの変遷をたどること
 - ④ どちらの原版を採用するのかの判断に迷った際の指標になること
- 以上を目的としたことから、様々なエディションの系譜を整理するために、二つの原版の異なる箇所以外も採り上げた。それらはどちらも同じ表記であることから「L/W」と表記する。

第1楽章 ①

(アルタリア異刷り／L訂正版／モシエレス版 1841 以前／W第2版／リスト版／モシエレス版 1858)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
0			テンポ表記	4分音符=138	2分音符=138	W	L	L	W	W	L
1				f sf	ff ff	W W	L L	L 1拍目sf/ 1拍目裏ff	W W	W 1拍目sf/ 1拍目裏ff	W W
9-15	下段		スラー	T. 9からT. 10と T. 11からT. 15の 2つのスラー	T. 9からT. 15まで 1つのスラー	W	L	L	W	sempre legato	L
10-11	上段		スラー	T. 10の2拍目裏の み	T. 10の2拍目裏から T. 11の最後まで	W	L	L	W	W	L/W T. 10の2拍目 のみのスラーと T. 11のスラー
11-12	上段/下声部		a ² -f ² 音のスラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
12-13	上段/下声部		f ² -f ² 音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	L	L
15	上段/上声部		スラー	as ² -a ² 音	g ² -as ² -a ² 音	W	L	L	なし	W	L
19, 20						W	L	L	L	L	L
22-24	上段		ペダルとるマーク 記譜法	T. 20の1拍目 オクターヴ記号で	T. 19とT. 20の間 locoで	W W	L L	L L	W W	L L	L L
24			cresc. の位置	1拍目裏	2拍目	W	L	L	W	L	L
26	下段	2	和音の最高音	a ¹ 音	a ¹ 音	L/W	L/W	L/W	b ¹ 音	b ¹ 音	b ¹ 音
32			p	1拍目裏	2拍目	W	L	L	W	L	L
38			フェルマータ	1つめの8分音符	4分音符と8分音符	W	L	L	W	L	L
39			p	1拍目裏	1拍目	W	L	L (T. 38の最後の 音にもpあり)	W	L	L (T. 38の最後の音 にもpあり)
45-46	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	L
45-48	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L/W(T. 47,48のみ スラーあり)	L/W(T. 47,48のみ スラーあり)	L
49-50	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L ※終わりはT. 51の 1音目まで
55, 59			p	なし	あり	W	L	L	L	L	L
55-56	下段		スラー	なし	なし	L/W	あり	あり	あり	あり	あり
57-58	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
59-60	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
64	上段	1 裏-2	スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
64-65	下段	2 裏-1	g音のタイ	なし	あり	W	L	W	W	W	W
65	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	L? T. 84の2拍目裏 から開始
66	上段	1	スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	L
67	上段/下声部	2-	8分休符/c ² -es ² 音	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W	あり
67-68	下段		スラー	小節ごとに 区切れる	1つのスラー	W	L	L	W	W	W
69	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	L? T. 68の2拍目裏 から
70	上段/下声部	1	スラー	あり	なし	W	L	L	L? 1拍目裏 のみ	L? 1拍目裏 のみ	L
70	下段	2 裏	d ⁴ 音の _H	あり	なし	W	L	L	L	L	L
70-73	上段/下声部	2 頭	4分音符のスタッカート	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	あり	L/W
73	上段/下声部	1 裏-2	スラー	あり	なし	W	L	L	L? 1拍目裏 のみ	L? 1拍目裏 のみ	L
73	下段	2 裏	c ⁴ 音の _H	あり	なし	W	L	L	W	W	L
74	上段、下段/ 上声部		スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
75-77			クレッシェンドマーク	1拍目から	1拍目裏から	W	L	L	W	W	L
75-76	上段		スラー	小節ごとに 区切れる	1つのスラー	W	L	L	W	L	W
76	上段	2 裏	アクセント	上声部と下声部	上声部のみ	W	L	L	W	L	W
77-78	上段		スラー	小節ごとに区切れる	1つのスラー	W	L	L	W	W	W
79-80	上段/下声部		スラーの始まり	1拍目から	2拍目から	W	L	L	下声部には スラーなし	下声部には スラーなし	L
79	上段/下声部	1		d ⁴ 音の8分音符	d ⁴ 音の8分音符	L/W	L/W	L/W	8分休符	L/W	L/W
81-82	上段		スラー	2つの小節に それぞれあり	T. 81のみあり	W	L	L	L? T. 81-82で一つ のスラー	L? T. 81-82で一つ のスラー	L? T. 81-82で一つ のスラー
83-84	上段		スラー	T. 83のみあり	なし	W	L	L+T. 84もあり	L? T. 83-84で 一つのスラー	L? T. 83-84で 一つのスラー	L? T. 83-84で 一つのスラー
84	下段	1	三和音の中声部の音	d音	c音	W	L	L	L	L	L
85	上段/上声部	1	スラー	あり	なし	W	L	L	L? T. 86の 最後まで	L? T. 86の 最後まで	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエス版 (1858)
85, 88	上段/下声部		スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	L? (T. 85-86/ T. 87-88)
85-88	上段/下声部		T. 85-88とT. 87-88のスラー	あり	なし	W	L	L(※T. 87-88は なし)	W	W	W
86	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	L	L	L? T. 85から	L? T. 85から	L
91-93	上段、下段		スタックカート	あり	一部のみあり	W	L	L	W(※T. 91は無く なっている)	L	L(※Lにない箇所 も追加している)
91	1裏			sf	ff	W	L	L(下段に改めて sfが足されている)	W	L(下段に改めてsf が足されている)	L(下段に改めてsf が足されている)
92	下段	1裏	sf	1拍目裏	2拍目	W	L	L	W	L	L
94-97	上段		記譜法	オクターヴ記号で	オクターヴ記号で	L/W	L/W	L/W	locoで	L/W	L/W
94-95	上段、下段		スタックカート	なし	なし	L/W	L/W	あり	L/W	あり	あり
96	上段	1		fp	sf	W	L	L	W	L	L
96-97	下段		指使い	4321X321421X	543213215321	W	L(T. 97の1番目 は+)	L(T. 97の1番目 は+)	W	543214321321	-4-2-4-3---
98	上段	1	記譜法	オクターヴ記号で	オクターヴ記号で	L/W	L/W	L/W	locoで	L/W	L/W
106-, 107-, 109-	上段/下声部		g ² 音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	W	L
110	上段/上声部		スラー	なし	あり	W	L	W	W	L	W
112	上段		1拍目と2拍目裏のスタックカート	あり	なし	W	L	L	W	W	2拍目裏のみあり
120a		1		sf	ff	W	L	L	W	W	L
124, 126, 128	上段		4分音符のスタックカート	なし	T. 124とT. 128の 2拍目裏のみあり	W	L	W(T. 124は 1拍目もあり)	W(T. 126も2拍目 の裏のみあり)	W(T. 126も2拍目 の裏のみあり)	3小節ともに 1拍目と2拍目裏に あり
129	下段	1	fis ¹ 音の ^h	なし	なし	L/W	あり	あり	あり	あり	あり
147	上段/下声部		b音	8分音符	4分音符	W	L	L	W	L	W
153	下段/上声部	1裏-2	c ¹ 音の記譜法	4分音符×2タイ	2分音符	W	L	W	W	W	W
161	下段/下声部	1	Es ¹ 音の ^h	なし	あり	W	L	L	W	W	W
162	上段/上声部	1裏	es ¹ 音	b	^h	W	L	L	W	W	W
162	下段/上声部	1裏	g ¹ 音	4分音符	8分音符	W	L	L	W	L	L
163	上段/下声部	1	f音	あり	なし	W	L	L	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
163	下段/上声部		スラー	1裏から	1から?	W	L	L	なし	L	L
164	下段/上声部		スラー	あり	なし	W	L	L	W	L(1拍目から開始)	L
166	下段/上声部	1裏	b音のb	あり	なし	W	L	L	L	L	L
169、171	下段	2	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L
173-174	上段、下段		スラー	8分音符+4分音符 までが基本	8分音符のみ	W	L	L	W	L(T.174の1拍目裏-2拍目のみ異なる)	L(8分音符+4分音符に統一)
173-175			sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L※T.174、175の2拍目はなし
176	上段/上声部	1裏	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L※1裏-2にかけて変更
176/177			ペダルマーク	T.177の1拍目	T.176の2拍目裏	W	L	L	W	L	L
177		1		f	ff	W	L	L	W	W(T.176の最後の音に移動)	W
178		2裏	p	あり	なし	W	L	L	L	L	L
192			ペダルとるマーク	2拍目頭	最後の音	W	L	L	W	L	なし
193			Ped.	T.192の最後の音	1拍目にあり	W	L	L	W	L	W
196			Ped.	なし	あり	W	L	L	W	W	L
207	上段		スラー	1拍目裏から	1拍目から	W	L	L(1拍目スタックカートも付記)	W	なし	L(※終わりはT.208の最後まで)
210	上段	1	g ² 音の#	あり	なし	W	L	L	W	L	L
212	上段	1	g ¹ 音の#	あり	なし	W	L	L	W	L	L
214	下段/下声部	2	2分休符	あり	なし	W	L	L	L	L	L
214、217	下段		p	なし	あり	W	L	L	T.214はL T.217はW	L	L
217	上段		最後の音	fis ¹ 音	ais ¹ 音	W	L	L	W	L	L
221-223	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	W(※T.223のみあり)	L	L
221-226			cresc.	なし	あり	W	L	L	W	L	W
224	上段	1	e ³ 音の8分音符	あり(T.223の付点による)	なし	W	L	L	L	L(8分音符による)	L(8分音符による)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
224-226			ラとラ#	ラ?	ラ#?	W	L	L	W	ラ#	W
228, 229			Ped.	T. 228の最後の音	T. 229の頭	W	L	L	W	L	T. 228とT. 229の間
233	上段/上声部	2	スラー	f ² -es ² 音のみ	2拍目全て	W	L	L+T. 232の2拍目裏からT. 234の2拍目まで	W	W?(T. 234の1拍目最後まで)	T. 232の2拍目裏からT. 234の2拍目まで
234	下段/上声部	2裏	b音のb	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W	L/W
234-235	下段/下声部		f音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	W	W
235	上段/下声部	2	g音	b	b	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
236-237	下段/下声部		b-b音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	W	L
237	上段/上声部		a ² 音のb	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
239	上段/上声部	1	a ² 音のb	あり	なし	W	L	L	L	L	L
239	上段/下声部	1	a ¹ 音の臨時記号	なし	なし	L/W	L/W	L/W	b	b	b
239-240	下段/下声部		des ¹ -des ¹ 音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	W	L
240	上段/下声部	2裏	g音のb	なし	あり	W	W	W	W	W	W
243	上段/下声部	1裏-2	ges ² -ges ² 音のタイ	なし	あり	W	L	L	W	W	L
246	上段/上声部	2	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
246	下段/上声部	1裏	a ¹ 音のb	なし	なし	L/W	あり	あり	あり	あり	あり
248	上段/上声部	1	a ³ 音のb	あり	なし	W	L	L	L	L	L
248	上段	2裏	和音	f ² /as ² /f ³ 音	f ² /as ² /des ³ /f ³ 音	W	L	L	W	L	L
249	上段	1	d ⁴ 音のb	あり	なし	W	L	L	L	L	L
250, 252	上段		スタッカート	あり	なし	W	L	L	W	L	L
257	上段	2裏	c ² 音のb	あり	なし	W	L	L	L	L	L
258-261	上段		スタッカート	あり	なし	W	L	L	W	L	L
264, 265			ritardandoの開始位置	T. 265の頭	T. 264の2拍目裏	W	L	L	W	L	L
265	上段、下段		a音とa ² 音のb	あり	なし	W	L	L	L	L	L
266	下段		fis/ois ¹ 音のpp	なし	あり	W	L	L	W	L	L
266			最後の音の強弱	f	ff	W	L	L	W	W	L
266			ペダルとる・ペダル・とるマーク	なし	あり	W	L	L	W	L	L
267	下段	1	和音の強弱記号	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	sf	L/W
268			ペダルとるマーク	最後の音	下段の8分休符	W	L	L	なし	L	1拍目の最後

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
312	上段/下声部 2		音	c ² -f ² 音	c ² -f ² 音	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
312	上段/上声部 2 裏		音	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
312	上段/上声部 2 裏		スラー	なし	なし	L/W	L/W	あり	あり	あり	あり
313-314	上段		スラー	T. 313-T. 314の 1拍目最後まで	T. 314の2つ目の 8分音符から	W	L	L	T. 313の2つ目の 8分音符から	sempre legato	L
319-320	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	W	L
323	下段 1		音	Es-es音 (T. 322から スラーあり)	Es-es音 (スラーなし)	W	es ¹ -es ² 音 (T. 322から タイ)	es ¹ -es ² 音 (T. 322から タイ)	W	es ¹ -es ² 音 (T. 322から タイ)	es ¹ -es ² 音 (T. 322から タイ)
323-325	上段、下段		スタッカート	あり	なし	W	L	L(T. 325の下段 1拍目裏は追加 している)	W	L(T. 325の下段1 拍目裏は追加して いる)	L(※Lにない箇所 も追加している)
326-328			sfとfp	あり	なし	W	L	L	T. 326-327の4つ のsfのみあり	L	L
329	下段 2			2分休符	2分休符	L/W	L/W	L/W	4分休符とb ¹ -d ² 音 の8分音符	L/W	4分休符とb ¹ -d ² 音 の8分音符
331	上段 2 裏		c ² 音の ^ハ	あり	なし	W	L	L	L	L	L
344			ペダルマーク	1拍目裏	1拍目	W	L	L	W	W	W
353	上段 2		b ¹ -b ² 音の ^ハ	あり(b ¹ 音のみ)	なし	W	L	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり
362-363	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
365	上段、下段		trの前の ^ハ	なし	あり	W	L	L	W	L	W
383			最後の音の強弱	sf	ff	W	L	L	W	L	W
398			sempre dim.	1拍目	1拍目裏	W	L	L	W	L	L
402-403			ペダルマーク/ペダルとるマーク	なし	あり	W	L	L	T. 402のペダル マークのみあり	L	T. 402のペダル マークのみあり
403			cresc. の位置	2拍目頭	2拍目裏	W	L	L	なし	なし	なし

第1楽章 ②

(旧全集／ハスリンガー版／ビューロー版／ダム版／ライネッケ版)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
0			テンポ表記	4分音符=138	2分音符=138	なし	なし	2分音符=112	W (2分音符=100)	なし
1				f	ff	W	W	W	W	W
9-15	下段		スラー	T. 9からT. 10と T. 11からT. 15の 2つのスラー	ff	なし	W	1拍目アクセント/強 弱記号はなし	1拍目sf	なし
10-11	上段		スラー	T. 10の2拍目裏の み	T. 10の2拍目裏から T. 11の最後まで	W	W	W(T. 16の2拍目ま で)	L	W(T. 16の2拍目 まで)ビューロー版 に同じ
11-12	上段/下声部			あり	なし	W	W	W	L	W
12-13	上段/下声部			あり	なし	W	W	W	L	W
15	上段/上声部		スラー	as ² -a ² 音	g ² -as ² -a ² 音	W(タイで結ばれた1 つ前のg ² 音から)	W(タイで結ばれた1 つ前のg ² 音から)	W(タイで結ばれた1つ 前のg ² 音から)	L	W(タイで結ばれた 1つ前のg ² 音から)
19, 20					T. 19とT. 20の間	L	T. 19の最後	T. 19の最後	L	W
22-24	上段				locoで	W	W	W	L	L
24					1拍目裏	W	W	W	L	W
26	下段	2		a ¹ 音	a ¹ 音	b ¹ 音	b ¹ 音	b ¹ 音	b ¹ 音	b ¹ 音
32				1拍目裏	2拍目	W	W	W	L	W
38				1つめの8分休符	4分休符と8分休符	W	L	W	L	W
39				1拍目裏	1拍目	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	L	T. 38の最後の音
45-46	上段		スラー	あり	なし	W	W	L	L	W
45-48	下段		スラー	あり	なし	L/W(T. 47,48のみ スラーあり)	L/W(T. 47,48のみス ラーあり)	L	L	L/W(T. 47,48のみ スラーあり)
49-50	下段		スラー	あり	なし	L	L	(L)開始がT. 48の2 拍目裏-	L	L
55, 59				なし	あり	L/W T. 55にはなし	L/W T. 55にはなし	L/W T. 55にはなし	L/W T. 55にはなし	L/W T. 55にはなし
55-56	下段		スラー	なし	なし	L/W	L/W	あり(※スラー終わり はT. 58の1拍目最後 まで)	あり	L/W
57-58	下段		スラー	あり	なし	W	W	L? T. 55からT. 58の1 拍目最後まで	L	W
59-60	下段		スラー	あり	なし	W	W	L? T. 58の2拍目から 開始	L	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
64	上段	1 裏-2	スラー	あり	なし	L	L	L	L(2声にスラー)	L
64-65	下段	2 裏-1	g-音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W
65	上段		スラー	あり	なし	W	W	L? T. 64の2拍目裏から開始	ポルタート	W
66	上段	1	スラー	あり	なし	W	W	L? T. 64の2拍目裏から開始	L	L
67	上段/下声部	2-	8分休符/c ² -es ² 音	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
67-68	下段		スラー	小節ごとに区切れる	1つのスラー	W	W	W	W	W
69	上段		スラー	あり	なし	W	W	L? T. 68の2拍目裏から	L? T. 68の2拍目裏から	W
70	上段/下声部	1	スラー	あり	なし	L? 1拍目裏のみ	L? 1拍目裏のみ	L? 2拍目頭まで	L? 2拍目頭まで	L? 1拍目裏のみ
70	下段	2 裏	d ¹ 音の ¹	あり	なし	L	L	L	L	L
70-73	上段/下声部	2 頭	4分音符のスタッカート	なし	なし	あり	あり	あり T. 70はなし	L/W(T. 73のみあり?)	L/W(T. 72と73のみあり?)
73	上段/下声部	1 裏-2	スラー	あり	なし	L? 1拍目裏のみ	L? 1拍目裏のみ	L	L	L
73	下段	2 裏	e ¹ 音の ¹	あり	なし	W	L	L	L ※注あり	L()付き
74	上段、下段/ 上声部		スラー	あり	なし	W	W	L? 下段は下声部にスラー	L ※下段は下声部にスラーは1拍目のみ	上段のみあり(※1小節間すべて)
75-77			クレッシェンドマーク	1拍目から	1拍目裏から	L	L	L	L	L
75-76	上段		スラー	小節ごとに区切れる	1つのスラー	W	W	W	W	W
76	上段	2 裏	アクセント	上声部と下声部	上声部のみ	W	W	L? 下声部はsfz	W	W
77-78	上段		スラー	小節ごとに区切れる	1つのスラー	W	W	W	W	W
79-80	上段/下声部		スラーの始まり	1拍目から	2拍目から	下声部にはスラーなし	下声部にはスラーなし	下声部にはスラーなし	L	T. 80の2拍目裏のみあり
79	上段/下声部	1		d ² 音の8分音符	d ² 音の8分音符	8分休符	8分休符	8分休符	L/W	8分休符
81-82	上段		スラー	2つの小節にそれぞれあり	T. 81のみあり	L? T. 81-82で一つのスラー	L? T. 81-82で一つのスラー	L? T. 81-82で一つのスラー	L? T. 81-82で一つのスラー	L? T. 81-82で一つのスラー
83-84	上段		スラー	T. 83のみあり	なし	L? T. 83-84で一つのスラー	L? T. 83-84で一つのスラー	L? T. 83-84で一つのスラー	L? T. 83-84で一つのスラー	L? T. 83-84で一つのスラー
84	下段	1	三和音の中声部の音	d音	c音	L	L	L	L	L
85	上段/上声部	1	スラー	あり	なし	L? T. 86の最後まで	L? T. 86の最後まで	L? T. 86の最後まで	L	L? T. 86の最後まで

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングァー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
85, 88	上段/下声部		スラー	あり	なし	W	W	L? (独自のスラー)	L? (T. 85-86/T. 87-88)	W
85-88	上段/下声部		T. 85-86とT. 87-88のスラー	あり	なし	W	W	W	W	W
86	上段/上声部		スラー	あり	なし	L? T. 85から	L? T. 85から	L? T. 85から	L? T. 85から	L? T. 85から
91-93	上段、下段		スタックカート	あり	一部のみあり	W	L (※Lにない箇所も追加している)	L (T. 93の2拍目裏はなし)	L (※Lにない箇所も追加している)	W (※下段T. 92の1拍目裏抜けている)
91	1 裏			sf	ff	W	W	W	L (下段に改めてsfが足されている)	W
92	下段	1 裏	sf	1拍目裏	2拍目	W	L	W	L	L
94-97	上段		記譜法	オクターヴ記号で	オクターヴ記号で	locoで	locoで	locoで	L/W	locoで
94-95	上段、下段		スタックカート	なし	なし	L/W	あり	あり	あり	L/W
96	上段	1		fp	sf	W	L	W(L.dimin.がある)	L ※注あり	W
96-97	下段		指使い	4321X321421X	543213215321	W	W	543214321432	5432143213-- (リスト版と酷似?)	W(+独自の指使い併記)
98	上段	1	記譜法	オクターヴ記号で	オクターヴ記号で	locoで	locoで	locoで	L/W	locoで
106 ¹ , 107 ¹ , 109-	上段/下声部		g ² 音のタイ	あり	なし	W	W	W	L	W
110	上段/上声部		スラー	なし	あり	W	W	W ² (T. 109から開始)	W (※T. 111の1拍目まで)	W
112	上段		1拍目と2拍目裏のスタックカート	あり	なし	2拍目裏のみあり	2拍目裏のみあり	L	2拍目裏のみあり	2拍目裏のみあり
120a		1		sf	ff	W	W	W	W	W
124, 126, 128	上段		4分音符のスタックカート	なし	T. 124とT. 128の2拍目裏のみあり	W (T. 126も2拍目の裏のみあり)	W (T. 126も2拍目の裏のみあり+T. 128は1拍目もあり)	3小節ともに1拍目と2拍目裏にあり	3小節ともに1拍目と2拍目裏にあり	T. 124は2拍目裏のみあり/T. 126は1拍目と2拍目裏にあり/T. 128は1拍目のみあり
129	下段	1	fis ¹ 音の ₄	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
147	上段/下声部		b音	8分音符	4分音符	W	W	L ※Wが明らかでないという注あり	W	W
153	下段/上声部	1 裏-2	c ¹ 音の記譜法	4分音符 × 2 タイ	2分音符	W	W	W	W	W
161	下段/下声部	1	E _s 音の ₄	なし	あり	W	W	W	W	W
162	上段/上声部	1 裏	es ¹ 音	b	₄	W	W	W	W	W
162	下段/上声部	1 裏	g音	4分音符	8分音符	W	W	W	W	W
163	上段/下声部	1	f ¹ 音	あり	なし	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングァー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネツケ版 (1878)
163	下段/上声部		スラー	1裏から	1から?	W	W	L(終わりはT.164の1 拍目まで)	W	W
164	下段/上声部		スラー	あり	なし	W	W	L(終わりはT.165の1 拍目まで)	L	W
166	下段/上声部 1裏		b音のb	あり	なし	L	L	L	L	L
169、171	下段 2		sf	あり	なし	W	W	L(小さく付記)	L	W
173-174	上段、下段		スラー	8分音符+4分音符 までが基本	8分音符のみ	W	W	L(8分音符+4分音符 に統一)	W	W
173-175			sf	あり	なし	W	W	W	L(※T.175の 2拍目はなし)	W
176	上段/上声部 1裏		スラー	あり	なし	L	L	L※1裏-2にかけて に変更	L	L
176/177			ペダルマーク	T.177の1拍目	T.176の2拍目裏	W	W	W	L	W
177	1			f	f	W	W	L/W(T.176の最後の 音にはfであるべきと の注あり)	W	W
178	2裏		p	あり	なし	L	L	L	L	L
192			ペダルとるマーク	2拍目頭	最後の音	W	2拍目裏	W	なし	W
193			Ped.	T.192の最後の音	1拍目にあり	W	W	W	W	W
196			Ped.	なし	あり	W	W	W	L	W
207	上段		スラー	1拍目裏から	1拍目から	W	W	T.201からひとつの スラー	L	W
210	上段	1	g ² 音の#	あり	なし	W	W	L	L	W
212	上段	1	g ¹ 音の#	あり	なし	W	W	L	L	W
214	下段/下声部 2		2分休符	あり	なし	L	L	W	L	L
214、217	下段		p	なし	あり	T.214はL T.217はW	L	L	L	T.214はL T.217はW
217	上段		最後の音	fis ¹ 音	ais ¹ 音	L	L	L	L	L
221-223	上段		スラー	あり	なし	W(※T.223のみ あり)	L	W(※T.223のみあり)	L	W(※T.223のみあ り)
221-226			cresc.	なし	あり	W	W(点線はなし)	W	W	W(点線はなし)
224	上段	1	e ³ 音の8分音符	あり(T.223の付点 による)	なし	L(8分音符による)	L(8分音符による)	L(8分音符による)	L(8分音符による)	L(8分音符による)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネツケ版 (1878)
224-226			ラとラ#	ラ?	ラ#?	W	W	ラ#	ラ#	ラ#
228, 229			Ped.	T. 228の最後の音	T. 229の頭	W	W	W	W	W
233	上段/上声部	2	スラー	f ² -es ² 音のみ	2拍目全て	T. 232の2拍目裏から	T. 232の2拍目裏から	T. 232の2拍目裏から T. 234の1拍目まで	T. 232の2拍目裏から T. 234の1拍目まで	T. 232の2拍目裏から T. 234の1拍目まで (ビューロー版に同じ)
234	下段/上声部	2裏	b音のb	なし	なし	あり	あり	あり	L/W	あり
234-235	下段/下声部		f音のタイ	あり	なし	W	W	W	W	W
235	上段/下声部	2	g ¹ 音	b	b	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
236-237	下段/下声部		b-b音のタイ	あり	なし	W	W	W	W	W
237	上段/上声部		a ² 音のb	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
239	上段/上声部	1	a ² 音のb	あり	なし	L	L	L	L	L
239	上段/下声部	1	a ¹ 音の臨時記号	なし	なし	b	h	h	h	b ※(h)あり
239-240	下段/下声部		des ¹ -des ¹ 音のタイ	あり	なし	W	W	W	W	W
240	上段/下声部	2裏	g ² 音のb	なし	あり	W	W	W	W	W
243	上段/下声部	1裏-2	ges ² -ges ² 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W
246	上段/上声部	2	スラー	あり	なし	W	W	L	L	W
246	下段/上声部	1裏	a ¹ 音のb	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
248	上段/上声部	1	a ³ 音のb	あり	なし	L	L	L	L	L
248	上段	2裏	和音	f ² /as ² /f ³ 音	f ² /as ² /des ³ /f ³ 音	W	W	W	W	W
249	上段	1	d ³ 音のb	あり	なし	L	L	L	L	L
250, 252	上段		スタッカート	あり	なし	L(T. 252の2拍目裏のみなし?)	L	L	L(T. 252の1拍目裏のみなし?)	L
257	上段	2裏	c ² 音のb	あり	なし	L	L	L	L	L
258-261	上段		スタッカート	あり	なし	L(※T. 261はなし)	L(※T. 261はなし)	L	L	L(※T. 260の2拍目裏はなし)
264, 265			ritardandoの開始位置	T. 265の頭	T. 264の2拍目裏	W	W	W	W	W
265	上段、下段		a音とa ² 音のb	あり	なし	L	L	L	L	L
266	下段		fis/cis音のppp	なし	あり	W	W	W	L	W
266			最後の音の強弱	f	ff	W	W	W	W	W
266			ペダルとる・ペダルとるマーク	なし	あり	W (最後のとるマークは 小節の最後へ移動)	W (最後のとるマークは 小節の最後へ移動)	W (最後のとるマークは 小節の最後へ移動)	(W)最後のとるマークは 新たなペダルマークへと 変更	W (最後のとるマークは 小節の最後へ 移動)
267	下段	1	和音の強弱記号	なし	なし	L/W	ff	アクセント	ff	L/W
268			ペダルとるマーク	最後の音	下段の8分休符	なし	なし	なし	1拍目の最後	1拍目の最後

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングガー版 (1865頃)	ビュロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
273			調号	b × 2	♯ × 2 (♭は臨時記号)	L	L	L	L	L
277-278	上段、下段		スラー	なし	なし	L/W	L/W	あり(4分音符にはス タッカート)	あり	L/W
278-280	上段		スラー	T. 278の2拍目裏-	T. 279の1拍目-	W	W	L	L	W
280-282	下段		スラー	T. 280の2拍目裏-	T. 281の1拍目-	L	L	L	L	L
281-282	上段		スラー	T. 278のスラー から繋がっている	T. 281の1拍目-	L(開始は T. 279-)	L(開始は T. 279-)	L	W	L(開始は T. 279-)
287			cresc. の位置	1拍目	1拍目裏から	W	W	W	W	W
287-290	上段	1裏-	スラー	T. 290の 最後の音まで	T. 288の 最後の音まで	W(+T. 289-290の 最後の音まで)	W(+T. 289-290の最 後の音まで)	(L); T. 291の1拍目ま で	(L); T. 291の1拍目ま で	W(+T. 289-290の 最後の音まで)
289-294	下段		スラー	あり	なし	W(※T. 293-294の みあり)	W(※T. 293-294のみ あり)	L(※T. 284の2拍目か ら一つのスラー)	L	L(※T. 293-はT. 295の1拍目最後 まで)
293-294	下段		cresc.	なし (T. 293の1拍目 裏、両段の中間に cresc. マークあり)	あり	なし	なし	なし	L	なし
294			cresc.	なし	2拍目	1拍目(+2拍目には デクレッシェンド マーク)	1拍目(+2拍目には デクレッシェンドマーク)	1拍目(+2拍目には デクレッシェンドマーク)	L(※2拍目に デクレッシェンド マーク)	1拍目(+2拍目に はデクレッシェン ドマーク)
297	下段	1裏	b	d'音	b音	L	L	L	L	L
297	下段/下声部	2裏	c'音	なし	あり	W	W	W	W	W
299, 300	上段/下声部	1		なし	なし	上声部と同じ音の4 分音符	上声部と同じ音の 4分音符	上声部と同じ音の4 分音符	上声部と同じ音の4 分音符	上声部と同じ音の 4分音符
300	上段/下声部	1裏-2	f ² 音の記譜	4分音符と8分音符	4分音符と8分音符の タイ	付点4分音符	L	付点4分音符	W	付点4分音符
305	上段/上声部	1	a ² 音の付点	あり	なし	L	L	L	L	L
306	下段/上声部	2裏	d'音	なし	あり	W	W	W	W	W
311	上段/上声部		スラーの始まり	2つ目の8分音符	1拍目	W(終わりはT. 312 の2拍目まで)	W(終わりはT. 312の 2拍目まで)	W(終わりはT. 312の2 拍目まで)	W(終わりはT. 312 の2拍目まで)	L(終わりはT. 312 の2拍目まで)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネツケ版 (1878)
312	上段/下声部 2		音	c ² -f ² 音	c ² -f ² 音	c ² -e ² 音	c ² -e ² 音	c ² -e ² 音	L/W	c ² -e ² 音
312	上段/上声部 2 裏		音	なし	なし	f ² 音の4分音符	f ² 音の4分音符	f ² 音の4分音符	L/W 注あり	f ² 音の4分音符
312	上段/上声部 2 裏		スラー	なし	なし	L/W	L/W	あり	あり	あり
313-314	上段		スラー	T. 313-T. 314の1拍目最後まで	T. 314の2つ目の8分音符から	L	L	L	L(※T. 314の2拍目まで)	L
319-320	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
323	下段	1	音	Es-es音 (T. 322からスラーあり)	Es-es音 (スラーなし)	W	W	es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ)※“Es-es”は誤りであるとの注あり	es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ)	W ※es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ)を併記
323-325	上段、下段		スタッカート	あり	なし	W	L(※Lにない箇所も追加している)	L	L(T. 325の下段1拍目裏は追加している)※Lによるとの注あり	T. 324の1拍目のみあり
326-328			sfとfp	あり	なし	T. 326-327の4つのsfのみあり	T. 326-327の4つのsfのみあり	L(旧全集と同じ表記ながら、trpを追記している)	L	T. 326-327の4つのsfのみあり
329	下段	2		2分休符	2分休符	4分休符とb ¹ -d ² 音の8分音符	4分休符とb ¹ -d ² 音の8分音符	4分休符とb ¹ -d ² 音の8分音符	4分休符とb ¹ -d ² 音の8分音符	4分休符とb ¹ -d ² 音の8分音符
331	上段	2 裏	c ² 音の ^{tr}	あり	なし	L	L	L	L	L
344			ペダルマーク	1拍目裏	1拍目	W	なし	W	W	W
353	上段	2	b ¹ -b ² 音の ^{tr}	あり(b ¹ 音のみ)	なし	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり
362-363	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	W
365	上段、下段		trの前の ^{tr}	なし	あり	W	W	W(楽譜内には ^{tr} なしだが注の中であり)	W	W
383			最後の音の強弱	sf	ff	W	W	W	W	W
398			sempre dim.	1拍目	1拍目裏	W	W	W	L	W
402-403			ペダルマーク/ペダルとるマーク	なし	あり	W	W(※とるマークなし)	W	W(※T. 402のペダルマークはなし)	W(※T. 402のペダルマークはなし)
403			cresc. の位置	2拍目頭	2拍目裏	なし	なし	なし	なし	なし

第1楽章 ③

(ダルベール版／シエンカー版／トーヴァイ版／シユナーベル版／アラウ版／J. ファッシヤー版 1975／" 2005)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーマス版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フイッシャー版 (1975)	J.フイッシャー版 (2005)
0			テンポ表記	4分音符=138	2分音符=138	2分音符=112 (ビューロー版に 同じ)	W	[]付きで 2分音符=80-92	W	W ※2分音符=112	W	※2分音符=116 も(付きで併記)
1				f	ff	1拍目テヌート/ 強弱記号はなし	W	なし	W	L	L	L
9-15	下段		スラー	T. 9からT. 10と T. 11からT. 15の 2つのスラー	ff	なし	W	なし	W	W ※L?1拍目に []付きでsfあり	W	W
10-11	上段		スラー	T. 10の2拍目裏の み	T. 10の2拍目裏から T. 11の最後まで	W? (T. 11の2拍 目まで)	W? (T. 12の1拍 目まで)	T. 17の1音目 まで	W	W	W	W
11-12	上段/下声部		あり	あり	なし	W	W	W	W	L	L	L
12-13	上段/下声部		あり	あり	なし	W	W	W	W	L	L	L
15	上段/上声部		スラー	as ² -a ² 音	g ² -as ² -a ² 音	W(タイで結ばれ た1つ前のg ² 音か ら)	W(タイで結ばれ た1つ前のg ² 音か ら)	T. 10の2拍目か らT. 17の1音目 まで	W(タイで結ばれ た1つ前のg ² 音か ら)	W(タイで結ばれ た1つ前のg ² 音か ら)	W(タイで結ばれ た1つ前のg ² 音か ら)	W(タイで結ばれ た1つ前のg ² 音か ら)
19, 20			ペダルとるマーク	T. 20の1拍目	T. 19とT. 20の間	L	W	T. 19の最後	L	T. 19の最後	L	L
22-24	上段		記譜法	オクターヴ記号で	loooで	W	L	L	W	L	L	L
24			1拍目裏	1拍目裏	2拍目	W	W(T. 2拍目裏)	W	W	W	W	W
26	下段	2	a ² 音	a ² 音	a ² 音	b ² 音	b ² 音	b ² 音	b ² 音	b ² 音	L/W	L/W
32			1拍目裏	1拍目裏	2拍目	W	W	W	W	W	W	W
38			1つめの8分休符	4分休符と8分休符	4分休符と8分休符	W	W	W	W	W	W	W
39			1拍目裏	1拍目	1拍目	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	L	L
45-46	上段		スラー	あり	なし	L	上段 T. 45の2拍 目裏-T. 46の1拍 目にかけてのみ スラーあり	W	L	L	L	L
45-48	下段		スラー	あり	なし	L	L/W(T. 47,48の みスラーあり)	L/W(T. 47,48の みスラーあり)	L	L	L	L
49-50	下段		スラー	あり	なし	L	L	(L)T. 48の2拍目 裏-T. 51の1音目 まで	L	L	L	L
55, 59			p	なし	あり	W	L/W T. 55にはな し	L/W T. 55にはな し	W	L/W T. 55にはなし	L	L
55-56	下段		スラー	なし	なし	あり	あり	あり(※スラー終 わりはT. 59の1 音目まで)	あり(※スラー終 わりはT. 59の1 音目まで)	L/W	あり	あり
57-58	下段		スラー	あり	なし	L	L	L? T. 55からT. 59の1音目まで	L(T. 55からのス ラー)	W	L	L
59-60	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	W	L	L
64	上段	1 裏-2	スラー	あり	なし	L	L(2声にスラー)	L	L(2声にスラー)	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シエンカー版 (1918-1921)	トーマス版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フナイッシャー版 (1975)	J.フナイッシャー版 (2005)
64-65	下段	2 裏-1	g-g音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
65	上段		スラー	あり	なし	L	W	L [?] T. 64の2拍目裏-T. 66の2拍目	テヌート	L※点線スラー	L	L
66	上段	1	スラー	あり	なし	L(※2拍目まで)	W	L [?] T. 64の2拍目裏-T. 66の2拍目	W	L※点線スラー	L	L
67	上段/下声部	2-	8分休符/c ² -es ² 音	なし	なし	あり	あり	あり	あり(※初版では欠けているとの注あり)	あり ※c ² -es ² 音は[]付き	L/W	L/W
67-68	下段		スラー	小節ごとに区切れる	1つのスラー	W	L	W	W	W	W	W
69	上段		スラー	あり	なし	L	W	L [?] T. 68の2拍目裏-T. 70の最後まで	テヌート	L※点線スラー	L	L
70	上段/下声部	1	スラー	あり	なし	L [?] 2拍目頭まで	L [?] 1拍目裏のみ	W	L	L	L	L
70	下段	2 裏	d ² 音の ²	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
70-73	上段/下声部	2 頭	4分音符のスタッカート	なし	なし	L/W	あり	L/W	あり	L/W	L/W	L/W
73	上段/下声部	1 裏-2	スラー	あり	なし	L	L [?] 1拍目裏のみ	W	L	L	L	L
73	下段	2 裏	c ² 音の ²	あり	なし	W	L	(?)	W※注あり	L	L	L
74	上段、下段/上声部		スラー	あり	なし	独自のスラー(※下段の上声部はスラーなし)	W	T. 73の2拍目裏からT. 75の1音目まで	L(※下段は2拍目にもスラーあり)	L※下段のスラーは1拍目のみ	L※下段のスラーは1拍目のみ	L※下段のスラーは1拍目のみ
75-77			クレッシェンドマーク	1拍目から	1拍目裏から	L	L	L	L	L	L	L
75-76	上段		スラー	小節ごとに区切れる	1つのスラー	W	W	W	W	W	W	W
76	上段	2 裏	アクセント	上声部と下声部	上声部のみ	W	W	W	W	W	W	W
77-78	上段		スラー	小節ごとに区切れる	1つのスラー	W	W	W	W	W	W	W
79-80	上段/下声部		スラーの始まり	1拍目から	2拍目から	T. 80の2拍目のみあり	W	下声部にはスラーなし	1つめの8分音符から	W	1つめの8分音符から	1つめの8分音符から
79	上段/下声部	1		d ² 音の8分音符	d ² 音の8分音符	8分休符	8分休符	8分休符	8分休符	8分休符	8分休符	8分休符
81-82	上段		スラー	2つの小節にそれぞれあり	T. 81のみあり	L [?] T. 81-82で1つのスラー	L [?] T. 81-82で1つのスラー	L [?] T. 81-82で1つのスラー	L [?] T. 81-82で1つのスラー	L [?] T. 81-82で1つのスラー	L [?] T. 81-82で1つのスラー	L [?] T. 81-82で1つのスラー
83-84	上段		スラー	T. 83のみあり	なし	L [?] T. 83-84で1つのスラー	L [?] T. 83-84で1つのスラー	L [?] T. 83-84で1つのスラー	L [?] T. 83-84で1つのスラー	L [?] T. 83-84で1つのスラー	L [?] T. 83-84で1つのスラー	L [?] T. 83-84で1つのスラー
84	下段	1	三和音の中声部の音	d ² 音	c ² 音	L	L	L	L	L	L	L
85	上段/上声部	1	スラー	あり	なし	L [?] T. 85の2拍目まで	L [?] T. 86の最後まで	L [?] T. 86の最後まで	L [?] T. 86の最後まで	W	L	L
85, 88	上段/下声部		スラー	あり	なし	W	W	W	L [?] (T. 85-86/T. 87-88)	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シエンカー版 (1918-1921)	トーマズ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フョージンジャー版 (1975)	J.フョージンジャー版 (2005)
85-88	上段/下声部		T. 85-88とT. 87-88のスラー	あり	なし	W	W	W	W	W	L	L
86	上段/上声部		スラー	あり	なし	L? T. 85からT. 86の2拍目まで	L? T. 85から	L? T. 85から	L? T. 85から	W	L	L
91-93	上段、下段		スタッカート	あり	一部のみあり	L(※Lにない箇所も追加している)	W(※T. 93の1拍目のみ両段とも追加あり)	W(※下段T. 92の1拍目裏抜けしている)	L	W	L	L
91	1 裏			sf	ff	L(下段に改めてsfが足されている)	W	W	W	W	L	W
92	下段	1 裏	sf	1拍目裏	2拍目	L	L	L	L	L	L	L
94-97	上段		記譜法	オクターヴ記号で	オクターヴ記号で	locoで	locoで	L/W	locoで	locoで	L/W	L/W
94-95	上段、下段		スタッカート	なし	なし	あり(※T. 95の上段はなし?)	あり	L/W	あり(※T. 95の上段はなし?)	L/W	L/W	L/W
96	上段	1		fp	sf	W	L	W	L※ロンドン版による注あり	L	L	L
96-97	下段		指使い	4321X321421X	543213215321	543214321321(リスト版に同じ)	W	独自の指使い	W	W※()付きでリストと同じ指使いも併記	W	W
98	上段	1	記譜法	オクターヴ記号で	オクターヴ記号で	locoで	locoで	locoで	locoで	locoで	L/W	L/W
106-107-109-	上段/下声部		g ² 音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	W	L	L
110	上段/上声部		スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
112	上段		1拍目と2拍目裏のスタッカート	あり	なし	2拍目裏のみあり	2拍目裏のみあり	2拍目裏のみあり	L	2拍目裏のみあり	L	L
120a		1		sf	ff	W	W	W	W	W	L	W
124, 126, 128	上段		4分音符のスタッカート	なし	T. 124とT. 128の2拍目裏のみあり	3小節ともに1拍目と2拍目裏にあり	W(T. 126も2拍目の裏のみあり)	3小節ともに1拍目と2拍目裏にあり	3小節ともに1拍目と2拍目裏にあり	W(T. 126も2拍目の裏のみあり)	W(T. 126も2拍目の裏のみあり)	W(T. 126も2拍目の裏のみあり)
129	下段	1	f _{is} 音の _h	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
147	上段/下声部		b音	8分音符	4分音符	W	W	W	W	L	L	L
153	下段/上声部	1 裏-2	c ¹ 音の記譜法	4分音符×2 タイ	2分音符	W	W	W	W	W	W	W
161	下段/下声部	1	E _s 音の _h	なし	あり	W	W	W	W	W	W	L
162	上段/上声部	1 裏	e _s ¹ 音	_b	_h	W	W	W	W	W	L	L
162	下段/上声部	1 裏	g音	4分音符	8分音符	W	W	W	W	W	L	L
163	上段/下声部	1	f音	あり	なし	W	W	W	W	W	W	L
163	下段/上声部		スラー	1 裏から	1から?	W	W	W(終わりはT. 164の1音目まで)	T. 163の最後の音からT. 164の最初の音	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シエンカー版 (1918-1921)	トーヴン版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フイツィャー版 (1975)	J.フイツィャー版 (2005)
164	下段/上声部		スラー	あり	なし	L (終わりはT.165 の1拍目まで) ビュロー版に 同じ	L	W	L(終わりはT. 165の 1拍目まで) ビュロー版に 同じ	W	L	L
166	下段/上声部 1裏		b音のト	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
169, 171	下段	2	sf	あり	なし	L(小さく付記)	L	W	L(小さく付記)	W	W	L
173-174	上段、下段		スラー	8分音符+4分音符 までが基本	8分音符のみ	W	W	W	W	W	L(8分音符+4分 音符に統一)	L(8分音符+4分 音符に統一)
173-175			sf	あり	なし	W	L(※T.175の 2拍目はなし)	W	W	L	L	L
176	上段/上声部 1裏		スラー	あり	なし	L	L	L	L	W	L	L
176/177			ペダルマーク	T.177の1拍目	T.176の2拍目裏	W	L	W	W(ペーターヴェ ンによるとの 注あり)	W	W	W
177		1		f	ff	W	W	W	W	W	W	L
178		2裏	p	あり	なし	L	L	L	L[f]付き	L	L	L
192			ペダルとるマーク	2拍目頭	最後の音	W	W	2拍目裏	W	W	L	L
193			Ped.	T.192の最後の音	1拍目にあり	W	W	W	W	W	L	L
196			Ped.	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
207	上段		スラー	1拍目裏から	1拍目から	W	W	W(終わりは T.208の最後ま で)	W	W	W	W
210	上段	1	e ³ 音の#	あり	なし	W	L	L	W	L※[]付きで あり	W	L
212	上段	1	e ³ 音の#	あり	なし	W	L	L	W	L※[]付きで あり	W	L
214	下段/下声部 2		2分休符	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
214, 217	下段		p	なし	あり	T.214はL T.217はW	W	L	T.214はL T.217はW	L	W	W
217	上段		最後の音	fis ¹ 音	ais ¹ 音	L	L	L	L	L	W	W
221-223	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
221-226			cresc.	なし	あり	W	W	W (T.223まで?)	W	W(点線はなし)	W	W
224	上段	1	e ³ 音の8分音符	あり(T.223の付点 による)	なし	L (8分音符による)	L (8分音符による)	L (8分音符による)	L (8分音符による)	L (8分音符による)	L (8分音符による)	L (8分音符による)
224-226			ラとラ#	ラ?	ラ#?	ラ# ※当然aisで あるとの注あり	ラ#	[e] ※#?も併記	ラ# ※注あり	W	W	W
228, 229			Ped.	T.228の最後の音	T.229の頭	W	W	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーヴイ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フョージンジャー版 (1975)	J.フョージンジャー版 (2005)
233	上段/上声部 2	スラー		f ² -es ² 音のみ	2拍目全て	W	W	T. 232の2拍目裏 からT. 234の2拍 目まで	T. 232の2拍目裏 から	W	W	W
234	下段/上声部 2 裏	b音のb		なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	L/W	L/W
234-235	下段/下声部	f音のタイ		あり	なし	なし	W	W	W	W	L	L
235	上段/下声部 2	g ² 音		b	b	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W ※[]付きで 併記	L/W	L/W
236-237	下段/下声部	b-b音のタイ		あり	なし	W	W	W	W	W	L	L
237	上段/上声部	a ² 音のb		なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	L/W	L/W
239	上段/上声部 1	a ² 音のb		あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
239	上段/下声部 1	a ¹ 音の臨時記号		なし	なし	b (旧全集による ものか?)	b	b ※ b ² ?も併記	b ※注あり	b	L/W	L/W
239-240	下段/下声部	des ¹ -des ¹ 音のタイ		あり	なし	W	W	W	W	W	L	L
240	上段/下声部 2 裏	g ² 音のb		なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
243	上段/下声部 1 裏-2	ges ² -ges ² 音のタイ		なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
246	上段/上声部 2	スラー		なし	なし	L	L	独自のスラー	L	W	L	L
246	下段/上声部 1 裏	a ¹ 音のb		なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
248	上段/上声部 1	a ³ 音のb		あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
248	上段 2 裏	和音		f ² /as ² /f ³ 音	f ² /as ² /des ² /f ³ 音	W	W	W	W	W	W	W
249	上段 1	d ³ 音のb		あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
250, 252	上段	スタッカート		あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
257	上段 2 裏	c ² 音のb		あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
258-261	上段	スタッカート		あり	なし	L(※T. 261は1拍 目のみあり)	L	L	L(※T. 258はな し)	W	L	L
264, 265		ritardandoの開始位置		T. 265の頭	T. 264の2拍目裏	W	2拍目	L	W	W? T. 265の 1拍目裏	L	L
265	上段、下段	a音とa ² 音のb		あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
266	下段	fis/ois ¹ 音のpp		なし	あり	W	W	L	W	L	W	W
266		最後の音の強弱		f	ff	W	W	W	W	W	L	L
266		ペダルとる・ペダル・とるマーク		なし	あり	W (ペダル・とる マークの位置が 異なる)	W (最後の音に 新たなペダル マークあり)	(W): 最後のとる マークは新たな ペダルマーク へと変更	W (最後の音に 新たなペダル マークあり) ※ペーターヴエン による注あり	L	L	L
267	下段 1	和音の強弱記号		なし	なし	L/W	1拍目裏にff	上段1拍目裏にff	L/W	L/W	L/W	L/W
268		ペダルとるマーク		最後の音	下段の8分音符	1拍目の最後	1拍目の最後	1拍目の最後 ()付き	1拍目の最後 ※注あり	2拍目頭	L	L
273		調号		b × 2	b × 2 (bは臨時記 号)	L	L	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シエンカー版 (1918-1921)	トーマス版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フナイッシャー版 (1975)	J.フナイッシャー版 (2005)
277-278	上段、下段		スラー	なし	なし	あり	L/W	L/W	あり	あり	あり	あり
278-280	上段			T. 278の2拍目裏- T. 280の2拍目裏-	T. 279の1拍目- T. 281の1拍目-	L/W(2つある)	W	L	L/W(2つある)	W	W	W
280-282	下段			T. 280の2拍目裏-	T. 281の1拍目-	L	T. 280の2拍目裏のみ	L	L	W	W	W
281-282	上段			T. 278のスラーから繋がっている 1拍目	T. 281の1拍目- 1拍目裏から	L(開始はT. 279-) W	W	L(開始はT. 278の2拍目裏-) L	L(開始はT. 279-) W	W	W	W
287			cresc. の位置									
287-290	上段	1裏- 裏-	スラー	T. 290の最後の音まで	T. 288の最後の音まで	W(+T. 289-290の最後の音まで)	W(+T. 289-290の最後の音まで)	(L):T. 291の1拍目まで	W(+T. 289-291の1拍目まで)	L	W(+T. 289-290の最後の音まで)	W(+T. 289-290の最後の音まで)
289-294	下段		スラー	あり	なし	L(T. 294の2拍目裏から新たなスラー-)	L	L	L(*T. 293-はT. 295の2拍目まで)	T. 287-T. 290のみあり	L(T. 293-のスラーの終わりはT. 295の1拍目まで)	L
293-294	下段		cresc.	なし (T. 293の1拍目裏、両段の中間にcresc.マークあり)	あり	W	W	L(T. 293の2拍目、両段の中間にcresc.マークあり)	W	W(点線はなし)	W	W
294			cresc.	なし	2拍目	2拍目にクレッシェンド、2拍目裏にデクレッシェンドマーク	W	L(2拍目にデクレッシェンドマーク)	W	W	W	W
297	下段	1裏	b	d'音	b音	L	L	L	L	L	L	L
297	下段/下声部	2裏	c音	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
299, 300	上段/下声部	1		なし	なし	上声部と同じ音の4分音符	L/W	上声部と同じ音の4分音符	上声部と同じ音の4分音符	上声部と同じ音の4分音符	L/W	L/W
300	上段/下声部	1裏-2	f ² 音の記譜	4分音符と8分音符のタイ	4分音符と8分音符のタイ	付点4分音符	W	付点4分音符	付点4分音符	付点4分音符	付点4分音符	付点4分音符
305	上段/上声部	1	a ² 音の付点	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
306	下段/上声部	2裏	d'音	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
311	上段/上声部		スラーの始まり	2つ目の8分音符	1拍目	W(終わりはT. 312の2拍目まで)	2拍目から	W	W(終わりはT. 311の2拍目)	W	W	W
312	上段/下声部	2	音	c ² -f ² 音	c ² -f ² 音	c ² -e ² 音	L/W	c ² -e ² 音	c ² -e ² 音 ※f ² 音はおそらく間違っているとの注あり	c ² -e ² 音	L/W	L/W
312	上段/上声部	2裏	音	なし	なし	L/W	f ² -f ³ 音	f ² 音の4分音符	L/W	L/W	L/W	L/W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シエンカー版 (1918-1921)	トーマス版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フョージンジャー版 (1975)	J.フョージンジャー版 (2005)
312	上段/上声部	2 裏	スラー	なし	なし	あり	あり	あり	T. 311からのスラー	L/W	L/W	L/W
313-314	上段			T. 313-T. 314の1拍目最後まで	T. 314の2つ目の8分音符から	L	L	L(※T. 314の2拍目まで)	L	L	L	L
319-320	下段			あり	なし	L	L	L	L	W	L	L
323	下段	1	音	Es-es音 (スラーあり)	Es-es音 (スラーなし)	es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ)	es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ)	es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ)	es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ)	es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ)	es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ)	es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ)
323-325	上段、下段		スタッカート	あり	なし	L(※Lにない箇所も追加している)	L(※提示部に同じ)	W	L	W	L	L
326-328				あり	なし	T. 326-327の4つのsfとT. 328は小さく付記	L	全てsf	fpのみあり	L	L	L
329	下段	2		2分休符	2分休符	4分休符とb ¹ -d ² 音の8分音符	4分休符とb ¹ -d ² 音の8分音符	4分休符とb ¹ -d ² 音の8分音符	4分休符とb ¹ -d ² 音の8分音符	4分休符とb ¹ -d ² 音の8分音符	L/W	L/W
331	上段	2 裏	c ² 管の ¹ ₄	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
344			ペダルマーク	1拍目裏	1拍目	W	W	W	W	W	L	L
353	上段	2		あり(b音のみ)	なし	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり
362-363	下段			あり	なし	L(※T. 365の2拍目まで)	W	W	L	W	L	L
365	上段、下段		trの前の ¹ ₄	なし	あり	W	W	W	W	W	L(b)あり	W
383			最後の音の強弱	sf	ff	W	W	W	W	W	W	W
398				1拍目	1拍目裏	W	L	L	W	L	W	W
402-403			ペダルマーク/ペダルとるマーク	なし	あり	W(※T. 402のペダルマークはなし)	W(※T. 401のペダルマークは2拍目裏?)	W(※T. 402のペダルマークはなし)	W(※T. 402のペダルマークはなし)	W	L	L
403			cresc. の位置	2拍目頭	2拍目裏	L	W	W[]付き	L	L	L	L

第1楽章 ④

(ペンレ版 (C) / " (V) / ウィーン原典版 2001 / " 2018 / 園田高弘版 / ペンレライター版)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原版 (2001)	ウィーン原版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
0			テンポ表記	4分音符=138	2分音符=138	W()付き	W	W	W	W	W
1				f	ff	W	W	W	W	W	W
9-15	下段		スラー	T. 9からT. 10と T. 11からT. 15の 2つのスラー	T. 9からT. 15まで 1つのスラー	なし	なし	W	W	なし	W
10-11	上段		スラー	T. 10の2拍目裏の み	T. 10の2拍目裏から T. 11の最後まで	W	W	W	W	W	W
11-12	上段/下声部			あり	なし	W	W	W	W	W	W
12-13	上段/下声部			あり	なし	W	W	W	W	W	L
15	上段/上声部		スラー	as ² -a ² 音	g ² -as ² -a ² 音	W(タイで結ばれた 1つ前のg ² 音から)	W(タイで結ばれた 1つ前のg ² 音から)	W	W	W(タイで結ばれた 1つ前のg ² 音から)	W
19, 20				T. 20の1拍目	T. 19とT. 20の間	W	W	W	W	T. 19の最後	W
22-24	上段			オクターヴ記号で 1拍目裏	locoで 2拍目	L	L	L	L	L	W
24						W	W	W	W	W	L
26	下段	2		a ² 音	a ² 音	b ² 音	b ² 音	b ² 音	L/W	b ² 音	L/W
32				1拍目裏	2拍目	W	W	W	W	W	W
38				1つめの8分休符	4分休符と8分休符	W	W	W	W	W	W
39				1拍目裏	1拍目	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	T. 38の最後の音	L(T. 38の最後の音 にも「」付きであり)
45-46	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
45-48	下段		スラー	あり	なし	L/W(T. 47, 48のみ スラーあり)	L	L	L()付き	L	W
49-50	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L(※終わりはT. 51の1音目まで)	L
55, 59				なし	あり	W	W	W	W	W	W
55-56	下段		スラー	なし	なし	L/W	あり	あり []付き	あり L訂正版()付き	あり	L/W
57-58	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
59-60	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
64	上段	1裏-2	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原版 (2001)	ウィーン原版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
64-65	下段	2裏-1	g-g音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
65	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
66	上段	1	スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
67	上段/下声部	2-	8分休符/c ² -es ³ 音	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	L/W
67-68	下段		スラー	小節ごとに区切れる	1つのスラー	W	W	W	W	W	W
69	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L? T. 68の2拍目裏から	W
70	上段/下声部	1	スラー	あり	なし	W	W	W	L()付き	L(1拍目裏-2拍目)	1拍目裏のみ 点線スラー (T. 302-4より)
70	下段	2裏	d ⁴ 音の ^h	あり	なし	L	L	L	L	L	L
70-73	上段/下声部	2頭	4分音符のスタッカート	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
73	上段/下声部	1裏-2	スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	1拍目裏のみ
73	下段	2裏	c ³ 音の ^h	あり	なし	W	W	W	L	W	W
74	上段、下段/ 上声部		スラー	あり	なし	W	L※下段のスラーは1拍目のみ	L※下段のスラーは1拍目のみ	L()付き	L※下段のスラーは1拍目のみ	W
75-77-			クレッシェンドマーク	1拍目から	1拍目裏から	L	L	L	L	L	L
75-76	上段		スラー	小節ごとに区切れる	1つのスラー	W	W	W	W	W	W
76	上段	2裏	アクセント	上声部と下声部	上声部のみ	W	W	W	下声部のみ	W	W
77-78	上段		スラー	小節ごとに区切れる	1つのスラー	W	W	W	W	W	W
79-80	上段/下声部		スラーの始まり	1拍目から	2拍目から	W	1つめの8分音符から	1つめの8分音符から	1つめの8分音符から	1つめの8分音符から	W
79	上段/下声部	1		d ⁴ 音の8分音符	d ⁴ 音の8分音符	8分休符	8分休符	8分休符	8分休符	8分休符	L/W
81-82	上段		スラー	2つの小節にそれぞれあり	T. 81のみあり	L? T. 81-82で一つのスラー	L? T. 81-82で一つのスラー	L? T. 81-82で一つのスラー	L? T. 81-82で一つのスラー(※T. 77より)	L? T. 81-82で一つのスラー	L? T. 81-82で一つのスラー
83-84	上段		スラー	T. 83のみあり	なし	L? T. 83-84で一つのスラー	L? T. 83-84で一つのスラー	L? T. 83-84で一つのスラー	L? T. 83-84で一つのスラー(※T. 81より)	L? T. 83-84で一つのスラー	L? T. 83-84で一つのスラー
84	下段	1	三和音の中声部の音	d ⁴ 音	c ³ 音	L	L	L	L	L	L
85	上段/上声部	1	スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
85, 88	上段/下声部		スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
85-88	上段/下声部		T. 85-86とT. 87-88のスラー	あり	なし	W	W	W	W	W	W
86	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
91-93	上段、下段		スタックカート	あり	一部のみあり	W	W(T. 93の1拍目裏のスタックカートが追加されている)	L	L()付き ※Wにもありな箇所も()に入れてしまっている	W(T. 93のみ追加あり)	W
91	1 裏			sf	ff	W	W	W	W	W	W
92	下段	1 裏		1拍目裏	2拍目	L	L	L	L	L	L
94-97	上段		記譜法	オクターヴ記号で	オクターヴ記号で	locoで	locoで	locoで	locoで	locoで	locoで
94-95	上段、下段		スタックカート	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
96	上段	1		fp	sf	L ※注あり	L ※注あり	L ※注あり	L	L	L
96-97	下段		指使い	4321X321421X	543213215321	W	W	W(+独自の指使い併記)	W(+独自の指使い併記)	W	W
98	上段	1	記譜法	オクターヴ記号で	オクターヴ記号で	locoで	locoで	locoで	locoで	locoで	locoで
106-107-109-	上段/下声部		g音のタイ	あり	なし	W	W	W	W	W	L
110	上段/上声部		スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	W
112	上段		1拍目と2拍目裏のスタックカート	あり	なし	2拍目裏のみあり	L	L	L()付き	L	2拍目裏のみあり
120a		1		sf	ff	W	W	W	W	W	W
124, 126, 128	上段		4分音符のスタックカート	なし	T. 124とT. 128の2拍目裏のみあり	W(T. 126も2拍目の裏のみあり)	W(T. 126も2拍目の裏のみあり)	W(T. 126も[]付きで2拍目の裏のみあり)	W(T. 126も[]付きで2拍目の裏のみあり)	W(T. 126も2拍目の裏のみあり)	W(T. 126も2拍目の裏のみあり)
129	下段	1	fis ¹ 音の ¹ 音	なし	なし	あり	あり	あり	ありL訂正版	あり	あり
147	上段/下声部		b音	8分音符	4分音符	L ※注あり	L ※注あり	L	L	L	L
153	下段/上声部	1 裏-2	c ¹ 音の記譜法	4分音符×2 タイ	2分音符	W	W	W	W	W	W
161	下段/下声部	1	Es音の ¹ 音	なし	あり	W	W	W	W	W	W
162	上段/上声部	1 裏	es ¹ 音	b	h	W	W	W	W	W	W
162	下段/上声部	1 裏	g音	4分音符	8分音符	W	W	W	W	W	L
163	上段/下声部	1	f音	あり	なし	W	W	W	W	W	W
163	下段/上声部		スラー	1 裏から	1から?	W	W	L	L	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原版 (2001)	ウィーン原版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
164	下段/上声部		スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
166	下段/上声部	1裏	b音のb	あり	なし	L	L	L	L	L	L
169、171	下段	2	sf	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
173-174	上段、下段		スラー	8分音符+4分音符 までが基本	8分音符のみ	W	W	Lに統一	Lに統一	Lに統一	W
173-175			sf	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
176	上段/上声部	1裏	スラー	あり	なし	W	L ※1裏-2にかけて に変更	L ※1裏-2にかけて に変更	L()付き ※1裏-2にかけて に変更	L ※1裏-2にかけて に変更	W
176/177			ペダルマーク	T. 177の1拍目	T. 176の2拍目裏	W	W	W	W	W	W
177		1		f	ff	W	W	W	W	W	W
178		2裏	p	あり	なし	L()付き	L	L	L()付き	L	L
192			ペダルとるマーク	2拍目頭	最後の音	W	W	W	W	W	W
193			Ped.	T. 192の最後の音	1拍目にあり	W	W	W	W ※+類似T. 195 より	W	W
196			Ped.	なし	あり	W	W	W	W	W	W
207	上段		スラー	1拍目裏から	1拍目から	W	W	W	W	L(※終わりはT. 208の最後まで)	W
210	上段	1	g [♯] 音の#	あり	なし	L ※注あり	L ※注あり	L	L	L	L
212	上段	1	g [♯] 音の#	あり	なし	L ※注あり	L ※注あり	L	L	L	L
214	下段/下声部	2	2分休符	あり	なし	L	L	L	L	L	L
214、217	下段		p	なし	あり	W	W	W	W	W	W
217	上段		最後の音	fis [♯] 音	ais [♯] 音	L	L	L	L	L	L
221-223	上段		スラー	あり	なし	L()付き	L	L	L()付き	L	L
221-226			cresc.	なし	あり	W	W	W	W	W	W
224	上段	1	e [♯] 音の8分音符	あり(T. 223の付点 による)	なし	L(8分音符による)	L(8分音符による)	L(8分音符による)	L(8分音符による)	L(8分音符による)	L(8分音符による)
224-226			ラとラ#	ラ?	ラ#?	W	W	W	W	W(aisであるべきと の注あり)	ラ#
228、229			Ped.	T. 228の最後の音	T. 229の頭	W	W	W	L	W	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン/原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
233	上段/上声部 2		スラー		2拍目全て	W	W	W	W	W	W
234	下段/上声部 2 裏		b音のb	なし	なし	あり	あり	あり		あり	L/W
234-235	下段/下声部		f-f音のタイ	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
235	上段/下声部 2		g音	b	b	L/W	#※注あり	#	#	#	[]付きで#
236-237	下段/下声部		b-b音のタイ	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
237	上段/上声部		a音のb	なし	なし	あり	あり	[]付きであり	[]付きであり	あり	[]付きであり
239	上段/上声部 1		a音のb	あり	なし	L	L	L	L	L	L
239	上段/下声部 1		a音の臨時記号	なし	なし	#※注あり	#※注あり	[]付きで#	[]付きで#	#	#
239-240	下段/下声部		des ¹ -des ¹ 音のタイ	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
240	上段/下声部 2 裏		g音のb	なし	あり	W	W	W	W	W	W
243	上段/下声部 1 裏-2		ges ² -ges ² 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
246	上段/上声部 2		スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
246	下段/上声部 1 裏		a音のb	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
248	上段/上声部 1		a音のb	あり	なし	L	L	L	L	L	L
248	上段		和音	f ² /as ² /f ³ 音	なし	W	W	W	W	W	W
249	上段		d ³ 音のb	あり	なし	L	L	L	L	L	L
250, 252	上段		スタッカート	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	L
257	上段	2 裏	c ² 音のb	あり	なし	L	L	L	L	L	L
258-261	上段		スタッカート	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	L
264, 265			ritardandoの開始位置	T. 265の頭	T. 264の2拍目裏	W	W	W	W	W	L
265	上段、下段		a音とa ² 音のb	あり	なし	L	L	L	L	L	L
266	下段		fis/cis ¹ 音のpp	なし	あり	L	L	L	L	L	W
266			最後の音の強弱	f	ff	W	W	W	W	W	W
266			ペダルとる・ペダル・とるマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	W
			最後の音に新たなペダルマークあり								
			最後の音に新たなペダルマークあり								
			最後の音に新たなペダルマークあり								
267	下段	1	和音の強弱記号	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
268			ペダルとるマーク	最後の音	下段の8分休符	1拍目の最後	1拍目の最後	W	W	1拍目の最後	W
273			調号	b x 2	# x 2 (bは臨時記号)	L	L	L	L	L	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン/原版(L)	ウィーン/原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン/原典版 (2001)	ウィーン/原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
277-278	上段、下段		スラー	なし	なし	L/W	あり	あり []付きor[] が付記されていない箇所もあり	()付きであり L訂正版 ※+類似箇所 T. 45-47による	あり	L/W
278-280	上段		スラー	T. 278の2拍目裏-	T. 279の1拍目-	W	L	L	L	L	W
280-282	下段		スラー	T. 280の2拍目裏-	T. 281の1拍目-	W	L	L	L	L	W
281-282	上段		スラー	T. 278のスラー から繋がっている	T. 281の1拍目-	W	W	W	W	W	W
287			cresc. の位置	1拍目	1拍目裏から	W	W	W	W	W	W
287-290	上段	1裏-	スラー	T. 290の 最後の音まで	T. 288の 最後の音まで	L	L	L	L	(L) T. 291の1拍目 まで	L
289-294	下段		スラー	あり	なし	W? (※T. 287- T. 290まではあり)	L(※T. 287-T. 290 まで1つのスラー)	L	L ()付き	L(※T. 1つ目のス ラーはT. 287から T. 293-のスラー はT. 295の1音目 まで)	W(※T. 293-294の みあり)
293-294	下段		cresc.	なし (T. 293の1拍目 裏、両段の中間に cresc. マークあり)	あり	W	W	W=L? (T. 293の2拍 目、両段の中間に cresc. マーク あり)	W()付き ※LとWの情報が 逆転している	W	L
294			cresc.	なし	2拍目	W	W	L	W	W	L
297	下段	1裏	b	d音	b音	L	L	L	L	L	L
297	下段/下声部	2裏	c音	なし	あり	W	W	W	W	W	W
299, 300	上段/下声部	1		なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
300	上段/下声部	1裏-2	f ² 音の記譜	4分音符と8分音符 タイ	4分音符と8分音符の タイ	付点4分音符	付点4分音符	付点4分音符	付点4分音符	付点4分音符	付点4分音符
305	上段/上声部	1	a ² 音の付点	あり	なし	L	L	L	L	L	L
306	下段/上声部	2裏	d音	なし	あり	W	W	W	W	W	W
311	上段/上声部		スラーの始まり	2つ目の8分音符	1拍目	W	W	W	W	W	W
312	上段/下声部	2	音	c ² -f ² 音	c ² -f ² 音	L/W ※e ² 音も 考えられるとの注 あり	L/W ※e ² 音も 考えられるとの注 あり	L/W	L/W	L/W	L/W
312	上段/上声部	2裏	音	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原版 (2001)	ウィーン原版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
312	上段/上声部	2裏	スラー	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
313-314	上段		スラー	T. 313-T. 314の 1拍目最後まで	T. 314の2つ目の 8分音符から	L	L	L	L	L	L
319-320	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
323	下段	1	音	Es-es音 (T. 322から スラーあり)	Es-es音 (スラーなし)	W	W	es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ) ※1訂正版、 類似箇所T. 91に よる	es ¹ -es ² 音 (T. 322からタイ)	W	es ¹ -es ² 音 (T. 322から タイ)
323-325	上段、下段		スタッカート	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
326-328			sfとfp	あり	なし	L※T. 326-327は ()付き	L	L	L()付き	L	L
329	下段	2		2分休符	2分休符	4分休符とb ¹ -d ² 音 の8分音符	4分休符とb ¹ -d ² 音 の8分音符	4分休符と[]付き でb ¹ -d ² 音の8分音 符	4分休符と[]付き でb ¹ -d ² 音の8分音 符(類似箇所T. 97 による)	4分休符とb ¹ -d ² 音 の8分音符	L/W
331	上段	2裏	a ² 音の ^ハ	あり	なし	L	L	L	L	L	W
344			ペダルマーク	1拍目裏	1拍目	W	W	W	W	W	W
353	上段	2	b ¹ -b ² 音の ^ハ	あり(b音のみ)	なし	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり	L+b ² 音もあり
362-363	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
365	上段、下段		trの前の ^ハ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
383			最後の音の強弱	sf	ff	W	W	W	W	W	W
398			sempre dim.	1拍目	1拍目裏	W	W	W	W	W	L
402-403			ペダルマーク/ペダルとるマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	W
403			cresc. の位置	2拍目頭	2拍目裏	L?	L?	L	L	L	L

第2楽章 ①

(アルタリア異刷り／L訂正版／モシエレス版 1841 以前／W第2版／リスト版／モシエレス版 1858)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシェレス版 (1841以前)	W 第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシェレス版 (1858)
0				あり	なし	W	L	L	W	L	L
3	下段	3	スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
5	下段	1-2	f-f音のタイ/ A-A _s 音のスラー	タイなし/ スラーあり	タイあり/ スラーなし	W	L	L	W	L	L+W (=タイもスラー もあり)
14		3		なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
18		3		なし	あり	W	L	L	W	L	L
22		2	和音の中声部	g音の4分音符	g音の4分音符	L/W	L/W	L/W	1拍目のg音の2分 音符が伸びている	1拍目のg音の2分 音符が伸びている	1拍目のg音の2分音 符が伸びている
24	上段	2	b音の ^H	あり	なし	W	L	L	L	L	L
24-26	上段、下段			あり	なし	W	L	L	L	L	L
25		3	pp	なし	あり	W	L	L	W	L	W
30		3	p	あり	なし	W	L	L	W	L	L
30-33		3	デクレッシェンド	なし	あり	W	L	L	W	L	W (アクセント?)
34		3	p	なし	あり	W	L	L	W	L	W
34	上段	3	スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
35?36?		1	dim.	T. 35にあり	T. 36にあり	W	L	L	W	L	L
40, 41		3	pp	なし	あり	W	L	L	W	LとW(T. 40あり, T. 41なし)	L
40-42	上段、下段			あり	なし	W	L	L	L	L	L
52	下段	3	3連符の1つ目の音	B ₁ 音	A _s 音	W	L	L	W	W	W
57-62	下段		スラー	T. 57アウフタクト~T. 58の1拍目とT. 60~ T. 61にあり	T. 60アウフタクト~T. 61にあり	W	L	L	T. 57-T. 62の1拍目 までがひとつの スラー	L+ T. 58~T. 59 にもあり	L? (※T57アウフタク ト~T. 59とT. 60~ T. 62の1拍目まで)

小節数	段ノ声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
61		1	ペダル取るマーク	あり	なし	W	L	L	W	L	W
69-70			デクレッシェンド	あり	T. 69のみにあり	W	L	L	W	L	L
71			ペダル取るマーク	1拍目にあり	3拍目にあり	W	L	L	W	L	L
72	上段	3	上声部の4分音符f ² 音	なし	あり	W	L	L	W	L? (T. 73の1拍目もなし)	L
76			ペダル取るマーク	2拍目頭にあり	2拍目終わりにあり	W	L	L	W	L	L
77		1	デクレッシェンド	あり	なし	W	L	L	W	L	L
77		3	ペダルマーク	あり	T. 76の3拍目にあり	W	L	L	W	L	L
80		1	pp	下段にあり	中段にあり	W	L	L	W	L	L
80		終わり	ペダル取るマーク	なし	あり	W	L	L	W	L	W
110	上段		sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L
112		1-2	和音の音符の種類ノフェルマーク 4分音符のあとに4分 休符ありノそれぞれ の音符と休符にフェ ルマークあり		4分音符ひとつのみ ノ4分音符にフェ ルマークあり	W	L	L	W	L	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
112	下段		オクターヴ記号	なし(上段のオクターヴ記号が活きているとも読める)	なし(上段のオクターヴ記号が活きているとも読める)	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
112			音符の大きさ	普通の大きさ	普通の大きさ	L/W	L/W	L/W	小さく記載	L/W	小さく記載
113 アウフ タクト			Tempo primo	なし	あり	W	L	L	W	W	W
114			ペダル取るマーク	2拍目終わり	1拍目終わり	W	L	L	W	W	T. 113の2拍目終わり
116	上段	1-2	スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
118-120	上段、下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
120		1-2	デクレッシェンド	あり	なし	W	L	L	W	L	W
122	上段	3	スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
122-124	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
124-126	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
125-127			クレッシェンド/f	なし/T. 127の1拍目(裏?)でf	T. 125の3拍目から T. 127の2拍目に かけてあり/ T. 127の3拍目でf	W	L	L	W	L(127の1拍目でf)	W
125-127	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
128-131		3	デクレッシェンド	なし	あり	W	L	L	クレッシェンド	L	クレッシェンド
129	上段	1-2	スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
129	上段	3	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	W
130-131	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
133-136	下段		スラー	133-36の1拍目まで	なし	W	L	L	W	W	L
135		2	pp	なし	あり	W	L	L	W	L	L
138	上段	2	b音の ^ハ	あり	なし	W	L	L	L	L	L
138-139	下段/下声部		スラー	あり	なし	W	L	L	T. 39のみあり	L	L
139		3	pp	なし	あり	W	L	L	W	L	W
140	下段	3	ハ音記号	なし	なし	L/W	あり	あり	あり	あり	あり
140-142	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
141	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
145-148	上段	1-2	スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
145-147	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
154-155	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
156	上段	3	スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
157	下段		クレッシェンド	1拍目にあり	T. 156の3拍目にあり	W	L	L	W	L	L
157-158			スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
159	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
159	下段		スラー	なし	あり	W	L	L	W	W	W
165		3	pp	なし	あり	W	L	L	W	L	W
166, 167	上段・下段	1	B ₁ -B音、b-b ^ハ 音の ^ハ	あり (B ₁ 音とb音のみ)	なし	W	L	L	L (全てに ^ハ)	L (全てに ^ハ)	L (全てに ^ハ)
168			Prestoの位置	1拍目 アフタクト	1拍目	W	L	L	W	W	W
173			スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	W

第2楽章 ②

(旧全集／ハスリンガー版／ビューロー版／ダム版／ライネッケ版)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングァー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネツケ版 (1878)
0		p		あり	なし	W	L	W	L	W
3	下段	3	スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
5	下段	1-2	f音のタイ/ A-As音のスラー	タイなし/ スラーあり	タイあり/ スラーなし	L+W (=タイも スラーもあり)	L+W (=タイも スラーもあり)	L+W (=タイも スラーもあり)	L+W (=タイも スラーもあり)	L+W (=タイも スラーもあり)
14		3	p	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
18		3	p	なし	あり	W	W	W	W ※Wによる注 あり	W
22		2	和音の中声部	g音の4分音符	g音の4分音符	1拍目のg音の2分音 符が伸びている	1拍目のg音の2分音 符が伸びている	1拍目のg音の2分音 符が伸びている	1拍目のg音の2分音 符が伸びている	1拍目のg音の2分音 符が伸びている
24	上段	2	b音のh	あり	なし	L	L	L	L	L
24-26	上段、下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
25		3	pp	なし	あり	W	W	W	W	W
30		3	p	あり	なし	L	L	L	W ※pは誤りである との注あり	L
30-33		3	デクレッシェンド	なし	あり	W	W	W	W	W
34		3	p	なし	あり	W	W	W	W	W
34	上段	3	スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
35?36?		1	dim.	T. 35にあり	T. 36にあり	L	L	L	L	L
40, 41		3	pp	なし	あり	W	W	W	W	W
40-42	上段、下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
52	下段	3	3連符の1つ目の音	B ₁ 音	A ₅₁ 音	W	W	W	W	W
57-62	下段		スラー	T. 57アフタクト~T. 58の1拍目とT. 60~ T. 61にあり	T. 60アフタクト~T. 61にあり	T. 57-T. 62の1拍目 までがひとつの スラー	T. 57-T. 62の1拍目 までがひとつの スラー	T. 57-T. 62の1拍目 までがひとつの スラー	T. 57-T. 62の1拍目 までがひとつの スラー	T. 57-T. 61の 最後まで

小節数	段／声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハズリングァー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネツケ版 (1878)
61		1	ペダル取るマーク	あり	なし	W	L? T. 60の3拍目 最後にあり	Lに類似(ペダルを 取るマークでなく新 たにペダルをつける マークあり)	L? T. 60の3拍目 最後にあり	T. 60の2拍目 終わりにあり
69-70			デクレッシェンド	あり	T. 69のみにあり	W	L? (※T. 69は クレッシェンド)	W	L T. 71まであり	W
71			ペダル取るマーク	1拍目にあり	3拍目にあり	W	W	W? (2拍目終わりに あり)	2拍目にあり	W
72	上段	3	上声部の4分音符 ² 音	なし	あり	W	W	W ※続きの声部も 付記	W	W
76			ペダル取るマーク	2拍目頭にあり	2拍目終わりにあり	W	W	L	W	W
77		1	デクレッシェンド	あり	なし	W	W	W	L	W
77		3	ペダルマーク	あり	T. 76の3拍目にあり	W	W	W? (76の2拍目にあり)	W	W
80		1	pp	下段にあり	中段にあり	W	W	W	W	W
80		終わり	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W
110	上段		sf	あり	なし	L	L	L	L	L
112		1-2	和音の音符の種類／ フェルマータ	4分音符のあとに4分 休符あり／それぞれ の音符と休符にフェ ルマータあり	4分音符ひとつのみ ／4分音符にフェル マータ	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネツケ版 (1878)
112	下段		オクターヴ記号	なし(上段のオクターヴ記号が活きているとも読める)	なし(上段のオクターヴ記号が活きているとも読める)	L/W	L/W	5番目の上行スケールのバッセーンが弾きにくさを回避するために上段に記載されており、かつ6番目のスケールの直前にト音記号が付され、明らかに下段はオクターヴ上で演奏することが念頭に置かれていない	L/W	L/W
112			音符の大きさ	普通の大きさ	普通の大きさ	小さく記載	小さく記載	小さく記載	小さく記載	小さく記載
113 アウフ タクト			Tempo primo	なし	あり	W	W	W	W	W
114			ペダル取るマーク	2拍目終わり	1拍目終わり	L	L	L	T. 113の2拍目 終わり	L
116	上段	1-2	スラー	あり	なし	L(※2声どちらも スラー)	L(※2声どちらも スラー)	L	L(※2声どちらも スラー)	L(※2声どちらも スラー)
118-120	上段、下段		スラー	あり	なし	L(※2声でスラーの 箇所やタイもあり)	L(※2声でスラーの 箇所やタイもあり)	L	L(※2声でスラーの 箇所やタイもあり)	L(※2声でスラーの 箇所やタイもあり)
120		1-2	デクレッシェンド	あり	なし	W	W	W	W	W
122	上段	3	スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
122-124	下段		スラー	あり	なし	L(※2声でスラーの 箇所もあり)	L(※2声でスラーの 箇所もあり)	L	L(※2声でスラーの 箇所もあり)	L(※2声でスラーの 箇所もあり)
124-126	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
125-127			クレッシェンド/f	なし/T. 127の1拍目 (裏?)でf	T. 125の3拍目から T. 127の2拍目に かけてあり/f T. 127の3拍目でf	W	W (cresc.の点線は なし)	W	W (cresc.の点線は なし)	W (cresc.の点線はな し)
125-127	下段		スラー	あり	なし	L(※2声でスラーの 箇所やタイもあり)	L(※2声でスラーの 箇所やタイもあり)	L(※2声でスラーの 箇所やタイもあり)	L(※2声でスラーの 箇所やタイもあり)	L(※2声でスラーの 箇所やタイもあり)
128-131		3	デクレッシェンド	なし	あり	W	W	デクレッシェンドとク レッシェンドを交互 に付記	クレッシェンド	W
129	上段	1-2	スラー	あり	なし	L(※2声どちらも スラー)	L(※2声どちらも スラー)	L	L(※2声どちらも スラー)	L(※2声どちらも スラー)
129	上段	3	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネツケ版 (1878)
130-131	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
133-136	下段		スラー	133-36の1拍目まで	なし	L?(133の2拍目～ 135の2拍目にかけてあり)	L?(133の2拍目～ 136の1拍目にかけてあり)	L?(T.132の3拍目～ T.135の2拍目にかけてひとつ、さらに3 拍目から136の1拍目にかけてもうひとつあり)	L? T.133の1拍目～ T.135の2拍目まで /T.135の3拍目～ T.136の1拍目まで)	L? 133の2拍目～ 135の2拍目にかけてあり)
135		2	pp	なし	あり	W	W	W	W (3拍目にあり) ※Wにより、他の版 では欠けているとの 注あり	W
138	上段	2	b音の ^h	あり	なし	L	L	L	L	L
138-139	下段/下声部		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
139		3	pp	なし	あり	W	W	W	W	W
140	下段	3	ハ音記号	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
140-142	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L (※2声でスラーの 箇所もあり)	L (※2声でスラーの 箇所もあり)
141	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
145-148	上段	1-2	スラー	あり	なし	L(※2声どちらもス ラーの箇所あり)	L	L	L (※2声どちらも スラーの箇所あり)	L (※2声どちらも スラーの箇所あり)
145-147	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
154-155	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
156	上段	3	スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
157			クレッシェンド	1拍目にあり	T.156の3拍目にあり	W	W	W	W	W
157-158	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
159	上段		スラー	あり	なし	L	L(※2声どちらも スラー)	L	L (※2声どちらも スラー)	L
159	下段		スラー	なし	あり	W	W	W	W	W
165		3	pp	なし	あり	W	W	W	W	W
166, 167	上段・下段	1	B ₁ -B音、b ^h 音のみ	あり	なし	L (全てに ^h)	L (全てに ^h)	L (全てに ^h)	L (全てに ^h)	L (全てに ^h)
168			Prestoの位置	アウフタクト	1拍目	W	W	W	W	W
173			スラー	あり	なし	L	L	L	L	W

第2楽章 ③

(ダブルバージョン版／シエンカー版／トーヴァイ版／シュナーベル版／アラウ版／J. フィッシャー版 1975／" 2005)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シエンカー版 (1918-1921)	トーヴィ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.ファイジヤー版 (1975)	J.ファイジヤー版 (2005)
0			p	あり	なし	L 小ざく記載	L	L	L [] 付き	L	L	L
3	下段	3	スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
5	下段	1-2	f音のタイ/ A-As音のスラー	タイなし/ スラーあり	タイあり/ スラーなし	L+W (=タイもス ラーもあり)	L+W (=タイもス ラーもあり)	L+W (=タイもス ラーもあり)	L+W (=タイもス ラーもあり)	L+W (=タイも スラーもあり)	L	L
14		3	p	なし	なし	mfを小さく付記	L/W	[] 付きであり	fを小さく付記	[] 付きであり	L/W	L/W
18		3	p	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
22		2	和音の中声部	g音の4分音符	g音の4分音符	1拍目のg音の 2分音符が 伸びている	1拍目のg音の 2分音符が 伸びている	1拍目のg音の 2分音符が伸び ている	1拍目のg音の 2分音符が 伸びている	1拍目のg音の2 分音符が伸び ている	L/W	L/W
24	上段	2	b音の ^{tr}	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
24-26	上段、下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
25		3	pp	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
30		3	p	あり	なし	L	W	L	W ^{tr} (小さく付記) ※Wには何も付 記がないため、 前の指示のfが 次の指示のpま で有効であると の注あり	L	L	L
30-33		3	デクレッシェンド	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
34		3	p	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
34	上段	3	スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
35?36?		1	dim.	T. 35にあり	T. 36にあり	L	L	L	L	L	L	L
40, 41		3	pp	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
40-42	上段、下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
52	下段	3	3連符の1つ目の音	B ₁ 音	As ₁ 音	W	W	W	W	W	W	W
57-62	下段		スラー	T. 57アウフタクト～T. 58の1拍目とT. 60～ T. 61にあり	T. 60アウフタクト～T. 61にあり	T. 57-T. 62の1 拍目までがひと つのスラー	T. 57-T. 62の1 拍目までがひと つのスラー	T. 57-T. 62の1 拍目までがひと つのスラー	T. 57-T. 62の1拍 目までがひとつ のスラー	T. 57-T. 62の1 拍目までがひと つのスラー	L [?] /W (T. 56の2拍 目～T. 58の1拍目 とT. 60アウフタクト ～T. 61にあり)	L [?] /W (T. 56の2 拍目～T. 58の1 拍目とT. 60アウ フタクト～T. 61 にあり)

小節数	段／声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シエンカー版 (1918-1921)	トーヴァイ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.ファイジヤー版 (1975)	J.ファイジヤー版 (2005)
61		1	ペダル取るマーク	あり	なし	W	T. 60の2拍目終 わりにあり	L? T. 60の3拍目 最後にあり (※T. 61には独 目のペダルマー ク付記)	L? T. 60の3拍目 最後にあり	L	L	L
69-70			デクレッシェンド	あり	T. 69のみ	W	L T. 71まであり	W	W	W	W	W
71			ペダル取るマーク	1拍目にあり	3拍目にあり	W小さく付記	W	W	W	W	L	L
72	上段	3	上声部の4分音符f ² 音	なし	あり	W	W	W	W ※T. 73まで声 部を付記	W	W	W
76			ペダル取るマーク	2拍目頭にあり	2拍目終わりにあり	W	W	W? (3拍目にあり)	W	W? (3拍目にあり)	W	W
77		1	デクレッシェンド	あり	なし	前のresc.が 続いている	W	LWで2拍目にあ るdim.が1拍目 にある	W	LWで2拍目に あるdim.が 1拍目にある	L(アクセント?)	L(アクセント?)
77		3	ペダルマーク	あり	T. 76の3拍目にあり	W	W	1拍目にあり	W	W	L+W(76の3拍目 も77の3拍目にも あり)	L+W(76の3拍 目も77の3拍目 にもあり)
80		1	pp	下段にあり	中段にあり	W	W	W	W	W	L+W (両方に付記)	L+W (両方に付記)
80		終わり	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W? (81の1拍目に あり)	W? (81の1拍目に あり)	W? (81の1拍目にあ り)
110	上段		sf	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
112		1-2	和音の音符の種類／ フェルマータ	4分音符のあとに4分 音符あり／それぞ れの音符と休符にフェ ルマータあり	4分音符ひとつのみ ／4分音符にフェ ルマータ	W	W	W	W ※フェルマータの 後は直ちに次へ いくよう注あり (Lとは正反対)	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シエンカー版 (1918-1921)	トーヴィ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.ファイジヤナー版 (1975)	J.ファイジヤナー版 (2005)
112	下段		オクターヴ記号	なし(上段のオクターヴ記号が活きているとも読める)	なし(上段のオクターヴ記号が活きているとも読める)	L/W	L/W	あり	L/W(下段の音域があらかじめ1オクターヴ上で併書かれている)	L/W + []付きで1オクターヴ上で併記してある	L/W	L/W
112			音符の大きさ	普通の大きさ	普通の大きさ	小さく記載	小さく記載	小さく記載	小さく記載	小さく記載	小さく記載	小さく記載
113 アウフ タクト			Tempo primo	なし	あり	W	W	W	W	W	L(T. 114にあり)	W
114			ペダル取るマーク	2拍目終わり	1拍目終わり	L	W(※1拍目)	L	L	2拍目	2拍目	2拍目
116	上段	1-2	スラー	あり	なし	L	L(※2声どちらもスラー)	L(※2声どちらもスラー)	L(※2声どちらもスラー)	L	L	L
118-120	上段、下段		スラー	あり	なし	L	L	L(※2声でスラーの箇所やタイもあり)	L(※2声でスラーの箇所やタイもあり)	L(※タイの追加あり)	L	L
120		1-2	デクレッシェンド	あり	なし	W(前のcresc.の点線あり)	W	W	W	L	L	L
122	上段	3	スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
122-124	下段		スラー	あり	なし	L(※2声でスラーの箇所もあり)	L(※2声でスラーの箇所もあり)	L(※2声でスラーの箇所もあり)	L(※2声でスラーの箇所もあり)	L	L	L
124-126	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
125-127			クレッシェンド/f	なし/T. 127の1拍目(裏?)でf	T. 125の3拍目からT. 127の2拍目にかけてあり/T. 127の3拍目でf	W	W(cresc.の点線はなし)	W	W	W(cresc.の点線はなし)	W	W
125-127	下段		スラー	あり	なし	L(※2声でスラーの箇所やタイもあり)	L(※2声でスラーの箇所やタイもあり)	L(※2声でスラーの箇所やタイもあり)	L(※2声でスラーの箇所やタイもあり)	L(※タイの追加あり)	L	L
128-131		3	デクレッシェンド	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
129	上段	1-2	スラー	あり	なし	L	L(※2声どちらもスラー)	L(※2声どちらもスラー)	L(※2声どちらもスラー)	L	L	L
129	上段	3	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
130-131	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シエンカー版 (1918-1921)	トーヴイ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.ファイジヤナー版 (1975)	J.ファイジヤナー版 (2005)
133-136	下段		スラー	133-36の1拍目まで	なし	L?(T. 132の3拍目-T. 135の2拍目にかけてひとつ、さらに3拍目から136の1拍目にかけてもうひとつあり)	L?(133の2拍目~135の2拍目にかけてあり)	L?(133の2拍目~136の1拍目にかけてあり)	L?(T. 132の3拍目-T. 135の2拍目にかけてひとつ、さらに3拍目から136の1拍目にかけてもうひとつあり)	L?(133の2拍目~136の1拍目にかけてあり)	L?(133の2拍目~136の1拍目にかけてあり)	L?(133の2拍目~136の1拍目にかけてあり)
135		2	pp	なし	あり	W	W (3拍目にあり)	W (3拍目にあり)	W (3拍目にあり)	W	W	W
138	上段	2	b音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
138-139	下段/下声部		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
139		3	pp	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
140	下段	3	ハ音記号	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
140-142	上段		スラー	あり	なし	L	L (※2声でスラーの箇所もあり)	L (※2声でスラーの箇所もあり)	L (※2声でスラーの箇所もあり)	L	L	L
141	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
145-148	上段	1-2	スラー	あり	なし	L (※2声どちらもスラーの箇所あり)	L (※2声どちらもスラーの箇所あり)	L (※2声どちらもスラーの箇所あり)	L (※2声どちらもスラーの箇所あり)	L	L	L
145-147	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
154-155	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
156	上段	3	スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
157			クレッシェンド	1拍目にあり	T. 156の3拍目にあり	W	W	W	W	W	W	W
157-158	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
159	上段		スラー	あり	なし	L	L (※2声どちらもスラー)	L (※2声どちらもスラー)	L (※2声どちらもスラー)	L	L	L
159	下段		スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
165		3	pp	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
166, 167	上段・下段	1	B ₁ -B音、b-b [♯] 音の [♯]	あり (B ₁ 音とb音のみ)	なし	L (全てにB)	L (全てにB)	L (全てにB)	L (全てにB)	L (全てにB)	L (全てにB)	L (全てにB)
168			Prestoの位置	アフタクト	1拍目	W	W	W	W	W	W	W
173			スラー	あり	なし	L	L	L	L	W	L	L

第2楽章 ④

(ペンレ版 (C) / " (V) / ウィーン原典版 2001 / " 2018 / 園田高弘版 / ペンレライター版)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
0		p		あり	なし	L※注あり	L※注あり	L	L()付き	L	L
3	下段	スラー		あり	なし	L	L	L 注釈別本	L()付き	L	L
5	下段	f音のタイ/ A-As音のスラー	タイなし/ スラーあり	あり	タイあり/ スラーなし	L+W (＝タイも スラーもあり)	L+W (＝タイも スラーもあり)	L+W (＝タイも スラーもあり)	L+W (＝タイも スラーもあり) スラーは()あり	L+W (＝タイも スラーもあり)	W
14		p		なし	なし	()付きあり	()付きあり	[]付きであり	[]付きであり	あり	[]付きであり
18		p		なし	あり	W	W	W	W	W	W
22		2	和音の中声部	g音の4分音符	g音の4分音符	1拍目のg音の2 分音符が伸びて いる	1拍目のg音の2 分音符が伸びて いる	1拍目のg音の2 分音符が伸びて いる	1拍目のg音の2 分音符が伸びて いる	1拍目のg音の2 分音符が伸びて いる	L/W
24	上段	b音の ^h		あり	なし	L	L	L	L※Wには ^h が欠 けており、ここはL によるとの 注あり	L	L
24-26	上段、下段	スラー		あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
25		pp		なし	あり	W	W	W	W	W	W
30		p		あり	なし	L※注あり	L※注あり	L	L()付き	L	L※注なし
30-33		3	デクレッシェンド	なし	あり	W	W	W	W	W	W※右手に付記
34		p		なし	あり	W	W	W	W	W	W
34	上段	スラー		あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
35?36?		1	dim.	T. 35にあり	T. 36にあり	L	L	なし	L※類似19とLに よるとの注あり	L	L
40, 41		3	pp	なし	あり	W	W	W	W	W	W
40-42	上段、下段	スラー		あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
52	下段	3	3連符の1つ目の音	B ₁ 音	As ₁ 音	W	W	W	W	W	W
57-62	下段	スラー	T. 57アウフタクト～T. 58の1拍目とT. 60～ T. 61にあり	T. 60アウフタクト～T. 61にあり	T. 57-T. 62の1拍 目までがひとつ のスラー	T. 57-T. 62の1拍 目までがひとつ のスラー	T. 57-T. 62の1拍 目までがひとつ のスラー	T. 57-T. 62の1拍 目までがひとつ のスラー	T. 57-T. 62の1拍 目までがひとつ のスラー	T. 57-T. 62の1拍 目までがひとつ のスラー	T. 57-T. 62の1拍 目までがひとつ のスラー

小節数	段／声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
61		1	ペダル取るマーク	あり	なし	()付きて T. 60の2拍目 終わりにあり	T. 60の2拍目 終わりにあり	L	L? 60の3拍目最後 に()付きてあり	ビューローに同 じ。※ペダルマー クは、ペーター ヴェンによる指示 と園田によるもの とが併記。ここで はペーターヴェン によるものは、ヘ ンレに同じ。しか しペーターヴェン によるものとは何 から情報を得て いるのが不明。	L? T. 60の3拍目 最後にあり
69-70			デクレッシェンド	あり	T. 69のみにより	W	W	L	L ※Lによるもの 注あり	W	L
71			ペダル取るマーク	1拍目にあり	3拍目にあり	W	W	W	W	W	W
72	上段	3	上声部の4分音符f ² 音	なし	あり	W	W	W	W	W	W
76			ペダル取るマーク	2拍目頭にあり	2拍目終わりにあり	W	W	W	W	W ※ペーターヴェ ン、園田の どちらの表記もW	W
77		1	デクレッシェンド	あり	なし	W	W	L	L ()付き	W	L ※注なし
77		3	ペダルマーク	あり	T. 76の3拍目にあり	W	W	W	W	W ※ペーターヴェ ン、園田の どちらの表記もW	W
80		1	pp	下段にあり	中段にあり	W	W	W	W	W	L
80		終わり	ペダル取るマーク	なし	あり	W? (81の1拍目に あり)	W? (81の1拍目に あり)	W? (81の1拍目に あり)	W? (81の1拍目に あり)	W ※ペーターヴェ ンによるとされる 指示は81の1拍 目にあり	W
110	上段		sf	あり	なし	L	L	L	L	L	L
112		1-2	和音の音符の種類/ フェルマータ	4分音符のあとに4分 音符あり/それぞ れの音符と音符にフ ェルマータあり	4分音符ひとつのみ /4分音符にフェ ルマータ	W	W	W	W	W	W

小節数	段／声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原版 (2001)	ウィーン原版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
112	下段		オクターヴ記号	なし(上段のオクターヴ記号が活きているとも読める)	なし(上段のオクターヴ記号が活きているとも読める)	L/W	()付きであり	[]付きであり	[]付きであり	あり	L/W
112			音符の大きさ	普通の大きさ	普通の大きさ	小さく記載	小さく記載	小さく記載	小さく記載	小さく記載	L/W ※注あり
113 アウフ タクト			Tempo primo	なし	あり	W	W	W	W	W	W
114			ペダル取るマーク	2拍目終わり	1拍目終わり	W(※1拍目)	W(※1拍目)	W	W	W(1拍目) ※ペーターヴェ ン、園田のどちら の表記もW	W
116	上段	1-2	スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
118-120	上段、下段		スラー	あり	なし	L※()付きで タイの追加あり	L※()付きで タイの追加あり	L ※タイの追加 あり	L()付き ※[]付きでタイ の追加あり	L ※タイの追加 あり	L
120	上段	1-2	デクレッシェンド	あり	なし	W	W	W	W	W	W
122	上段	3	スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
122-124	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
124-126	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
125-127			クレッシェンド/f	なし/T.127の1拍目 (裏?)でf	T.125の3拍目から T.127の2拍目に かけてあり/ T.127の3拍目でf	W	W	W	W	W	W
125-127	下段		スラー	あり	なし	L※()付きで タイの追加あり	L※()付きで タイの追加あり	L()付き ※[]付きでタイ の追加あり	L()付き ※[]付きでタイ の追加あり	L ※タイの追加 あり	L
128-131		3	デクレッシェンド	なし	あり	W	W	W	W	W	W
129	上段	1-2	スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
129	上段	3	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	W
130-131	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
133-136	下段		スラー	133-36の1拍目まで	なし	L?(133の2拍目~ 135の2拍目)にか けてあり)	L?(133の2拍目~ 135の2拍目)にか けてあり)	L?(133の2拍目~ 135の2拍目)にか けてあり)	L?(133の2拍目~ 135の2拍目)にか けてあり)	L?(133の2拍目~ 135の2拍目)にか けてあり)	L
135		2	pp	なし	あり	W	W	W	W	W	W
138	上段	2	b音の ^ハ	あり	なし	L	L	L	L	L	L
138-139	下段/下声部		スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
139		3	pp	なし	あり	W	W	W	W	W	W
140	下段	3	ハ音記号	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
140-142	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
141	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
145-148	上段	1-2	スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
145-147	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
154-155	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
156	上段	3	スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
157			クレッシェンド	1拍目にあり	T. 156の3拍目にあり	W	W	W	W	W	W
157-158	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
159	上段		スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
159	下段		スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	W
165		3	pp	なし	あり	W	W	W	W	W	W
166, 167	上段・下段	1	B ₁ -B音、b-b'音の ^ハ	あり (B ₁ 音とb'音のみ)	なし	L (全てにハ)	L (全てにハ)	L (全てにハ)	L (全てにハ)	L (全てにハ)	L (全てにハ)
168			Prestoの位置	アフタクト	1拍目	W	W	W	W	W	W
173			スラー	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L

第3楽章 ①

(アルタリア異刷り／L訂正版／モシエレス版 1841 以前／W第2版／リスト版／モシエレス版 1858)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異調り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
0			表題	Adagio espressionato e con molto Sentimento.	Adagio sostenuto. Appassionato e con molto sentimento.	W	L	Adagio appassionato e con molto Sentimento.	W	Adagio. Appassionato e con molto Sentimento.	W
1			p	あり	なし	W	L	L	W	L	L
1	上段、下段		スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
2	上段、下段		スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	L
2			ペダル・取るマーク	あり	なし	W	L	L	W	L	L
3	上段		スラー	なし	あり	W	L	W	W	W	W
4	上段、下段	1-3	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
5		4-6		アクセント?	デクレッシェンド?	W	L	L	W	L	L
5-6			ペダル・取るマーク	なし	あり	W	L	L	W	W	W
7, 10	上段	4-6	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
9		1-2	アクセント? ディムヌエンド?	あり (アクセントらしい)	なし	W	L	L	W	W	L
9	上段	4-6	スラー	なし	あり	W	L	W	W	W	W
14			クレッシェンド始まり	1拍目から	4拍目から	W	L	L	W?(5拍目から)	L?(2? 3? 拍目 から)	L
14-15			クレッシェンド頂点	T. 14とT. 15の間	T. 15の3拍目	W	L	L	L?(T. 15の1拍目)	L?(T. 15の1拍目)	L
19	上段	6 裏	♯音の ⁴ 裏	あり	なし	W	L	L	L	L	W
19-20	上段		クレッシェンド、デクレッシェンド	あり	なし	W	L	L	W	L	L
20-21	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
22	上段		前打音	8分音符	8分音符2本斜線	W	L	L	8分音符斜線	8分音符斜線	16分音符斜線
23			デクレッシェンドマーク	4拍目から	5から6拍目に かけて	W	L	L	W	L	L
24			クレッシェンド、デクレッシェンド	あり	なし	W	L	L	W	L	L
25	下段/上声部	5	四分音符のぼう	なし	あり	W	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異聞り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モンテレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モンテレス版 (1858)
27	下段	3,4,5,6	スタッカート	線	点	W	L	L	なし	W(スタッカート表 記に区別なし?)	三角スタッカート
28		2	p	あり	なし	W	L	L	W	L	L
29	上段	3裏	内声	16分音符あり	16分音符なし	W	L	L	W	L	L
29	下段	1	バスのcis音	あり	なし	W	L	L	W	L	L
29			cresc.	あり	なし	W	L	L	W	L	L
32		1	cresc.の再度の指示	なし	あり	W	L	L	W	L	L
33	上段	3-4, 5-6	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
35	下段	4	バスのcis音	なし	あり	W	L	L	W	L	W
38			più cresc.	なし	あり	W	L	L	W	W	2拍目終わりから cresc.
38-39	上段	6-1	e ² -e ² 音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	L	L
39, 40	下段/上声部	5-6	スラー	あり	なし	W	L	L	L(※4拍目裏から スラー)	L	L(※4拍目裏から スラー)
41	下段/下声部	5	h音の ^h	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	あり
42	上段/下声部	2	h ¹ 音の ^h	なし	あり	W	L	L	W	L	W
42	上段/上声部	4	g ² 音の ^h	あり	なし	W	L	L	L	L	L
42	上段	6	h ¹ 音とh ² 音の ^h	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W	L/W
42	下段/下声部	4	A音の ^h	あり	なし	W	L	L	W	L	L
43	上段	3-4	d ⁴ -d ⁴ 音のタイ	あり	あり	L/W	L/W	L/W	なし	L/W	L/W
43	下段	4	E音の ^h	なし	なし (段変えがある)	W	L	L	あり(16分音符のは たが分けて書いて ある)	L	あり
43	下段	4裏	G ₁ 音の ^h	なし	あり	W	L	L	W	W	W
44	上段、下段	6裏	g音とg ¹ 音の ^h	あり	なし	W	L	L	W	L	L
44			ペダル取るマーク	小節終わり	2拍目(裏?)	W	L	L	W	L	なし
45	下段		スラー	1-6拍目まで	1拍目-小節最後 まで	W	L	L	なし	なし	なし
51	上段	6	スラー	あり(もしかすると 3連符のマーク?)	なし	W	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異調り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モンテレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モンテレス版 (1858)
53			p	あり	なし	W	L	L	W	L	L
55	下段/下声部	6	d'音の#	なし	あり	W	L	L	W	W	L
56	下段/下声部	3	g ¹ -g ² 音のオクターヴ	16分音符の2連符	8分音符と 16分音符の3連符	W	L	L	W	L	W
58	下段	6	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
60		1	p	なし	あり	W	L	L	W	L	L
60	上段	2-3	a ¹ -a ² 音のタイ/ fis ¹ -fis ² 音のタイ	なし/あり	あり/なし	W	L	L	どちらもなし	W	L
60		4-6	ペダル・取るマーク	なし	あり	W	L	L	W	L	W
63	下段	3-6	スラー	なし	なし	L/W	あり	あり	あり	あり	あり
65	上段		スラー	3-4	1-6	W	3-1(T. 66)	3-1(T. 66)	3-6	3-1(T. 66)	3-1(T. 66)
66	上段	1-3	4分音符と8分音符の音	fis ² -a ² 音のみ	fis ¹ -fis ² 音と a ¹ -a ² 音のオクター ヴ	W	L	L	W	W	W
71	下段	4-6	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
72		1	p	あり	なし	W	L	L	W	L	L
73	下段		スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
73-75			調号	#2つのまま	#3つになる	W	L	L	W	L	L
76	上段/上声部	1	h ² 音	付点4分音符	4分音符	W	L	L	W	L	W
76	上段/下声部	3	ラトとファ	as ² 音,f ² 音	as ² 音,f ² 音	L/W	L/W	L/W	as音,f音	L/W	as音,f音
77	上段		スラー	あり	なし	W	L	L	W 独自の表記あり	L	L
79	下段	5裏		d'音	des'音	W	L	L	W	es'音	W
80	下段	4	c'音の#/es'音の#	あり	なし	W	L	L	L	L	L
83	上段/下声部	1	a音	4分音符	8分音符	W	W	W	W	W	W
83	下段	4	g音の#	あり	なし	W	L	L	L	L	L
84	上段、下段	1	e'音とe ² 音の#	あり	あり	L/W	L/W	L/W	L/W	なし!	L/W
84	上段	3,4裏	c ² 音の#/c ¹ 音の#/f ² 音の#	なし/あり/あり	なし/なし/なし	W	L	L	L+c ² 音の#は 補う	L+c ² 音の#は 補う	L+c ² 音の#は 補う
84	下段	1,2,4	c'音の#/g'音の#/f'音の#	あり/あり/あり	なし/なし/なし	W	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異聞り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モンテレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モンテレス版 (1858)
89-90	上段		スラー	T. 89の1拍目～ T. 90の4拍目終りまで	T. 89の1拍目～T. 89最後まで/T. 90 の1拍目～3拍目最 後まで	W	L	L	L2(小節で2つに 区切れている)	スラーなし	L
92	上段		スラー	1-2拍目の最後まで で/3-6拍目の最 後まで	1-2拍目の最後まで で/4-6拍目の最 後まで	W	L	L	1-3拍目の最後まで で/4-6拍目の 最後まで	スラーなし	L
96			cresc.の点線	あり	なし	W	L	L	W	W	L
97	下段	6	h音とd'音の ^h	あり	なし	W	L	L	L	L	L
98			cresc.	なし	あり	W	L	L	W(W同様に段変え あり)	L	L
100-101			クレッシェンド、デクレッシェンド	なし	あり	W	L	L	W	L	W
102		1	p	なし	あり	W	L	L	W	L(W同様に改ペー ジある!こも 抑らず!)	L
102	上段	4	オクターヴ記号	なし	あり	W	L	L(加えてloco表 記もあり)	W	W	W
104	下段	2裏-小節 最後まで	オクターヴ記号	あり	あり	L/W	L/W	L/W	オクターヴで 書かれる	オクターヴで 書かれる	オクターヴで 書かれる
105	上段	1	d'音の#	あり	なし	W	L	L	L	L	L
105	上段	6	h'音の ^h	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W	L/W
105	上段	6裏	d'音の ^h	あり	なし	W	L	L	L	L	L
106	上段		スラー	2-3拍目/4-6拍目	1-3拍目/4-6拍目	W	L	L	なし	(L)4-6拍目には なし	L
106	下段	4裏-小節 最後まで	スラー	あり	なし	W	L	L (L) ※1拍目裏から	なし	なし	(L)※1拍目から
107	上段	3	e'音の#	なし	なし	L/W	あり	あり	L/W	あり	あり
107	下段	5-6	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
107, 113			u.c./t.c.	なし	なし	L/W	あり	あり	L/W	あり	L/W
108	上段	2-6	3つのスラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
108	上段	6裏	d ² 音	なし	あり	W	L	L	W	L	W
109	上段	3,4	スラー	なし	あり	W	L	L	W	L	W
111	下段	4	H音	なし	あり	W	L	L	W	L	L
112	下段	4裏	Fis音	あり	なし	W	L	L	W	W	W
115	上段		tr.の前の ^h	あり	なし	W	L	L	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異調り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モンチェレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モンチェレス版 (1858)
115	上段	2-3		上声部に デクレッシェンド	下声部にアクセント	W	L	L	W?	なし	L
116	上段	1	16分音符の音	fis ³ 音	dis ³ 音	W	L	L	W	L	W
120			クレッシェンド、デクレッシェンド	下段の下にあり	下段の下にあり	L/W	L/W	Lと全く同じ	なし(※T.122の ものと捉えている)	なし	なし(※T.122の ものと捉えている)
121	下段	4	a音の#	あり	なし	W	L	L	W	L	L
123	上段/上声部		2声で書かれる	2声(T.124の1-3拍 目まで)	2声(T.123のみ)	W	L	L	1声	L	1声
124	上段	4	e ² 音とe ³ 音	#	♯	W	L	L	W	#?♯?	W
124, 125	下段	4-6	スラーの開始	4拍目裏から	4拍目から	W	L	L	T.124はL T.125はW?	W	T.124はL T.125はW?
124	下段	5裏	h ¹ 音の♯	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W	L/W
127	下段/上声部	3裏	音	cis ¹ 音の♯	cis ¹ 音の♯	W	L	L	W	W (臨時記号は何も なく調号により#)	W (臨時記号は何も なく調号により#)
127-128	上段		fis ² -fis ³ 音とd ² -d ³ 音のタイ	あり/なし	なし/あり	W	L	L	W	W	W
129		3終わり	ペダル取るマーク	なし	あり	W	L	L	W	W(4拍目にあり)	W(3拍目にあり)
131	下段/下声部		スラー	なし	あり	W	L	L	W ※1-3拍目と4-6 拍目とで2つのス ラーになっている	W ※1-3拍目と4- 6拍目とで2つのス ラーになっている	W ※1-3拍目と4-6 拍目とで2つのス ラーになっている
136	上段	6	スラー	あり	なし	W	L	L	L (3連符のマーク か?)	(L) 始めの2つにのみ スラーがかかっ ている	L
138	上段/下声部	2	16分音符の音	cis ² 音	ais ¹ 音	W	L	W	W	W	W
140	下段/下声部	4-6	音符	付点4分音符の eis ¹ 音	4分音符のeis ¹ 音と 8分音符のfis ¹ 音	W	W	W	W	W	W
141	下段/下声部	2	ais ¹ -ais ¹ 音のタイ	なし	あり	W	L	L	W(タイではなく8分 音符で書かれる)	W(タイではなく8分 音符で書かれる)	W(タイではなく8分 音符で書かれる)
141	下段/上声部	3-4	dis ¹ -dis ¹ 音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	L	W
141	下段/上声部	5	ais ¹ 音の♯	あり	なし	W	L	L	L	L	L
141	下段/上声部	5	g ¹ 音の#	なし	なし	L/W	あり	あり	L/W	あり	あり
143		4	cresc.	なし	あり	W	L	L	W	L	L
143	上段	5-6	スラー	5拍目裏から	5拍目から	W	L	L	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異調り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モンチェレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モンチェレス版 (1858)
143			t.c.	なし	6拍目にあり	W	5拍目にあり	5拍目にあり	W	5拍目裏?にあり	5拍目にあり
144	上段	1-3	cis ² -cis ² 音のタイ	あり	なし	W	L	L(e ² -e ² 音にも タイあり)	W	L(e ² -e ² 音にも タイあり)	W
144			dim.	3拍目にあり	2拍目にあり	W	L	L	W	L	L(デクレッシェンド マーク)
144		3	ペダル取るマーク	なし	あり	W	L	L	W	W	2拍目にあり
145	上段	1-3	ais ¹ -ais ² 音のタイ	なし	なし	L/W	L/W	あり	L/W	あり	あり
145		4	ペダル	なし	あり	W	L	L	W	L	L
145	下段	6	ペダル取るマーク	なし	あり	W	L	L	W	W	L
148, 150	上段、下段		スラー	あり	なし	W	L	L	L(3-6拍目)	L	(L)一部異なる フレーズング
152	上段	4	音符	4分音符	付点4分音符	W	L	W	W ※gis ² 音のみ 4分音符	W	W
153			クレッシェンド、デクレッシェンド	なし	あり	W	L	L	W	W	L
154			u.c.	なし	1拍目にあり	W	3拍目にあり	3拍目にあり	W	W	L
158		1	p	あり	なし	W	L	L	W	L	L
162			cresc.	1拍目から	4拍目から	W	L	L	W	L	L
170	上段	1	前打音	h ¹ 音	h ¹ 音	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
174	上段/上声部	4-6	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
175	上段/上声部	3-4	h ¹ -h ² 音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	L	W
176	上段		スラー	T. 177の1拍目最後 まで	T. 176の最後の拍 まで	W	L	(L)※T. 177の 3拍目最後まで	W	なし	(L)※T. 177の 3拍目最後まで
180	下段	1	指使い	なし	あり	W	L	L	W	L	W
185-186	下段	4-1	タイ	あり	なし	W	L	L	W	L	L
186	下段	4	Ais ² 音の#	あり	なし(1拍目にあり)	W	L	L	W	L	L

第3楽章 ②

(旧全集／ハスリンガー版／ビューロー版／ダム版／ライネッケ版)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリンガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
0			表題	Adagio espressionato e con molto Sentimento.	Adagio sostenuto. Appassionato e con molto sentimento.	W	W	W	W	W
1			p	あり	なし	W	W	W	L	W
1	上段、下段		スラー	あり	なし	W	W	L	L	W
2	上段、下段		スラー	あり	なし	W	W	L(フレージングは 異なる)	L(フレージングは 異なる)	W
2			ペダル・取るマーク	あり	なし	W	W	W	L	W
3	上段		スラー	なし	あり	W	W	W(フレージングは 異なる)	W	W
4	上段、下段	1-3	スラー	あり	なし	W	W	L	L	W
5		4-6		アクセント?	デクレッシェンド?	W	W	L/W (=どちらもあり)	L	W
5-6			ペダル・取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W
7、10	上段	4-6	スラー	あり	なし	W	W	L(独自の追加のフ レージングスラーも あり)	L	T. 7 W / T. 10 L(上声部のみ)
9		1-2	アクセント? デイミヌエンド?	あり (アクセントらしい)	なし	W	W	L(デイミヌエンド)	L	W
9	上段	4-6	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W
14			クレッシェンド始まり	1拍目から	4拍目から	W?(5拍目から)	W	W	L	W
14-15			クレッシェンド頂点	T. 14とT. 15の間	T. 15の3拍目	L?(T. 15の1拍目)	L	L?(T. 15の1拍目)	L	L?(T. 15の1拍目)
19	上段	6 裏	d [♯] 音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L
19-20	上段		クレッシェンド、デクレッシェンド	あり	なし	W	W	L	L	W
20-21	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	W	L	L	L?
22	上段		前打音	8分音符	8分音符2本斜線	8分音符斜線	8分音符斜線	8分音符斜線	8分音符斜線	一部無い箇所もあり
23			デクレッシェンドマーク	4拍目から	5から6拍目に かけて	W	L	W	L	W
24			クレッシェンド、デクレッシェンド	あり	なし	W	W	L	L	W
25	下段/上声部	5	四分音符のぼう	なし	あり	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリンガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
27	下段	3,4,5,6	スタッカート	線	点	なし	なし	脚注にて スタッカートの指示	W	なし
28		2	p	あり	なし	W	W	W	L?(※T. 27にあり)	W
29	上段	3 裏	内声	16分音符あり	16分音符なし	W	W	W	W	W
29	下段	1	バスのcis音	あり	なし	W	W	W	L	L
29			cresc.	あり	なし	W	W	L?(右手にクレッシェ ントマーク)	W	W
32		1	cresc.の再度の指示	なし	あり	W	W	W	L	L
33	上段	3-4, 5-6	スラー	あり	なし	W	W	L? (1-4, 5-6)	L? 1小節間あり	L? (1-4, 5-6)
35	下段	4	バスのcis音	なし	あり	W	W	W	W	W
38			più cresc.	なし	あり	W	W	W	W	W
38-39	上段	6-1	e ² -e ² 音のタイ	あり	なし	W	W	W	L	L
39, 40	下段/上声部	5-6	スラー	あり	なし	L(※4拍目裏から スラー)	L(※4拍目裏から スラー)	L(※4拍目裏から スラー)	L(※4拍目裏から スラー)	L(※4拍目裏から スラー)
41	下段/下声部	5	h音の [♯]	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
42	上段/下声部	2	h音の [♭]	なし	あり	W	W	W	W	W
42	上段/上声部	4	g [♯] 音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L
42	上段	6	h音とh [♯] 音の [♯]	なし	なし	あり	あり	あり	L/W	あり
42	下段/下声部	4	A音の [♯]	あり	なし	W	W	L	L	L()付き
43	上段	3-4	d [♯] -d [♯] 音のタイ	あり	あり	なし	L/W	L/W	L/W	なし
43	下段	4	E音の [♯]	なし	なし (段変えがある)	あり(16分音符のは たが分けて書いて ある)	あり(16分音符のは たが分けて書いて 書いてある)	あり(16分音符の はたが分けて 書いてある)	あり(16分音符の はたが分けて 書いてある)	あり(16分音符の はたが分けて 書いてある)
43	下段	4 裏	G ₁ 音の [♯]	なし	あり	W	W	W	W	W
44	上段、下段	6 裏	g音とg [♯] 音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L
44			ペダル取るマーク	小節終わり	2拍目(裏?)	W	W	W	W	W
45	下段		スラー	1-6拍目まで	1拍目-小節最後 まで	なし	なし	なし	W	なし
51	上段	6	スラー	あり(もしかすると 3連符のマーク?)	なし	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリンガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
53			p	あり	なし	W	W	L(小さく付記)	L	W
55	下段/下声部 6		d音の#	なし	あり	W	W	W	W	W
56	下段/下声部 3		g ¹ -g音のオクターヴ	16分音符の2連符	8分音符と 16分音符の3連符	W	W	L	W	W
58	下段	6	スラー	あり	なし	W	W	L	L	W
60		1	p	なし	あり	W	W	W	W	W
60	上段	2-3	a ¹ -a ¹ 音のタイ/ fis ¹ -fis ¹ 音のタイ	なし/あり	あり/なし	W	W	W(fis ¹ -fis ¹ 音の指し 変えている！)	W	W
60		4-6	ペダル・取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W
63	下段	3-6	スラー	なし	なし	あり	あり	あり	あり(※T. 64の 1拍目まで)	あり
65	上段		スラー	3-4	1-6	W	3-6	※6-1(T. 66)もあり	3-1(T. 66)	W
66	上段	1-3	4分音符と8分音符の音	fis ² -a ² 音のみ	fis ¹ -fis ² 音と a ¹ -a ² 音のオクター ヴ	W	W	W	W	W
71	下段	4-6	スラー	あり	なし	W	W	※3拍目からスラー	L	W
72		1	p	あり	なし	W	W	W	W	W
73	下段		スラー	あり	なし	W	L	L ※2つ目は T. 74までスラー	L	W
73-75			調号	#2つのまま	#3つになる	W	W	W	L	W
76	上段/上声部 1		h ² 音	付点4分音符	4分音符	W	W	W	W	W
76	上段/下声部 3		ラトとファ	as ² 音,f ² 音	as ² 音,f ² 音	as ² 音,f ² 音	as ² 音,f ² 音	as ² 音,f ² 音	as ² 音,f ² 音 ※Ozernyによる/ 原版が誤りである との注あり	as ² 音,f ² 音
77	上段		スラー	あり	なし	W 第2版と同じ表記	W 第2版と同じ表記	L ※2つ目はT.78ま でスラー 第2版と同じ表記	L	W
79	下段	5 裏		d ¹ 音	des ¹ 音	W	W	es ¹ 音	W	W
80	下段	4		あり	なし	L	L	L	L	L
83	上段/下声部 1		a音	4分音符	8分音符	W	W	W	W	W
83	下段	4	g音の#	あり	なし	L	L	L	L	L
84	上段、下段	1	e ¹ 音とe ² 音の#	あり	あり	L/W	L/W	なし!	L/W	L/W
84	上段	3.4 裏	c ² 音の#/c ³ 音の#/f ² 音の#	なし/あり/あり	なし/なし/なし	L L+c ² 音の#は補う	L L+c ² 音の#は補う	L+c ² 音の#は補う	L+c ² 音の#は補う	L+c ² 音の#は補う
84	下段	1.2.4	c ³ 音の#/g ¹ 音の#/f ² 音の#	あり/あり/あり	なし/なし/なし	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
89-90	上段		スラー	T. 89の1拍目～ T. 90の4拍目終りまで	T. 89の1拍目～T. 90 最後まで/ T. 90 の1拍目～3拍目最 後まで	W	L? (小節で2つに 区切れている)	W	L	L? (小節で2つに 区切れている)
92	上段		スラー	1-2拍目の最後まで で/ 3-6拍目の最 後まで	1-2拍目の最後まで で/ 4-6拍目の最 後まで	1-3拍目の最後まで で/ 4-6拍目の 最後まで	1-3拍目の最後まで で/ 4-6拍目の 最後まで	1-3拍目の最後まで で/ 4-6拍目の最 後まで	1-3拍目の最後まで で/ 4-6拍目の最 後まで	1-3拍目の最後まで で/ 4-6拍目の最 後まで
96			cresc.の点線	あり	なし	L	L	L	L	W
97	下段	6	h音とd'音の [♯]	あり	なし	L	L	L	h音のみあり	L
98			cresc.	なし	あり	W(W同様に段変え あり)	W(W同様に段変え あり)	W(W同様に段変え あり)	W(W同様に段変え あり)	W ページ変えあり
100-101			クレッシェンド、デクレッシェンド	なし	あり	W	W	W	W	W
102		1	p	なし	あり	W	W	W	W	W
102	上段	4	オクターヴ記号	なし	あり	W	W	W	W	W
104	下段	2 裏-小節 最後まで	オクターヴ記号	あり	あり	1拍目裏からオク ターヴで書かれる (※1拍目裏は () 付き)	1拍目裏からオク ターヴで書かれる (※1拍目裏は 小文字)	1拍目裏からオク ターヴで書かれる (※1拍目裏は 小文字)	オクターヴで 書かれる	1拍目裏からオク ターヴで書かれる (※1拍目裏は () 付き)
105	上段	1	d'音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L
105	上段	6	h音の [♯]	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
105	上段	6 裏	d'音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L
106	上段		スラー	2-3拍目/ 4-6拍目	1-3拍目/ 4-6拍目	L	L	L	L	L
106	下段	4 裏-小節 最後まで	スラー	あり	なし	W	W	(L)※5拍目裏からT. 107の1拍目終り まで	(L)※4拍目から スラー	W
107	上段	3	e'音の [♯]	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
107	下段	5-6	スラー	あり	なし	W	W	L (独自の異名同音 の書き換えあり!!)	L	W
107, 113			u.c./t.c.	なし	なし	L/W	L/W	あり (※u.c.はT. 108に あり)	あり	L/W
108	上段	2-6	3つのスラー	あり	なし	W	W	(※3つ目のスラー はなし)	L	L (※1つ目のスラーは なし)
108	上段	6 裏	d ² 音	なし	あり	W	W	W	W	W
109	上段	3,4	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W
111	下段	4	H音	なし	あり	W	W	W	W	W
112	下段	4 裏	Fis音	あり	なし	W	W	W	W	W
115	上段		tr.の前の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリンガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
115	上段	2-3		上声部に デクレッシェンド	下声部にアクセント	W	W	W	W	W
116	上段	1	16分音符の音	fis ³ 音	dis ³ 音	W	W	W	L ※CramerとLisztに よるとの注あり	W
120			クレッシェンド、デクレッシェンド	下段の下にあり	下段の下にあり	なし(※T. 122の ものと擬えている)	なし	T. 120は上段/ T. 122にもあり	なし(※T. 122の ものと擬えている)	なし(※T. 122のもの と擬えている)
121	下段	4	a音の#	あり	なし	L	L	L	L	L
123	上段/上声部		2声で書かれる	2声(T. 124の1-3拍 目まで)	2声(T. 123のみ)	1声	1声	1声	1声	1声
124	上段	4	e ² 音とe ³ 音	#	h	W	W	W	W	W
124, 125	下段	4-6	スラーの開始	4拍目裏から	4拍目から	L	L	L	L	L
124	下段	5裏	h音のh	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
127	下段/上声部	3裏	音	cis ³ 音のh	cis ³ 音の#	W	W	W	L ※Cramer1820に よるとの注あり	W
127-128	上段		fis ² -fis ³ 音とd ² -d ³ 音のタイ	あり/なし	なし/あり	W	W	W	L	W
129		3終わり	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	L
131	下段/下声部		スラー	なし	あり	W ※1-3拍目と4-6 拍目とで2つの スラーになっている	W ※1-3拍目と4-6 拍目とで2つの スラーになっている	W ※1-3拍目と4-6 拍目とで2つの スラーになっている	W ※1-3拍目と4-6 拍目とで2つの スラーになっている	W ※1-3拍目と4-6拍 目とで2つのスラーに なっている
136	上段	6	スラー	あり	なし	L (3連符のマーク か?)	L (3連符のマーク か?)	L (3連符のマーク か?)	L	L (3連符のマーク か?)
138	上段/下声部	2	16分音符の音	cis ² 音	ais ³ 音	W	W	W	W	W
140	下段/下声部	4-6	音符	付点4分音符の eis ³ 音	4分音符のeis ³ 音と 8分音符のfis ³ 音	W	W	W	W	W
141	下段/下声部	2	ais ² -ais ³ 音のタイ	なし	あり	W(タイではなく8分 音符で書かれる)	W(タイではなく8分 音符で書かれる)	W(タイではなく8分 音符で書かれる)	W(タイではなく8分 音符で書かれる)	W(タイではなく8分 音符で書かれる)
141	下段/上声部	3-4	dis ¹ -dis ² 音のタイ	あり	なし	W	W	W(dis ¹ -dis ² 音の指 使い変えている!)	L	W(dis ¹ -dis ² 音の指 使い変えている!)
141	下段/上声部	5	ais ³ 音のh	あり	なし	L	L	L	L	L
141	下段/上声部	5	g ³ 音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
143		4	cresc.	なし	あり	W	W	W	W	W
143	上段	5-6	スラー	5拍目裏から	5拍目から	W	W	L	L	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリンガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネット版 (1878)
143			t.c.	なし	6拍目にあり	W	5拍目にあり	W	5拍目にあり	5拍目にあり
144	上段	1-3	cis ² -cis ² 音のタイ	あり	なし	W	W	L(e ² -e ² 音にもタイあり)※注あり「ここでは、より早い全ての版で、必要なタイが抜けている」	L(e ² -e ² 音にもタイあり)	W(e ² -e ² 音にはあり)
144			dim.	3拍目にあり	2拍目にあり	W	W	W	W	W
144		3	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W
145	上段	1-3	ais ¹ -ais ¹ 音のタイ	なし	なし	L/W	L/W	あり	あり	L/W
145		4	ペダル	なし	あり	W	W	W	W	W
145	下段	6	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W
148, 150	上段、下段		スラー	あり	なし	(L)一部異なる フレージング	(L)一部異なる フレージング	(L)旧全集ともども一部異なる フレージング	(L)一部異なる フレージング	(L)一部異なる フレージング ※旧全集と同じ
152	上段	4	音符	4分音符	付点4分音符	W	W	W	W	W
153			クレッシェンド、デクレッシェンド	なし	あり	W	W	W	W	W
154			u.c.	なし	1拍目にあり	W	W	W	W	W
158		1	p	あり	なし	W	W	W	L	W
162			cresc.	1拍目から	4拍目から	W	W	W	W	W
170	上段	1	前打音	h ¹ 音	h ¹ 音	L/W	L/W	g ¹ 音になっている	L/W	L/W
174	上段/上声部	4-6	スラー	あり	なし	W	W	(L)スラーの終わりが異なる	L	W
175	上段/上声部	3-4	h ¹ 音のタイ	あり	なし	W	W	L	W	W
176	上段		スラー	T. 177の1拍目最後まで	T. 176の最後の拍まで	W	W	W	T. 177の4拍目まで	W
180	下段	1	指使い	なし	あり	L	L	W	W	W
185-186	下段	4-1	タイ	あり	なし	W	W	W	L	W
186	下段	4	Ais音の#	あり	なし(1拍目にあり)	W	W	W	L	W

第3楽章 ③

(ダブルバージョン版／シエンカー版／トーヴェイ版／シュナーベル版／アラウ版／J. フィッシャー版 1975／" 2005)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーマス版 (1931)	シュナーベール版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フイツィンジャー版 (1975)	J.フイツィンジャー版 (2005)
0			表題	Adegio espressionato e con molto Sentimento.	A dagio sostenuto. Appassionato e con molto sentimento.	W	W	W	W (appassionatoは 小文字開始)	W	Adagio appassionato e con molto Sentimento.	W
1			p	あり	なし	W	W	W	L(小さく付記)	W	L	L
1	上段、下段		スラー	あり	なし	L	W	L	W	W	W	W
2			スラー	あり	なし	L(フレージングは異 なる)	L(フレージングは 異なる)	L(フレージングは 異なる)	L(フレージングは異 なる)	L	L	L (L) ※下段のスラー は若干異なる
2			ペダル・取るマーク	あり	なし	W	W	W	L? (位置は異なる)	L	L	L
3			スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	L	L
4		1-3	スラー	あり	なし	L	W	L(声ともに スラー)	L	W	L	L
5		4-6		アクセント?	デクレッシェンド?	W	W	W	W	W	L	L
5-6			ペダル・取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
7, 10		4-6	スラー	あり	なし	L(※T.7は ホルタート)	W	L(独自の追加の フレージングス ラーもあり)	L	T.7=W T.10=L	L	L
9		1-2	アクセント? デイミヌエンド?	あり (アクセントらしい)	なし	クレッシェンドと デクレッシェンド あり	W	W	W	L(アクセント)	L(アクセント)	L(アクセント)
9		4-6	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
14			クレッシェンド始まり	1拍目から	4拍目から	W	W	W	W	W	L	L
14-15			クレッシェンド頂点	T.14とT.15の間	T.15の3拍目	L	L	L	L?(T.15の1拍目)	L	L?	L? (T.14の6拍目)
19		6 裏	d ^h 音のh	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
19-20			クレッシェンド、デクレッシェンド	あり	なし	Lクレッシェンド のみあり	W	W	Lクレッシェンド のみ()付きであり	W	L	L
20-21		上段/上声部	スラー	あり	なし	L? 一部無い箇所もあり	T.21の5-6拍目 のみあり	L?	L	T.20=L T.21=W	L	L
22		上段	前打音	8分音符	8分音符2本斜線	8分音符斜線	16分音符	8分音符斜線	8分音符斜線	8分音符斜線	16分音符	16分音符
23			デクレッシェンドマーク	4拍目から	5から6拍目に かけて	W	W	W	W	W	W	W
24			クレッシェンド、デクレッシェンド	あり	なし	L	W	W	W	L	L	L
25		下段/上声部 5	四分音符のぼう	なし	あり	L	L	L	W 注あり	L	W	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーマス版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フイツィンジャー版 (1975)	J.フイツィンジャー版 (2005)
27	下段	3,4,5,6	スタッカート	線	点	W	なし	なし (4拍目リヌートあり)	non troppo staccato 注あり	W	L (スタッカート の区別あり?)	L (スタッカート の区別ありで いながら)
28		2	p	あり	なし	W	W	W	W	W	L	L
29	上段	3 裏	内声	16分音符あり	16分音符なし	W	W	W	W	W	L	L
29	下段	1	バスのcis音	あり	なし	L	L	W	L	L	L	L
29			cresc.	あり	なし	W	W	W	W	W	L	L
32		1	cresc.の再度の指示	なし	あり	W	L	W	L	W	W	W
33	上段	3-4, 5-6	スラー	あり	なし	L? (1-4, 5-6)	W	W	L?	L	L	L
35	下段	4	バスのcis音	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
38			più cresc.	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
38-39	上段	6-1	e ² -e ³ 音のタイ	あり	なし	W	W	W	W	W	L	L
39, 40	下段/上声部	5-6	スラー	あり	なし	L(※4拍目裏から スラー)	L(※4拍目裏から スラー)	4拍目から スラー	L(※4拍目裏から スラー)	W	L(※4拍目裏 からスラー)	L(※4拍目裏 からスラー)
41	下段/下声部	5	h音の [♯]	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
42	上段/下声部	2	h音の [♭]	なし	あり	W	W	W	W	W	L	W
42	上段/上声部	4	g ² 音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
42	上段	6	h ¹ 音とh ² 音の [♯]	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	L(同じ様に T.42の2拍目の h ¹ 音の [♭] も扱っ ている)	h ¹ 音のみあり
42	下段/下声部	4	A音の [♯]	あり	なし	W	L	W	A音であるという 注あり	W	L	L
43	上段	3-4	d ² -d ³ 音のタイ	あり	あり	なし	L/W	L/W	なし	なし	L/W	L/W
43	下段	4	E音の [♯]	なし	なし(段 変えがある)	あり(16分音符の はたが分けて 書いてある)	あり(16分音符の はたが分けて 書いてある)	あり(16分音符の はたが分けて 書いてある)	あり(16分音符の はたが分けて 書いてある)	あり(16分音符 のはたが分けて 書いてある)	あり	あり
43	下段	4 裏	G ₂ 音の [♯]	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
44	上段、下段	6 裏	g ₂ 音とg ₁ 音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
44			ペダル取るマーク	小節終わり	2拍目(裏?)	W	W	3拍目終わり	W	3拍目終わり	W	W
45	下段		スラー	1-6拍目まで	1拍目-小節最後 まで	W	なし	なし	W	なし	L	W
51	上段	6	スラー	あり(もしかすると 3連符のマーク?)	なし	L	L	L	L	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーヴィ版 (1931)	シュナーペル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フイツィンジャー版 (1975)	J.フイツィンジャー版 (2005)
53				あり	なし	L(小さく付記)	L[]付き	L[]付き	L[]付き	L	L	L
55	下段/下声部	6	d ¹ 音の#	なし	あり	W	W	W	W	W	L	L
56	下段/下声部	3	g ¹ -a ¹ 音のオクターヴ	16分音符の2連符	8分音符と 16分音符の3連符	W	W	W	W	W	L	W
58	下段	6	スラー	あり	なし	L	W	W	L	W	L	L
60		1	p	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
60	上段	2-3	a ¹ -a ¹ 音のタイ/ fis ¹ -fis ¹ 音のタイ	なし/あり	あり/なし	W	W	W	W	W	LとW (=どちら もタイあり)	LとW (=どちら もタイあり)
60		4-6	ペダル・取るマーク	なし	あり	W	W	W	W ※注にペーターヴェ ンに由来とある	W	W	W
63	下段	3-6	スラー	なし	なし	あり	あり(※T. 64の 1拍目まで)	あり(※T. 64の 1拍目まで)	あり	L/W	あり	あり
65	上段		スラー	3-4	1-6	3-1(T. 66)	3-1(T. 66)	3-1(T. 66)	W	W	3-1(T. 66)	3-1(T. 66)
66	上段	1-3	4分音符と8分音符の音	fis ² -a ² 音のみ	fis ¹ -fis ² 音と a ¹ -a ² 音のオクター ヴ	W	W	W	W	W	W	W
71	下段	4-6	スラー	あり	なし	L?	W	W	L	W	L	L
72		1	p	あり	なし	(※3-4, 6)	W	W	ppあり	L	L	L
73	下段		スラー	あり	なし	L	L	L	L	W	L	L
73-75			調号	#2つのまま	#3つになる	W	W	W	W	W	W	W
76	上段/上声部	1	h ² 音	付点4分音符	4分音符	W	W	W	W	L	L	L
76	上段/下声部	3	ラ ¹ とファ	es ² 音、f ² 音	es ¹ 音、f ² 音	as音、f音	L/W	as音、f音	L/W	L/W	L/W	L/W
77	上段		スラー	あり	なし	L 第2版と同じ表記	L	L (※一部異なる) 第2版と同じ表記	L 第2版と同じ表記	W 第2版と同じ 表記	L 第2版と同じ 表記	L 第2版と同じ 表記
79	下段	5 裏		d ¹ 音	des ¹ 音	W	W	es ¹ 音	W	W	W	W
80	下段	4	c ¹ 音の# / es ¹ 音の ¹	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
83	上段/下声部	1	a ¹ 音	4分音符	8分音符	W	W	W	W	W	W	W
83	下段	4	g ¹ 音の#	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
84	上段、下段	1	e ¹ 音とe ² 音の#	あり	あり	L/W	L/W	L/W	L/W ※いくつかの エディションでなしな ことがあるが、明ら かに#だとの 注あり	L/W	L/W	L/W
84	上段	3.4 裏	c ² 音の# / c ¹ 音の# / f ² 音の#	なし/あり/あり	なし/なし/なし	L+c ² 音の#は 補う	L+c ² 音の#は 補う	L+c ² 音の#は 補う	L+c ² 音の#は 補う	L+c ² 音の#は 補う	L+c ² 音の#は 補う	L+c ² 音の#は 補う
84	下段	1.2.4	c ¹ 音の# / g ¹ 音の# / f ¹ 音の#	あり/あり/あり	なし/なし/なし	L	L	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーマス版 (1931)	シュナーペル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フアイシャー版 (1975)	J.フアイシャー版 (2005)
89-90	上段		スラー	T. 89の1拍目～ T. 90の4拍目終り りまで	T. 89の1拍目～T. 89最後まで/T. 90 の1拍目～3拍目最 後まで	L? (小節で2つに区 切れている)	W	L? (小節で2つに 区切れている)	L? (小節で2つに 区切れている)	W	L	L
92	上段		スラー	1-2拍目の最後まで で/3-6拍目の最 後まで	1-2拍目の最後まで で/4-6拍目の最 後まで	1-3拍目の最後まで /4-6拍目の最 後まで	1-3拍目の最後まで で/4-6拍目の最 後まで	1-3拍目の最後まで で/4-6拍目の最 後まで	1-3拍目の最後まで /4-6拍目の最 後まで	1-3拍目の最後 まで/4-6拍目 の最後まで	L	L
96			cresc.の点線	あり	なし	W	L	L	W	W	L	L
97	下段	6	h音とd'音の ^h	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
98			cresc.	なし	あり	W(W同様に 段変えあり)	W	W	W ページ変えあり	W	L	L
100-101			クレッシェンド、デクレッシェンド	なし	あり	W	W	W	W	W	W (Wと同じく下 段に書かれる)	W (Wと同じく下 段に書かれる)
102		1	p	なし	あり	W	W	L	W	L	L	L
102	上段	4	オクターヴ記号	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
104	下段	2 裏-小節 最後まで	オクターヴ記号	あり	あり	1拍目裏からオク ターヴで書かれる (※1拍目裏は 小文字)	1拍目裏からオク ターヴで書かれる (※1拍目裏は ()付き)	1拍目裏からオク ターヴで書かれる (※1拍目裏は []付き)	オクターヴで 書かれる	オクターヴで 書かれる	オクターヴで 書かれる	オクターヴで 書かれる
105	上段	1	d'音の#	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
105	上段	6	h'音の ^h	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
105	上段	6 裏	d'音の ^h	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
106	上段		スラー	2-3拍目/4-6拍目	1-3拍目/4-6拍目	L	L	L	L	L	L	L
106	下段	4 裏-小節 最後まで	スラー	あり	なし	(L)※1拍目裏から T. 107の1拍目まで	L	W	(L)※1拍目から	W	L	L
107	上段	3	e'音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
107	下段	5-6	スラー	あり	なし	L	L	L	L	W	L	L
107, 113			u.c./t.c.	なし	なし	L/W	L/W	L/W	uc. なし/ t.c. はあり	あり	あり	あり
108	上段	2-6	3つのスラー	あり	なし	L	L	L	L	W	L	L
108	上段	6 裏	d'音	なし	あり	W	W	W	W	W	L	L
109	上段	3.4	スラー	なし	あり	W	W	W	W	4拍目のみあり	W	W
111	下段	4	h音	なし	あり	W	W	W	W	W	W	L
112	下段	4 裏	Fis音	あり	なし	W	W	W	W	W	W	W
115	上段		tr.の前の ^h	あり	なし	L	L	L	L []付き	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーマス版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.ファイシャー版 (1975)	J.ファイシャー版 (2005)
115	上段	2-3		上声部に デクレッシェンド	下声部にアクセント	W	L	なし	W 注あり	W	W	L
116	上段	1	16分音符の音	fis ³ 音	dis ³ 音	W	W	W	W 注あり	W	W	W
120			クレッシェンド、デクレッシェンド	下段の下にあり	下段の下にあり	上段にあり (※T. 122にもあり)	なし(※T. 122の ものと捉えている)	中段にあり (※T. 122にも あり)	クレッシェンドのみ ()付きで、に中段 にあり/ T. 122にもあり	なし(※T. 122 のものど捉えて いる)	Lに同じ?	Lに同じ?
121	下段	4	a音の#	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
123	上段/上声部		2声で書かれる	2声(T. 124の1-3拍 目まで)	2声(T. 123のみ)	1声	T. 123の1-3拍目 のみ2声	1声	1声	1声	1声	1声
124	上段	4	e ² 音とe ³ 音	#	h	W	W	W	W	W	L	W
124, 125	下段	4-6	スラーの開始	4拍目裏から	4拍目から	T. 124はL T. 125はW?	W	L	T. 124にはなし/ T. 125はW	W	L	L
124	下段	5 裏	h ¹ 音のh	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	L/W	L/W
127	下段/上声部	3 裏	音	cis ¹ 音のh	cis ¹ 音の#	W	W (臨時記号は何も なく調号により#)	W (臨時記号は何も なく調号により#)	W (Wが正しい との注あり)	W (臨時記号は 何もなく調号に より#)	W	W
127-128	上段		fis ² -fis ³ 音とd ³ -d ³ 音のタイ	あり/なし	なし/あり	W	LとW(=どちらも タイあり)	W	W※Lは間違いで あるとの注あり	W	LとW(=どちら もタイあり)	LとW(=どちら もタイあり)
129		3 終わり	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
131	下段/下声部		スラー	なし	あり	W※1-3拍目と4-6 拍目とで2つのス ラーになっている	W※1-3拍目と4-6 拍目とで2つのス ラーになっている	W※1-3拍目と4-6 拍目とで2つのス ラーになっている	W※1-3拍目と4-6 拍目とで2つのス ラーになっている	W※1-3拍目と 4-6拍目とで 2つのスラーに なっている	W(変化なしに Wのまま書いて ある)	W(変化なしに Wのまま書いて ある)
136	上段	6	スラー	あり	なし	L (T. 137の1拍目 まで)	L (3連符のマーク か?)	L	L	W	L	L
138	上段/下声部	2	16分音符の音	cis ² 音	ais ² 音	W	W	W	W	W	W	L
140	下段/下声部	4-6	音符	付点4分音符の eis ¹ 音	4分音符のeis ¹ 音と 8分音符のfis ¹ 音	W	W	W	W	W	W	W
141	下段/下声部	2	ais ¹ -ais ¹ 音のタイ	なし	あり	W	W(タイではなく8分 音符で書かれる)	W(タイではなく8分 音符で書かれる)	W	W(タイではなく8 分音符で書か れる)	L	W
141	下段/上声部	3-4	dis ¹ -dis ¹ 音のタイ	あり	なし	W	L	L	L (Lタイが無いのは 誤りとする注あり)	L	L	L
141	下段/上声部	5	ais ¹ 音のh	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
141	下段/上声部	5	g ¹ 音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
143		4	cresc.	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
143	上段	5-6	スラー	5拍目裏から	5拍目から	W	W	L	W	4拍目裏から	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーマス版 (1931)	シュナーベール版 (1949)	アラウ版 (1978)	J.フイツィンジャー版 (1975)	J.フイツィンジャー版 (2005)
143			t.c.	なし	6拍目にあり	5拍目にあり	W	5拍目にあり	5拍目にあり	5拍目裏にあり	5拍目にあり	5拍目にあり
144	上段	1-3	cis ² -cis ² 音のタイ	あり	なし	W	W	W	W 注あり	W (e ² -e ² 音にはあり)	W (e ² -e ² 音にはあり)	W (e ² -e ² 音にはあり)
144			dim.	3拍目にあり	2拍目にあり	W	W	W	W	W	W	W
144		3	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W ※注にペーターヴェンに由来とある	W	W	W
145	上段	1-3	ais ¹ -ais ¹ 音のタイ	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W	L/W	L/W
145		4	ペダル	なし	あり	W	W	W	W ※注にペーターヴェンに由来とある	W	W	W
145	下段	6	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	5拍目にあり	5拍目にあり
148, 150	上段、下段		スラー	あり	なし	(L)一部異なる フレーズ	(L)一部異なる フレーズ	(L)異なる フレーズ	独自のスラー	W	L	L
152	上段	4	音符	4分音符	付点4分音符	W	W	W	W	W	W	W
153			クレッシェンド、デクレッシェンド	なし	あり	W	W	W	W ()付き	W	W	W
154			u.c.	なし	1拍目にあり	W	W	W	W	W	W	W
158		1	p	あり	なし	W	L []付き	W	L	L	L	L
162			cresc.	1拍目から	4拍目から	W	W	W	W	W	L	L
170	上段	1	前打音	h ¹ 音	h ¹ 音	L/W	g ¹ 音になっている	L/W	L/W ※h ¹ 音はおそらく間違いであり、g ¹ 音を演奏して問題ない旨の注あり	L/W	L/W	L/W
174	上段/上声部	4-6	スラー	あり	なし	L	W	W	L	W	L	L
175	上段/上声部	3-4	h ¹ -h ¹ 音のタイ	あり	なし	W	W	W	W	W	W	W
176	上段		スラー	T. 177の1拍目最後まで	T. 176の最後の拍まで	(L) ※T. 177の3拍目最後まで	W	W	W ※T. 177の1-3拍目までもあり	W	W	W
180	下段	1	指使い	なし	あり	W	W	L	W ※注にペーターヴェンに由来とある	W	W	W
185-186	下段	4-1	タイ	あり	なし	W	L ※原稿には抜けているとの注あり	L	L	L	L	L
186	下段	4	A ₁₈ 音の#	あり	なし(1拍目にあり)	W	L	L	W	L	W	W

第3楽章 ④

(ペンレ版 (C) / " (V) / ウィーン原典版 2001 / " 2018 / 園田高弘版 / ベーレンライター版)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
0			表題	Adagio espressionato e con molto Sentimento. あり	Adagio sostenuto. Appassionato e con molto sentimento. なし	W	W	W	W	W	W
1			p	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
1	上段、下段		スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
2	上段、下段		スラー	あり	なし	W	W	L ※下段のスラーは 若干異なる	L()付き ※下段のスラーは 若干異なる	L? (※上段のみ、 T. 5の1拍目まで)	W
2			ペダル・取るマーク	あり	なし	W	W	W	L()付き	W (※独自のスラー あり)	L
3	上段		スラー	なし	あり	W	W	W	W	T. 2からのスラーが 続いている	W
4	上段、下段	1-3	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	上段はT. 2からのス ラーが続いている、 下段はなし	W
5		4-6		アクセント?	デクレッシェンド?	W	W	W	W	W	W
5-6				なし	あり	W	W	W	W	W	W
7, 10	上段	4-6	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	独自のスラーあり	W
9		1-2	アクセント? デイミスエンド?	あり (アクセントらしい)	なし	W	W	L	L()付き	W	W
9	上段	4-6	スラー	なし	あり	W	W	W	W	独自のスラーあり	W
14			クレッシェンド始まり	1拍目から	4拍目から	W	W	W	W	W	W
14-15			クレッシェンド頂点	T. 14とT. 15の間	T. 15の3拍目	L? (T. 15の1拍目)	L? (T. 15の1拍目)	L	L	L?(T. 15の1拍目)	W?(T. 15の2拍目)
19	上段	6 裏	♯音の ¹⁾	あり	なし	L	L	L	L ※L ¹⁾ による注 あり	L	W
19-20	上段		クレッシェンド、デクレッシェンド	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
20-21	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	T. 19の4拍目から ひとつのスラー	L? (T. 20の4-6拍目 とT. 21の1-3のみ あり)
22	上段		前打音	8分音符	8分音符2本斜線	W	W	16分音符	32分音符	8分音符斜線	32分音符
23			デクレッシェンドマーク	4拍目から	5から6拍目に かけて	W	W	W	W	W	L
24			クレッシェンド、デクレッシェンド	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
25	下段/上声部	5	四分音符のぼう	なし	あり	W	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
27	下段	3,4,5,6	スタックカート	線	点	W(スタックカート表記に 区別なし?)	W(スタックカート表記に 区別なし?)	(L)スタックカート表記 は常に線のため 判別難しい	(L)スタックカート表記 は常に線のため 判別難しい	W	L(スタックカート表記 に区別なし?)
28		2	p	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
29	上段	3 裏	内声	16分音符あり	16分音符なし	W	W	W	W	W	W(音符の書き方も Wそのもの)
29	下段	1	バスのcis音	あり	なし	L	L	L	L	L	L
29			cresc.	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
32		1	cresc.の再度の指示	なし	あり	W	W	L	L	W	W
33	上段	3-4, 5-6	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	T. 33の2音目- T. 34の1音目まで	W
35	下段	4	バスのcis音	なし	あり	W	W	W	W	W	W
38			più cresc.	なし	あり	W	W	W	W	W	W
38-39	上段	6-1	e ² -e ³ 音のタイ	あり	なし	W	W	W	W	W	L
39, 40	下段/上声部	5-6	スラー	あり	なし	W	W	L ※4拍目裏から スラー	L()付き ※4拍目裏から スラー	W	W
41	下段/下声部	5	h音の [♯]	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
42	上段/下声部	2	h [♯] 音の ^b	なし	あり	W	W	W	W	W	W
42	上段/上声部	4	g [♯] 音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L	W
42	上段	6	h [♯] 音とh [♯] 音の [♯]	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	h [♯] 音のみあり
42	下段/下声部	4	A音の [♯]	あり	なし	W ※ウィーン原版に よる、ロンドン原版は Ais音と注あり	L	L	L	L	L
43	上段	3-4	d [♯] -d [♯] 音のタイ	あり	あり	なし ※Wがおそらく 誤りであるとの注あり	なし ※Wがおそらく 誤りであるとの注あり	L/W	L/W	なし	L/W
43	下段	4	E音の [♯]	なし	なし (段変えがある)	あり	あり	あり	あり	あり	あり
43	下段	4 裏	G ₁ 音の [♯]	なし	あり	W	W	W	W	W	W
44	上段、下段	6 裏	g音とg [♯] 音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L	L
44			ペダル取るマーク	小節終わり	2拍目(裏?)	W	L	W	W	L ペーターヴェンの ペダルとしてLを 採用している	3拍目終わり
45	下段		スラー	1-6拍目まで	1拍目-小節最後 まで	なし	なし	W	W	なし	W
51	上段	6	スラー	あり(もしかすると 3連符のマーク?)	なし	W	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
53				あり	なし	L ※Lによるもの 注あり	L ※Lによるもの 注あり	L	L()付き	L	L
55	下段/下声部 6		p d ¹ 音の#	なし	あり	W	W	W	W	W	W
56	下段/下声部 3		g ¹ -g音のオクターヴ	16分音符の2連符	8分音符と 16分音符の3連符	W	W	W	W	W	W
58	下段	6	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
60		1	p	なし	あり	W	W	W	W	W	W
60	上段	2-3	a ¹ -a ¹ 音のタイ/ fis ¹ -fis ¹ 音のタイ	なし/あり	あり/なし	W	W	LとW(=どちらも タイあり)	LとW(=どちらも タイあり)	W	W
60		4-6	ベダル・取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	W
63	下段	3-6	スラー	なし	なし	L/W	L/W	L/W	()付きあり	L/W	L/W
65	上段		スラー	3-4	1-6	W	W	W	W	W	W
66	上段	1-3	4分音符と8分音符の音	fis ² -a ² 音のみ	fis ¹ -fis ² 音と a ¹ -a ² 音のオクター ヴ	W	W	W	W	W	W
71	下段	4-6	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
72		1	p	あり	なし	W	W	W	W	W	W
73	下段		スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
73-75			調号	#2つのまま	#3つになる	W	W	W	W	W	W
76	上段/上声部 1		h ¹ 音	付点4分音符	4分音符	L ※注あり	L ※注あり	L	L	L	L
76	上段/下声部 3		ラトとファ	as ¹ 音/f ¹ 音	as ¹ 音/f ¹ 音	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
77	上段		スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
79	下段	5 裏		d ¹ 音	des ¹ 音	W	es ¹ 音 注あり	es ¹ 音 注あり	W	es ¹ 音	W ※es ¹ 音の誤り? との注あり
80	下段	4	c ¹ 音の#/es ¹ 音の ^h	あり	なし	L	L	L	L	L	L
83	上段/下声部 1		a ¹ 音	4分音符	8分音符	W	W	W	W	W	W
83	下段	4	g ¹ 音の#	あり	なし	L	L	L	L	L	L
84	上段、下段	1	e ¹ 音とe ² 音の#	あり	あり	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
84	上段	3.4 裏	c ¹ 音の#/c ² 音の#/f ² 音の#	なし/あり/あり	なし/なし/なし	L+c ¹ 音の#は補う	L+c ¹ 音の#は補う	L+c ¹ 音の#は補う	L+c ¹ 音の#は補う	L+c ¹ 音の#は補う	L+c ¹ 音の#は補う
84	下段	1.2.4	c ¹ 音の#/g ¹ 音の#/f ¹ 音の#	あり/あり/あり	なし/なし/なし	L	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
89-90	上段		スラー	T. 89の1拍目～ T. 90の4拍目終りまで	T. 89の1拍目～T. 90 最後まで/T. 90 の1拍目～3拍目 最後まで	W	W	W	W	W	W
92	上段		スラー	1-2拍目の最後まで で/3-6拍目の最 後まで	1-2拍目の最後まで で/4-6拍目の最 後まで	1-3拍目の最後まで /4-6拍目の最後 まで	1-3拍目の最後まで /4-6拍目の最後 まで	1-3拍目の最後まで /4-6拍目の最後 まで(T.90に放つて)	1-3拍目の最後まで /4-6拍目の最後 まで	1-3拍目の最後まで /4-6拍目の最後 まで	1-3拍目の最後まで /4-6拍目の最後 まで
96			cresc.の点線	あり	なし	W	W	W	W	W	L
97	下段	6	h音とd'音の ²	あり	なし	L	L	L	L	L	W
98			cresc.	なし	あり	W	W	W	W	W	W
100-101			クレッシェンド、デクレッシェンド	なし	あり	W	W	W	W	W	W
102		1	p	なし	あり	L	L	L	L	L	W
102	上段	4	オクターヴ記号	なし	あり	W	W	W	W	W	W
104	下段	2裏-小節 最後まで	オクターヴ記号	あり	あり	オクターヴで 書かれる	オクターヴで 書かれる	オクターヴで 書かれる	オクターヴで 書かれる	オクターヴで 書かれる	オクターヴで書かれ る ※上の声部は []付き
105	上段	1	d'音の#	あり	なし	L	L	L	L	L	L
105	上段	6	h音の ²	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	L/W
105	上段	6裏	d'音の ²	あり	なし	L	L	L	L	L	W
106	上段		スラー	2-3拍目/4-6拍目	1-3拍目/4-6拍目	L	L	L	L	L	W
106	下段	4裏-小節 最後まで	スラー	あり	なし	W	W	W	L()付き ※4拍目からスラー	W	L (L) ※4拍目からスラー
107	上段	3	e'音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
107	下段	5-6	スラー	あり	なし	W	W	W	L()付き	W	W
107, 113			u.c./t.c.	なし	なし	L/W	L/W ※Londoner Erstausgabeには あると間違った注が あり!	あり	()付きであり	L/W	あり
108	上段	2-6	3つのスラー	あり	なし	W	W	W	L()付き	W	W
108	上段	6裏	d ² 音	なし	あり	W	W	W	W	W	W
109	上段	3,4	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	W
111	下段	4	H音	なし	あり	W	W	W	W	W	W
112	下段	4裏	Fis音	あり	なし	W	W	W	W	W	L
115	上段		tr.の前の ²	あり	なし	L()付き	L	L	L	L	L
115	上段	2-3		上声部に デクレッシェンド	下声部にアクセント	W	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
116	上段	1	16分音符の音	fis ³ 音	dis ³ 音	W	W ※Lの表記が注にあり	W	W	W	W
120			クレッシェンド、デクレッシェンド	下段の下にあり	下段の下にあり	なし(※T. 1220のものと擬えている)	()付きで中段にあり ※注付き	中段にあり	中段にあり	中段にあり	中段にあり
121	下段	4	a音の#	あり	なし	L	L	L	L	L	L
123	上段/上声部		2声で書かれる	2声(T. 124の1-3拍目まで)	2声(T. 123のみ)	1声	1声	1声	1声	1声	1声
124	上段	4	e ³ 音とe ² 音	#	h	W ※Lの表記が注にあり	W ※Lの表記が注にあり	W	W	W	W
124, 125	下段	4-6	スラーの開始	4拍目裏から	4拍目から	W	W	W	L ※他の類似箇所を参考に	W	W
124	下段	5 裏	h ¹ 音のh	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
127	下段/上声部	3 裏	音	cis ¹ 音のh	cis ¹ 音のh #	W	W	W	W	W	W (臨時記号は何もなく調号により#)
127-128	上段		fis ³ -fis ² 音とd ³ -d ² 音のタイ	あり/なし	なし/あり	W	W	LとW(=どちらもタイあり)	LとW(=どちらもタイあり)	W	W
129		3 終わり	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	W
131	下段/下声部		スラー	なし	あり	W ※1-3拍目と4-6拍目とで2つのスラーになっている	W ※1-3拍目と4-6拍目とで2つのスラーになっている	W ※1-3拍目と4-6拍目とで2つのスラーになっている	W ※1-3拍目と4-6拍目とで2つのスラーになっている	W ※1-3拍目と4-6拍目とで2つのスラーになっている	W ※1-3拍目と4-6拍目とで2つのスラーになっている
136	上段	6	スラー	あり	なし	W	W	W	W	W	W
138	上段/下声部	2	16分音符の音	cis ² 音	ais ¹ 音	W	W	W	W	W	W
140	下段/下声部	4-6	音符	付点4分音符のeis ¹ 音	4分音符のeis ¹ 音と8分音符のfis ¹ 音	W	W	W	W	W	W
141	下段/下声部	2	ais-ais音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
141	下段/上声部	3-4	dis ¹ -dis ¹ 音のタイ	あり	なし	L ()付き	L ()付き	L	L	L	L
141	下段/上声部	5	ais ¹ 音のh	あり	なし	L	L	L	L	L	L
141	下段/上声部	5	g ¹ 音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
143		4	cresc.	なし	あり	W	W	W	W	W	W
143	上段	5-6	スラー	5拍目裏から	5拍目から	4拍目裏から	4拍目裏から	W	W	4拍目裏から	W
143			t.c.	なし	6拍目にあり	5拍目にあり	5拍目にあり	W	W (L訂正版には5拍目にありとの注)	5拍目にあり	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原版 (2001)	ウィーン原版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
144	上段	1-3	cis ² -ais ² 音のタイ	あり	なし	W(e ² -e ² 音には ()付きで タイあり)	W(e ² -e ² 音には ()付きで タイあり)	L(e ² -e ² 音には ()付きで タイあり)	L()付き (e ² -e ² 音には []付きで タイあり)	W (e ² -e ² 音にはあり)	W (e ² -e ² 音にはあり)
144			dim.	3拍目にあり	2拍目にあり	W	W	W	W	W	W
144		3	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	W
145	上段	1-3	ais ¹ -ais ¹ 音のタイ	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
145		4	ペダル	なし	あり	W	W	W	W	W	W
145	下段	6	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	5拍目にあり	5拍目にあり	W	W
148, 150	上段、下段		スラー	あり	なし	W	W	T. 148はなし W T. 150はあり L	L()付き	W	W
152	上段	4	音符	4分音符	付点4分音符	W	W	W	W	W	W
153			クレッシェンド、デクレッシェンド	なし	あり	W	W	W	W	W	W
154			u.c.	なし	1拍目にあり	W	W	W	W(L訂正版には 3拍目にありとの注)	W	W
158		1	p	あり	なし	W	L	L	L()付き	L	W
162			cresc.	1拍目から	4拍目から	W	W	W	W	W	W
170	上段	1	前打音	h ¹ 音	h ¹ 音	L/W	g ¹ 音になっている ※注あり	g ¹ 音になっている	g ¹ 音(類似箇所 T. 22より推察)	g ¹ 音になっている	L/W (g ¹ 音の誤りではな いか?との注ある)
174	上段/上声部	4-6	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	独自のスラー	W
175	上段/上声部	3-4	h ¹ -h ¹ 音のタイ	あり	なし	W	W	W	W	W	W
176	上段		スラー	T. 177の1拍目最後 まで	T. 176の最後の拍 まで	W	W	L	W	W	W
180	下段	1	指使い	なし	あり	W	W	W	W	W	W
185-186	下段	4-1	タイ	あり	なし	L ※注あり	L ※注あり	L	L()付き	L	L
186	下段	4	Ais音の#	あり	なし(1拍目にあり)	L	L	L	L	L	L

第4楽章 ①

(アルタリア異刷り／L訂正版／モシエレス版 1841 以前／W第2版／リスト版／モシエレス版 1858)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエス版 (1858)
0			表題	Introduzione	Per la misura si conta nel largo sempre quattro semicrome, cioè è [16分音符×4]	W	L	L	W	どちらを書いて いない	W
1			調号	b 2つ	b 1つ	W	L	L	W	L	L
1	上段		1つ目のオクターヴのフェルマータの音符	付点8分音符	付点16分音符	W	L	L	W	4分音符	W
1	下段		1つ目のオクターヴのフェルマータの音符	付点8分音符	付点32分音符	W	L	L	W	L	付点16分音符
1	下段		2つ目のオクターヴのフェルマータの音符	32分音符	16分音符	W	L	L	W	L	W
1	上段		f ¹ -f ¹ 音とas ¹ -as ¹ 音のタイ	なし	あり	W	L	L	W	W	W
1	上段	最後の音符	b ¹ 音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	L	L
2/3			Allegroとの区分の横線	あり	なし	W	L	L	L	終止線	L
7	下段/上声部	3裏	ais音の#	あり	なし	W	L	L	W	L	L
8	上段、下段	1	休符	付点16分休符	付点16分休符	L/W	L/W	L/W	複付点8分休符	L/W	L/W
8	上段	最後の和音	h	cis ¹ 音につく	ais ¹ 音につく	W	L/W(=両方にh)	W	W	W	W
9	上段	2-3	a ² -a ² 音とa ³ -a ³ 音のタイ	なし	あり	W	L	L	W	W	W
9		3	ペダル取るマーク	なし	あり	W	L	L	W	W	L
10	下段		trの波線	2つ目にもみあり	なし	W	L	L	W	L	W
10	下段		a tempo以降の2つ目のオクターヴの音符	64分音符	32分音符	W	L	L	W	L	L
10	下段		a tempo以降の6つ目のオクターヴの音符	32分音符	64分音符	W	L	L	W	W	W
10			cresc.の位置	accelerandoと 同じ所	調号変化する所	W	L	L	W	W	W
16			楽章表記のつづり	Fuga a Tre voci con a leune licenze	Fuga a Tre voci con alcune licenze	W	Fuga a tre voci con licenza	Fuga a tre voci con licenza	W (treのhは 小文字)	W (treのhは 小文字)	Fuga a tre voci, con alcune licenze
18, 19	上段/下声部	1	スタッカート	なし	あり	W	L	L	L	L	L
25		1	es ¹ 音のh	あり	なし	W	L	L	L	L	L
26		1	cresc.	あり	なし	W	L	L	W	W	W
26	上段		デクレッシェンドマーク	2-3拍目にあり	3拍目のみにあり	W	L	L	W	L	2拍目のみにあり
27	上段/上声部	2裏	es ² 音のh	あり	なし	W	L	L	L	L	L
29	下段/上声部	1裏	スタッカート	なし	あり	W	W ※綿スタッカート	W	L	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
29	下段/上声部	2-3終わりまで	スラー	なし	なし	L/W	あり	あり	L/W	あり	あり
30, 32-34		2	>の記号について	付点4分音符のアクセント	短いデクレッシェントマーク	W	L	L	W	L	L
32-35			cresc.の点線	T. 35の終わりまであり	T. 32の終わりまで	W	L	L	なし	なし	なし
35	下段	1	スタッカート	あり	なし	W	L	L	W	L	W
35	下段	1		sf	f	W	L	L	W	なし	なし
37	上段/上声部	1裏	スタッカート	あり	なし	W	L	L	W	L	L
37	上段/上声部	2		なし	あり	W	L	W	W	W	W
38	上段	2-3終わりまで	スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	L ※1拍目裏から
38	上段		下の声部	なし	あり	W	L	L	W	W(g'音の2分音符もあり!?)	W
42	上段/上声部	2		なし	あり	W	L	L	W	W	L
43	上段/上声部	1裏		あり	なし	W	L	L	W(bを付記)	W	W(bを付記)
44	下段	1		なし	あり	W	W	W	W	W	W
44, 45	上段	2		上声部	中声部	W	L	L	L	L	L
45	下段	3	es音の臨時記号	何も付記なし	何も付記なし	L/W	L/W	L/W	あり	あり	あり
52	下段	1		sf	ff	W	L	L	なし	L	L
53			調号	b 2つのまま	b 4つに変化	W	L	L	W	L	W
53, 54	下段	3	スタッカート	あり	なし	W	L	L	W	W	W
61	上段/上声部	3	des ² 音	4分音符	8分音符	W	L	L	W	W	L
61	下段	1		なし	あり	W	L	L	W	W	W
64	上段/上声部	1	f ² 音, es ² 音のスタッカート	なし	あり	W	L	L	W	L	W
65	上段/下声部	3	オリジナルの指使い	なし	あり	W	L	L	W	L	W? 一部のみあり
66, 67	上段/下声部	3裏	スタッカート	なし	あり	W	L	L	W	L	W
70-71	下段	T. 70の2-	スラー	小節間で切れ、2つのスラーになっ ていている	1つのスラー	W	L	L	W	L	W
71	上段	3	sf	なし	あり	W	L	L	W	L	W
75-76	下段	T. 76の1拍目 まで	ソのb	なし	なし	L/W	L/W	L/W	T. 75にあり	L/W	T. 75の下段 G音にのみあり
75-76	下段/下声部	T. 75の2-	スラー	小節間で切れ、2つのスラーになっ ていている	1つのスラー	W	L	L	W	L	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異調り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モリエス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モリエス版 (1858)
77	上段	2	sf	下段にあり	上段にあり	W	L	L	W	W	L
78	上段	1裏	g ¹ 音のb	あり	なし	W	L	L	L	L	L
78	下段	1	c ¹ 音のb	あり	なし	W	L	L	W	L	L
78	上段	2	sf	なし	あり	W	L	L	W	W	L
84	下段	3	C/c音のオクターヴのb	なし	なし	L/W	L/W	L/W	1拍目にあり	L/W	あり
85			調号	b 4つのまま	b 6つに変化	W	L	L	W	L	L
85	上段/上声部	2	b ¹ 音, ces ² 音の8分音符のスタッカート	あり	なし	W	L	L	W	L	L
85	上段/上声部	3	des ² 音の4分音符のスタッカート	あり	なし	W	L	L	W	W	W
85	上段/上声部	3	sf	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W	あり
86	下段	2	b音, ces ¹ 音の8分音符のスタッカート	あり	なし	W	L	L	W	L	L
87	下段	3裏	c ¹ 音の ²	なし	なし	L/W	あり	あり	L/W	あり	あり
88	上段/上声部	1	as ² 音	4分音符	8分音符	W	L	L	L	L	L
88	上段/上声部	2, 3		4分音符×2	休符なし	W	L	L	L	L	L
95	上段/上声部	3	as ³ 音, ges ³ 音, f ³ 音のスタッカート	あり	なし	W	L	L	W	L	W
96-98			mano destra, mano sinistra, m.d.	なし	あり	W	L	L	W	W	W
97	上段/下声部		8分音符のけた	6つの8分音符が 1つにまとめられる	1番目の8分音符の み独立させている	W	L	L	W	L	W
97	上段/下声部	1裏		es ¹ 音	es ¹ 音	L/W	L/W	L/W	L/W	f ¹ 音に変更され ている(+11拍目 [-ges ¹ 音]が足さ れている)	L/W
97, 99	上段/上声部	3	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L
103-105			T. 103の2-	f	sf	W	L	L	W	W	W
105-107	下段	3	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L
112-113	下段	3-1	C/c音/C音のオクターヴのタイ	あり	なし	W	L	L	C音のみタイ	L	L
117	上段	1	es ² 音の ²	なし	なし	L/W	あり	あり	あり	あり	あり
117, 118	上段/上声部	1裏	ges ² 音の ²	あり	なし	W	L	L	L	L	L
117-118	上段/下声部		b ¹ 音のtr	あり	なし	W	L	L	W	W	W
117-118	下段	3-1	E ³ 音 ² /es ³ 音 ² のオクターヴのタイ	あり	なし	W	L	L	es ³ 音 ² のみタイ	L	L
118-119			g ³ 音のtr	小節間で途切れず 連続したtr	小節間で途切れず 連続したtr	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
119	下段	3	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1856)
119,122			mano sinistra	なし	あり	W	L	L	T. 118とT.121の 3拍目にあり	L	L
120	上段	3 裏	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L
121-122	上段	3-1, 2	c'音のtr	小節間で途切れず 連続したtr	小節間で途切れず 連続したtr/タイで 結ばれる	W	L	L	L	W	W
122	下段	3	sf	なし	あり	W	L	L	W	L	L
123	上段/下声部	3 裏	sf	なし	あり	W	L	L	W	L	L
127	中声部		スラー	1-2のみ	1小節間すべて	W	L	L	W	W	W
128	上段/上声部		スラー	なし	あり	W	L	L	W	W	(W)T. 129まで 1つのスラー
132	上段/上声部	2	c'音, des ³ 音のスタックカート	あり	なし	W	L	L	W	L	L
134		1	f	なし	あり	W	L	L	W	L	W
134	上段/上声部	3	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	W
135	下段	2	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L
135-139	上段、下段		8分音符のスタックカート	あり	なし	W	L	L	W	L	L
141, 142	下段	1	8分音符のスタックカート	あり	なし	W	L	L	W	L	L
142-143	上段/下声部	3	es ³ -es ³ 音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	L	L
143	上段/下声部	3	8分音符のスタックカート	なし	あり	W	L	L	W	W	W
146	上段/上声部	1	sf	なし	あり	W	L	L	L	W	L
148-149			調号	↳ 5つのまま	↳ 6つに変化	W	L	L	↳ 4つ(T. 145で調 号変化がないた ため)	L	↳ 4つ(T. 145で 調号変化がない ため)
148	上段/上声部	2	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L
149	下段	1	スタックカート	あり	なし	W	L	L	W	W	L
149	下段	2	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L
149	上段/下声部	3	d'音	なし	あり	W	L	L	W	W	W
151	上段/上声部	1 裏、3 裏	スタックカート	なし	あり	W	L	L	1拍目裏はあり	1拍目と1拍目裏 にあり	W + 1拍目にもあり
152	上段/上声部	1	スタックカート	あり	なし	W	L	L	W	L	L
153	上段/上声部	3	p	なし	あり	W	L	L	W	L	W
155, 156	上段/下声部	1-2	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエス版 (1858)
157	上段/上声部		スラー	なし	あり	W	L	L	W	T.158の2拍目 まであり	T.158の2拍目 まであり
159	上段/上声部 3裏		a ^h 音の ^h	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W	あり
159-164	上段/上声部		スラー	T.159の3拍目裏- T.161の最後の音 まで/T.162の1拍 目-T.163の最後の 音まで/T.164の1 拍目-2拍目まで	T.159の3拍目裏- T.162の最後の音 まで/T.163の1拍 目-T.164の2拍目 まで	W	L (※T.159の スラーは不詳明)	L	W	スラーなし (legatoと あり)	L
161-162	上段/下声部 3裏-2		スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
164-165	下段/下声部 3-1		e-e音のタイ	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	あり	あり
165, 166	上段	1-2	スラー	あり	なし	W	L	L	W	W(T.159-164の legatoに關係 か?)	L
165	下段	1-2	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	T.162の3拍目 からあり
165-166	下段/上・下 声部 3-1		e-g音のタイ/d-d音のタイ	なし	なし	L/W	L/W	e-g音のみあり	L/W	L/W	e-g音のみあり
166	下段/上声部		スラー	なし	あり	W	L	L	W	L	W
166-167	下段/下声部		スラー	なし	あり	W	L	L	W	L	W
168-171	上段/上声部		スラー	T.168の1拍目- T.169の2拍目まで	T.168の1拍目- T.171の最後まで	W	L	L	W(T.172の 1拍目まで)	なし	W(T.172の 1拍目まで)
170-171	上段/下声部 3-		スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	L
171-172	上段/上声部		h-h音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
172	上段/下声部 1-2		スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	L
173	下段	1-2	スラー	なし	あり	W	L	L	W	L	W
173-174	下段		クレッシェンド、デクレッシェンドマーク	あり	なし	W	L	L	W	L	L
174		3	クレッシェンドマーク	なし	あり	W	L	L	W	L	W
175-176	上段		スラー	上声部	下声部	W	L	L	W	L	W
176-177	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
178	下段/下声部 1-2		スラー	なし	あり	W	L	L	W	L	W
180			cresc. の点線	T.183まであり	なし	W	L	L	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
182	上段/上声部 3		スタッカート	なし	あり	W	L	L	L	L	L
183	下段	1-2	スラー	あり	なし	W	L	L	L	L	L
183	上段/上声部 3		スタッカート	なし	あり	W	L	L	L	L	L
184			non ligato	上段と下段の間に1つだけ	上段、下段ともに書かれる	W	L	L	L	L	上段のみに "non legato"
184	下段	1-2	スラー	あり	なし	W	L	W(消された痕あり?)	W	W	W
191	下段	3	sf	あり	なし	W	L	L	W	W	W
191, 192	上段/下声部		休符	なし	あり	W	L	L	W	L	T. 192のみあり
193	下段	3	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	W
195	上段/上声部 3 裏		f ¹ 音の#	なし	なし	L/W	L/W	あり! (モシエレスによる訂正か?)	L/W	あり	あり
196	上段/上声部 1		スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	L
196	下段	1		sf	ff	W	L	L	W	L	W
199	上段/上声部 1-2		h-h音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
202	上段/上声部 2		sf	なし	あり	W	L	L	W	W	W
204			p	あり	なし	W	L	L	W	L	W
204			cresc.の点線	T. 207まであり	なし	W	L	L	W	W	W
204-205	上段/上声部 3 裏-1		e ² -e ² 音のタイ	なし	あり	W	L	L	W	W	L
207	上段/上声部		スラー	2-3拍目にあり	1拍目-最後の音まで	W	L	L	W	L	1拍目裏-最後の音まで
208		1		sf	ff	W	L	L	W	L	W
209	下段/下声部 2		sf	なし	あり	W	L	L	W	L	W
212	上段	2 裏	g ² 音の#	なし	なし	L/W	L/W	あり(モシエレスによる訂正か?)	あり	あり	あり
215	上段/下声部 2 裏-3		a ¹ -a ¹ 音のタイ	なし	あり	W	W	W	(W)4分音符になっている	W	W
220	上段/上声部 2		sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L
221-222	下段/上声部		e-e音のタイ	なし	あり	W	L	L	W	L	W
226	上段/下声部 2 裏		c ² 音の#	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W	L/W
228-229	上段/上声部		c ³ -c ³ 音のタイ	あり	なし	W	L	L	W	L	L
229		1		sf	ff	W	L	L	W	L	W
229	上段/下声部 2 裏		fis ¹ 音の#	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W	あり
231, 232	下段	1	スタッカート	なし	あり	W	L	L	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエス版 (1858)
235	上段	1		sf	ff	W	L	L	W	fになっている	W
236, 237		2	sf	なし	あり	W	L	L	W	W	W
238	下段	1		sf	f	W	L	L	W	W	W
239	上段/上声部	1		f音	as音	W	L	L	W	W	W
245-246	上段/上声部	3裏-1	2つの8分音符の記譜	けた	2つのはた	W	L	L	W	W	L
248		1		sf	ff	W	L	L	W	W	W
250			una corda	なし	あり	W	L	L	W	L	W
250-253	上段/上声部		スラー	2小節ずつで2つのスラー	1つのスラー	W	L	L	W	スラーなし "sempre legato"	L
254	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	L	L	W	W(T. 250の sempre legatoに 関係か)	L
254	上段/下声部		スラーの開始	1拍目	2拍目	W	L	L	W	スラーなし	L
258-264	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	L
262	上段・下段		cis ¹ 音とcis ² 音の ^ハ	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W(井が追記さ れる)	L/W(井が追記さ れる)	L/W(井が追記され る)
273-274	上段/上声部	2-1	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	T. 271からあり
275-276	上段/上声部	2-2	スラー	あり	なし	W	L	L	W	W	T. 275の1拍目から T. 279の1拍目まで あり
277	上段/上声部	1-3	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	T. 275の1拍目から T. 279の1拍目まで あり
278	下段/下声部	1	f音の ^ハ	なし	あり	W	L	W	W	W	W
279			tre corde	なし	あり	W	L	L	W	L	W
282			cresc.の位置	2拍目	3拍目	W	L	L	W	L	L
283	上段	1	es ¹ 音の ^ハ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
284	下段	3	es音の ^ハ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
284-286	上段		スラー終わり	T. 285の最後の音 まで	T. 286の1拍目まで	W	L	L	W	L	L
285	下段	2裏	es音の ^ハ	あり	なし	W	L	L	W (bを付記)	L	W (bを付記)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異譜り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエレス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエレス版 (1858)
291		1, 3	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L
292		2	sf	あり	なし	W	L	L	W	L	L
294		2	sf	sf	ff	W	L	L	W	L	なし
296	上段/下声部	3	4分音符の音	c'音	c'音	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
299	上段	1裏	es'音の ^h	なし	なし	L/W	あり	あり	あり	あり	あり
300		1	sf	なし	あり	W	L	L	W	L	L
300		2		sf (上声部に付記)	ff	W	L	L	W	L	なし
300-301		3-1		なし	なし	L/W	L/W	あり	L/W	あり	L/W
301	下段/下声部	1		sf	ff	W	L	L	W	L	W
305-306				あり	なし ※下声部の d'-c'音のスラーに 見える	W	L	L	W	L	L
311		1		あり	なし	W	L	L	W	L	L
319		1		なし	あり	W	L	L	W	W	W
320	下段/上声部	3	指使い	なし	あり	W	L	L	W	L	一部のみあり
322	下段	1		sf	f	W	L	L	W	L	ff
325	上段/上声部	3裏		あり	なし	W	L	L	L	L	L
326, 328, 329	上段・下段	3		あり	なし	W	L	L	(W) ※T. 326のみL?	L	L
327	上段/下声部	3	アーティキュレーション	ポルタート	何も付記なし	W	L	L	W	スラー	W
330	下段	3		あり	なし	W	L	L	W	L	W
333		1		f(sfのsが消えた形 跡あり?)	ff	W	L	L	W	L	W
337	上段/上声部	1裏-		なし	なし	L/W	あり	あり	L/W	あり	スラーのみあり
338	上段/上声部	2	tr	あり	なし	W	W	W	W	W	W
343			cresc.の位置	2拍目	1拍目	W	L	L	W	L	L
343	上段/下声部	2	アクセント	なし	あり(短いデクレツ シエンダ?)	W	L	L	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	アルタリア異刷り (1819以降)	L訂正版 (1820)	モシエス版 (1841以前)	W第2版 (1856)	リスト版 (1857)	モシエス版 (1858)
344	上段/上声部	1, 2	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L (3拍目と下段にもスラー付記)	W
345	上段/上声部	1裏		es ^s 音 上段、下段ともに書かれる	ges ^s 音 上段と下段の間に1つだけ	W	L	L	W	W	W
345		2	sf			W	L	L	W	W	W
349	下段	1		A ₁ 音	F ₁ 音	W	L	L	W	L	L
350	下段	2裏		d音	B音	W	L	L	W	W	L
354	上段/下声部	1	c'音の4分音符	なし	あり	W	L	L	W	W	L
355	下段	2	sf	なし	あり	W	L	L	W	L	W
362	下段	2裏, 3	スタッカート	あり	なし	W	L	L	W	L	L
364	上段/下声部	1-2	スラー	あり	なし	W	L	L	W	L	L
365		3		sf	ff	W	L	L	W	L	L
366	下段	3裏	B ₁ /B音のオクターヴのb	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W	L/W
366	下段	3	スラー	なし	なし	L/W	L/W	あり	L/W	あり	あり
367-368			cresc.の位置	T. 368の1拍目	T. 367の3拍目	W	L	L	W	T. 368の2拍目	W
369		1		下段にsf	両段にff	W	L	L	W(両段の中間にffひとつ)	L(両段の中間にsf)	L
369	下段	2		sf	ff	W	L	L	W	L	なし
370	上段/上声部	1	ges ^s 音	4分音符	16分音符	W	L	L	W	L	W
370	上段	3	sf	なし	あり	W	L	L	W	W	W
370-372	下段		E ₁ 音のタイ	なし	あり	W	L	L	W	L	W
372	上段	1, 2	sf	1拍目のみあり	なし	W	L	L	L+2拍目もあり	L+2拍目もあり	L
372-373			デクレッシェンドマーク	なし	あり	W	L	L	W	W	T. 372の3拍目のアクセント?
377		2	g音のb	なし	あり	W	L	W	W	W	W
379, 380	下段	1	B ₁ 音の2分音符の付点	あり	なし	W	L	L	L	L	L
389		1		f	ff	W	L	L	W	L	W
397-399				sf	ff	W	L	L	W	L(T. 399の3拍目ff)	T. 397はL/ T. 398, 399はW
398-399	下段		和音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W

第4楽章 ②

(旧全集／ハスリンガー版／ビューロー版／ダム版／ライネッケ版)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハズリンガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
0			表題	Introduzione	Per la misura si conta nel largo sempre quattro semicrome, cioè è [16分音符×4]	W	W	どちらとも書いていない	W ドイツ語で書かれる	W
1			調号	b 2つ	b 1つ	W	W	L	L	W
1	上段		1つ目のオクターヴのフェルマータの音符	付点8分音符	付点16分音符	W	W	フェルマータなし/ 16分音符と複付点 4分音符のタイ	W	W
1	下段		1つ目のオクターヴのフェルマータの音符	付点8分音符	付点32分音符	付点16分音符	付点16分音符	フェルマータなし/ 16分音符と複付点 4分音符のタイ	付点16分音符	付点16分音符
1	下段		2つ目のオクターヴのフェルマータの音符	32分音符	16分音符	W	W	フェルマータなし/ 16分音符と8分音符 と4分音符と16分音 符のタイ	W	W
1	上段		f ¹ -f ¹ 音とas ¹ -as ¹ 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W
1	上段	最後の音符	b ¹ 音の ^b	あり	なし	L	L	L	L	L
2/3			Allegroとの区分の複縦線	あり	なし	L	L	L	L	L
7	下段/上声部	3 裏	ais ¹ 音の #	あり	なし	L	L	L	L	L
8	上段、下段	1	休符	付点16分音符	付点16分音符	複付点8分音符	複付点8分音符	複付点8分音符	複付点8分音符	複付点8分音符
8	上段	最後の和音	♯	cis ¹ 音につく	ais ¹ 音につく	W	W	W	W	W
9	上段	2-3	a ² -a ² 音とa ³ -a ³ 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W
9		3	ペダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	W
10	下段		trの波線	2つ目へのみあり	なし	2つともあり	L	L	3つともあり	2つともあり
10	下段		a tempo以降の2つ目のオクターヴの音符	64分音符	32分音符	L	W	L	L	L
10	下段		a tempo以降の6つ目のオクターヴの音符	32分音符	64分音符	W	L	W	W	W
10			cresc.の位置	accelerandoと 同じ所	調号変化する所	W	W	L/W (crescendo ed accelerando moltoと 書いてある)	L/W (crescendo ed accelerando moltoと 書いてある)	W
16			楽章表記のつづり	Fuga a Tre voci con a leune licenze	Fuga a Tre voci con alcune licenze	W (treのは 小文字)	Fuga a tre voci, con alcune licenze	W (treのは 小文字)	Fuga a tre voci, con alcune licenze	Fuga a tre voci, con alcune licenze
18, 19	上段/下声部	1	スタッカート	なし	あり	L	L	T.18のみあり?	L	L
25		1	es ¹ 音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L
26		1	cresc.	あり	なし	W	W	W	W	W
26	上段		テクレッシェンドマーク	2-3拍目にあり	3拍目のみにあり	L	L	L	2拍目のみにあり	L
27	上段/上声部	2 裏	es ¹ 音の [♯]	あり	なし	L	L	L	L	L
29	下段/上声部	1 裏	スタッカート	なし	あり	L	L	L(スラー付記)	W	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハズリンガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
29	下段/上声部	2-3終わりまで	スラー	なし	なし	L/W	L/W	L/W (スタックカート 付記)	あり	L/W
30, 32- 34		2	>の記号について	付点4分音符の アクセント	短いデクレッシェン ドマーク	W	W (※T. 32はなし)	L+W(アクセントとデ クレッシェンドマーク が両方付記されて いる)	L	W
32-35			cresc.の点線	T. 35の終わり まであり	T. 32の終わり まで	T. 34の終わり まで	T. 34の終わり まで	T. 34の終わり まで	なし	なし
35	下段	1	スタックカート	あり	なし	W	W	W	W	W
35	下段	1		sf	f	W	なし	L	なし	W
37	上段/上声部	1 裏	スタックカート	あり	なし	W	L	L	L	W
37	上段/上声部	2		なし	あり	W	W	W	W	W
38	上段	2-3終わりまで	スラー	あり	なし	W	W	W(スタックカート 付記)	L (T. 39の1音目 まで)	W
38	上段		下の声部	なし	あり	W	W	W	W	W
42	上段/上声部	2		なし	あり	W	W	W	W	W
43	上段/上声部	1 裏		あり	なし	W	W(bを付記)	W	L	W(bを付記) ※(a)も併記
44	下段	1	b音の [♯]	なし	あり	W	W	W	W	W
44, 45	上段	2	sf	上声部	中声部	L	L	L	L	L
45	下段	3	es音の臨時記号	何も付記なし	何も付記なし	あり	あり	あり	あり	あり
52	下段	1		sf	ff	L	L	L	L	L
53			調号	b 2つのまま	b 4つに変化	W	W	W	W	W
53, 54	下段	3	スタックカート	あり	なし	W	W	W	W	W
61	上段/上声部	3	des ² 音	4分音符	8分音符	W	W	W	W	W
61	下段	1	sf	なし	あり	W	W	W	W	W
64	上段/上声部	1	f ² 音, es ² 音のスタックカート	なし	あり	W	L	W	f ² 音のみあり	W
65	上段/下声部	3	オリジナルの指使い	なし	あり	W	W	W	W? 一部のみあり	W
66, 67	上段/下声部	3 裏	スタックカート	なし	あり	W	W	W	W	W
70-71	下段	T. 70の2-	スラー	小節間で切れ、 2つのスラーに なっている	1つのスラー	W	W	W	W	W
71	上段	3	sf	なし	あり	W	W	W	W	W
75-76	下段	T. 76の1拍目 まで	ソの [♭]	なし	なし	T. 75にあり	T. 75にあり	T. 75にあり	T. 75にあり	T. 75にあり
75-76	下段/下声部	T. 75の2-	スラー	小節間で切れ、 2つのスラーに なっている	1つのスラー	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
77	上段	2	sf	下段にあり	上段にあり	W	W	W	W	W
78	上段	1 裏	g'音の♭	あり	なし	L	L	L	L	L
78	下段	1	c'音の♭	あり	なし	L	L	L	L	L
78	上段	2	sf	なし	あり	W	W	W	W	W
84	下段	3	C/c音のオクターヴの♭	なし	なし	あり	1拍目にあり	あり	あり	あり
85			調号	♭4つのまま	♭6つに変化	W	W	W	L	W
85	上段/上声部	2	b'音、ces ² 音の8分音符のスタックカート	あり	なし	W	W	L	L	L
85	上段/上声部	3	des ² 音の4分音符のスタックカート	あり	なし	W	W	W	W	W
85	上段/上声部	3	sf	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
86	下段	2	b音、ces'音の8分音符のスタックカート	あり	なし	W	L	L	L	L
87	下段	3 裏	c'音の♯	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
88	上段/上声部	1	as ² 音	4分音符	8分音符	L	L	L	L	L
88	上段/上声部	2, 3		4分音符×2	休符なし	L	L	W	L	L
95	上段/上声部	3	as ³ 音、ges ³ 音、f ³ 音のスタックカート	あり	なし	W	W	(スラー付記)	W	W
96-98			mano destra, mano sinistra, m.d.	なし	あり	(W)言葉では指示がないが、右手を上段に、左手を下段に書くことで指示している	(W)言葉では指示がないが、右手を上段に、左手を下段に書くことで指示している	(W)言葉では指示がないが、右手を上段に、左手を下段に書くことで指示している	(W)言葉では指示がないが、右手を上段に、左手を下段に書くことで指示している	(W)言葉では指示がないが、右手を上段に、左手を下段に書くことで指示している
97	上段/下声部	1 裏	8分音符のけた	6つの8分音符が1つにまとめられる	1番目の8分音符のみ独立させている	W	W	L	L	W
97	上段/下声部	3		es'音	es'音	f'音に変更されている	f'音に変更されている	f'音に変更されている(+1拍目にges'音が足されている)	f'音に変更されている(+1拍目にges'音が足されている)	f'音に変更されている
97, 99	上段/上声部	3	sf	あり	なし	W	W	L(小さく付記)	L	W
103-105			T. 103の2-	f	sf	W	W	W	W	W
105-107	下段	3	sf	あり	なし	W	W	(L)sfではなくffz/T. 107はアクセントのみ	L	W
112-113	下段	3-1	C ₁ 音/C音のオクターヴのタイ	あり	なし	L	L	L	L	L
117	上段	1	es ² 音の♯	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
117, 118	上段/上声部	1 裏	ges ² 音の♯	あり	なし	L	L	L	L	L
117-118	上段/下声部		b'音のtr	あり	なし	W	W	W	W	W
117-118	下段	3-1	Es音 [♯] /es音 [♯] のオクターヴのタイ	あり	なし	L	L	L	L	L
118-119		3-1, 2	g音のtr	小節間で途切れず連続したtr	小節間で途切れず連続したtr	L/W	L/W	L/W(どちらにもm.d.で指示)	L/W	L/W
119	下段	3	sf	あり	なし	W	W	L	L	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングァー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
119, 122			mano sinistra	なし	あり	L	L	m.d.あり	L	L
120	上段	3 裏	sf	あり	なし	W	W	※アクセント付記	W	W
121-122	上段	3-1, 2	c ³ 音のtr	小節間で途切れず 連続したtr	小節間で途切れず 連続したtr/タイで 結ばれる	L	W	W	W	W
122	下段	3	sf	なし	あり	W	W	W	W	W
123	上段/下声部	3 裏	sf	なし	あり	W	W	W	W	W
127	中声部		スラー	1-2のみ	1小節間すべて	W	W	W	T. 126の3拍目- T. 127の最後 まで	W
128	上段/上声部		スラー	なし	あり	W	W	(W)T. 130の1拍目ま で1つのスラー	(W)T. 129まで 1つのスラー	W
132	上段/上声部	2	c ³ 音, des ³ 音のスタックカート	あり	なし	L	L	L	L	L
134	上段/上声部	1	f	なし	あり	W	W	W	W	W
134	上段/上声部	3	sf	あり	なし	W	W	W	L	W
135	下段	2	sf	あり	なし	W	W	W	L	W
135-139	上段、下段		8分音符のスタックカート	あり	なし	W (T. 135の下段の みあり)	L (T. 135の3拍目は なし)	L	L	L(※T. 137の拍 目裏はなし?)
141, 142	下段	1	8分音符のスタックカート	あり	なし	L	L	L	L	L
142-143	上段/下声部	3	es ¹ -es ¹ 音のタイ	あり	なし	W	W	L	L	L
143	上段/下声部	3	8分音符のスタックカート	なし	あり	W	W	W	W	W
146	上段/上声部	1	sf	なし	あり	L	L	W(小さく付記)	W	L
148-149			調号	5つのまま	6つに変化	4つ(T. 145で 調号変化がない ため)	4つ(T. 145で 調号変化がない ため)	4つ(T. 145で 調号変化がない ため)	4つ(T. 145で 調号変化がない ため)	4つ(T. 145で 調号変化がない ため)
148	上段/上声部	2	sf	あり	なし	W	W	L(小さく付記)	L	L
149	下段	1	スタックカート	あり	なし	W	W	L	L	L
149	下段	2	sf	あり	なし	L	L	f(フォルテ)に変更 されている	L	L
149	上段/下声部	3	d ¹ 音	なし	あり	W	W	W	W	W
151	上段/上声部	1 裏、3 裏	スタックカート	なし	あり	1拍目裏はあり?	W+1拍目にもあり	W+1拍目にもあり	W+1拍目にもあり	L
152	上段/上声部	1	スタックカート	あり	なし	W	L	L	W	W
153	上段/上声部	3	p	なし	あり	W	W	W	W	W
155, 156	上段/下声部	1-2	スラー	あり	なし	W	W	L(T. 155のフレージ ングは異なる)	L(T. 155のフレー ジングは異なる)	L(T. 155のフレー ジングは異なる)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハズリンガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
157	上段/上声部		スラー	なし	あり	W	W	T. 156の3拍目から T. 158の2拍目まで あり	T. 158の2拍目 まであり	T. 158の2拍目 まであり
159	上段/上声部	3 裏	a ² 音の ^h	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
159-164	上段/上声部		スラー	T. 159の3拍目裏- T. 161の最後の音 まで/T. 162の1拍 目-T. 163の最後の 音まで/T. 164の1 拍目-2拍目まで	T. 159の3拍目裏- T. 162の最後の音 まで/T. 163の1拍 目-T. 164の2拍目 まで	W	W	すべて1つの スラー	L	すべて1つの スラー
161-162	上段/下声部	3 裏-2	スラー	あり	なし	W	W	L	L	W
164-165	下段/下声部	3-1	e-e音のタイ	なし	なし	L/W	あり	あり	あり	あり
165, 166	上段	1-2	スラー	あり	なし	W	L	L	L	L
165	下段	1-2	スラー	あり	なし	W	W	T. 162の3拍目 からあり	T. 162の3拍目 からあり	T. 163の1拍目から T. 165の3拍目まで
165-166	下段/上・下 声部	3-1	g-g音のタイ/d-d音のタイ	なし	なし	L/W	g-g音のみあり	両方あり	両方あり	g-g音のみあり
166	下段/上声部		スラー	なし	あり	W	W	W	W	W
166-167	下段/下声部		スラー	なし	あり	W	W	W	W	W
168-171	上段/上声部		スラー	T. 168の1拍目- T. 169の2拍目まで	T. 168の1拍目- T. 171の最後まで	W(T. 172の 1拍目まで)	W(T. 172の 1拍目まで)	T. 170の最後 まで	W(T. 172の 1拍目まで)	W(T. 172の 1拍目まで)
170-171	上段/下声部	3-	スラー	あり	なし	W	W	L? (独自のスラー)	L	W
171-172	上段/上声部		h-h音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W
172	上段/下声部	1-2	スラー	あり	なし	W	W	L? (独自のスラー)	L	W
173	下段	1-2	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W
173-174	下段		クレッシェンド、デクレッシェンドマーク	あり	なし	W	W	W	L	W
174		3	クレッシェンドマーク	なし	あり	W	W	W	W	W
175-176	上段		スラー	上声部	下声部	W	W	L+W どちらも	L+W どちらも	W
176-177	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	L	L	L	L
178	下段/下声部	1-2	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W
180			cresc. の点線	T. 183まであり	なし	L	W	L	T. 182のみあり	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハズリंगाー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
182	上段/上声部 3		スタッカート	なし	あり	W	L	小さく テヌート?	L	L
183	下段	1-2	スラー	あり	なし	L	L	L	L	L
183	上段/上声部 3		スタッカート	なし	あり	W	L	小さく テヌート?	L	L
184			non ligato	上段と下段の間に1 つだけ	上段、下段ともに書 かれる	上段のみに "ben legato"	legato	上段のみに "non legato"	W	上段のみに "ben legato"
184	下段	1-2	スラー	あり	なし	W	W	W	W	W
191	下段	3	sf	あり	なし	W	W	W	W	W
191, 192	上段/下声部		休符	なし	あり	W	T. 191のみあり	W	T. 192のみあり	W
193	下段	3	sf	あり	なし	W	W	L? 2拍目から クレッシェンドあり	W	W
195	上段/上声部 3 裏		f'音の#	なし	なし	L/W	L/W	L/W	あり	L/W
196	上段/上声部 1		スラー	あり	なし	W	W	L?(T. 195の3裏 からスラー)	L	W
196	下段	1		sf	ff	W	W	W	W	W
199	上段/上声部 1-2		h-h音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W
202	上段/上声部 2		sf	なし	あり	W	W	W	W	W
204			p	あり	なし	W	W	W	L	W
204			cresc.の点線	T. 207まであり	なし	W	W	L	L	W
204-205	上段/上声部 3 裏-1		e ² -e ³ 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W
207	上段/上声部		スラー	2-3拍目にあり	1拍目- 最後の音まで	W	1拍目裏-最後の音 まで	独自のスラー	1拍目裏-最後の音 まで	W
208		1		sf	ff	W	W	W	W	W
209	下段/下声部 2		sf	なし	あり	W	W	W	W	W
212	上段	2 裏	g ² 音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
215	上段/下声部 2 裏-3		a ¹ -a ¹ 音のタイ	なし	あり	(W)4分音符に なっている	(W)4分音符に なっている	(W)4分音符に なっている	(W)4分音符に なっている	(W)4分音符に なっている
220	上段/上声部 2		sf	あり	なし	W	W	(L)アクセントあり	L	W
221-222	下段/上声部		e-e音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W
226	上段/下声部 2 裏		c ² 音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
228-229	上段/上声部		c ³ -c ³ 音のタイ	あり	なし	W	W	L	L	L
229		1		sf	ff	W	W	W	W	W
229	上段/下声部 2 裏		fis'音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
231, 232	下段	1	スタッカート	なし	あり	L	L	W	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネット版 (1878)
235	上段	1		sf	ff	W	W	W	W	W
236, 237		2	sf	なし	あり	W	W	W	W	W
238	下段	1		sf	f	W	W	W	W	W
239	上段/上声部	1		f ³ 音	as ³ 音	W	W	W	W	W
245-246	上段/上声部	3 裏-1		けた	2つのはた	L	L	L	L	L
248		1		sf	ff	W	W	W	W	W
250			una corda	なし	あり	W	W	W	W	W
250-253	上段/上声部		スラー	2小節ずつで2つのスラー	1つのスラー	W	W	W?(T. 254の1拍目まで)	W	W
254	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	W	W	L	W
254	上段/下声部		スラーの開始	1拍目	2拍目	W	W	W	L	W
258-264	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	W	L? (独自のスラー)	L	W
262	上段・下段		cis ³ 音とcis ² 音の [♯]	なし	なし	L/W(♯が追記される)	L/W(♯が追記される)	あり (※注あり)	あり (※ビューローとNottebohmは [♯] との注あり)	♯が追記される ※()付きでも併記
273-274	上段/上声部	2-1	スラー	あり	なし	W	W	T. 270の2拍目から T. 275の2拍目まで あり	T. 271の1拍目から あり	W
275-276	上段/上声部	2-2	スラー	あり	なし	W	W	T. 275の3拍目から あり	T. 275の1拍目から T. 279の1拍目まで あり	W
277	上段/上声部	1-3	スラー	あり	なし	W	W	T. 276の3拍目から T. 277の2拍目まで あり	T. 275の1拍目から T. 279の1拍目まで あり	W
278	下段/下声部	1	f音の [♯]	なし	あり	W	W	W	W	W
279			tre corde	なし	あり	W	W	W	W	W
282			cresc.の位置	2拍目	3拍目	W	W	W	L	2拍目裏?
283	上段	1	es ¹ 音の [♯]	なし	あり	W	W	W	W	W
284	下段	3	es ¹ 音の [♯]	なし	あり	W	W	W	W	W
284-286	上段		スラー終わり	T. 285の最後の音まで	T. 286の1拍目まで	W	W	W	W	W
285	下段	2 裏	es ¹ 音の [♯]	あり	なし	W (♭を付記)	W (♭を付記)	W (♭を付記)	L ※注あり	W(♭を付記) ※()付きでも併記

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリンガー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
291		1, 3	sf	あり	なし	W	W	L(小さく付記)	L	W
292		2	sf	あり	なし	W	W	L(小さく付記)	L	W
294		2		sf	ff	W	W	W	W	W
296	上段/下声部	3	4分音符の音	c'音	c'音	d'音	d'音	d'音 ※注あり	d'音 ※注あり	d'音
299	上段	1 裏	es'音の ³	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
300		1	sf	なし	あり	W	W	W	W	W
300		2		sf (上声部に付記)	ff	W	W	W(L)※上声部には アクセントと スタッカートあり	W	W
300-301		3-1	es-es音のタイ	なし	なし	L/W	L/W	あり	あり	あり
301	下段/下声部	1		sf	ff	W	W (中段に書かれる)	W(L) ※アクセントも 付記	L	W
305-306			f-f'音のタイ	あり	なし、※下声部の d'-c'音のスラーに 見える	W	L+W どちらも	L+W どちらも	L	W
311		1	f	あり	なし	W	W	W	L	W
319		1	p	なし	あり	W	W	L	W	W
320	下段/上声部	3	指使い	なし	あり	W	L	W	一部のみあり	W
322	下段	1		sf	f	W	W	W	W	W
325	上段/上声部	3 裏	es ² 音の b	あり	なし	L	L	L	L	L
326, 328, 329	上段・下段	3	スラー	あり	なし	(W) ※T. 326のみL! [?]	(W) ※T. 326のみL! [?]	L T. 329のみ 独自のスラー	L	L
327	上段/下声部	3	アーティキュレーション	ポルタート	何も付記なし	W	W	スラー	スラー	スラー
330	下段	3	スラー	あり	なし	W	W	L(独自の スラー)	W	W
333		1		f(sfのsが消えた形 跡あり?)	ff	W	W	W	W(上段、下段の両 方に付される)	W
337	上段/上声部	1 裏-	スタッカート、スラー	なし	なし	L/W	L/W	独自のスタッカー ト、スラー	あり	L/W
338	上段/上声部	2	tr	あり	なし	W	W	W	W	W
343			cresc.の位置	2拍目	1拍目	W	W	W	L	W
343	上段/下声部	2	アクセント	なし	あり(短いデクレ シェンド?)	W (アクセント)	W	W (アクセント)	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	旧全集 (1862-1865)	ハスリングァー版 (1865頃)	ビューロー版 (1871)	ダム版 (1878)	ライネッケ版 (1878)
344	上段/上声部	1, 2	スラー	あり	なし	W	W	L (3拍目と下段にもス ラー付記) ※拍頭にそれぞれ アクセントあり	W	W
345	上段/上声部	1 裏		es ³ 音	ges ³ 音	W	W	W	W	W
345		2	sf	上段、下段ともに書 かれる	上段と下段の間に つだけ	W	W	W(L)※両段にアク セント付記	下段のみ	W
349	下段	1		A ₁ 音	F ₁ 音	L	L	L	L	L
350	下段	2 裏		d音	B音	W	W	W	W※注あり	W
354	上段/下声部	1	c音の4分音符	なし	あり	W	W	W	W	W
355	下段	2	sf	なし	あり	W	W	W	W	W
362	下段	2 裏, 3	スタッカート	あり	なし	W	W	L(※3拍目にはス タッカートではなく アクセント)	2拍目裏のみあり	W
364	上段/下声部	1-2	スラー	あり	なし	W	L	L	L	W
365		3		sf	ff	W	W	W(L)※両段に アクセント付記	W	W
366	下段	3 裏	B ₁ /B音のオクターヴのト	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり
366	下段	3	スラー	なし	なし	L/W	あり	L/W (スタッカートを 付記)	あり	L/W
367-368			cresc.の位置	T. 368の1拍目	T. 367の3拍目	W	T. 367の2拍目	W	W	W(2拍目裏)
369		1		下段にsf	両段にff	W(両段の中間 にffひとつ)	W(両段の中間に ffひとつ)	W(両段の中間にff ひとつ)	W(両段の中間に ffひとつ)	W(両段の中間に ffひとつ)
369	下段	2		sf	ff	W	W	W(L) ※アクセントも付記	W	W
370	上段/上声部	1	ges ³ 音	4分音符	16分音符	W	W	W	W	W
370	上段	3	sf	なし	あり	W	W	W	W	W
370-372	下段		E ₃ 音のタイ	なし	あり	L	L	W	W	L
372	上段	1, 2	sf	1拍目のみあり	なし	L+2拍目もあり	L+2拍目もあり	L+2拍目もあり	L+2拍目もあり	L+2拍目もあり
372-373			デクレッシェンドマーク	なし	あり	W	T. 372の3拍目のア クセント?	W	W	W
377		2	g音のト	なし	あり	W	W	W	W	W
379, 380	下段	1	B ₁ 音の2分音符の付点	あり	なし	L	L	L	L	L
389		1		f	ff	W	W	W	W	W
397-399				sf	ff	W	W	W(T. 398, T. 399)は fff)	W	W
398-399	下段		和音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W

第4楽章 ③

(ダブルバージョン版／シエンカー版／トーヴェイ版／シュナーベル版／アラウ版／J. フィッシャー版 1975／" 2005)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーヴイ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J. フィッシャー版 (1975)	J. フィッシャー版 (2005)
0			表題	Introduzione	Per la misura si conta nel largo sempre quattro semicrome, cioè è [16分音符×4]	W	W	W	W	L+W(どちらも 書いてある)	L+W(どちらも 書いてある)	W
1			調号	♭ 2つ	♭ 1つ	W	L	W	W	W	W	W
1	上段		1つ目のオクターヴのフェルマータの音符	付点8分音符	付点16分音符	W	W	W	W	W	W	W
1	下段		1つ目のオクターヴのフェルマータの音符	付点8分音符	付点32分音符	付点16分音符	付点16分音符	付点16分音符	付点16分音符	付点16分音符	付点16分音符	付点16分音符
1	下段		2つ目のオクターヴのフェルマータの音符	32分音符	16分音符	W	W	W	W	W	L	L
1	上段		f ¹ -f ² 音とas ¹ -as ² 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
1	上段	最後の音符	b ¹ 音の♭	あり	なし	L	L	♭のみ	L	L	♭のみ	♭のみ
2/3			Allegroとの区分の横線	あり	なし	L	L	L	L	L	W	W
7	下段/上声部	3 裏	ais音の井	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
8	上段、下段	1	休符	付点16分音符	付点10分音符	複付点8分音符	L/W	複付点8分音符	複付点8分音符	複付点8分音符	複付点8分音符	複付点8分音符
8	上段	最後の和音	h	cis ² 音につく	ais ² 音につく	W	W	W	W	W	W	W
9	上段	2-3	a ² -a ³ 音とa ³ -a ² 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
9	上段	3	ペダル取るマーク	なし	あり	2拍目最後に あり	W	2拍目最後に あり	W	W	2拍目最後に あり	2拍目最後に あり
10	下段		trの波線	2つ目へのみあり	なし	W	3つともあり	W	W	W	W	W
10	下段		a tempo以降の2つ目のオクターヴの音符	64分音符	32分音符	L	L	L	L	L	L	L
10	下段		a tempo以降の6つ目のオクターヴの音符	32分音符	64分音符	W	W	W	W	W	W	W
10			cresc.の位置	accelerandoと 同じ所	調号変化する所	W	W	W	W	W	W (accelerandoも 同じ位置にあり)	W
16			楽章表記のつづり	Fuga a Tre voci con a leune licenze	Fuga a Tre voci con alcune licenze	Fuga a tre voci, con alcune licenze	W (treのtは 小文字)	Fuga a tre voci, con alcune licenze	Fuga a tre voci, con alcune licenze	Fuga a tre voci, con alcune licenze	W (treのtは 小文字)	W (treのtは 小文字)
18, 19	上段/下声部	1	スタッカート	なし	あり	L	L	L	L(テヌートあり)	W	W	W
25		1	es ² 音のh	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
26		1	cresc.	あり	なし	W	W	W	W	W	L	L
26	上段		テクレッシェンドマーク	2-3拍目にあり	3拍目のみにあり	L	L	L	L	L	L	L
27	上段/上声部	2 裏	es ² 音のh	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
29	下段/上声部	1 裏	スタッカート	なし	あり	L	W	L	W	W	W	W
29	下段/上声部	2-3終わりまで	スラー	なし	なし	1幕-T. 30の 1音目まで	あり	L/W	L/W (スタッカート 付記)	あり	あり	あり

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーヴイ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J. フィッシャー版 (1975)	J. フィッシャー版 (2005)
30, 32-34		2	>の記号について	付点4分音符のアクセント	短いデクレッシェントマーク	L ※T. 34のみなし	W	W	W	W	L	L
32-35			cresc.の点線	T. 35の終わりまであり	T. 32の終わりまで	T. 35の1拍目まで	なし	T. 34の終わりまで	T. 34の終わりまで	なし	L	なし
35	下段	1	スタッカート	あり	なし	L	W	W	W (アクセントあり)	W	L	L
35	下段	1		sf	f	W	W	なし	W	W	L	W
37	上段/上声部 1 裏		スタッカート	あり	なし	W	L	W	L	L []付き	L	L
37	上段/上声部 2			なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
38	上段	2-3終わりまで	スラー	あり	なし	L ※1拍目裏-T. 39の1拍目まで	L (T. 39の1拍目まで)	W	W(スタッカート付き)	L	L	L
38	上段		下の声部	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
42	上段/上声部 2			なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
43	上段/上声部 1 裏		es ² 音の ^h	あり	なし	W(b を付き)	W(b を付き)	L []付き	W(b を付き) ※Wの方が正しいと考えるとの注あり	W(b を付き)	L	L
44	下段	1	b音の ^h	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
44, 45	上段	2		上声部	中声部	L	L	L	L	L	L	L
45	下段	3	es ² 音の臨時記号	何も付記なし	何も付記なし	あり	b を付き	あり	あり	あり	L/W	L/W
52	下段	1		sf	ff	L	L	L	L	L	L	W
53			調号	b 2つのまま	b 4つに変化	W	W	W	W	W	W	W
53, 54	下段	3	スタッカート	あり	なし	W	W	W	W	W	L	L
61	上段/上声部 3		des ² 音	4分音符	8分音符	W	W	W	W	W	W	W
61	下段	1		なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
64	上段/上声部 1		f ² 音, es ² 音のスタッカート	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
65	上段/下声部 3		オリジナルの指使い	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
66, 67	上段/下声部 3 裏		スタッカート	なし	あり	W	W	T. 66のみあり	W	W	W(T. 67はL?)	W
70-71	下段	T. 70の2-	スラー	小節間で切れ、2つのスラーになっている	1つのスラー	W	W	W	W	W	L	L
71	上段	3		なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
75-76	下段	T. 76の1拍目まで	ソノ b	なし	なし	T. 75にあり	T. 75にあり	T. 75のみあり	T. 75にあり	T. 75にあり	L/W	L/W
75-76	下段/下声部	T. 75の2-	スラー	小節間で切れ、2つのスラーになっている	1つのスラー	W	W	W	W	W	L	L
77	上段	2	sf	下段にあり	上段にあり	W	W	W	W	W	W	W
78	上段	1 裏	g ² 音の b	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
78	下段	1	c ² 音の b	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
78	上段	2	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シモンカー版 (1918-1921)	トーヴイ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J. フィッシャー版 (1975)	J. フィッシャー版 (2005)
84	下段	3	C/c音のオクターヴのb調号	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
85	上段/上声部	2	b ² 音, ces ² 音の8分音符のスタックカート	b ² 4つのまま	b ² 6つに変化	W	W	W	W	W	W	W
85	上段/上声部	3	des ² 音の4分音符のスタックカート	あり	なし	L	W	W	L	[]付き	L	L
85	上段/上声部	3	sf	なし	なし	あり	L/W	L/W	あり	[]付きであり	L/W	L/W ※()付きでアクセントあり
86	下段	2	b音, ces ¹ 音の8分音符のスタックカート	あり	なし	L	W	W	L	[]付き	L	L
87	下段	3裏	c ¹ 音の ¹	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
88	上段/上声部	1	as ² 音	4分音符	8分音符	L	L	L	L	L	L	L
88	上段/上声部	2, 3		4分音符×2	体符なし	L	L	L	L	L	L	L
95	上段/上声部	3	as ³ 音, ges ³ 音, f ³ 音のスタックカート	あり	なし	(スラー付記)	W	W	(スラー付記)	W	L	L
96-98			mano destra, mano sinistra, m.d.	なし	あり	(W)言葉では指 示がないが、右 手を上段に、左 手を下段に書く ことで指示して いる)	W	(W)言葉では指 示がないが、右 手を上段に、左 手を下段に書く ことで指示して いる)	W	W	W	W
97	上段/下声部		8分音符のけた	6つの8分音符が 1つにまとめられる	1番目の8分音符の み独立させている	W	W	L	W	W	L	L
97	上段/下声部	1裏		es ¹ 音	es ¹ 音	f ¹ 音に変更 されている	L/W	f ¹ 音に変更 されている [] 付きで足されて いる) ※注あり	f ¹ 音に変更 されている ※注あり	L/W	L/W	L/W
97, 99	上段/上声部	3		あり	なし	L(小さく付記)	W	W	W	L	L	L
103-105		T. 103の2-		f	sf	W	W	W	W	W	W	W
105-107	下段	3		あり	なし	アクセントあり	W	W	W	W	L	L
112-113	下段	3-1	C ¹ 音/C音のオクターヴのタイ	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
117	上段	1	es ² 音の ¹	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
117, 118	上段/上声部	1裏	ges ² 音の ¹	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
117-118	上段/下声部		b ² 音のtr	あり	なし	W	W	W	W	W	W	W
117-118	下段	3-1	Es ² 音/tr/es音のオクターヴのタイ	あり	なし	L	L	L	L	L	L	W
118-119		3-1, 2	g音のtr	小節間で途切れず 連続したtr	小節間で途切れず 連続したtr	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	小節間で区別し 2つのtrになって いる	小節間で区別し 2つのtrになって いる
119	下段	3		あり	なし	アクセントあり	L	W	L	W	L	L
119, 122			mano sinistra	なし	あり	T. 118とT. 121の 3拍目にr.h.	W	T. 118とT. 121の 3拍目にR	T. 118とT. 121の 3拍目にあり	T. 118とT. 121 の3拍目にm.d.	W	W
120	上段	3裏		あり	なし	W	W	[]付き	W	L	L	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーヴイ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J. フィッシャー版 (1975)	J. フィッシャー版 (2005)
121-122	上段	3-1, 2	c ³ 音のtr	小節間で途切れず連続したtr	小節間で途切れず連続したtr/タイで結ばれる	L	W	W	L	W	小節間で区別し2つのtrになっている(m.s.の表記あり)	小節間で区別し2つのtrになっている(m.s.の表記あり)
122	下段	3	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
123	上段/下声部	3 裏	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
127	中声部		スラー	1-2のみ	1小節間すべて	W	W	W	W	T. 126の3拍目-T. 127の最後まで	W	W
128	上段/上声部		スラー	なし	あり	T. 127の3拍目-あり	W	(W)T. 129まで1つのスラー	W	T. 127の3拍目-あり	W	W
132	上段/上声部	2	c ³ 音、des ³ 音のスタックカート	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
134	上段/上声部	1	f	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
134	上段/上声部	3	sf	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
135	下段	2	sf	あり	なし	W(※クレッシェンドとデクレッシェンドあり)	L	L	W	L	L	L
135-139	上段、下段		8分音符のスタックカート	あり	なし	L	L	W	L	W	L	L
141, 142	下段	1	8分音符のスタックカート	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
142-143	上段/下声部	3	es ¹ -es ³ 音のタイ	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
143	上段/下声部	3	8分音符のスタックカート	なし	あり	W	W	L	W	W	W	W
146	上段/上声部	1	sf	なし	あり	アクセントあり	W	L	L	W	W	W
148-149			調号	b 5つのまま	b 6つに変化	b 4つ(T. 145で調号変化がないため)	b 4つ(T. 145で調号変化がないため)	b 4つ(T. 145で調号変化がないため)	b 4つ(T. 145で調号変化がないため)	b 4つ(T. 145で調号変化がないため)	b 4つ(T. 145で調号変化がないため)	b 4つ(T. 145で調号変化がないため)
148	上段/上声部	2	sf	あり	なし	L	L	W	L	L	L	L
149	下段	1	スタックカート	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
149	下段	2	sf	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
149	上段/下声部	3	d ³ 音	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
151	上段/上声部	1 裏, 3 裏	スタックカート	なし	あり	W	L	L	W+1拍目にもあり	W+[付きで1拍目にもあり]	W	W
152	上段/上声部	1	スタックカート	あり	なし	L	W	W	L	L	L	L
153	上段/上声部	3	p	なし	あり	W	W	L	W	W	W	W
155, 156	上段/下声部	1-2	スラー	あり	なし	L(T. 155のフレージングは異なる)	L(T. 155のフレージングは異なる)	W	L(T. 155のフレージングは異なる)	W	L	L
157	上段/上声部		スラー	なし	あり	T. 156の3拍目からT. 158の2拍目まであり	T. 156の3拍目からT. 158の2拍目まであり	T. 156の3拍目からT. 158の2拍目まであり	T. 158の2拍目まであり	T. 156の3拍目からT. 158の2拍目まであり	T. 156の3拍目からあり	W
159	上段/上声部	3 裏	a ³ 音の ³	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり(小さく付記)	あり(小さく付記)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トヴイ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J. フィッツジャー版 (1975)	J. フィッツジャー版 (2005)
159-164	上段/上声部		スラー	T. 159の3拍目裏-T. 161の最後の音まで/T. 162の1拍目-T. 163の最後の音まで/T. 164の1拍目-T. 164の2拍目まで	T. 159の3拍目裏-T. 162の最後の音まで/T. 163の1拍目-T. 164の2拍目まで	T. 159の3拍目裏-T. 161の最後の音まで/T. 162の1拍目-T. 163の最後の音まで/T. 164の2拍目まで	すべて1つのスラー	W	T. 159の3拍目裏-T. 161の最後の音まで/T. 162の1拍目-T. 163の最後の音まで/T. 164の2拍目まで	T. 159の3拍目裏-T. 161の最後の音まで/T. 162の1拍目-T. 163の最後の音まで/T. 164の2拍目まで	L	L
161-162	上段/下声部	3裏-2	スラー	あり	なし	L	W	W	(※3拍目まで)	L	L	L
164-165	下段/下声部	3-1	e-e音のタイ	なし	なし	あり	あり	あり	あり※注あり	点線タイ	L/W	L/W
165, 166	上段	1-2	スラー	あり	なし	L	L	W	L	W	W	W
165	下段	1-2	スラー	あり	なし	T. 162の3拍目からあり	T. 162の3拍目からあり	T. 163の1拍目からあり	L	W	L	L
165-166	下段/上・下声部	3-1	f音のタイ/d-e音のタイ	なし	なし	両方あり	両方あり	両方あり	両方あり	両方点線であり	L/W	L/W
166	下段/上声部		スラー	なし	あり	W(※T. 165の3拍目-T. 167の1拍目まで)	W	W	W	W	W	W
166-167	下段/下声部		スラー	なし	あり	W(T. 165の3拍目→)	W	W(T. 165の3拍目→)	W	W	W	W
168-171	上段/上声部		スラー	T. 168の1拍目-T. 169の2拍目まで	T. 168の1拍目-T. 171の最後まで	W(T. 172の1拍目まで)	W(T. 172の1拍目まで)	W(T. 172の1拍目まで)	W(T. 172の1拍目まで)	W(T. 172の1拍目まで)	W(T. 172の1拍目まで)	W(T. 172の1拍目まで)
170-171	上段/下声部	3-	スラー	あり	なし	L? (ビューローと同じスラー)	L? (独自のスラー)	L? (独自のスラー)	L? (シェンカーに同じ)	W	L (T. 172の2拍目まで)	L (T. 172の3拍目まで)
171-172	上段/上声部		h-h音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
172	上段/下声部	1-2	スラー	あり	なし	L? (ビューローと同じスラー)	L	L	L	W	L (T. 170からのスラー)	L (T. 170からのスラー)
173	下段	1-2	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
173-174	下段		クレッシェンド、デクレッシェンドマーク	あり	なし	W	W	W	W	W	L	L
174	上段	3	クレッシェンドマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
175-176	上段		スラー	上声部	下声部	L+W どちらも	W	W	L+W どちらも	W	L+W どちらも	L+W どちらも
176-177	上段/上声部		スラー	あり	なし	L	L	W	L	W	L	L
178	下段/下声部	1-2	スラー	なし	あり	W	W	W	T. 177の3拍目裏からあり	W	W	W
180			cresc. の点線	T. 183まであり	なし	L	W	L	L	W	L	L
182	上段/上声部	3	スタッカート	なし	あり	小さく テヌート?	L	L	L	W	W	W
183	下段	1-2	スラー	あり	なし	L	L	L	L	L(点線スラー)	L	L
183	上段/上声部	3	スタッカート	なし	あり	小さく テヌート?	L	L	L	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トーヴイ版 (1931)	シュナーベール版 (1949)	アラウ版 (1978)	J. フィッツジャー版 (1975)	J. フィッツジャー版 (2005)
184			non ligato	上段と下段の間に1つだけ	上段、下段ともに書かれる	上段のみに "non ligato"	上段のみに "non ligato"	上段のみに "non legato"	W ("non legato")	上段のみに "non legato"	中段に "ben ligato"	W
184	下段	1-2	スラー	あり	なし	W	W	W	W	L(点線スラー)	L	W
191	下段	3	sf	あり	なし	W	W	W	W	W	W	W
191, 192	上段/下声部		休符	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
193	下段	3	sf	あり	なし	アクセントあり	W	W	W	W	L	L
195	上段/上声部	3 裏	f ¹ 音の#	なし	なし	L/W(2拍目裏のf ¹ 音がへ音譜表に書かれるため、fis ¹ 音になっている)	あり	あり	あり	あり	L/W	L/W
196	上段/上声部	1	スラー	あり	なし	L?(T, 195の2裏からスラー)	L	W	W	W	W	W
196	下段	1		sf	ff	W	W	W	W	W	L	W
199	上段/上声部	1-2	h-h音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
202	上段/上声部	2	sf	なし	あり	L(※クレッシェンドとデクレッシェンドあり)	W	W	W	W	W	W
204			p	あり	なし	L(小さく付記)	W	L[]付き	W	L	L	L
204			resc.の点線	T. 207まであり	なし	L	L	L	L	W	W	W
204-205	上段/上声部	3 裏-1	e ² -e ³ 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
207	上段/上声部		スラー	2-3拍目にあり	1拍目-最後の音まで	1拍目裏-最後の音まで	1拍目裏-最後の音まで	1拍目裏-最後の音まで	W	1拍目裏-最後の音まで	L	L
208		1		sf	ff	W	W	W	W	W	L	W
209	下段/下声部	2		なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
212	上段	2 裏	g ² 音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり(小さく付記)	あり(小さく付記)
215	上段/下声部	2 裏-3	a ¹ -a ¹ 音のタイ	なし	あり	(W)4分音符になっている	W	(W)4分音符になっている	(W)4分音符になっている	(W)4分音符になっている	W	W
220	上段/上声部	2	sf	あり	なし	W	W	W	W	W	L	L
221-222	下段/上声部		e-e音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
226	上段/下声部	2 裏	c ² 音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり(小さく付記)	あり(小さく付記)
228-229	上段/上声部		c ³ -c ³ 音のタイ	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
229		1		sf	ff	W	W	W	W	W	L	W
229	上段/下声部	2 裏	fis ² 音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり(小さく付記)	あり(小さく付記)
231, 232	下段	1	スタッカート	なし	あり	L(アクセントあり)	L	L	L	W	W	W
235	上段	1		sf	ff	W	W	W	W	W	L	W
236, 237		2		なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
238	下段	1		sf	f	(小さく追記)	W	W	W	W	W	W
239	上段/上声部	1	f ³ 音	f ³ 音	as ³ 音	W	W	W	W	W	W	W
245-246	上段/上声部	3 裏-1	2つの8分音符の記譜	付た	2つの付た	L	L	L	L	L	W	W
248		1		sf	ff	W	W	W	W	W	L	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シェンカー版 (1918-1921)	トヴグイ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J. フィッシャー版 (1975)	J. フィッシャー版 (2005)
250			una corda	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
250-253	上段/上声部		スラー	2小節ずつで2つの スラー	1つのスラー	W ² (T. 254の 1拍目まで)	W	W	W	W	W	W
254	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	L	W	W	W	L	L
254	上段/下声部		スラーの開始	1拍目	2拍目	W	L	W	W(1-2拍目に かけて別の スラーもあり)	W	W	W
258-264	上段/上声部		スラー	あり	なし	L ² (独自のスラー)	L ² (独自のスラー)	W	L ² (独自のスラー)	L ² (独自の点線 スラーあり)	L	L
262	上段・下段		cis ¹ 音とcis ² 音の ^h	なし	なし	L/W (#が追記 される)	あり	[#]を付記/ #?も併記	L/W (#が追記 される) ※注あり	L/W (#が追記 される)	あり(小さく付記)	あり 欄外に付記
273-274	上段/上声部 2-1		スラー	あり	なし	T. 271の2拍目か らT. 275の 2拍目まで	W	W	T. 273の 1拍目からあり	T. 271の2拍目 からT. 275の 2拍目まで (点線スラー)	L	L
275-276	上段/上声部 2-2		スラー	あり	なし	T. 275の3拍目か らあり	T. 275の1拍目 からT. 277の 2拍目まであり	W	T. 275の2-3拍目 のみあり	T. 275の3拍目 からあり	L	L
277	上段/上声部 1-3		スラー	あり	なし	T. 276の3拍目か らT. 277の2拍目 まであり	T. 275の1拍目 からT. 277の 2拍目まであり	W	T. 277の2-3拍目 のみあり	T. 276の3拍目 からT. 277の2 拍目まで/T. 277の3拍目か らT. 278の2拍 目まで	L	L
278	下段/下声部 1		f 音の ^h	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
279			tre corde	なし	あり	W	W	W	W	W	L	L
282			cresc.の位置	2拍目	3拍目	L	W	T. 283の1拍目	W	T. 283の1拍目	W	W
283	上段	1	es ¹ 音の ^h	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
284	下段	3	es ³ 音の ^h	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
284-286	上段		スラー終わり	T. 285の最後の音 まで	T. 286の1拍目まで	W	L	W	W	W	L	L
285	下段	2 裏	es ³ 音の ^h	あり	なし	L	L	L	L ※Lの ^h が正し いとの注あり	L	L	L
291		1, 3	sf	あり	なし	L(小さく付記)	T. 291の1拍目 のみあり	W	L(小さく付記)	L	L	L
292		2	sf	あり	なし	L(小さく付記)	W	W	W	L	L	L
294		2	sf	sf	ff	W	W	W	W	W	L	L+W どちらも
296	上段/下声部 3		4分音符の音	c ¹ 音	c ¹ 音	d ¹ 音	d ¹ 音	d ¹ 音	d ¹ 音 ※注あり	d ¹ 音	L/W	L/W
299	上段	1 裏	es ³ 音の ^h	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
300		1	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シモンカー版 (1918-1921)	トーヴイ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J. フィッツジャー版 (1975)	J. フィッツジャー版 (2005)
300	2			sf (上声部に付記)	ff	W	W	W	W	W	L	W
300-301	3-1		es-es音のタイ	なし	なし	あり	あり	あり	あり ※注あり	あり	L/W	L/W
301	下段/下声部	1		sf	ff	W	W	W	なし	W	L	W
305-306			f-f音のタイ	あり	なし ※下声部の d-c音のスラーに 見える	L+W どちらも	L	L	L+W どちらも ※注あり	L+W どちらも	L	L
311	1		f	あり	なし	mfを小さく付記	W	W	W	W	L	L
319	1		p	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
320	下段/上声部	3	指使い	なし	あり	独自の指使い (2112)	W	一部のみにあり	W	W	W	W
322	下段	1		sf	f	W	W	W	W	W	L	W
325	上段/上声部	3 裏		あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
326, 328, 329	上段/下段	3		あり	なし	L	L	L	L	L(T. 326のみ 点線スラー)	L	L
327	上段/下声部	3	アーティキュレーション	ポルタート	何も付記なし	W	スラー	スラー	スラー	点線スラー	L	L
330	下段	3		あり	なし	L	W	W	W (non legatoの 追記あり)	W	L	L
333	1			f(sfのsが消えた形 跡あり?)	ff	W	W	W	W	W	sfを指示	W
337	上段/上声部	1 裏-		なし	なし	ピュローに同じ +スラーが追記	L/W	L/W	スタッカート	[]付きでスタッ カート/スラー もあり	あり	あり
338	上段/上声部	2		あり	なし	W	W	W	W	W	W	W
343	上段/下声部	2		なし	あり(短いアクセ ント?)	W (アクセント)	W	W (アクセント)	W (アクセント)	W (アクセント)	W (アクセント)	W (アクセント)
344	上段/上声部	1, 2		あり	なし	(3拍目と下段にも スラー付記) ※ピュローに同 じく拍頭にそれぞ れアクセントあり	W	W	(3拍目と下段 にもスラー 付記)	W	L	L
345	上段/上声部	1 裏		es ³ 音	ges ³ 音	W	W	W	W	W	W	W
345	2			上段、下段ともに書 かれる	上段と下段の間に つだけ	W(L) ※両段にア クセント付記	下段のみ	W	W	W	L	L
349	下段	1		A音	F音	L	L	L	L	L	L	L
350	下段	2 裏		d音	B音	W	W	W	W	W	L	W
354	上段/下声部	1		なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
355	下段	2		なし	あり	W	W	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ダルベール版 (1902-1904)	シエンカー版 (1918-1921)	トーヴァイ版 (1931)	シュナーベル版 (1949)	アラウ版 (1978)	J. フィッツジャー版 (1975)	J. フィッツジャー版 (2005)
362	下段	2 裏 3	スタッカート	あり	なし	L(※3拍目には スタッカートではな くアクセント)	W	W	2拍目裏のみ あり	[]付きで 2拍目裏 のみあり	L	2拍目裏のみ あり
364	上段/下声部	1-2	スラー	あり	なし	L	W	W	L(※2声ともに あり)	L(点線スラー)	L	L
365		3		sf	ff	W	W	W	W	W	W	W
366	下段	3 裏	B ₁ /B音のオクターヴのb	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	B音のみbあり	B音のみbあり
366	下段	3	スラー	なし	なし	あり	L/W	L/W	あり	点線スラー	L/W	L/W
367-368			cresc.の位置	T. 368の1拍目	T. 367の3拍目	W(2拍目?裏?)	W	W	T. 367の2拍目	W	L	L
369		1		下段にsf	両段にff	W(両段の中間に ffひとつ)	W	W(両段の中間 にffひとつ)	なし	W(両段の中間 にffひとつ)	W	W
369	下段	2		sf	ff	W	W	W	W	W	W	W
370	上段/上声部	1	ges'音	4分音符	16分音符	W	W	W	W	W	W	W
370	上段	3		なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
370-372	下段		E ₅ 音のタイ	なし	あり	L	W	W	W	W	W	W
372	上段	1, 2		1拍目のみあり	なし	L+2拍目もあり	L+2拍目もあり	L+2拍目もあり	L+2拍目もあり	L+2拍目もあり	L	L
372-373			デクレッシェンドマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
377		2	g音のb	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W
379, 380	下段	1	B ₁ 音の2分音符の付点	あり	なし	L	L	L	L	L	L	L
389		1		f	ff	W	W	W	W	W	W	W
397-399				sf	ff	W	W	W	W(※T. 398の 1拍目のみL)	W	L	W
398-399	下段		和音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W	W

第4楽章 ④

(ペン版 (C) / " (V) / ウィーン原典版 2001 / " 2018 / 園田高弘版 / ベーレンライター版)

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
0			表題	Introduzione	Per la misura si conta nel largo sempre quattro semicrome, cioè è [16分音符×4]	W	W	L+W(どちらもある)	L+W(どちらもある)	W	W
1			調号	b 2つ	b 1つ	W	W	W	W	W	W
1	上段		1つ目のオクターヴのフェルマータの音符	付点8分音符	付点16分音符	W	W	W	W	W	W
1	下段		1つ目のオクターヴのフェルマータの音符	付点8分音符	付点32分音符	付点16分音符	付点16分音符	付点16分音符	付点16分音符 (上段に統一)	付点16分音符	付点16分音符
1	下段		2つ目のオクターヴのフェルマータの音符	32分音符	16分音符	W	W	W	L	W	L
1	上段		f ¹ -f ¹ 音とas ¹ -as ¹ 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
1	上段	最後の音符	b ¹ 音の b	あり	なし	L	L	L	L	L	bのみ
2/3			Allegroとの区分の横線	あり	なし	L	L	L	L	L	W
7	下段/上声部	3 裏	ais音の#	あり	なし	L	L	L	L	L	L
8	上段、下段	1	休符	付点16分音符	付点16分音符	複付点8分 休符	複付点8分 休符	複付点8分休符	複付点8分休符	複付点8分休符	複付点8分休符
8	上段	最後の和音	♯	cis ³ 音につく	ais ² 音につく	W	W	W	W	W	W
9	上段	2-3	a ² -a ² 音とa ³ -a ³ 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
9		3	ベダル取るマーク	なし	あり	W	W	W	W	2拍目最後にあり	W
10	下段		trの波線	2つ目へのみあり	なし	W	W	W	2つともあり※1つ目は 訂正リストによる	W	2つともあり
10	下段		a tempo以降の2つ目のオクターヴの音符	64分音符	32分音符	L	L	L	L	L	L
10	下段		a tempo以降の6つ目のオクターヴの音符	32分音符	64分音符	W	W	W	W	W	W
10			cresc.の位置	accelerandoと 同じ所	調号変化する所	W	W	W	W	W	W
16			楽章表記のつづり	Fuga a Tre voci con a leune licenze	Fuga a Tre voci con alcune licenze	W (treのtは 小文字)	W (treのtは 小文字)	W (treのtは 小文字)	W (treのtは 小文字)	Fuga a tre voci, con alcune licenze	W (treのtは 小文字)
18, 19	上段/下声部	1	スタッカート	なし	あり	W	W	W	W	W(ポルタート?)	W
25		1	es ¹ 音の ♯	あり	なし	L(声部自体が 下段に書かれる)	L(声部自体が 下段に書かれる)	L	L	L	L
26		1	cresc.	あり	なし	W	W	W	W	W	W
26	上段		デクレッシェンドマーク	あり	なし	L	L	L	L	L	L
27	上段/上声部	2 裏	es ² 音の ♯	あり	なし	L	L	L	L	L	L
29	下段/上声部	1 裏	スタッカート	なし	あり	W	W	W	W	W	L
29	下段/上声部	2-3終わりまで	スラー	なし	なし	L/W	L/W	あり	()付きであり ※L訂正版による	L/W	あり

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンдон原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
30, 32-34		2	>の記号について	付点4分音符のアクセント	短いデクレッシェンドマーク	W	W	W	L	W	L?
32-35			cresc.の点線	T. 35の終わりまであり	T. 32の終わりまで	なし	なし	なし	なし	なし	T. 34の終わりまで
35	下段	1	スタックカート	あり	なし	W	W	L	W	W	W
35	下段	1		sf	f	なし	なし	なし	W	なし	W
37	上段/上声部	1 裏	スタックカート	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
37	上段/上声部	2		なし	あり	W	W	W	W	W	W
38	上段	2-3終わりまで	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	L
38	上段		下の声部	なし	あり	W	W	W	W	W	W
42	上段/上声部	2		なし	あり	W	W	W	W	W	W
43	上段/上声部	1 裏	es ³ 音の ¹	あり	なし	W(Lは ² ありとの注あり)	L(Lによるとの注あり)	L	L	L	L
44	下段	1	b音の ²	なし	あり	W	W	W	W	W	W
44, 45	上段	2	sf	上声部	中声部	L	L	L	L	L	L
45	下段	3	es音の臨時記号	何も付記なし	何も付記なし	(³)あり	(¹²)あり	[¹²]あり	[¹²]あり	あり	(b)あり
52	下段	1		sf	ff	L(Lによるとの注あり)	L(Lによるとの注あり)	L	L(+脈絡から)	L	W
53			調号	b 2つのまま	b 4つに変化	W	W	W	W	W	W
53, 54	下段	3	スタックカート	あり	なし	W	W	W	W	W	W
61	上段/上声部	3	des ² 音	4分音符	8分音符	W	W	W	W	W	W
61	下段	1		なし	あり	W	W	W	W	W	W
64	上段/上声部	1	f ² 音, es ² 音のスタックカート	なし	あり	W	W	W	W	W	W
65	上段/下声部	3	オリジナルの指使い	なし	あり	W	W	W	W	W	W
66, 67	上段/下声部	3 裏	スタックカート	なし	あり	W	W	W	W	W	W
70-71	下段	T. 70の2-	スラー	小節間で切れ、2つのスラーになっている	1つのスラー	W	W	W	W	W	W
71	上段	3	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W
75-76	下段	T. 76の1拍目まで	ソのb	なし	なし	T. 75に ¹ あり	上声部(b?) / 下声部 ²	T. 75に ¹ あり	T. 75に ¹ あり	T. 75の下段 G音にのみあり	b 付記
75-76	下段/下声部	T. 75の2-	スラー	小節間で切れ、2つのスラーになっている	1つのスラー	W	W	W	W	W	W
77	上段	2	sf	下段にあり	上段にあり	W	W	W	W	W	W
78	上段	1 裏	g ¹ 音のb	あり	なし	L	L	L	L	L	L
78	下段	1	c ¹ 音のb	あり	なし	L	L	L	L	L	L
78	上段	2	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
84	下段	3	C/e音のオクターヴの 調号	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
85	上段/上声部	2	b ¹ 音、ces ² 音の8分音符のスタックカート	b ¹ 4つのまま	b ¹ 6つに変化	W	W	W	W	W	W
85	上段/上声部	3	des ³ 音の4分音符のスタックカート	あり	なし	W	W	W	(L)付き	L	W
85	上段/上声部	3	sf	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
86	下段	2	b音、ces ¹ 音の8分音符のスタックカート	あり	なし	W	W	L	L()付き ※ベートー ヴェーンの表記に従って 線スタックカート	W (T. 85はLにも かかわらず)	W
87	下段	3 裏	c ¹ 音の ¹	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
88	上段/上声部	1	as ² 音	4分音符	8分音符	L	L	L	L	L	L
88	上段/上声部	2, 3		4分音符×2	休符なし	L	L	L	L()付き	L	L
95	上段/上声部	3	as ³ 音、ges ³ 音、f ³ 音のスタックカート	あり	なし	W	W	W	W	W (スラー付き)	W
96-98			mano destra, mano sinistra, m. d.	なし	あり	W	W	W	W	W	W
97	上段/下声部		8分音符のけた	6つの8分音符が 1つにまとめられる	1番目の8分音符の み独立させている	W	W	W	W	W	W
97	上段/下声部	1 裏		es ¹ 音	es ¹ 音	f ¹ 音に変更されて いる(ウィーン原典版 が誤っているとの 注あり)	f ¹ 音に変更されて いる(ウィーン原典版 が誤っているとの 注あり)	f ¹ 音に変更されて いる	f ¹ 音に変更されて いる	f ¹ 音に変更されて いる	L/W
97, 99	上段/上声部	3		あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
103-105		T. 103の2-		f	sf	W	W	W	W	W	W
105-107	下段	3		あり	なし	W	W	L (T. 107はなし)	L()付き	W	W
112-113	下段	3-1	C ₁ 音/C音のオクターヴのタイ	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
117	上段	1	es ² 音の ²	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
117, 118	上段/上声部	1 裏	ges ² 音の ¹	あり	なし	L	L	L	L	L	L
117-118	上段/下声部		b ¹ 音の ^{tr}	あり	なし	W	W	W	W	W	W
117-118	下段	3-1	Es ³ 音 ² /es ³ 音 ² のオクターヴのタイ	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
118-119		3-1, 2	g音の ^{tr}	小節間で途切れず 連続した ^{tr}	小節間で途切れず 連続した ^{tr}	L/W	L/W	小節間で区別し 2つのtrになっている	小節間で区別し 2つのtrになっている	L/W	小節間で区別し 2つのtrになっている
119	下段	3	sf	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	L
119, 122			mano sinistra	なし	あり	W	W	W	W	上声部にms.あり (該当箇所はおそ らく右手との 指示と読める)	W
120	上段	3 裏	sf	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	L

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
121-122	上段	3-1, 2	c ³ 音のtr	小節間で途切れず 連続したtr	小節間で途切れず 連続したtr/タイで 結ばれる	W	W	小節間で区別し2つの trになっている	小節間で区別し2つの trになっている(m.s.の 表記あり)	W	小節間で区別し2つの trになっている (※m. smist.の 表記あり)
122	下段	3	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W
123	上段/下声部	3裏	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W
127	中声部		スラー	1-2のみ	1小節間すべて	T. 126の3拍目- T. 127の最後まで	T. 126の3拍目- T. 127の最後まで	W	W	T. 126の3拍目- T. 127の最後まで	W
128	上段/上声部		スラー	なし	あり	W(T. 127の 3拍目から)	W(T. 127の 3拍目から)	W	W	W(T. 127の 3拍目から)	W
132	上段/上声部	2	c ³ 音、des ³ 音のスタックカート	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
134	上段/上声部	1	f	なし	あり	W	W	W	W	W	W
134	上段/上声部	3	sf	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
135	下段	2	sf	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
135-139	上段、下段		8分音符のスタックカート	あり	なし	W	W	L	L()付き	L	W
141, 142	下段	1	8分音符のスタックカート	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
142-143	上段/下声部	3	es ¹ -es ¹ 音のタイ	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
143	上段/下声部	3	8分音符のスタックカート	なし	あり	W	W	W	W	W	W
146	上段/上声部	1	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W
148-149			調号	b 5つのまま	b 6つに変化	b 4つ(T. 145で 調号変化がない ため)	b 4つ(T. 145で 調号変化がない ため)	L	L	b 4つ(T. 145で 調号変化がない ため)	L
148	上段/上声部	2	sf	あり	なし	L()付き	L()付き	L	L()付き	L	W
149	下段	1	スタックカート	あり	なし	L	L	L	L	L	L
149	下段	2	sf	あり	なし	L	L	L	L()付き	L	L
149	上段/下声部	3	d ¹ 音	なし	あり	W	W	W	W	W	W
151	上段/上声部	1裏、3裏	スタックカート	なし	あり	L	L	W+1拍目にも あり	W+1拍目に[]付きで あり	1、1拍目裏に あり	W
152	上段/上声部	1	スタックカート	あり	なし	W	W	L	L()付き	L	W
153	上段/上声部	3	p	なし	あり	W	W	W	W	W	W
155, 156	上段/下声部	1-2	スラー	あり	なし	W	W	W	W	L(独自の フレージング)	L(T. 155のフレー ジングは異なる)
157	上段/上声部		スラー	なし	あり	T. 158の2拍目 まであり	T. 158の2拍目 まであり	T. 158の2拍目 まであり	T. 158の2拍目 まであり	T. 158の2拍目 まであり	T. 158の2拍目 まであり
159	上段/上声部	3裏	a ¹ 音の ²	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
150-164	上段/上声部		スラー	T. 159の3拍目裏- T. 161の最後の音 まで/T. 162の1拍 目-T. 163の最後の 音まで/T. 164の1 拍目-2拍目まで	T. 159の3拍目裏- T. 161の最後の音 まで/T. 162の1拍 目-T. 163の最後の 音まで/T. 164の1 拍目-2拍目まで	W	W	W	W	W	W
161-162	上段/下声部	3裏-2	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	L(※3拍目まで)	W
164-165	下段/下声部	3-1	e-e音のタイ	なし	なし	()付きであり	()付きであり	[]付きであり	[]付きであり	あり	点線タイあり
165, 166	上段	1-2	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	L(独自の フレーズング)	L
165	下段	1-2	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
165-166	下段/上・下 声部	3-1	g-音のタイ/d-d音のタイ	なし	なし	()付きで両方あり	()付きで両方あり	[]付きであり	[]付きであり	両方あり	L/W
166	下段/上声部		スラー	なし	あり	W	W	W	WK()付き ※Lの情報 と動運いにか?	W	W
166-167	下段/下声部		スラー	なし	あり	W	W	W	WK()付き ※Lの情報と 動運いにか?	W	W
168-171	上段/上声部		スラー	T. 168の1拍目- T. 169の2拍目まで	T. 168の1拍目- T. 171の最後まで	W(T. 172の1拍目 まで)	W(T. 172の1拍目 まで)	W (T. 171の2拍目まで)	W (T. 171の2拍目まで)	W(T. 172の1拍目 まで)	W (T. 171の2拍目まで)
170-171	上段/下声部	3-	スラー	あり	なし	W	W	W	W	W	L? (cantabile)の表記 あり
171-172	上段/上声部		h-h音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
172	上段/下声部	1-2	スラー	あり	なし	W	W	W	L()付き ※LおよびT. 165の 類似箇所より	W	W
173	下段	1-2	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W (独自のフレー ズング)	W
173-174	下段		クレッシェンド、デクレッシェンドマーク	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	L
174		3	クレッシェンドマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	W
175-176	上段		スラー	上声部	下声部	W	W	W	W	W	W
176-177	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	W	W	L()付き	W	W
178	下段/下声部	1-2	スラー	なし	あり	W	W	W	W	W	W
180			cresc. の点線	T. 183まであり	なし	W	W	W	W	W	L
182	上段/上声部	3	スタッカート	なし	あり	W	W	W	W	L	W
183	下段	1-2	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	L	L
183	上段/上声部	3	スタッカート	なし	あり	W	W	W	W	L	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原版 (2001)	ウィーン原版版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
184			non ligato	上段と下段の間に1つだけ	上段、下段ともに書かれる	上段のみに "non ligato"	上段のみに "non ligato"	W	W	上段のみに "non ligato"	W
184	下段	1-2	スラー	あり	なし	W	W	W	W	L	W
191	下段	3	sf	あり	なし	W	W	W	W	W	W
191, 192	上段/下声部		休符	なし	あり	W	W	W	W	W	W
193	下段	3	sf	あり	なし	W	W	W	W	W	W
195	上段/上声部	3裏	f音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
196	上段/上声部	1	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
196	下段	1		sf	ff	W	W	W	W	W	W
199	上段/上声部	1-2	h-h音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
202	上段/上声部	2	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W
204			p	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
204			cresc.の点線	T. 207まであり	なし	W	W	W	W	W	L
204-205	上段/上声部	3裏-1	e ² -e ³ 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
207	上段/上声部		スラー	2-3拍目にあり	1拍目-最後の音まで	W	W	W	W	W	1拍目裏-最後の音まで
208		1		sf	ff	W	W	W	W	W	W
209	下段/下声部	2		なし	あり	W	W	W	W	W	W
212	上段	2裏	g音の ^h	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
215	上段/下声部	2裏-3	a ¹ -a ¹ 音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
220	上段/上声部	2	sf	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
221-222	下段/上声部		e-e音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
226	上段/下声部	2裏	c ² 音の#	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
228-229	上段/上声部		c ³ -c ³ 音のタイ	あり	なし	L()付き	L()付き	L()付き	L()付き	L	L
229		1		sf	ff	W	W	W	W	W	W
229	上段/下声部	2裏	fis ¹ 音の ^h	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
231, 232	下段	1	スタッカート	なし	あり	W	W	W	W	W	W
235	上段	1		sf	ff	W	W	W	W	W	W
236, 237		2	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W
238	下段	1		sf	f	W	W	W	W	W	W
239	上段/上声部	1		f ³ 音	as ³ 音	W	W	W	W	W	W
245-246	上段/上声部	3裏-1	2つの8分音符の記譜	けた	2つのはた	L	L	L	L	L	L
248		1		sf	ff	W	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
250			una corda	なし	あり	W	W	W	W	W	W
250-253	上段/上声部		スラー	2小節ずつで2つのスラー	1つのスラー	W	W	W	W	W	W
254	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	W	W	W	W	W
254	上段/下声部		スラーの開始	1拍目	2拍目	W	W	W	W	W	L
258-264	上段/上声部		スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	L? (独自のスラー)	W
262	上段/下段		cis ¹ 音とcis ² 音の ^ハ	なし	なし	(^ハ ?)と付記	(^ハ ?)と付記	[]付きで ^ハ	[]付きで ^ハ	L/W	あり
273-274	上段/上声部	2-1	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	T. 271の2拍目 からあり	W
275-276	上段/上声部	2-2	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き ※T. 276の3拍目まで	T. 278の終わり まであり	W
277	上段/上声部	1-3	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	T. 275の2拍目か らT. 278の終わり まであり	W
278	下段/下声部	1	f音の ^ハ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
279			tre corde	なし	あり	W	W	W	W	W	W
282			cresc.の位置	2拍目	3拍目	W	W	W	W	W	L (Lによる注あり)
283	上段	1	es ¹ 音の ^ハ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
284	下段	3	es音の ^ハ	なし	あり	W	W	W	W	W	W
284-286	上段		スラー-終わり	T. 285の最後の音 まで	T. 286の1拍目まで	W	W	W	W	W	L
285	下段	2裏	es音の ^ハ	あり	なし	L	L	L	L	L	L
291		1, 3	sf	あり	なし	W	W	L ※1拍目は[]付き	L()付き	W	L
292		2	sf	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	L
294		2	sf	sf	ff	W	W	W	W	W	W
296	上段/下声部	3	4分音符の音	c音	c音	d ¹ 音 ※注あり	d ¹ 音 ※注あり	d ¹ 音 ※注あり	d ¹ 音 ※注あり	d ¹ 音	[]付き d ¹ 音 ※注あり
299	上段	1裏	es ¹ 音の ^ハ	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
300		1	sf	なし	あり	W	W	W	W	W	W

小節数	段/声部	拍	詳細	ロンドン原版(L) (上声部に付記)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原版 (2001)	ウィーン原版版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
300		2		sf (上声部に付記)	ff	W	W	W	W	W	W
300-301		3-1	es-es音のタイ	なし	なし	()付きであり	()付きであり	[]付きであり	[]付きであり	あり	点線タイ
301	下段/下声部	1		sf	ff	W	W	W	W	W	W
305-306			f-r音のタイ	あり	なし ※下声部の d-c音のスラーに 見える	L()付き /Wどちらも	L()付き /Wどちらも	L+Wどちらも	L	L+Wどちらも	L
311		1	f	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	W
319		1	p	なし	あり	W	W	W	W	W	W
320	下段/上声部	3	指使い	なし	あり	W	W	W	W	W	W
322	下段	1		sf	f	W	W	W	W	W	W
325	上段/上声部	3裏		あり	なし	L	L	L	L	L	L
326, 328, 329	上段・下段	3	es音のト スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	L
327	上段/下声部	3	アーティキュレーション	ポルタート	何も付記なし	W	W	スラー	スラー ※類似箇所T.325と 統一	W	スラー
330	下段	3		あり	なし	W	W	W	W	W	W
333		1		f(sfのsが消えた形 跡あり?)	ff	W	W	W	W	W	W
337	上段/上声部	1裏-		なし	なし	L/W	L/W	L/W	()付きであり ※L訂正版による	L/W	L/W
338	上段/上声部	2		あり	なし	W	W	W	W	W	W
343			cresc.の位置	2拍目	1拍目	W	W	W	W	W	W
343	上段/下声部	2		なし	あり(短いデクレツ シエンド?)	W(アクセント)	W(アクセント)	W(アクセント)	W(アクセント)	W(アクセント)	W
344	上段/上声部	1, 2		あり	なし	W	W	W	W	L (独自のスラー)	W
345	上段/上声部	1裏		es音	ges音	W	W	W	W	W	W
345		2		上段、下段ともに書 かれる	上段と下段の間に1 つだけ	W	W	W	W	W	W
349	下段	1		A音	F音	L	L	L	L	L	L
350	下段	2裏		d音	B音	W	W	W	W	W	W
354	上段/下声部	1		なし	あり	W	W	W	W	W	W
355	下段	2		なし	あり	W	W	W	W	W	W

小節数	段／声部	拍	詳細	ロンドン原版(L)	ウィーン原版(W)	ヘンレ版(C) (1953)	ヘンレ版(V) (1980)	ウィーン原典版 (2001)	ウィーン原典版 (2018)	園田高弘版 (2003)	ペーレンライター版 (2019)
362	下段	2 裏, 3	スタッカート	あり	なし	W	W	W	W	W	W
364	上段／下声部	1-2	スラー	あり	なし	W	W	L	L()付き	W	L
365		3		sf	ff	W	W	W	W	W	W
366	下段	3 裏	B ₁ /B音のオクターヴの b	なし	なし	あり	あり	あり	あり	あり	B音のみ b あり
366	下段	3	スラー	なし	なし	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W	L/W
367-368			cresc.の位置		T. 367の3拍目	W	W	W	W	W	W
369		1		T. 368の1拍目 下段にsf	両段にff	W(両段の中間に ffひとつ)	W(両段の中間に ffひとつ)	W(両段の中間に ffひとつ)	W(両段の中間に ffひとつ)	W(両段の中間に ffひとつ)	W
369	下段	2		sf	ff	W	W	W	W	W	W
370	上段／上声部	1	ges.音	4分音符	16分音符	W	W	W	W	W	W
370	上段	3		なし	あり	W	W	W	W	W	W
370-372	下段			なし	あり	W	W	W	W	W	W
372	上段	1, 2		1拍目のみあり	なし	L+2拍目もあり	L+2拍目もあり	L+2拍目も[]付き あり	L()付き+2拍目も[] 付きあり	L+2拍目もあり	L
372-373			デクレッシェンドマーク	なし	あり	W	W	W	W	W	W
377		2	g音の b	なし	あり	W	W	W	W	W	W
379, 380	下段	1	B ₁ 音の2分音符の付点	あり	なし	L	L	L	L	L	L
389		1		f	ff	W	W	W	W	W	W
397-399				sf	ff	W	W	W	W	W	W
398-399	下段		和音のタイ	なし	あり	W	W	W	W	W	W